

青森県埋蔵文化財調査報告書第119集

# 館野遺跡

昭和 63 年度

青森県教育委員会



館野遺跡発掘調査報告書正誤表

頁	行	正	誤
例言	下から2	高橋 信彦	高橋 忠彦
10	上から1	南部浮石相当量	南部浮石相当層
15	上から10	・ <u>n</u> ・ <u>d</u> ・ <u>n</u> )	・ <u>n</u> ・ <u>b</u> ・ <u>n</u> )
25	上から6	<u>IX</u>	<u>IX</u>
25	上から8	<u>IX</u>	<u>IX</u>
82	下から2	広がり <u>を</u> して	広がり <u>と</u> して
83	上から7	埋めた <u>戻</u> した	埋め <u>戻</u> した
90	下から12	<u>IX</u> 層に	<u>IX</u> 層に
105	上から9	8 <u>m</u>	8 <u>cm</u>
106	下から11	平面 <u>年</u> は、	平面 <u>形</u> は、
121	下から8	(41) <u>。</u>	(41) <u>。</u>
121	下から7	(43) <u>。</u>	(43) <u>。</u>
127	上から8	て近い <u>下層</u>	て近い、 <u>下層</u>
127	下から4	施文 <u>す</u> ること <u>で</u> 、	施文 <u>す</u> ること <u>と</u> 、
131	上から10	土器 <u>内側面</u>	土器 <u>内面</u>
134	下から5	「 <u>二又</u> 状山形突起」	「 <u>二又</u> 状山形突起」
138	下から15	連続 <u>単線</u> 状 <u>瓦</u> 痕文	連続 <u>単線</u> 状 <u>瓦</u> 痕文
139	下から10	併用 <u>され</u> 71・72は	併用 <u>され</u> 、71・72
139	下から9	突文 <u>が</u> 施 <u>され</u>	突文 <u>のみ</u> が施 <u>され</u>
275	上から14	人間 <u>の</u> 生活	人間 <u>が</u> 生活
275	上から15	集落 <u>。</u> 中心	集落 <u>を</u> 中心



青森県埋蔵文化財調査報告書第119集

# たの野の遺跡

— 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和 63 年度

青森県教育委員会



## 序

馬淵川流域には、縄文時代から歴史時代にいたる多くの遺跡が周知されております。

本報告書は、昭和62年度に農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の実施に先立ち、当該路線内に所在する福地村館野遺跡を発掘調査した結果をまとめたものであります。

今回の調査によって、本遺跡が営まれた時期は縄文時代早期から後期にわたっていることが明らかになりました。特に出土遺物の量から、前期から中期にわたる円筒土器文化期の大遺跡であることが判明しました。

この成果が、今後、文化財の保護と研究に活用されるところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施及び報告書の作成にあたって、御指導、御協力をいただいた関係各位に対して、心から謝意を表します。

平成元年3月

青森県教育委員会

教育長 本 間 茂 夫

## 例 言

1. 本書は、昭和62年度に発掘調査を実施した福地村に所在する「館野遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した館野遺跡は、昭和53年度に青森県教育委員会が刊行した「青森県遺跡地名表」に遺跡番号64011として登録されている。
3. 執筆者氏名については、依頼原稿は文頭に、他は文末に記した。
4. 資料の鑑定及び分析については、次の方々に依頼した。

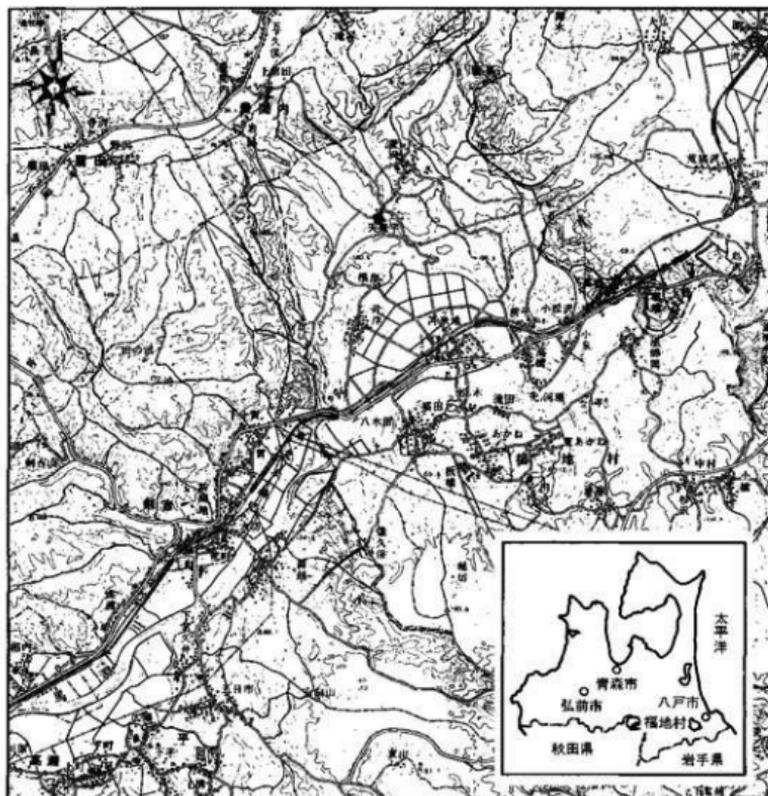
土壌分析	小山 陽造氏	八戸工業高等専門学校教授
石質鑑定	松山 力氏	青森県立八戸高等学校教諭
5. 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
6. 発掘調査並びに本報告書作成にあたり、次の機関・諸氏に御指導・御教示をいただいた（敬称略・順不同）。

（財）北海道埋蔵文化財センター、札幌市教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、  
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、東北歴史資料館

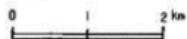
千代 肇、小笠原忠久、桜田 隆、藤沼 邦彦、桑原 滋郎、小井川和夫、加藤 道雄、早坂 春一、太田 昭夫、斉藤 裕彦、佐藤 甲二、田中 則和、岩見 誠夫、光井 文行、本間 宏、田村 俊之、高橋 信彦、須藤 隆、高橋 学、谷地 薫
7. 本書の原稿、図版に関する凡例は、第三章第2節に記述してある。

# 目次

序	
例言	
目次	
第I章 調査に至る経過と調査要項	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第II章 遺跡及び周辺の環境	3
第1節 周辺の遺跡	3
第2節 遺跡及び周辺の地形と地質	6
第III章 調査方法と整理方法	11
第1節 調査方法	11
第2節 記載凡例	12
第3節 遺物の分類基準	13
第IV章 検出遺構	19
第1節 竪穴住居跡	19
第2節 土壌	20
第3節 屋外炉	105
第4節 焼土	108
第5節 溝状ピット	111
第V章 出土遺物	114
第1節 土器	114
第2節 石器	184
第3節 土製品・石製品	197
第VI章 分析と考察	248
第VII章 科学的分析	263
写真図版	



● 館野遺跡



第1図 遺跡の位置

# 第 I 章 調査に至る経過と調査要項

## 第 1 節 調査に至る経過

農林部では、三戸郡福地村天厩平地区の農道整備をはかるため、昭和59年度から農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に着手していた。

事業の進捗に伴い、館野遺跡他数遺跡が路線内に含まれる恐れが生じたため、昭和61年5月17日、農林部土地改良第二課から県教育庁文化課あてに、当該事業予定地内に埋蔵文化財包蔵地が所在するかどうかの照会があった。

これを受けて文化課では、同年5月19日及び10月11日に現地調査を行った。その結果、事業予定地内には、館野遺跡、雷遺跡、西山遺跡の3遺跡が所在することが確認された。

同年10月17日、その旨を回答するとともに、埋蔵文化財の保護のため、事業予定地を変更しよう要望した。その後、路線変更について協議を重ねたが、道路の性格上路線変更は難しいとの結論に達し、工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査は、工事の進捗状況に応じ、館野遺跡は昭和62年度に、また雷遺跡、西山遺跡は平成元年度に実施することになった。

なお、館野遺跡は、県教育委員会が昭和37年度に実施した遺跡分布調査の際確認された遺跡である。当地域では最も遺物の豊富な遺跡とみられており、発掘調査の際は多量の遺物の出土が予想されていた。

(遠藤正夫)

## 第 2 節 調査要項

調査目的	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する館野遺跡の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。
調査期間	昭和62年7月1日から同年10月31日まで
遺跡名	とての 館野遺跡
遺跡所在地	青森県三戸郡福地村大字苔米地字館野34-13他
調査面積	3,000㎡
調査委託者	青森県農林部
調査受託者	青森県教育委員会
調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター
調査協力機関	福地村教育委員会 三戸土地改良事務所 三八教育事務所
調査参加者	

調査指導員 村越 潔 弘前大学教授  
調査協力員 西山 勝治 福地村教育委員会教育長  
調査員 山田 洋一 八戸市立多賀台小学校教頭（現 三戸郡三戸町立豊川小学校  
校長）  
松山 力 青森県立八戸高等学校教諭  
春日 信興 三戸地方教育研究所指導主事  
調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター  
調査第二課長 北林八洲晴  
" 天間 勝也（現 県教育庁文化課埋蔵文化財班長）  
主幹 遠藤 正夫  
主事 白鳥 文雄  
" 石戸谷 悟  
調査補助員 古屋敷 則雄、船橋 英樹、秋元 宏之、松橋 智  
佳子、平井 愛絵

## 第Ⅱ章 遺跡及び周辺の環境

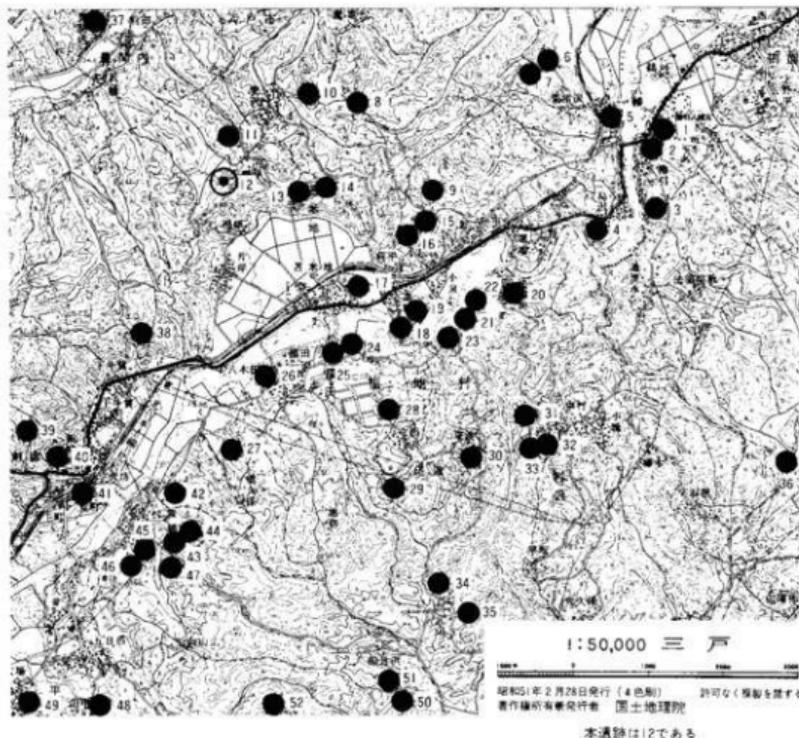
### 第1節 周辺の遺跡

岩手県北の山地を水源とする馬淵川は、青森県名川町・福地村・八戸市を南西から北東に横切り、太平洋に流出する。本遺跡は馬淵川と浅水川のほぼ中間に挟む標高120～130mの丘陵南斜面上に位置する。

県南三八地方は、馬淵川・新井田川流域を中心に数多くの遺跡が存在し、特に縄文時代後、晩期の遺跡が多い。

八戸市内では、是川中居遺跡、売場遺跡や長七谷地・八幡両貝塚等、有名な遺跡が数多く発見されている。

馬淵川流域の調査史を概観してみたい。1954・55年、江坂輝弥氏等が発掘した、平貝塚では



第2図 周辺の遺跡

装身具類、合せ口襖棺が出土し、1961年、音喜多富寿氏等の調査では人骨一体が出土し、1977年、名川町教育委員会による虚空蔵遺跡発掘調査では大洞C1式土器をはじめ足形付土版等各種の遺物が出土した。

剣吉荒町遺跡は、1956年以降数回にわたり調査が進められ、縄文時代の遺物として晩期の大洞A式・A'式土器、弥生式の遠賀川系土器及びモミ痕のある土器が出土し、それらの土器型式による編年時期が問題視されている。

三戸町松原遺跡は、1961年音喜多富寿氏等により発掘調査され、縄文時代後、晩期の土器及び各種の遺物が出土した。

同様に泉山遺跡は、1975年青森県教育委員会が調査し、深さ1～2mに及び大型のフラスコ状ビットや住居跡が検出され、時期は縄文時代中期中葉から晩期にかけてと思われる。ビット内より、円筒式・大木式土器、堅果、獣骨及び各種石器が出土し、円筒式から大木式への接点を探る貴重な遺跡と言える。

福地村管内には27の遺跡が確認されている。そのうち馬淵川流域には11の遺跡が点在し、山間部にも遺跡が多い。村内27遺跡中19箇所で縄文時代後期ないし晩期の土器を出土している点が注目される。

本村内における発掘調査例は、昭和56年、県教育委員会が実施した<sup>(註1)</sup>昼巻沢遺跡がある。そこからは、土壌2、フラスコ状ビット1、溝状ビット8、溝溝遺構2と早期、中期末葉～後期前半の土器及び石器(石鏃、磨製石斧、すり石等)が出土した。本遺跡は、昭和37年の分布調査で発見、登録され、その出土量は本地域最多と推定された。採集された遺物の多くは円筒土器片であるが本遺跡以外に円筒土器が出土した村内の遺跡は、西久根遺跡のみのようであるが、それらの関連性がこれから問題となるであろう。(石戸谷 悟)

(引用・参考文献)

注1 「昼巻沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第83集

第1表 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	備	考
1	千石屋敷遺跡	八戸市八幡字千石屋敷	台地	包含地	縄文(晩期)		
2	八幡貝塚遺跡	八戸市八幡字館ノ下	台地	貝塚	縄文(晩期)		
3	棚引遺跡	八戸市棚引字四所館神下久倉		城跡			
4	昼巻遺跡	八戸市上野字昼巻	台地	包含地	縄文(前～晩期)		
5	一日市遺跡	八戸市棚引字一日市	台地	散布地	歴史(平安、中世)		
6	荒猪の沢遺跡	八戸市棚引字荒猪の沢	台地	散布地	歴史		
7	岩の沢平遺跡	八戸市棚引字岩の沢平田	台地	包含地	歴史		
8	直渡遺跡	八戸市棚引字直渡	台地	包含地	縄文(前、中期)		
9	白根遺跡	八戸市棚引字白根	丘陵	散布地	縄文(晩期)		

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	備考
10	下木戸場遺跡	福地村美沢字下木戸場9-93	台地	包含地	縄文(前期)	
11	北向遺跡	福地村美沢字北向4	台地	包含地	縄文(後期)	
12	鉾野遺跡	福地村芥米地字鉾野	丘陵	包含地	縄文(後期)	
13	西山遺跡	福地村芥米地字西山1-2	台地	包含地	縄文(後期)	
14	雷遺跡	福地村芥米地字雷1	台地	包含地	縄文(後期)	
15	小松沢下平遺跡	福地村小泉字小松沢下426	丘陵	散布地	縄文(晩期)	
16	中森遺跡	福地村小泉字中森1-4	丘陵	散布地	縄文(後、晩期)歴史	
17	高橋館遺跡	福地村高橋字橋館6	丘陵	館跡	中世~近世	
18	巖合平遺跡	福地村小泉字巖合平17	丘陵	散布地	縄文(後期)歴史	
19	細見遺跡	福地村小泉字細見30	丘陵	散布地	歴史	
20	法師館遺跡	福地村法師岡字田向93	丘陵	跡	中世~近世	
21	西張遺跡(1)	福地村法師岡字西張42-6	台地	包含地	縄文(晩期)	
22	西張遺跡(2)	福地村法師岡字西張58	台地	散布地	縄文(後期)	
23	籬遺跡	福地村花渡字籬9	台地	包含地	縄文(後期)	
24	源次郎平遺跡(1)	福地村福田字源次郎平7	台地	包含地	縄文(後期)	
25	源次郎平遺跡(2)	福地村福田字源次郎平	台地	包含地	歴史	
26	西久根遺跡	福地村福田字西久根51	台地	包含地	縄文(前、中期)	福地村郷土誌
27	次崎館遺跡	福地村福田字次崎館8の1	台地	包含地	縄文(後期)歴史	
28	カッテウ遺跡	福地村塔渡字カッテウ14-2	丘陵	散布地	縄文(後、晩期)	
29	放森遺跡	福地村塔渡字放森10-17-1	丘陵	散布地	縄文(後、晩期)歴史	
30	塔渡遺跡	福地村塔渡字塔渡24	台地	包含地	縄文(後、晩期)	八戸周辺の遺跡地名表
31	天獅子遺跡	福地村杉沢字天獅子16	丘陵	散布地	縄文(後期)歴史	*
32	漆山遺跡	福地村杉沢字漆山7-1	丘陵	散布地	歴史	
33	牛巻遺跡	福地村杉沢字牛巻5	丘陵	散布地	縄文(後期)歴史	
34	佐伝窪遺跡	福地村塔渡字佐伝窪2	台地	包含地	縄文(後期)	
35	長地窪遺跡	福地村塔渡字長地窪24	丘陵	包含地	縄文(後期)	
36	登巻沢遺跡	福地村榑木字登巻沢30	丘陵	包含地	縄文(中、後期)	青埋文報第83集
37	高寺遺跡	五戸町豊岡内字高寺		包含地	縄文(後期)	
38	諸味坂遺跡	名川町平賀字諸味坂	山地	包含地	縄文(後期)	
39	伊勢沢遺跡(1)	名川町朝吉字伊勢沢	丘陵	包含地	縄文	
40	伊勢沢遺跡(2)	名川町朝吉字伊勢沢	丘陵	包含地	縄文(後、晩期)歴史	
41	朝吉荒所遺跡	名川町朝吉字荒所69、70-1	台地	包含地	縄文(晩期)	八戸県第五史系遺跡調査報告書 名川町朝吉荒所遺跡調査報告書
42	大宮遺跡	名川町森越字大宮	台地	包含地	縄文(後期)歴史	
43	森越山遺跡(1)	名川町森越字家ノ上	丘陵	包含地	縄文(後期)	
44	森越山遺跡(2)	名川町森越字家ノ上	丘陵	包含地	縄文(後期)歴史	
45	森の越野月遺跡	名川町森越字野月森越ギンガ壱壱	台地	包含地	縄文(早、後、晩期)弥生	
46	瀬米遺跡	名川町森越字瀬米		包含地	縄文(後、晩期)歴史	
47	提ヶ沢遺跡	名川町森越字提ヶ沢	台地	包含地	縄文(早期)	
48	柞木田遺跡	名川町平字柞木田57	台地	散布地	縄文(後期)歴史	
49	虚空蔵遺跡	名川町平字虚空蔵10-1	丘陵	包含地	縄文(後、晩期)	虚空蔵遺跡発掘調査報告書
50	下横沢遺跡(2)	名川町下名久井字下横沢42	台地	包含地	縄文(後、晩期)歴史	
51	下横沢遺跡(3)	名川町下名久井字下横沢43	台地	包含地	縄文	
52	東山遺跡	名川町下名久井字東山43-2	台地	散布地	縄文(後期)	

## 第2節 遺跡及び周辺の地形と地質

青森県立八戸高等学校 松山 力

### 1. 周辺の地形

青森県南東部太平洋岸の八戸湾には、南方から新井田川、南西方から馬淵川が注ぎ、馬淵川と太平洋岸の間では、新井田川東側に高低の諸段丘で構成される八戸平原が、新井田川の西側に名久井岳の北側から北北東方に幅をせばめながら低くなる、比較的に開析のすすんだ丘陵地が分布している。一方馬淵川の北側には、その支流の浅水川や直接に太平洋に注ぐ五戸川、あるいは相坂川（奥入瀬川）の支流の後藤川が、いずれも南西方から馬淵川に平行して流れ、これらの河川に挟まれて幅3～5kmの丘陵・段丘群が、脊梁山脈東麓から北東に高度を低めながら並行して帯状にのびている。

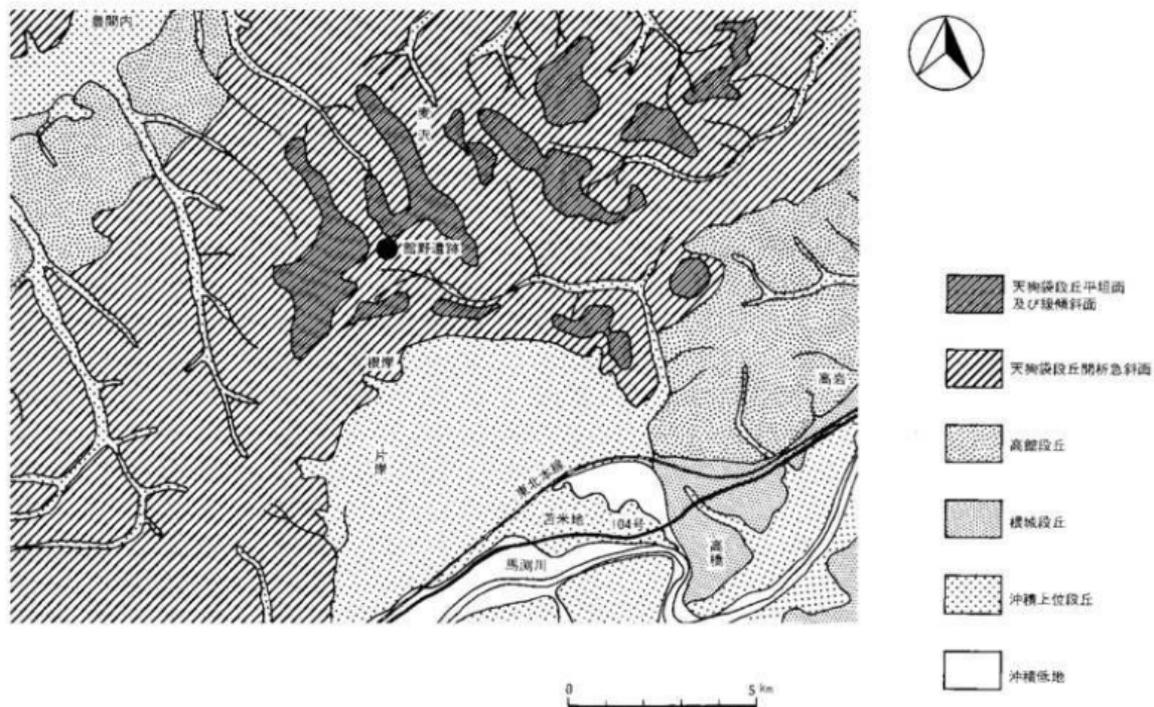
館野遺跡は、そのうちの浅水川と馬淵川との間を4～5km幅で北東にのびる丘陵・段丘群の北東端から南西方へ約5kmの丘陵を刻む小谷の斜面部にある。

遺跡周辺の丘陵（天狗岱段丘）は全体として北西方にゆるく傾き、また開析が進んで平坦面に乏しい。特に後述する遺跡直近の平坦面を除く南西方の高位段丘は、原面が尾根部に残る場所がわずかあるほかは、原面のほとんどが失われて、急傾斜地が大部分を占めている。これに対し、遺跡の北東方の天狗岱段丘部では、麦沢周辺に狭いながらも平坦面が残され、またゆるやかな起伏地も比較的広く分布する。天狗岱段丘の外側にある高館段丘は、一般にゆるやかに起伏する丘陵地となっている。

遺跡のすぐ西には長さ約1km、幅数百m程度の、南北に細長い、標高140～150mの平坦面がある。この平坦地の南半部に谷頭をもつ小谷が2本北東へ下るが、遺跡をのせる斜面部はその北側の小谷の北岸に相当する。この2つの小谷は遺跡の東南東方約500mの地点で合流し、丘陵を刻んで東へ1200mほど下った後ほぼ直角に折れて、800mほどで馬淵川北岸の谷底平野に達する。

遺跡の南方ほぼ2.5kmを東北東方に流れる馬淵川は、その先で、両岸からせまる丘陵・段丘群をえぐるように蛇行し、直線距離4kmほどで長苗代低地帯に達する。馬淵川最下流域は、八戸平原を含む馬淵川東側の丘陵・段丘群と浅水川北側の丘陵・段丘群に挟まれ、その奥部を館野遺跡のある丘陵・段丘群の末端で限られた、幅3～4km、海岸からの奥行き約9kmの沖積低地（長苗代低地帯）となっている。

遺跡南方から南東方までの馬淵川北岸には、遺跡をのせる丘陵を馬淵川の過去の曲流が削りつつつくった急崖で囲まれる、馬淵川を弦とするような半径1.1～1.5kmの半月型の浸食盆地（谷底平野）が広がっている。急崖の盆地面からの高度差は、西側で100mをこし、北側で50m



第3図 遺跡周辺地質概要図

余り、高館段丘をえぐる東側でも20～40mである。

遺跡とこの谷底平野の直近の北縁との距離は北々西～南々東方向に300m(丘陵縁から200m)で、その北縁と遺跡の南縁を通る前述の小谷との間には、小谷が南に折れる部分を底とするような長靴型の細長い丘陵が東に低くなりながらのびている。

## 2. 地質概要と遺跡の層序

遺跡周辺の大地の基盤は、砂岩・泥岩主体の斗川層群と呼ばれる新第三紀群新世の地層である。丘陵・段丘群は、ところによってその上に段丘堆積物がのり、基盤の地層や段丘堆積物は新旧の火山灰層群に覆われて、最上部の腐食土層に遷移する。

この地域の火山灰層は下位から、洪積世の天狗岱火山灰層、高館火山灰層、八戸火山灰層、沖積世に降下し黒色土層に挟まれる幾枚かの火山灰層とに分けられる。

天狗岱火山灰層と高館火山灰層とは主に粘土質の褐色火山灰層(ローム)で、幾枚もの粘土化した浮石層を挟む。八戸火山灰層は約13000～12000年前に降下した火山噴出物を主とするもので、下からI層～VII層の7枚に区分され、I・III・V層は主に粘土質あるいは砂質の火山灰層、II・IV・VI層は砂粒程度から径数cmまでの堅い浮石の密集したくずれやすい浮石層で、II・III層は数cm、その他は20～40cmの厚さとなっている。VII層は粘性に乏しい褐色火山灰層で、上部は腐食土に遷移する。

遺跡付近の腐食土(黒色土類)中には、8600年前の降下とされ南方の名川町刺吉以南で明瞭な地層をつくる南部浮石が密集する土層や、5000年前頃の降下とされる中撿浮石層が分布し、南方の南部浮石層は粒径数cm以内の浮石の密集層、遺跡付近で厚さ20cm程度の中撿浮石層は砂粒大の浮石(火山灰)の密集層で、いずれも膠結がすずまずくずれやすい。この2つのほか、約2000年前の降下とされる十和田b降下火山灰層の浮石部の浮石が黒色腐食土層の中に密集あるいは散在する部分がある。

館野遺跡では八戸火山灰層の部分までが発掘され、地表から下へおおまかにI～IX層までの9つに区分できた。I層は地表直下の耕作による攪乱土や盛土で、ふつう30～50cmの層厚となっている。

II層は10～30cmの厚さの黒褐色～暗褐色土層で、十和田b降下火山灰降下時の白色で堅い粒径数mm～2cmの浮石が随所に密集する。

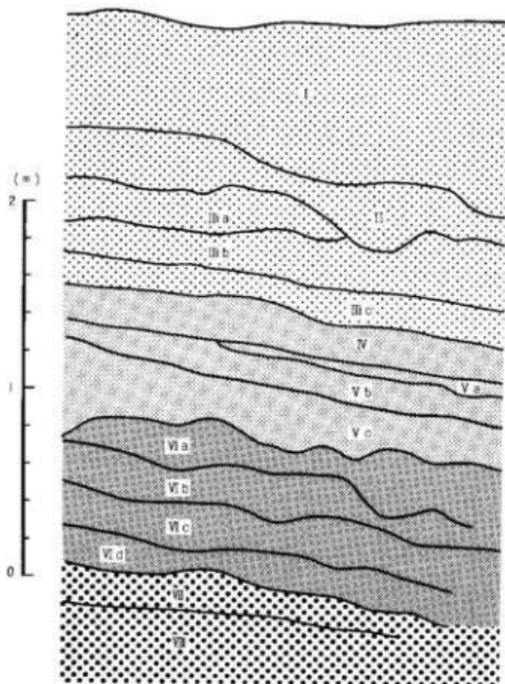
III層は層厚40～60cmで、上からIIIa層・IIIb層・IIIc層の3層に区分でき、縄文時代後期の遺物を包含する。この3層は下位の中撿浮石層(IV層)の浮石砂が上方にその混入密度を低めながら含まれるために、色調が漸移的に変化することから区別されるもので、IIIa層は暗褐色土層、IIIb層はやや明かるい暗褐色土層、IIIc層は浮石砂が多量に含まれる暗黄褐色土層である。

IV層は層厚20～25cmの中撿浮石層で、明黄褐色のくずれやすい浮石砂が密集する。

V層は層厚40～60cmで、上からVa層、Vb層、Vc層の3層に区分できる。いずれも粘土化のすすんだ黒色～黒褐色土で、Va層には白色の細かい浮石が多量に混入し、Vb層には下位の南部浮石層の粗粒浮石と白色の細かい浮石が散在する。Vc層は南部浮石層相当の明黄褐色～赤褐色の粗粒浮石が密集した土層である。

VI層は層厚70～90cmで、上からVIa層、VIb層、VIc層・VIc層の4層に区分できる。VIa層は腐食質の暗褐色土層で粗粒浮石が散在する。VIb層はローム質の明黄褐色土層、VIc層・VIc層はローム質の黄褐色土層で、VIc層がわずかに明るい。

VII層は層厚10～20cmの赤みがかった黄褐色土層で、約10000年前の二ノ倉火山灰層に連続する可能性が大きい。VIII層は層厚10cm程度の粘土質の黄褐色火山灰層で八戸火山灰層上部に相当し、IX層は灰白色～明黄褐色の八戸火山灰層互層部にあたる。



館野遺跡基本層序

I	褐色土 表土 (耕作土)				
II	黒褐色土一暗褐色土	十和田b降下火山灰 (密)	Vc	明黄褐色土一赤褐色土	南部浮石 (密)・南部浮石相当量
IIIa	暗褐色土	// (粗)	VIa	暗褐色土	
IIIb	やや明るい暗褐色土		VIb	明黄褐色土	
IIIc	暗黄褐色土		VIc	黄褐色土 (わずかに明るい)	
IV	明黄褐色火山灰	中流浮石層	VIId	黄褐色土	
Va	黒色土一黒褐色土	白色の細かい (密)	VII	赤みがかった黄褐色土	
Vb	//	白色の粗い・南部浮石 (粗)	VII	黄褐色土 (漸移層)	
			IX	灰白色一明黄褐色火山灰	八戸火山灰層

第4図 基本層序図

## 第三章 調査方法と整理方法

### 第1節 調査方法

#### 調査区の設定

道路建設用中心杭のNo319とNo320を通る線を基準軸線とし、これを延長してグリッドを設定した。1グリッドは4m×4mとした。

グリッドの呼称は、南から北方向にアルファベットの大文字、西から東方向に算用数字を付して、その組み合わせで示した。中心杭No319はK-15である。

グリッドの南北軸線はN-17 - Wである。

調査中に送水管及びケーブル線の敷設等が判明し、これらの保全のため該当地区については調査を一部断念した。したがってこれらの部分を境として便宜上、I区 - V区として地区割りを行った。(I区... 10 - 20ライン、II区... 20 - 36ライン、III区... 36 - 45ライン、IV区... 45 - 52ライン、V区... 52 - 60ライン)

#### 発掘方法

(粗掘り) 軸線(Kライン)及び5の倍数にあたるグリッドごとに土層観察用の「あぜ」を残して層ごとに掘り下げた。標準土層(基本層序)にはローマ数字を付して呼称した。

(遺構の調査方法) 遺構は各種類ごとに、確認順に番号を付した。調査中に遺構と断定できないものについては欠番としたが、一部隣接する遺構に振り替えたものもある。

遺構内の堆積状況を観察するためにセクションベルトを残し、規模の大小により四分法・二分法・その他を用いた。遺構内の堆積土は算用数字を付して呼称した。

遺構の実測の縮尺は、20分の1を基準としたが、規模の大小によって10分の1、その他とした。

実測にあたっては、斜面においては主に平板を、平坦面においては水系による遺り方実測を併用した。

記録保存のために、適宜写真撮影を行った。フィルムは、モノクロとカラーリバーサルを用いた。

(遺物の取り上げ方法) 遺構ごと及び層位ごとに取り上げることを原則とした。また、遺物の出土地点を記録し、層位・標高を台帳に記入した。遺構外出土物は、グリッド単位に通し番号を記入し、出土層位・標高を記録した。また、取り上げは、(土器- 白・石器- 青・その他- 赤)の色分けしたカードを使用し、遺物番号・出土地点・層位・取り上げ年月日等を明記した。

(白鳥 文雄)

## 第2節 記載凡例

本節では、本報告書の内容における、原稿執筆上の留意点、規則、略称、略記号、スクリーントーン等による図化などの点についての、いわば本書の凡例的意味の説明を述べる。

- 本書では、執筆者が複数にわたるため、できるだけ語句等の表現を統一するよう努めた。ただし、原稿執筆依頼者についてはその限りではないこととした。
- 本書における色調に関する表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』第5版に基づいている。
- 図版の縮尺は、各図ごとに表示してあるが、ないものは任意の縮尺を意味する。なお、写真図版においては、縮尺の統一は図っていない。
- 遺構・遺物における計測値は、それらのイメージを損なわないような妥当と考えられる部位を計測した数値であり、大半は、実測図と合致するがなかには合致しないものもある。
- 土壌の項については、その数が60余基と多数であることから、調査方法の項で述べてあるが、調査区をⅠ～Ⅴ各区に便宜上地区割りし、その順に記載してある。従って、大筋は土壌番号の数字順であるが、中には土壌番号が前後連番にならない場合もある。

また、土壌に関してだけは、各区ごとに、全土壌の観察事実記載の文章→全土壌の実測図→全土壌の出土遺物の実測図の順として記載することにした。

なお、各区ごとの土壌を記すと次のようになる。( )内は、土壌以外の遺構を示す。

Ⅰ区 該当なし

Ⅱ区 1～13・18～20・25・52・53・55 ( 1屋外炉、1・2溝 )

Ⅲ区 14～17・21～24・26・27a・27b・28a・28b・29・50・51 ( 1H )

Ⅳ区 54 ( 2～5屋外炉、1～11焼土 )

Ⅴ区 30～(32)・33・34a・34b・35～40・41a・41b・42～45a・45b・(46)・47～49

- 本書では、同一語が幾度かにわたって使われる場合、特別の場合(表題や、前後の文意で特に必要な場合)を除き、次のように省略することにした。

第1号土壌→1号土壌      第Ⅰ層→Ⅰ層

- 図版における略号等については、次のとおりとした。

P→土器      S→石器

----- → フラスコ状ビット等に顕著な上部から見えない遺構の下部輪郭

..... → 推定ライン      + → グリッド杭

A-1 ↔ A-2 → ライン延長上のグリッド杭

- 図版におけるスクリーントーンの図化は、次のとおりとした。



- 計測値において、〔 〕は現存値を、( )は推定値を意味する。

- 遺構の部位名称は、次のとおりとした。

開口面→遺構の上面 底面→遺構の下面 頸部→遺構の一番くびれた箇所

なお、前後の文意によっては、開口部・底部と表記している場合もある。また、竪穴住居跡・焼土に関しては、上記の限りとはしていない。

- 土層の層名については、すべて、第Ⅱ章第2節の記載内容に準拠しているが、なかには前後の文意から、または識別困難な理由から、Ⅲa・Ⅲb、Va・Vb・Vc等の各層細分をⅢ・Ⅴ層と記述した場合もある。

- 土器と石器に関する名称・略称は、次の第3節で述べることにする。 (遠藤 正夫)

### 第3節 遺物の分類基準

本節では、本報告書の文中記載のなかで特に遺物に関して、その呼称や分類についての基準を述べることにする。

ここで、各遺物の説明の前に、各遺物の出土地点及び、調査区域内外の状況について、触れておく。調査区域は、南側に面した斜面上に位置し、幅が平均20mという東西に細長くのびる格好の地域で、斜面上には畑作のために作られた、東西方向の段(崖)がみられ、その段の下の一帯は、やはり東西方向にのびる農道となっている。この農道部分には、地表面のぬかるみ防止のためか、付近の土を幾度となく敷設してきたといわれ、事実、農道面には、ある程度の量になる遺物がみられた(ダンボール箱で約10箱分相当量)。調査区域内に存在するこの農道の取り扱い及び農道の面に散布する遺物については苦慮したが、結果的には、一部の区域を精査し、また、散布していた遺物は、目につく限りすべて採集してきた。従って、この農道付近出土の遺物は、一応グリッド名は付してはいるものの、扱いは表採と同じようなものである。この農道、遺物でいえば表採扱いた区域は、第5図の調査区域南側にみられる段の下位部分であり、個々のグリッド名は記さないが、巨視的に言えば、10-42ライン間のJラインより南側(図では下位)、J-45グリッド杭とE-60グリッド杭を結ぶ線から南側(図では下位)の範囲がそれに相当する。

調査区域内における当時の利用状況については後述するつもりであるが、一応概略的に述べ

ると、調査区域内には、縄文時代前期から中期の時期にかけての「捨て場」がみられる（およそ45ライン付近から52ライン付近までの間）。この捨て場と関連すると思われる一帯が調査区域外に存在する。それは、調査区域内の南東側と隣接した、グリッド名でいえば、56ラインから、およそ70ラインにかけてのDラインより南側の下方に沢を臨む、急斜面を形成する一画であり、この一帯は、地形的にみても、また、地表面の観察からみても、明らかな遺物の大規模な「捨て場」である（図中には、スクリーントーンでおよその推定範囲を示しておいた）。

なお、この「捨て場」は盗掘の回数が増加したことを物語るが如く、立木は無残に倒れ、いたるところに盗掘穴がみられ、その近くには、土器片が多量に散在していた。それらの土器片は、縄文時代前期後半（円筒土器下層式）の土器が大半を占めている。

このように、今回の発掘調査の成果を述べる際、また、本遺跡を語る場合には、この調査区域外（区域外とはいつでも調査区から、わずか10m程離れただけの隣接地であるが）に位置する捨て場を念頭に置く必要があろうかと思い、本節に付記した訳である。

#### 1 土器について

今回の発掘調査で出土した土器の総量は、ダンボール箱で約100箱分にも達する膨大な量であった。その総出土土器をみると、1) 大半が、遺構外からの出土であり、遺構内と比較すれば、およそ1対4位の割合となる。2) その遺構外出土土器は、捨て場の要素をもつ平場からある程度集中して出土した。3) その遺構内外を問わず、出土した土器は、比較的復元可能なものが多い（1個体分がその場で潰れた状態の土器が多い）。4) 後述するが、出土土器を時期的にみると、縄文時代前期末葉から中期全般にわたっての時期のものが主体を占め、次いで後期前葉のものという量的な順が認められる。

出土土器は、時代別に区分すると、縄文時代前期に比定できる土器群、縄文時代中期に比定できる土器群、縄文時代後期に比定できる土器群の三つに時代区分できる。なお、上述の時期以外には、縄文時代早期の土器が2片（物見台式）、現代と思われる陶磁器が3片出土しただけである（両者とも、図・写真なく、分類の対象から除いた）。

縄文時代前期・中期に比定できる土器は、一部を除きすべて「円筒土器」であり、同じく後期に比定できる土器は、「十腰内式」土器である。

以上のように、出土土器の大半は「円筒土器」と「十腰内式土器」で、既にその型式設定基準が多くの研究者により発表され、かつ一般化されている土器群であることから、本書においては、土器の分類基準にあえて群区分を採らず、以下のように分類することにした。従って、文中の土器説明の記述は、すべて土器型式名を使用することにした。

〈土器分類基準〉

縄文時代前期… … 円筒土器下層式

- 円筒下層 a 式土器 (円筒下層 a 式・下層 a 式土器・下層 a 式)  
円筒下層 b 式土器 ( " b " " b " " " b " )  
円筒下層 c 式土器 ( " c " " c " " " c " )  
円筒下層 d 式土器 ( " d " " d " " " d " )  
円筒下層 d 式土器 ( " d " " d " " " d " " " d " )

縄文時代中期… … 円筒土器上層式・大木系土器

- 円筒上層 a 式土器 (円筒上層 a 式・上層 a 式土器・上層 a 式)  
円筒上層 b 式土器 ( " b " " b " " " d " )  
円筒上層 c 式土器 ( " c " " c " " " c " )  
円筒上層 d 式土器 ( " d " " d " " " d " )  
円筒土器 X 群土器  
大木系土器

縄文時代後期

十護内式土器

時代不明確な土器

なお、上記の項目の右側には、文中において、各土器型式名を略し記述する場合もあるため、その省略の際の略称名を付しておいた。右側 ( ) 内の略称は、文中の前後の文意によって使いわける場合もある。ただし、標題等に関しては略称してない。

また、円筒土器に関して上記の土器型式名及び分類基準は、長谷部言人氏の「円筒土器」の命名、山内清男氏の円筒土器下層式の 4 分類設定<sup>1)</sup>、江坂輝弥氏の細分類設定は<sup>2)</sup>、村越潔氏の円筒土器集成<sup>3)</sup>、三宅徹也氏の新分類基準提唱<sup>4)</sup>、等多くの先学諸氏の論中に見られる各土器型式名及び分類基準を参考とし、中でも村越潔氏の研究成果に準拠するところが多い。

以上、土器の分類について述べたが、本書では、土器に関する詳述は、遺構内と遺構外の各出土土器を一括して、第 V 章第 1 節で述べることにする。従って、各遺構内での出土遺物に關しては、特に注意すべき出土状況や、出土土器の数量の点についてのみ記述している。

(遠藤 正夫)

- 注 1、長谷部言人 1927 「円筒土器文化」『人類学雑誌』第 42 卷第 1 号  
2、山内 清男 1929 「関東北に於ける縄文土器」『史前学雑誌』第 1 卷第 2 号  
3、江坂 輝弥 1958 「青森県三戸郡大館村蟹沢遺跡調査報告」『石器時代』第 5 号  
4、江坂輝弥他 1970 『石神遺跡』  
5、村越 潔 1974 『円筒土器文化』  
6、三宅 徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」『北奥古代文化』第 6 号

## 2 石器について

本遺跡出土の石器は、欠損品が多いために、完形品だけでの分類は困難である。このため、一般的な器種分類を踏襲し、各項目内で特徴を記述するにとどめた。したがって、細分類は概略的なものであり、欠損品の特徴も大きな要素として取り扱った。

また、第V章の出土遺物の項では、第IV章の遺構内出土遺物についての詳細な記述がなされていないことから、遺構内・遺構外の出土遺物を含わせて分類・記述した。

文中の石器番号は、整理時における登録番号である。実測図及び計測値・その他の整理による混乱を避ける意味から文中でもそのまま使用した。また、剥片素材の石器及び礫素材の石器にそれぞれ1から番号を付した。剥片素材の石器中、遺構内出土のものは200番代の番号を付した。

文中では、特に特徴のあるものの記述にとどめ、各器体の特徴については巻末の石器計測表に、備考として記述した。

出土地点・計測値については、石器計測表に記載しており、掲載した図番号及び整理番号も表中に記してある。

計測表は、遺構内外を問わず同一表中に、器種ごとに記載した。表中の単位は、長さ・幅・厚さはmmとし、重さはgで表示した。( )は現存値。

礫素材の石器における文中の用語については次のとおりである。

器体成形 おもに、剥離等による粗形製作における加工

器体整形 おもに、小剥離・敲打による整形時における加工

器体調整 おもに、剥離・敲打・スリ等による一部分の加工で、器体の形状を大きく変えない程度の加工

潰し 敲打によるもので、整形等を意図した意識的な加工

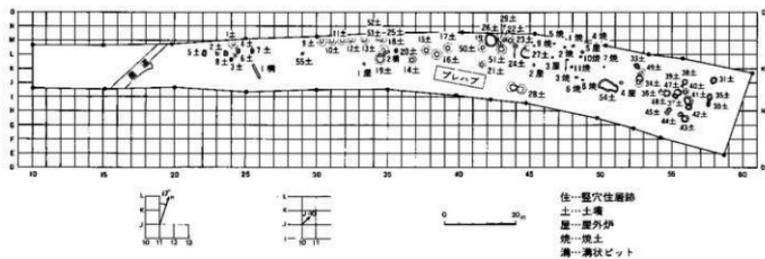
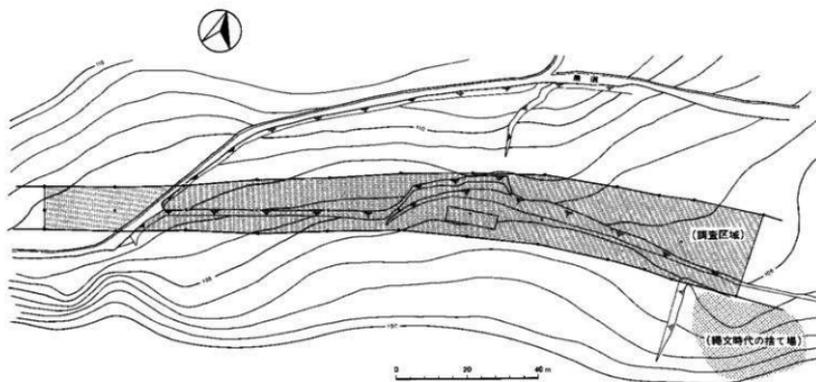
打ち欠き 剥離として捉えられるが、特に粗形を作出するものを示す。

スリ 擦る・磨る等の相違があるため、一括してスルと表記した。個別の機能として記載するときは、擦る・磨ると表記した。

器種構成は、次のとおりである。

石鑄 石槍 石錐 石筈 石匙 不定形石器 磨製石斧 石錘 半円状扁平打製石器 挟入扁平磨製石器 北海道式石冠 スリ石 凹石 敲き石 砥石 石皿 台石 その他

各器種の細分については出土遺物の石器の項で記述している。 (白鳥 文雄)



第5図 調査区範囲・遺構配置図

## 第IV章 検出遺構

発掘調査で検出した遺構の種類と数は、次のとおりである。

竪穴住居跡	-- 1軒
土壌	-- 59基 (a・bも各1基と計算)
屋外炉	-- 5基 (調査時と遺構名及び番号に変更あり)
焼土	-- 11基 ( # )
溝状ピット	-- 2基

以下、節単位で上記の遺構順に記述していくが、土壌だけは、第三章第2節で述べたとおり各地区ごと(Ⅱ-V区)に記述していく。

### 第1節 竪穴住居跡

#### 第1号竪穴住居跡 (第6図)

(位置と確認状況) K・L-41・42グリッドに位置する。当初80cm×95cmの焼土として確認した。精査の途中で焼土下位に土器片の集積が認められ、さらに炉を検出したことから住居跡であることが確認できた。

(重複) 第26号土壌と北東壁で重複しており、本住居跡が新しい。また確認面で検出した焼土は、本住居跡廃絶後の埋没過程において構築、使用された床炉と考えられる。

(規模と形態) 開口面は3m10cm×3m65cm、床面では3m×3m50cmで南北にやや長い楕円形を呈し、深さ(壁高)は、北壁で43cmである。床面積は、8.7㎡である。

(壁) V層を壁面としている。地山が南側へ傾斜しているため、南壁は非常に低い。

(床面) V層を床面としており、地山に沿って南側に向かって傾斜している。北側の壁直下とは約20cmの高低差がある。全体に軟質でしまりは弱い。また貼り床の痕跡は認められなかった。

(柱穴) VI層まで掘り下げて精査したが、遺構内外とも検出されなかった。

(炉) 中央からやや南寄り位置する。地山を掘り込んで構築しており、南側に3個の炉石を埋設している。焼土範囲は60cm×50cmで、厚さは約6cmである。

(堆積土) 4層に分層できる。黒褐色土を中心としており南部浮石を含む。全体に炭化物・土器片を含み、床面直上部分ではしまりの弱い焼土をブロック状に混入する。

(出土遺物) 多量の土器片と、石器及び礫・剥片が出土した。

本住居跡からの出土土器片は、ダンボール箱約2箱分である。土器片の多くは、堆積土中からの出土である。土器は、円筒下層d1式・上層a・b・c式及び縄文時代後期前半期のものが

出土し、時期的にも型式的にも多様である。このうち、円筒下層d式土器がもっとも多く、つづいて後期土器片が多い。

土器- 第7～8図- 1～4は堆積土中からの出土で、浅鉢形土器・深鉢形土器・姿棺形土器である。1は確認面で検出した焼土直下からの出土であり、円筒上層a<sub>1</sub>式と考えられる。

堆積土中でも床面ちかくから出土した土器片は後期のものが多く、2の深鉢形土器と4の椀形土器とは隣り合って出土したものである。本住居跡廃絶期の遺物は、十腰内I式と考えられる。炉から出土した椀形の破片と同一個体の破片がK- 31グリッドから出土している。

また、石鏝4点とスクレーパー1点が堆積土中から出土した。後者は、炉から出土したものである。礫石器では、敲き石が2点出土した(第9図)。

(遺構の時期) 出土遺物から縄文時代後期初頭の十腰内I式期の所産である。また、確認面で検出した焼土も、本住居跡とあまり差異のない時期のものと考えられる。この焼土は、本来焼土遺構の一つとして取り扱うところであるが、堆積土中に存在したため、本項で取り扱った。

(白鳥 文雄)

## 第2節 土壌

### II区 (20～36ライン間)

#### 第1号土壌 (第10図)

(位置と確認状況) L- 23・24グリッドに位置する。路線北端部で粗掘り作業中に遺構と堆積土を示す土層が認められ、土壌として確認した。

(重複) なし。(以下、重複関係にない単独遺構の場合はこの項を省略する)

(規模・形状) 北側半分は路線外にあるため未精査である。精査部分の開口面では2 m60cm、底面では2 m40cm、深さは1 m50cmである。平面形は円形を呈するものと推定される。断面形はやや中位のくびれた鉢形を呈し、底面にビット様のくぼみが認められる。

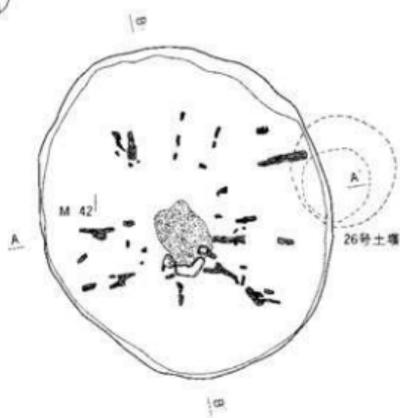
(壁) IIIa～VI層壁面としている。部分的にしまり、かたさが異なる。

(底面) VI層を底面としている。深さ40cm程のくぼみが認められるが平面形状は不明である。

(堆積土) 9層に分層することができる。壁際は黒色～黒褐色土が、中央部は褐色土が基調となっており、上部2層には十和田b降下火山灰の混入が認められる。全体にしまりに欠けるが、8・9層はかたくしまっており、人為的に埋め戻された可能性が高い。1～7層は自然堆積と推定される。

(出土遺物) 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

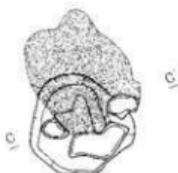


+



0 2m

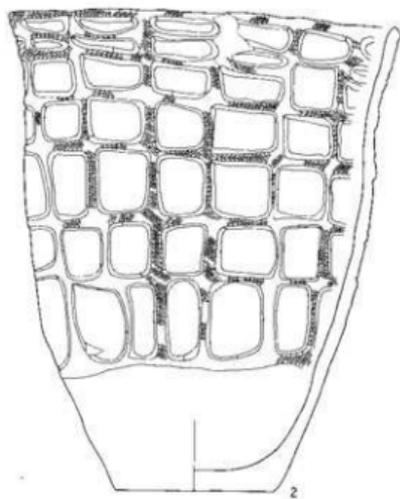
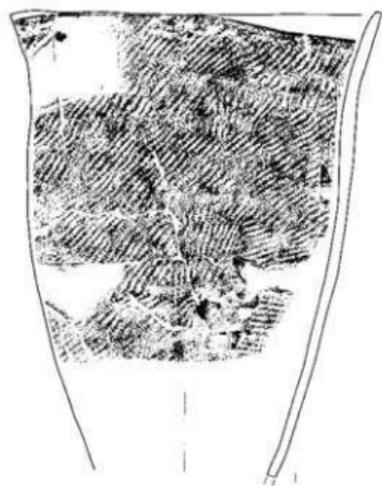
M 42+



0 1m

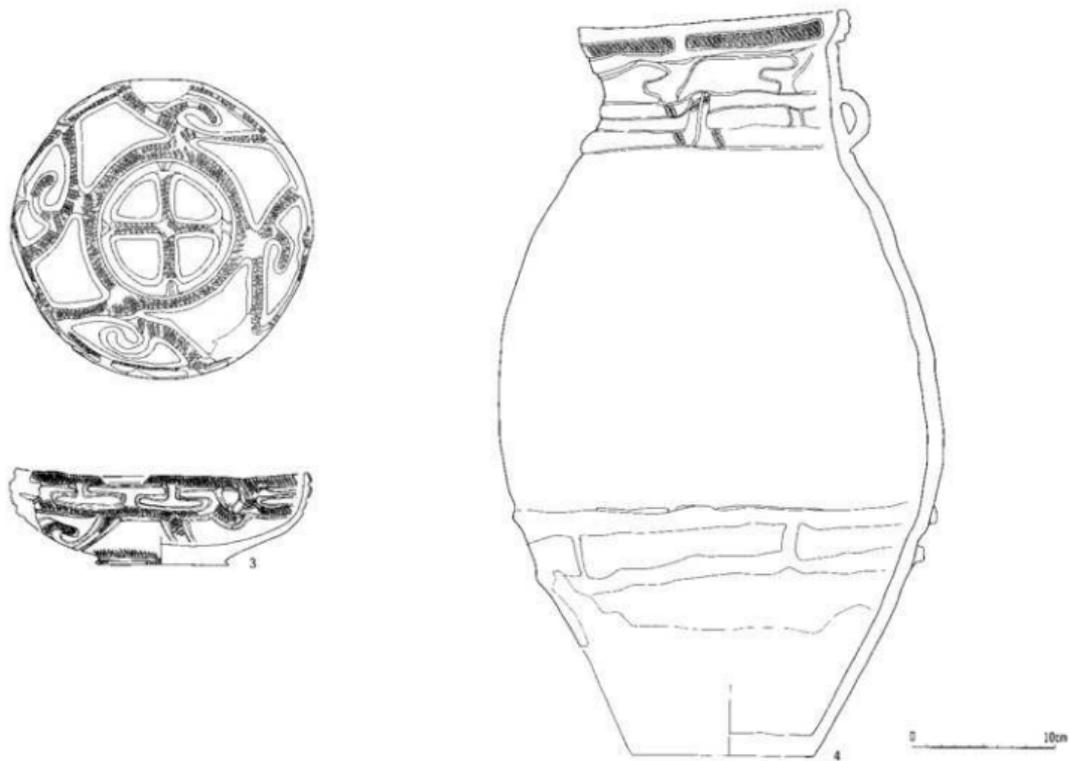
- 第1層 黒褐色土 10YR $\frac{3}{2}$   
焼土・炭化物粒混入  
土器片を多量に含む
- 第2層 黒褐色土 10YR $\frac{2}{5}$   
土器片を多量に含む
- 第3層 黒褐色土 10YR $\frac{3}{5}$   
焼土粒・浮石粒混入
- 第4層 暗褐色土 10YR $\frac{3}{4}$   
焼土粒・炭化物粒混入  
土器片を含む

第6図 第1号竪穴住居跡

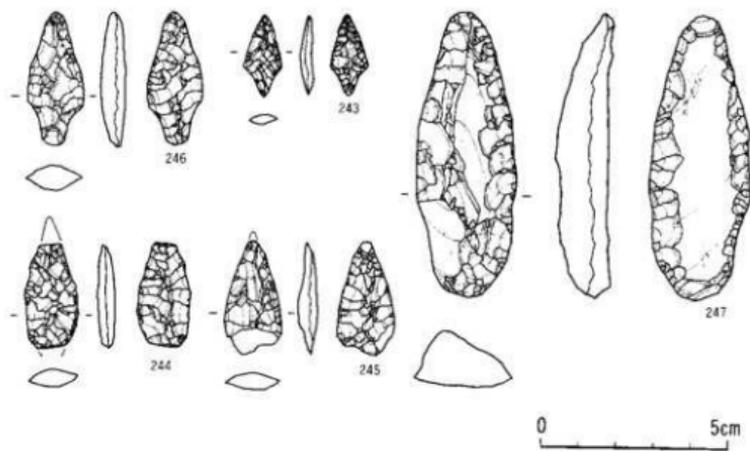


0 10cm

第7图 第1号竖穴住居跡出土復原土器(1)



第8图 第1号竖穴住居跡出土復原土器(2)



第9图 第1号竖穴住居跡出土石器

## 第2号土壌 (第10図)

(位置と確認状況) K・L-22・23グリッドに位置する。Vc層で、同系色のしみを掘り下げて確認した。

(規模と形状) 開口面は、90cm×1m20cmの楕円形、底面は1m×1m50cm不整形、深さは1m50cmである。断面は、不整なフラスコ状を呈する。

(壁) Vc層-I X層を壁面としている。地山の土質の差により、かたさ・しまりは異なる。浮石層(八戸火山灰層)の部分では崩落が認められる。

(底面) I X層中の灰白色粘土層を底面としている。非常に軟弱で、粘性が強い。中央部がややくぼんでいる。

(堆積土) 7層に分層することができる。黒褐色土を基調としており、確認面と類似した堆積土であるが、若干砂っぽい感じを受ける。全体に南部浮石を混入するが、下部では八戸火山灰層の浮石等の混入が認められる。自然堆積と考えられる。

(出土遺物) 6点の土器片と小礫が底面から20~30cm程上面から出土した。(白鳥 文雄)

## 第3号土壌 (第10図)

(位置と確認状況) K-23・24グリッドに位置する。V層中でV及びVIII層の混合土の広がりを見下ろして確認した。

(規模と形状) 開口面は90cm×1mの楕円形、底面は68cm×90cmで、深さは32cmである。断面はナベ底状を呈する。上部平面形はやや南北に長い。

(壁) Vc層-VIII層を壁面としている。しまりが強く、緩やかに立ち上がる。

(底面) VIII層を底面としている。しまりが強く、緩やかな曲面を呈する。

(堆積土) 3層に分層することができる。1層は暗褐色土と褐色土の混合土でしまりが強い。2層はしまりが弱く、黄褐色土中に暗褐色土のブロックが混入する。3層はしまりが強い。全体に混合土的な要素の強い堆積土であり、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

(出土遺物) 出土しなかった。(白鳥 文雄)

## 第4号土壌 (第10図)

(位置と確認状況) L-24グリッドに位置する。V層の最下面で、ほぼ同系色のやや色調の暗い褐色土の広がりをカットして確認した。

(規模と形状) 開口面は1m10cm×1m30cmの不整の長方形、底面は90cm×1m10cmの長方形を呈する。深さは90cmである。断面は箱形を呈する。

(壁) V-VIII層を壁面としており、しまりが強い。中位がややくびれるが、ほぼ垂直に立ち上がる。

(底面) VIII層を底面としている。しまりは強く、平坦である。壁面直下に、幅10cm、深さ10

cm程の溝がほぼ一巡する。

(堆積土) 4層に分層することができる。褐色土及び暗褐色土を基調としており、全体にかたくしまっている。各層とも混合土的な様相を呈する。人為的な埋め戻しと考えられる。

(出土遺物) 北西側の底面直上から塊状耳飾りが1点出土した。スリットはほぼ東側に向かっている。ほかに遺物は出土しなかった。遺構内外の土壌を採取し、分析を依頼した(第7章)。

(白鳥 文雄)

#### 第5号土壌 (第11図)

(位置と確認状況) K・L-22グリッドに位置する。Vc層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

(規模と形状) 開口面は95cm×1m70cmの南北に長い長方形を呈する。底面は70cm×1m60cmで、深さは50cmである。断面の形状は、箱形を呈する。

(壁) Vc～VII層を壁面としており、全体にしまりが強い。北側で一部オーバーハングするがおおむね垂直な立ち上がりである。

(底面) VII層を底面としており、しまりが強い。全体に、南側にやや傾斜している。

(堆積土) 5層に分層することができる。全体にV層に類似した黒褐色土が堆積しているが、上部はしまりが強く、地山と同程度である。各層に南部浮土を混入する。

(出土遺物) 底面から6点の礫が出土した。この中に刃部欠失の磨製石斧1点とスリ石1点がある。また、堆積土中から不定形石器が2点出土した。

(白鳥 文雄)

#### 第6号土壌 (第11図)

(位置と確認状況) K・L-24グリッドに位置する。Vc層で同系色のやや色調の暗い黒褐色土の落ち込みとして確認した。

(規模と形状) 開口面は1m5cm×1m20cmの南北に長い楕円形を呈し、底面は1m65cm×1m78cmで、深さは1m60cmである。断面は、不整なフラスコ状を呈する。

(壁) Vc層～VII層壁面としており、しまりは全体に強い。

(底面) VII層の粘土層を底面としており、軟弱で粘性が強い。東側に55cm×80cmの楕円形のくぼみがあり、底面全体は、このくぼみに向けて傾斜している。

(堆積土) 11層に分層することができる。全体にしまりがあるが、黒褐色土系の暗い色調の土層と明るい色調の土層が互層となって堆積しており、下部にはにぶい黄橙色(灰白色粘土)の混合土が帯状に認められる。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第7号土壌 (第11図)

(位置と確認状況) L-25グリッドに位置する。VI層でVc層に類似した黒褐色土の落ち込みとして確認した。

(規模と形状) 開口面で85cm×1m35cmの南北に長い楕円形を呈する。底面は、75cm×95cmで、深さは75cmである。

(壁) VI層・VII層を壁面にしており、しまりが強い。開口面でやや広がる傾向があり、南壁で顕著に認められるが、全体ではほぼ垂直に立ち上がる。

(底面) VII層を底面としており、しまりが強い。壁直下に幅10cm～20cm程の溝が楕円形に一巡している。溝の深さは約10cm程である。

(堆積土) 5層に分層することができる。黒褐色～暗褐色土を基調としており全体にしまっている。壁際の4層及び5層は軟質である。全体に南部浮土を混入する。人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

(出土遺物) 出土しなかった。 (白鳥 文雄)

第8号土壌 (第11図)

(位置と確認状況) K・L-23グリッドに位置する。VI層上面でVc層に非常に類似した黒褐色土の広がりとして確認した。

(規模と形状) 開口面で1m15cm×1m50cmの北西から南東方向に長い楕円形を呈する。底面は65cm×1m15cmで、深さは45cmである。

(壁) VI層・VII層を壁面としており、しまりは強い。

(底面) VII層を底面としている。平坦に作られており、しまりは強い。

(堆積土) 5層に分層することができる。黒褐色土～暗褐色土が主体であり、全体にしまりがあがる。特に5層は地山に類似したかたさであるが、色調及び混入物の差から堆積土と判断した。また、底面直上はやや砂っぽい感じを受ける。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 堆積土中から残核が1点出土した。 (白鳥 文雄)

第9号土壌 (第12図)

(位置と確認状況) L・M-31グリッドに位置する。V層で黒色土の落ち込みを確認した。北側半分が路線端に接近しており、確認面までで2m弱の比高差が認められることと、路線まで耕作していることから、南側半分の精査に止めた。以下、連続して確認された第10～第13号・第25号・第52・第53号土壌においても同様の理由から、南側半分または一部分の精査である。

(規模と形状) 確認した部分での開口面の最大長は1m5cmである。底面では2m70cmで深さは1m80cmである。断面は、フラスコ状を呈する。

(壁) IIIb層～IX層を壁面としている。地山の性質により部分的にしまりが異なる。下部のVII

層 - IX層部分は崩落が認められる。

(底面) IX層を底面としており、軟質である。平坦に作られている。

(堆積土) 13層に分層することができた。黒色土 - 暗褐色土が主体を占め、各種浮石・砂粒炭化物粒が混入している。下部 - 中位まではIX層の粘土等が多く混入する。自然堆積と考えられる。掘り込み部分はIII<sub>b</sub>層と考えられるが明確に把握できなかった。

(出土遺物) 土器片2点と凹み石が出土した(第14・16図)。 (白鳥文雄)

第10号土壌 (第12図)

(位置と確認状況) L・M-31グリッドに位置する。V層で黒色土の落ち込みを確認した。

第9号土壌他と同様に南側半分だけの精査である。

(規模と形状) 確認した部分での開口面の最大径は1m5cmである。底面では2mであるが、中位での最大径は2m60cmである。深さは1m85cmである。全体の断面はフラスコ状を呈する。

(壁) III<sub>b</sub>層 - IX層を壁面としており、地山の性質によりしまりが異なる。IX層では崩落が認められる。

(底面) IX層を底面としており、軟質である。平坦に作られている。

(堆積土) 16層に分層することができた。黒色土 - 暗褐色土が主体を占める。各種浮石が混入するが、特に中位には砂粒が多く混入し、下部には粘土及び八戸火山灰の浮石が多く認められる。自然堆積と考えられる。

(出土遺物) 土器片少量と小礫が出土した(第14図)。 (白鳥文雄)

第11号土壌 (第12図)

(位置と確認状況) L・M-31グリッドに位置する。V層で黒色土の落ち込みを確認した。

第9号土壌他と同様に南側部分だけの精査である。

(規模と形状) 確認した部分での開口面最大径は、1m5cmである。底面は、2m75cmで、深さは1m50cmである。断面はフラスコ状を呈する。

(壁) III<sub>b</sub>層 - IX層を壁面としており、地山の性質によりしまりが異なる。

(底面) IX層を底面としており、軟質である。平坦に作られている。

(堆積土) 13層に分層することができる。各種の浮石を混入しており、全体にしまりがある。中位までは第9・10・12・13号土壌と同様に中礫浮石の混入が多い。自然堆積と考えられる。

(出土遺物) 少量の土器片が出土した(第14図)。 (白鳥文雄)

第12号土壌 (第12図)

(位置と確認状況) L・M-32グリッドに位置する。V層で黒色土の落ち込みを確認した。

第9号土壌他と同様に南側部分だけの精査である。

(規模と形状) 確認した部分での開口面最大径は、1m10cmである。底面は、2m40cmで、

深さは1m40cmである。フラスコ状の断面を呈する。

(壁) III<sub>b</sub>層～IX層を壁面としており、地山の性質によりしまりが異なる。

(底面) IX層を底面としている。軟質である。平坦に作られているが、中央部が若干くぼむ。

(堆積土) 13層に分層することができる。各種浮石が混入しており、全体にしまりが強い。中位の4層中にはV層の崩落土の大きなブロックが混入する。自然堆積と考えられる。

(出土遺物) 少量の土器片が堆積土上面から出土した(第14図) (白鳥文雄)

第13号土壌 (第12図)

(位置と確認状況) L・M-33グリッドに位置する。V層で黒色土の落ち込みを確認した。

第9号土壌他と同様に南側部分だけの精査である。

(規模と形状) 確認した部分での開口面の最大径は1m50cmである。底面では2m30cmで、深さは1m75cmである。フラスコ状の断面を呈する。

(壁) III<sub>b</sub>層～IX層を壁面としており、地山の性質によりしまりが異なる。他の連続した土壌と中位のくびれ部分に差異が認められ、本土壌がもっとも広い。

(底面) IX層を底面としている。軟質である。平坦に作られている。

(堆積土) 22層に分層することができる。各種浮石を混入しており、中位には炭化物の混入が多い。連続して検出した土壌の中で、最上部の堆積土が異なるのは本土壌だけで、他の土壌の1層は、本土壌の2層に相当する。中位浮石の混入量の違いによるものが色調がやや明るく、他の土壌の1層上部に位置する土層に類似している。自然堆積と考えられる。

(出土遺物) 少量の土器片と石筥が1点出土している(第14・15図) (白鳥文雄)

第18号土壌 (第13図)

(位置と確認状況) L-34グリッドに位置する。本遺構の確認は、遺構上面に径2m以上の風倒木痕のような攪乱部が在り、その攪乱部と第2号溝状ピットとも重複関係にあることから、攪乱部の半截を行っていた際、その断面に地表面から30～40cmの深さの面にフラスコ状の輪郭が露呈したことによる。

(重複) 遺構の上面を攪乱(風倒木痕)により壊されている。さらに、攪乱部と遺構南東側(底面下まで)を2号溝状ピットが切断している。

(規模と形状) 開口部は、前述の如く壊されているため不明であるが、他の類例との比較や、頸部から上位へ向う壁の立ち上がり等から、最低でも直径1m以上の円形を呈するものと思われる。底面は、2m65cm×3mの楕円形を呈する。深さは、計測可能部分で最深1m10cmを計り、また、攪乱部上面からでは1m40cmを計る。断面は、フラスコ状と推定できる。底面の外縁は、高さのない割りに奥行が深い作りとなっている。

(壁) V～VII層壁面としている。底面近くの東側壁面は、しまり弱く凹凸が目立つ。ほか

はしまりが多少強く、凹凸も少ない。

(底面) VII層及び一部分VIII層を底面としている。VIII層の土質のせいか若干軟弱で、底面中央部がごくわずか盛り上がっている。

(堆積土) 6層に分層することができる。1-3層は、IV・V層の混合土で炭化物を少量含む。5層は、黄褐色土でVII層と思われる。比較的自然堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 堆積土中から土器片が出土した。石器は凹み石が1点出土している。土器は第14・22図、石器は第16図に示した。

(遠藤正夫)

第19号土壌 (第13図)

(位置と確認状況) K-34グリッドに位置する。III<sub>b</sub>層で褐色土の落ち込みを確認した。

(重複) 2号溝状ピットに上部の一部を切られている。なお、18号土壌とは重複していない。

(規模と形状) 開口面は、直径2mの円形、底面は2m65cm×2m90cmの楕円形、頸部の直径は1m40cm、深さは2mである。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

(壁) III<sub>b</sub>層からVIII層中位までの各層を壁面としている。頸部から下位の壁面は、しまりが強く凹凸は少ないが、逆に上位の壁面は、頸部上位にIV層がみられることから、しまりが弱く小さな凹凸が多い。

(底面) VIII層及び一部IX層を底面としている。しまりは、弱い。ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 17層に分層することができる。全体にしまりの弱い層が多い。9-12層は、IV層の壁崩落土である。自然堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 底面及び16・17層から石鏃が10点まとまって出土した。土器は、堆積土上位から少量出土したのみである。

土器(第14図) 石器(第15図)

(遠藤正夫)

第20号土壌 (第13図)

(位置と確認状況) L-35グリッドに位置する。Va層で褐色土の落ち込みを確認した。

(規模と形状) 開口面は、95cm×1m5cmの楕円形、底面は35cm×55cmの台形、深さは60cmである。開口面から底面の途中で段がみられる。断面の形状は、段付きの鍋状を呈している。

(壁) V<sub>b</sub>・VI層を壁面としている。しまりが強く、凹凸の少ない面となっている。壁は、西半分が急で東側半分は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

(底面) VII層を底面としている。しまりが強く平坦に作られている。

(堆積土) 単純な2層に分層することができる。両層ともにV<sub>c</sub>層が主体でありしまりは強い。

(出土遺物) 1層から土器片が5点出土したが、いずれも細片である(第38図)。

(遠藤正夫)

第25号土壤 (第12図)

- (位置と確認状況) L・M-34グリッドに位置する。V層で黒色土の落ち込みを確認した。第9号土壤等と同様に南側半分だけの精査である。
- (規模と形状) 計測した部分での開口面最大径は95cmである。底面では2m60cmで、深さは1m40cmである。断面はフラスコ状を呈する。
- (壁) V層-IX層を壁面としており、地山の性質によりしまりが異なる。
- (底面) IX層を底面としており、軟質である。ほぼ平坦に作られているが、中央部が若干低くなっている。
- (堆積土) 20層に分層することができる。各種浮石を混入しており、全体にしまりがある。粘土及び浮石の層が帯状に堆積している。自然堆積と考えられる。
- (出土遺物) 少量の土器片と磨製石斧他が出土した(第16・38図)。 (白鳥文雄)

第52号土壤 (第12図)

- (位置と確認状況) M-34グリッドに位置する。第9号土壤等の土壤を精査中に路線北側の壁面に遺構の堆積状態を示す土層として確認した。このためごく一部分だけの精査である。
- (重複) 第53号土壤と重複しており、本土壌が新しい。
- (規模と形状) 計測できたのは底面的一部分で、62cmであり、深さは90cmである。フラスコ状ピットの南西部分と考えられる。
- (壁) VI-IX層を壁面としており、しまっているが、全体像は不明である。
- (底面) 確認部分では、IX層及び第53号土壤の堆積土を底面にしている。
- (堆積土) 12層に分層することができる。上部は黒褐色土を主体としており、下部は粘土及び浮石の堆積が認められる。
- (出土遺物) 出土しなかった。 (白鳥文雄)

第53号土壤 (第12図)

- (位置と確認状況) M-34グリッドに位置する。第52号土壤と同様に路線北端の粗掘り面で断面だけを確認した。
- (重複) 第52号土壤と重複しており、本土壌が古い。
- (規模と形状) 計測したのは、底面的一部分で63cmであり、深さは第52号土壤の上部から1m30cmである。フラスコ状ピットの南西部分と考えられる。
- (壁) 上層は不明であるが、VI層-IX層を壁面としていていると考えられる。全体像は不明である。
- (底面) IX層を底面としており、軟質である。
- (堆積土) 2層に分層できる。地山の粘土と浮石の混合土である。

(出土遺物) 出土しなかった。

(白鳥文雄)

第55号土壇 (第13図)

(位置と確認状況) K・L-29グリッドに位置する。VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。調査時にはその形状から第1号柱穴状遺構としていたものである。

(規模と形状) 開口面は、50cm×60cmの不整な円形を呈する。底面は、35cm×40cmで、深さは85cmである。開口面から斜めに掘り込んでおり、柱穴状の形状を呈する。

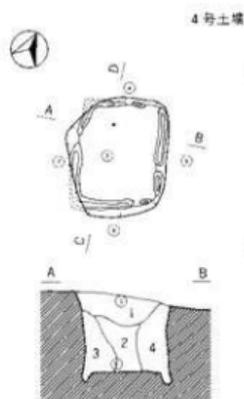
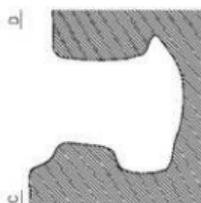
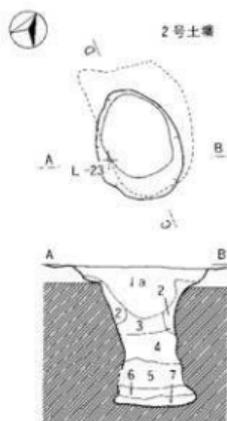
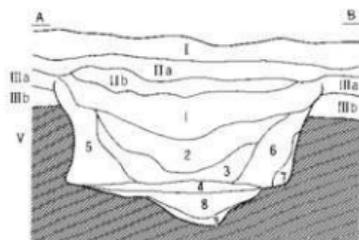
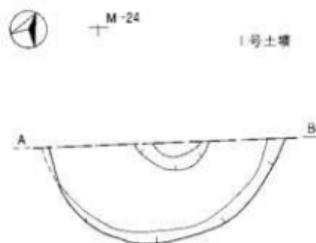
(壁) VI層・VII層を壁面としており、しまりが強い。南壁は直線的であるが北側部分は緩い階段状を呈している。

(底面) VII層を底面としている。非常にかたくしまっており、南西端の壇底最先端部には、一段低い部分が認められる。

(堆積土) 2層に分層することはできたが、底面の堆積状況は一部不明である。南部浮石を多量に混入しており、層全体にはしまりがあまり感じられない。

(出土遺物) 出土しなかった。

(白鳥文雄)



1号土壤土層注記  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 4和5B-層下火山灰5全七  
 第2層 // 10YR3/3 降下火山灰を微量含む  
 第3層 黄褐色土 10YR4/4  
 第4層 // 10YR4/4  
 第5層 暗褐色土 10YR5/2  
 第6層 黄褐色土 10YR4/4  
 第7層 灰褐色土 10YR4/6  
 第8層 // 7.5YR5/4  
 第9層 暗褐色土 10YR5/2 人為的

2号土壤土層注記  
 第1層 黄褐色土 7.5YR5/4  
 第2層 // 5YR5/4  
 第3層 黄褐色土 7.5YR5/4  
 第4層 暗褐色土 7.5YR5/2 炭化粒を含む  
 第5層 // 7.5YR5/4 炭化粒を含む  
 第6層 // 7.5YR5/4 混合土  
 第7層 黄褐色土 7.5YR5/4 混合土

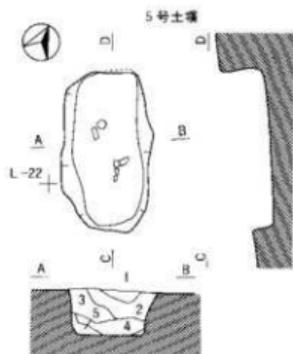
3号土壤土層注記  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 混合土  
 第2層 黄褐色土 10YR4/4  
 第3層 明黄褐色土 10YR4/6

4号土壤土層注記  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3  
 第3層 // 10YR3/3  
 第4層 黄褐色土 10YR4/4

② 土壤サンプル採取地点

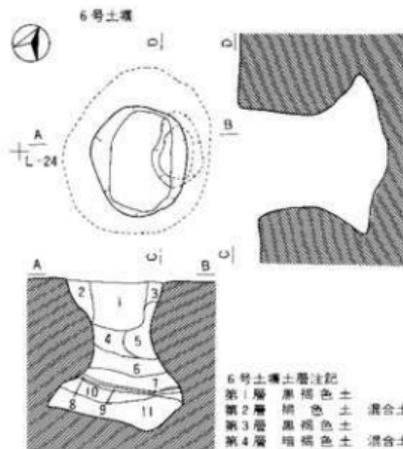
0 2 m

第10図 土壤I (II区 1~4号)



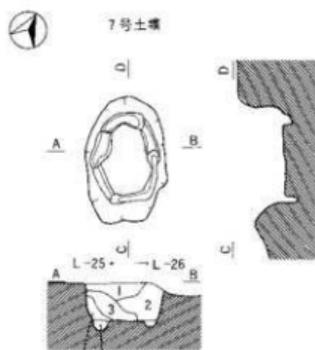
5号土壤土層注記

- |     |      |                    |
|-----|------|--------------------|
| 第1層 | 黑褐色土 | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第2層 | //   | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第3層 | //   | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第4層 | //   | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第5層 | //   | 10YR $\frac{3}{5}$ |



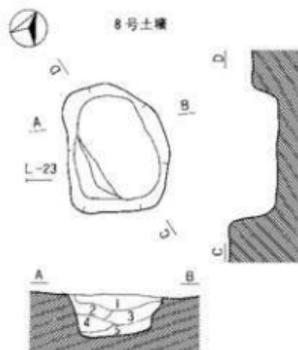
6号土壤土層注記

- |      |       |        |
|------|-------|--------|
| 第1層  | 黑褐色土  |        |
| 第2層  | 暗褐色土  | 混合土    |
| 第3層  | 黑褐色土  |        |
| 第4層  | 暗褐色土  | 混合土    |
| 第5層  | 暗褐色土  | 混合土    |
| 第6層  | 黑褐色土  |        |
| 第7層  | 黄褐色土  |        |
| 第8層  | 黑褐色土  |        |
| 第9層  | にぶい黄橙 | (白色粘土) |
| 第10層 | 暗褐色土  |        |
| 第11層 | 黑褐色土  |        |



7号土壤土層注記

- |     |      |                    |
|-----|------|--------------------|
| 第1層 | 黑褐色土 | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第3層 | 黑褐色土 | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第4層 | //   | 10YR $\frac{3}{5}$ |
| 第5層 | 暗褐色土 | 10YR $\frac{3}{5}$ |



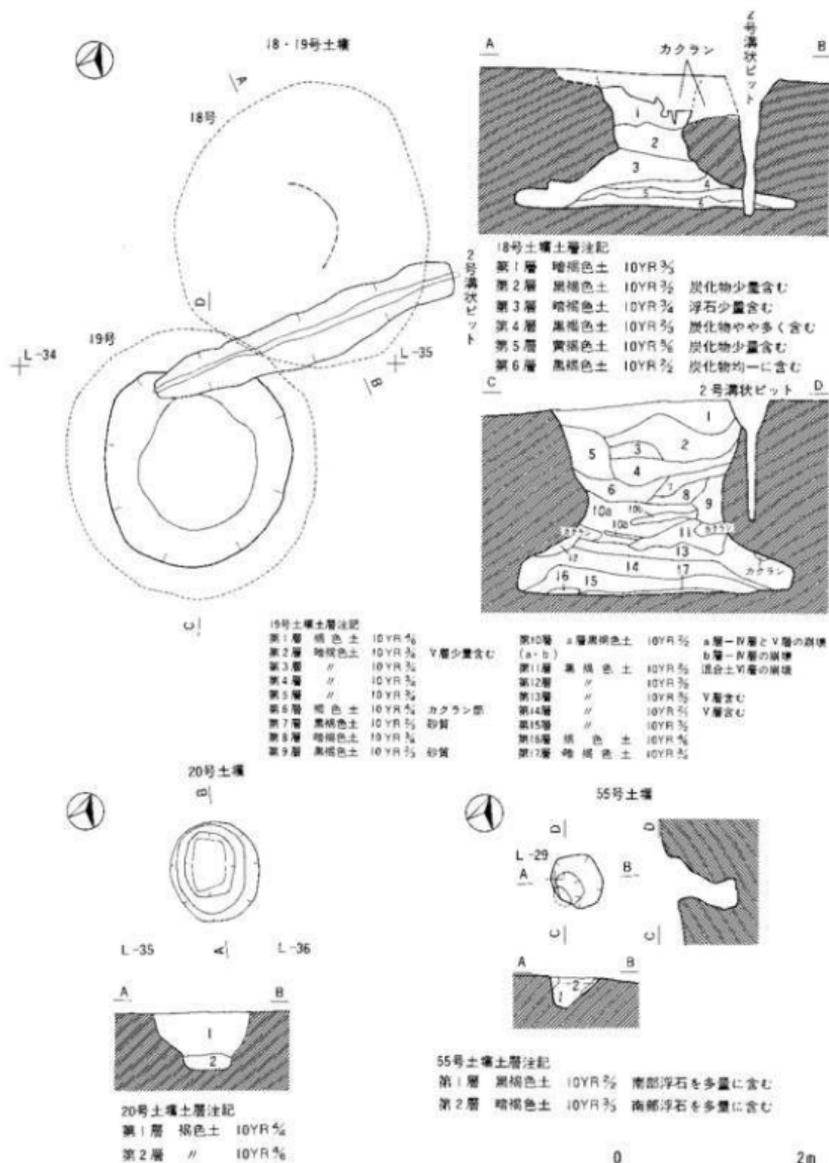
8号土壤土層注記

- |     |      |                         |
|-----|------|-------------------------|
| 第1層 | 黑褐色土 | 10YR $\frac{3}{5}$      |
| 第2層 | 褐色土  | 7.5YR $\frac{3}{5}$     |
| 第3層 | 暗褐色土 | 7.5YR $\frac{3}{5}$ 混合土 |
| 第4層 | //   | 7.5YR $\frac{3}{5}$     |
| 第5層 | //   | 10YR $\frac{3}{5}$      |

0 2m

第11圖 土壤(II区 5-8号)

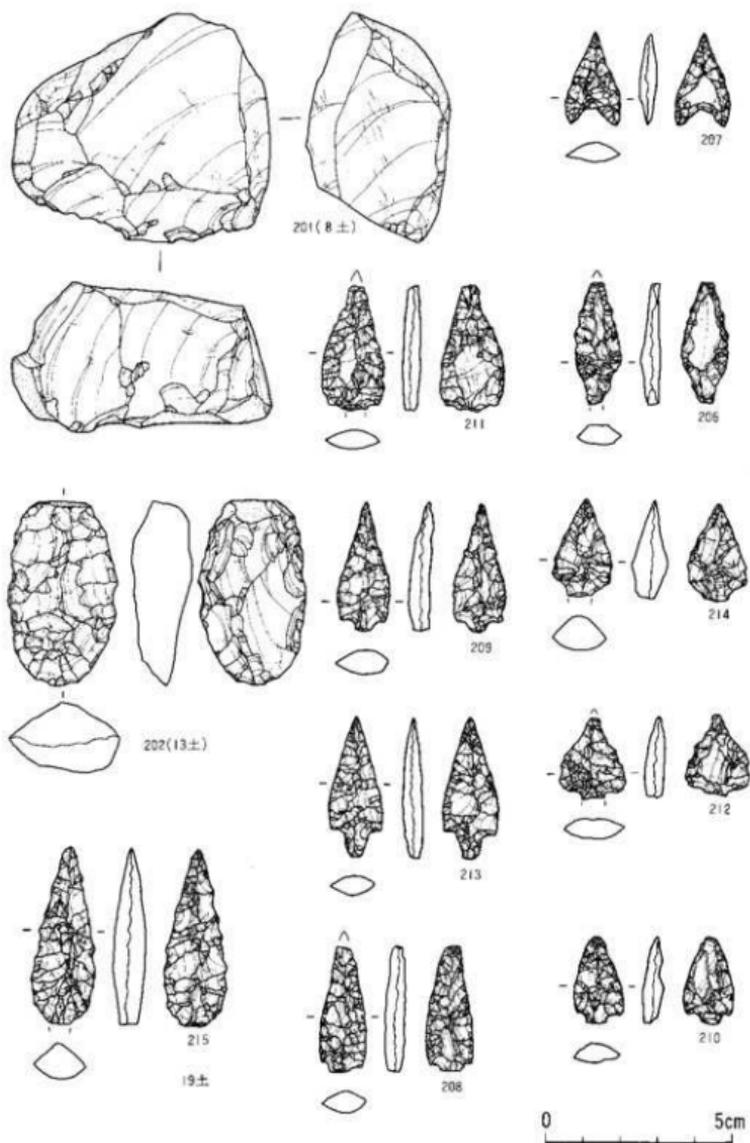




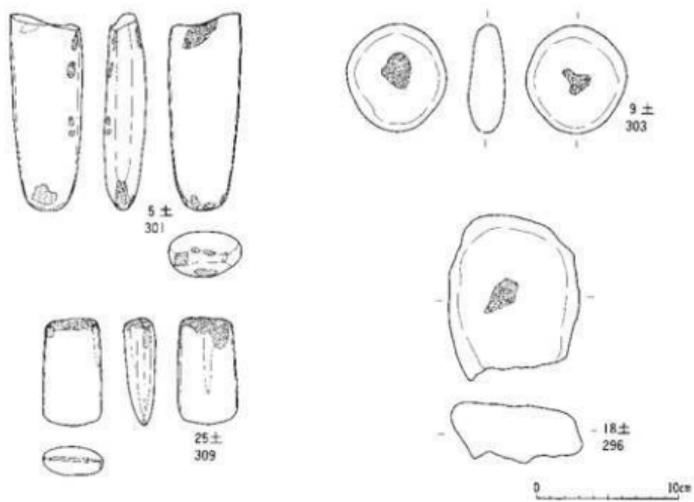
第13図 土壌 (II区 18-20-55号)



第14圖 遺構内出土土器1)



第15图 II区土壤出土石器1)



第16图 II区土壤出土石器2)

Ⅲ区 (36-45ライン間)

第14号土壌 (第17図)

(位置と確認状況) K-36グリッドに位置する。本遺構の一部が、遺構東側の後世の溝(配水管溝)の断面に露呈していたため容易に遺構確認ができた。遺構上面における確認は、V<sub>b</sub>層である。なお、この付近にはIV層は認められない。

(重複) 遺構東側が後世の溝・攪乱により切られている。

(規模と形状) 開口面は、直径1m25cmの円形、底面は、直径2m35cmの円形、深さは、1m45cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

(壁) V<sub>c</sub>層からVII層を壁面としている。全体に凹凸の少ないしまりのある面となっている。

壁は、底部から開口部に向かい一様の傾斜で内反して立ち上がっている。

(底面) VII層を底面としている。しまりは若干強く、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 15層に分層することができる。1・2層は、VII・VIII層の土と思われ開口部の蓋と考えられる。2層以下の各層には、焼土・炭化物・土器片が多量に含まれ、かつ、7層以外の2層以下各層は、しまりがなく、混合土である。明らかに人為的堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 特に8-15層及び底面から多量の土器片と石器が出土した。

土器... 第22図6・7 復原できた個体数は2点である。

石器... 第43・47図

(遠藤正夫)

第15号土壌 (第17図)

(位置と確認状況) L-37グリッドに位置する。V<sub>c</sub>層で円形を呈するVII・VIII層と思われる黄褐色土の広がりを確認した。

(規模と形状) 開口面は、1m20cm×1m35cmの楕円形、底面は2m45cm×2m60cmの楕円形、深さは1m20cmである。断面の形状は、ややいびつであるがフラスコ状を呈している。

(壁) V-VII層を壁面としている。頸部付近は内反する壁のため壁面崩落が激しく明瞭はないが、全体にしまりは強く、面の凹凸も少ない。壁は、底面から遺構中位の面まで強く内反し、そこから開口部に向かってやや直立に近い角度で立ち上がっている。

(底面) VII層を底面としている。しまりは強く、平坦に作られている。

(堆積土) 21層に分層することができる。2・3・12-16層は、一度掘り起こされたVII・VIII層を主体とする混合土である。開口部にあたかも蓋をしたような様相をみせている。18-21の各層には、焼土・炭化物等は全く含まれず、土器片が約40点包含されている。明らかに人為的堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 18-21層及び底面から土器・石器が出土した。特に底面東側壁近くでは、互いの口縁部を合わせた2個のほぼ完形土器が横位状態で出土した(第23図8・9)。

## 第16号土壌 (第17図)

(位置と確認状況) K・L-38グリッドに位置する。14・15号土壌と同様にV<sub>c</sub>層で円形を呈するVII・VIII層と思われる黄褐色土の広がりを確認した。

(規模と形状) 開口面は、直径1 m30cmの円形、底面は直径2 m85cmの円形、深さは1 m10cmである。断面の形状は、15号土壌に似ておりフラスコ状を呈している。

(壁) V~VII層を壁面としている。全体にしまりは強く、面の凹凸も少ない。

(底面) VII層を底面としている。しまりは、それ程強くはない。底面は、ほぼ平坦である。

(堆積土) 15層に分層することができる。1~4層は、一度掘り起こされたVII・VIII層を主体とする非常にしまりの強い混合土であり、1層上面には、火山灰(十和田b降下火山灰)が薄く認められる。5層上位には、多量の細かな骨片が集中してみられる。12層にも少量の骨片・焼土が含まれている。5層は、しまりがほとんどないが6層以下は各層ともにしまりが強い。

明らかに人為的な埋め戻しの様相を呈している。骨片の状況から、同じ埋め戻しでも、乱雑ではなく、丁寧な様子をうかがうことができる。

(出土遺物) 5層を間にその上下層から復原可能土器5個体及び中量の破片と石器が、また骨片が出土した。

なお、骨に関しては、各種の分析を依頼し、その結果を第VII章に掲載してある。

## 第17号土壌 (第18図)

(位置と確認状況) L-39グリッドに位置する。V<sub>a</sub>層で焼土粒と若干のまとまった土器を確認し、V<sub>b</sub>層で、14~16号土壌同様、環状を呈するVIII・IX層と思われる黄褐色土の広がりを確認した。環状の中にはV<sub>b</sub>層がみられる。

(規模と形状) 開口面は、1 m15cm×1 m30cmの楕円形、底面は直径2 m60cmの円形、深さは1 m90cmである。断面の形状は、頸部の長いフラスコ状を呈している。

(壁) VIc~VIII層を壁面としている。全体にしまりは強く、面の凹凸はほとんどない。

(底面) IX層を底面としている。しまりは強く、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 21層に分層することができる。1層は一度移動したV<sub>b</sub>層である。5層は、IX層を主体とする黒褐色、黄褐色土等の混合土である。7~9層は、壁崩落土と考えられる。12層を除く11層から20層までは、底面中央部近くが最大厚をもつような、所謂自然堆積の様相を呈しているが断定はできない。21層は、人為的に敷きつめたようにも受けとることができる。1~6・

10層は、その下位の層と比較し、かなり乱雑な堆積状況を呈し、土質等から人為的堆積の様相を呈している。11・13～21層も丁寧な埋め戻しと解するならば、本遺構も人為的に埋め戻された可能性がある。堆積土中出土の土器でも人為的埋め戻し（いつきの）であるため、ほぼ堆積土中・底面出土の土器は同時期とみて差しつかえない。

（出土遺物） 11層以下の各層及び底面から多量の土器片、石器が出土した。

土器… … 第25・39図

石器… … 第43・47図

（遠藤正夫）

第21号土壌 （第18図）

（位置と確認状況） K-41グリッドに位置する。V<sub>b</sub>層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

（規模と形状） 開口面は、85cm×1m15cmの楕円形、底面は径2mの円形、深さは70cmである。

断面の形状は、開口部が若干削平されていると思われるがフラスコ状を呈している。

（壁） V<sub>c</sub>-VII層を壁面としている。全体にしまりは弱い。壁面の凹凸は少ない。

（底面） VII層を底面としている。しまりは弱い。ほぼ平坦に作られている。

（堆積土） 10層に分層することができる。各層に量の多少はあるが炭化物が含まれており、特に10層には焼土が含まれている。各層ともしまりは弱い。6～10層は、中央部が盛り上がる形で逆に1～5層は壁際が中央部より厚く堆積する状況を呈しており、6～10層は自然堆積、1～5は人為的堆積の様相を呈している。

（出土遺物） 6層以下の堆積土中及び底面から多量の土器片と石器が出土した。

土器… … 第40図

石器… … 第43・47図

（遠藤正夫）

第22号土壌 （第18図）

（位置と確認状況） L・M-43グリッドに位置する。III<sub>c</sub>層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

（規模と形状） 開口面の径は、90cmの円形、底面の径は、1m40cmの不整形円形、深さは、最深部で1m、頸部径は、55cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

（壁） III<sub>c</sub>-VI層を壁面としている。頸部上位の壁は、IV層を壁面としているため、しまりは、まったくなく壁面も明確に把握できないが他の箇所は、しまりが強く、凹凸が少ない。

（底面） VI層下面（VI<sub>c</sub>かVI<sub>d</sub>の判別困難）を底面としている。しまりは弱い。面は、凹凸が若干みられ東側に若干傾いている。

（堆積土） 6層に分層することができる。各層にIV・V<sub>c</sub>層を少量含んでいる。自然堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 出土しなかった。

(遠藤正夫)

第23号土壌 (第18図)

(位置と確認状況) L・M-43グリッドで検出した。Ⅲc層で褐色土の落ち込みを確認した。

(規模と形状) 開口面は、直径1 m10cmの円形、底面は2 m×2 m30cmの楕円形、深さは1 m50cm、頸部直径は90cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

(壁) IV-VI層を壁面としている。全体にしまりは強く、壁面の凹凸はほとんどみられない。

(底面) VI<sub>d</sub>・VII層を底面としている。しまりはそれ程強くないが、ほぼ平坦に作られている。

底面中央に上面径35cm、深さ10cmの鍋状の小ビットが1個検出された。

(堆積土) 19層に分層することができる。6・11-13層は、壁崩落土である。2・9・11層には、IV-VI<sub>d</sub>・VII層が多量に含まれている。ほとんどの層には少量ながら炭化物が含まれている。小ビット内の19層は、砂質で若干炭化物を含む暗褐色土である。自然堆積の様相を呈している。ただし、1-4層は人為的堆積と思われる。1-3層には、ほぼ完形(底辺部欠失)の土器(第25図16)が包含されている。

(出土遺物) 2個体分の土器と石器が出土した。

土器... 第25・40図

石器... 第43図

(遠藤正夫)

第24号土壌 (第19図)

(位置と確認状況) L-43・44グリッドに位置する。Ⅲc層で一部V層を含む褐色土の落ち込みを確認した。

(規模と形状) 開口面は、径約90cmの不整形円形、底面は1 m50cm×1 m75cmの不整形楕円形、深さは1 m45cmである。南北断面形は、靴形に似ているが、全体としては、いびつなピーカー状を呈している。

(壁) III-VII層を壁面としている。東側壁面は、IV層も面としているため凹凸が激しく、しまりが弱い。他の面は、しまりも若干強く凹凸が少ない。

(底面) 一部VI<sub>d</sub>層とVII層を底面としている。しまりは強く、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 8層に分層することができる。1<sub>d</sub>層は、VII層を主体とするしまりの強い土である。あたかも14-16号土壌でみられたような土壌開口部に蓋をしたような様相を呈している。

各層ともしまりは弱い。1層以外の各層には微量の炭化物が含まれている。人為的に埋め戻した様相を呈している。特に5・6層で出土した土器は、投棄ではなく明らかに埋設したことをその出土状況が物語っている。

(出土遺物) 5・6層からほぼ完形の土器1個が出土した。堆積土中であるが本遺構の時期決定に耐えうる資料とみなせる。石器は出土しなかった。

## 第26号土壌 (第19図)

(位置と確認状況) L・M-42グリッドに位置する。第Ⅲ<sub>b</sub>層でⅦ層と思われる堅緻な明黄褐色土の広がりを確認した。

(重複) 本遺構の西側一部を1号住居跡に切られている。なお、29号土壌とは重複関係にない。

(規模と形状) 開口面は、1号住居跡に切断されているため確実ではないが、直径75cmの円形と思われる。底面は直径1m10cm、深さは1m35cmである。断面の形状は、若干いびつなフラスコ状を呈している。

(壁) Ⅳ層-Ⅵ層を壁面としている。しまりは弱く、壁面の凹凸も多い作りである。壁は、南西側の一部が、ほぼ垂直に近い内反で、他は頸部まで内反し、そこから垂直に近い角度で立ち上がっている。

(底面) Ⅵ<sub>a</sub>層を底面としている。しまりはほとんどなく、平坦部の少ない凹凸の多い面に作られている。

(堆積土) 8層に分層することができる。1-4層は、Ⅵ<sub>a</sub>・Ⅶ層主体の混合土であり、14-16号土壌でみられたような開口面に、Ⅶ層又はⅧ層の一度掘り起した土を蓋状に埋め戻した様相を呈している。6層は壁崩落土である。セクション図では理解し難たいが、精査中の所見では、明らかに人為的堆積であるとの感触を受けた。

(出土遺物) 土器片が堆積土上位から、わずかに数点出土したに過ぎず、石器は出土しなかった。土器の時期は不明である。

(遠藤正夫)

## 第27号土壌 (第20図)

(位置と確認状況) K・L-44グリッドに位置する。遺構の確認は、第Ⅲ章でも記述してあるが、調査区域を農道や配水・送電管が走り、粗掘り不能箇所を目安に地区割りを行ったが、その粗掘り不能箇所の一つが45ラインに当たっており、地表面から地山までの深さ約3mのベルト断面に遺構の輪郭が露呈したという偶然の結果によるものである。ベルトの断面には、基本層序の第Ⅲ<sub>b</sub>層の中位付近から下位に向けて、2基分の明瞭な輪郭が描かれていた。2基は、重複関係にあり、2基とも27号の番号を付し、各々をa・bで遺構区分した。重複関係において新しい方が27a号で古い方が27b号である。

## 第27号 a 土壌

(位置と確認状況) 開口面は、直径約1m30cmの円形を呈すると思われ、底面は2m45cmの円形と推定できる。深さは、断面において計測でき1m85cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈しており、全体の東側約半分がベルト下にあり、精査は西側半分だけである。

(壁) IIIb-VII層を壁面としている。全体にしまりは強い。壁面の凹凸はほとんどみられない。

(底面) VI d-VII層を底面としている。非常に堅緻な面を平坦に作っている。

(堆積土) 14層に分層することができる。各層に微量ながら炭化物が含まれている。全体にしまりは弱い。自然堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 7層からほぼ2個体分の土器が出土した。

土器... 第25・41図

石器... 第44・47図

(遠藤正夫)

#### 第27号b土壌

(位置と確認状況) 未精査部分は、遺構の東側部分で全体の1/5程度に相当する。全体の形状は、底面より上面の方が広い竪穴状を呈している。なお、精査当初は、竪穴住居跡を想定したが、一部壁が内反すること、柱穴が存在しないこと、炉等の施設がみられないこと等から土壌として扱うことにした。

(壁) IIIb-VI a層を壁面としている。しまりは、IV層部分だけがもろいが他は強い。一部であるが西側の壁は若干内反して立ち上がっている。

(底面) VI a・VI b層を底面としている。しまりは強い。底面には、高低差の小さな起伏が多い。

(堆積土) 10層に分層することができる。全体に炭化物を微量含み、6・9層には焼土も含まれている。全体にしまりが強い。自然堆積が人為的なものと判断できない。ただ1-4層は人為的堆積と考えることが可能である。

(出土遺物) 1・2・4層から多量の土器片が出土したが、復原できたものはない。

土器... 第41図

石器... 第47図

(遠藤正夫)

#### 第28号土壌 (第20図)

(位置と確認状況) 本土壌は、重複関係にないが、28a土壌と28b土壌に分けて記述する。

28a号は、I-43グリッドに、28b号はI-44グリッドに位置する。

本遺構の位置する区域一帯は、調査区域内外に広がる畑地へ通ずる農道に相当している場所で、第5図でいえば、調査区南側に東西方向に延びる傾斜面の下(南側)位にあたる。なお、この東西方向に延びる農道部分の大半は、調査区域内に含まれてはいるものの、調査中も使用していた農道であったこと、その他種々の事情等により、未精査の地区である。ただ、本遺構の位置する付近一帯には、道路面上に多数の土器片が散在しており、本遺構は、その遺物取り上げの際、わずかに道路面に露出していたほぼ1個体分の土器を取り上げるにあたり、道路上面の盛土を一部除去した際、最大径5m50cm程の楕円形を呈する落ち込みを確認した。

遺構確認のため、非常にかたくしまった盛土を除去したところ、その面には、南北方向に幅

数10cm間隔で長芋用のトレンチャーによる深さ1m程の溝(攪乱)が露出し、ぼんやりと円形らしき2基の遺構の存在を確認できたが、明確に把握するまでには至らなかった。従って、この時点で遺構番号を付すこととしたため、便宜上、西側の遺構を28a号(I-43)、東側の遺構を28b号(I-44)とすることにした。

なお、28b号土壌は、後述するが精査中開口部の崩壊に遭い、精査作業を一部断念した遺構である。28a号土壌と28b号土壌は、共に前述の如く明確な輪郭把握のため大分上面を掘り下げている。

#### 28号a土壌

(規模と形状) 開口面は、1m80cm×2m10cmの楕円形、底面は2m55cm×2m85cmの楕円形、深さは1m60cmである。断面の形状は、いびつに変形したフラスコ状を呈している。東西断面で見るとその形は、靴形を呈している。

(壁) IIIb-VI層を壁面としている。全体にしまりはそれ程強くなく、面の凹凸も多く雑な作りである。東側一部の壁は、底面から垂直に近い角度で立ち上がり、残りの大半は、底面から開口面に向かって内反気味に立ち上がっている。開口部は、底部の中心から東側にずれて位置している。

(底面) VII層を底面としている。しまりは弱く、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 8層に分層することができる。1層上面は、道路下になっていたため、極端にしまりが強く堅固になっている。4層はIV層が、5層はV層が主体となっている。各層とも混合土である。9層は壁崩落土である。明らかに人為的堆積の様相を呈している。

(出土遺物) 各層及び底面から多量の土器片が出土した。復原できた個体数は19個にもなる。1層以外の土器は各層及び底面出土のものも含めて、短期間に投棄された同時期の資料として取り扱うことができる遺物と思われる。

土器.... 第26~32図

石器.... 第47図

#### 28号b土壌

本遺構は、フラスコ状の土壌であるが、精査中、開口部付近が道路下の堅固な土となっていたこと、頸部付近の壁面が厚さ10数cmのIV層が一巡していたこと等の悪条件が重なり、狭い開口部付近の土(天井部)の崩壊がみられ、精査担当者の危険も考慮してやむなく、出土していた遺物を単に拾い集めていた際中、さらにセクションベルトも崩壊し、精査を断念することにした。従って、開口面のプランは、不明確である。

(規模と形状) 底面は、2m50cm×2m75cm(一部は崩落により不確実)の楕円形を呈する。深さは、約1m80cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈していた。

(壁) IIIb-VI層を壁面としている。しまりはやや強い。

(底面) VII層を底面としている。軟弱であるが、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 10余層に分層した直後、崩壊してしまったので詳細は不明である。しかし、全体的には、28a号土壌とほぼ類似しており、各層ともに各種土質の混合土であった。しまりは全体に強いが、その要因は、道路の下にあったことが大きく作用している。所見では、明らかに短期間で埋め戻されたような人為的堆積の様相を呈していた。

(出土遺物) 各層及び底面から多量の土器が出土した。復原できた個体数だけでも8個にものぼる。石器も20余点出土した。

しかし、前述のとおり、遺構の崩壊というアクシデントにより、その出土層位は不確実である。ただ、堆積土の状況等から、上位堆積土中出土の土器以外は、28号a土壌と同様、同一資料として取り扱うことは可能である。土器は、埋設というよりは、投棄した様相を呈していた。

土器... 第33-34図

石器... 第44-48図

(遠藤 正夫)

第29号土壌 (第19図)

(位置と確認状況) L・M-42・43グリッドに位置する。IIIb層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

(重複) なし。平面図では、26・61号両土壌と重複しているように見えるが、3基の土壌断面図でもわかるとおり、各々の深さに違いがあるため、実際は3基とも重複関係にはない。

(規模と形状) 開口面は、直径約1mの略円形、底面は2m10cm×2m25cmの楕円形、深さは1m50cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

(壁) IIIb-VII層を壁面としている。しまりが強く、面の凹凸は少ない。壁は、すべて内反して立ち上がっているが、開口面の中心と底面の中心とは若干のずれがあるため、南側の方が北側より多少内反の度合いが弱い。

(底面) VII層を底面としている。しまりは普通である。ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 13層に分層することができる。4・5層には炭化物を含む。7-9・11層は壁崩落土である。10・12・13層は砂質である。全体に各層ともにしまりが弱く、自然堆積か人為的堆積かは判断できない。

(出土遺物) 底面から4個体分の土器が出土した。

底面から他には、石筥、礫石器各1点が出土した。堆積土中からは、他に石製品等も出土した。

土器... 第35図

石器... 第46・48図

(遠藤 正夫)

第50号土壌 (第21図)

(位置と確認状況) L-41グリッドに位置する。Ⅲb層でぼんやりと円形らしい輪郭を確認したが、遺構と断定した面は、Va(Ⅳ層欠如)層上面である。

(規模と形状) 開口面は、径約95cmの不整形円形、深さは1m60cm、頸部の最狭部は、径75cmである。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

(壁) Ⅲb・V-VII層を壁面としている。しまりは全体に強く、面の凹凸が小さい。壁の立ち上がりは一様ではなく、南側半分が北側より若干内反の度合いが緩やかである。

(底面) VII層を底面としている。しまりが強く、平坦に作られている。

(堆積土) 11層に分層することができる。5・9層は、Ⅶ・Ⅷ層が主体となる混合土である。各層ともにしまりは弱く、10・11層は、しまりがほとんどない砂質である。4層には、焼土・炭化物が含まれており、炭化物は、他に3・6・8・10・11層に含まれている。精査中の所見から、明らかに人為的埋め戻しによる堆積である。

(出土遺物) 底面から復原可能土器が2個体各々横横に潰れた状態で出土した。堆積土中から不定形石器が1点出土した。

土器... 第36・42図

石器... 第46図

(遠藤 正夫)

第51号土壌 (第26・29と同一図面)

(位置と確認状況) L-42・43グリッドに位置する。Ⅲb層で炭化物・浮石を含むしまりの強い暗褐色土の落ち込みを確認した。

(重複) なし。29号土壌でも記述してあるが、29号土壌と本土壌とは、その深さに違い(本土壌の方が深い)があるため、重複関係にはない。

(規模と形状) 開口面は、径1m55cmの円形、底面は、径2m80cm、深さは最深部で1m75cm、頸部の径は、最狭部で95cmをはかる。断面の形状は、フラスコ状を呈している。

(壁) Ⅲb-VII層を壁面としている。北側(29号土壌側)の面は凹凸が目立つが、南側は、凹凸が少ない。全体にしまりは強い。

(底面) VII層下位面を底面としている。しまりが強く、平坦に作られている。

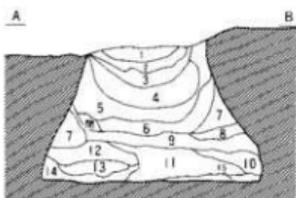
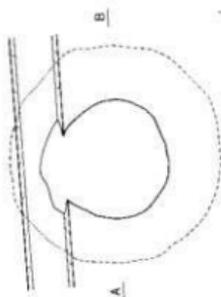
(堆積土) 11層に分層することができる。5・7層は、頸部壁面の崩落土と思われる。9層はもろい焼土である。6・8・10層は多量の炭化物を含んでいる。全体に各層ともしまりが弱く、11層は壁崩落土も混入したためか砂質である。人為的埋め戻しの様相を呈している。なお、堆積状況は、29号土壌と非常に類似している。

(出土遺物) 11層中及び底面から復原可能土器3個体が出土した。また、堆積土中位から石斧・凹み石各1点が出土した。土器... 第36・37・42図 石器... 第48図 (遠藤 正夫)

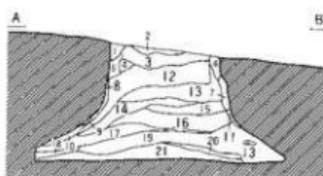
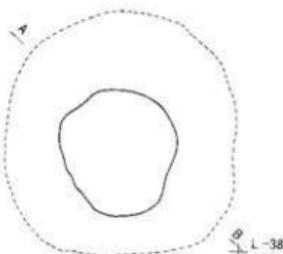


14号土壌

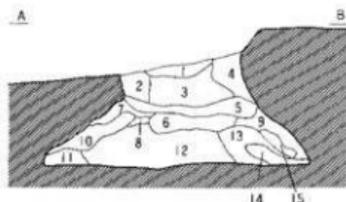
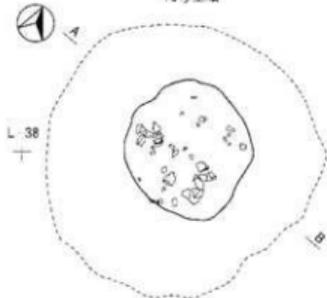
L-37



15号土壌

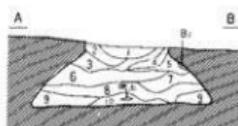
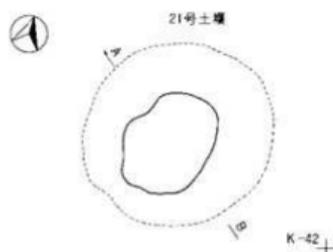
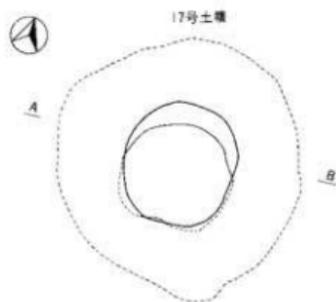


16号土壌

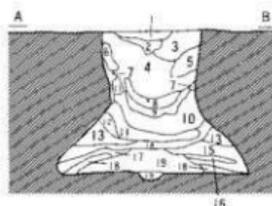
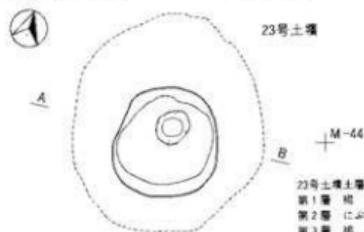
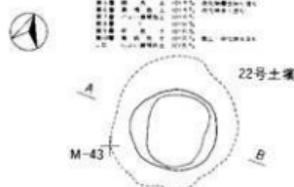


14号土壌土層記		
表土層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第1層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第2層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第3層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第4層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第5層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第6層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第7層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第8層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第9層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第10層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第11層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第12層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第13層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
14号土壌土層記	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
表土層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第1層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第2層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第3層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第4層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第5層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第6層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第7層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第8層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第9層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第10層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第11層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第12層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第13層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第14層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第15層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第16層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第17層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第18層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第19層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第20層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第21層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
16号土壌土層記	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
表土層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第1層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第2層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第3層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第4層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第5層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第6層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第7層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第8層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第9層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第10層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第11層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第12層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第13層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第14層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>
第15層	砂	土 0.00 m <sup>2</sup>

第17回 土壌 (田区 14~16号)

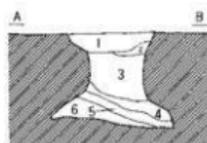


1 暗棕色土	10YR 5/3	2 暗棕色土	10YR 5/3
3 暗棕色土	10YR 5/3	4 暗棕色土	10YR 5/3
5 暗棕色土	10YR 5/3	6 暗棕色土	10YR 5/3



23号土壤土層記

第1層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第2層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第3層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第4層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第5層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第6層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第7層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第8層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第9層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第10層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第11層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第12層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第13層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第14層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第15層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第16層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第17層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第18層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入
第19層	暗棕色土	10YR 5/3	炭化物混入

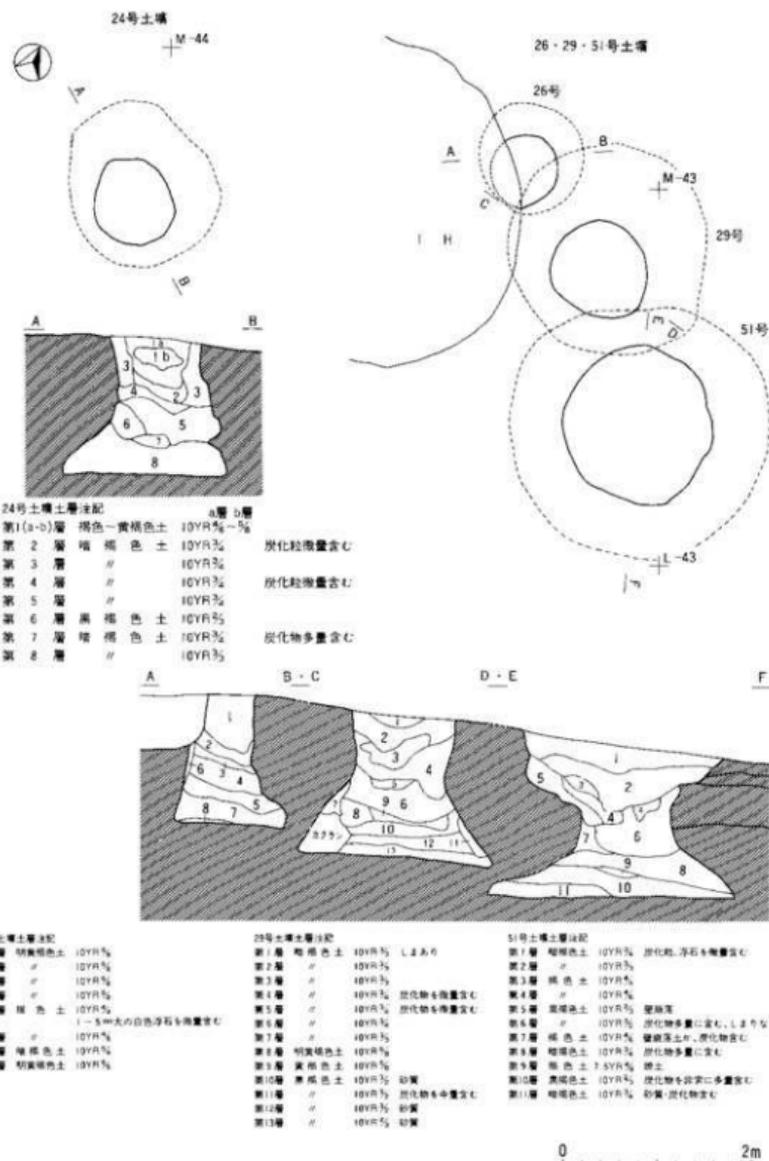


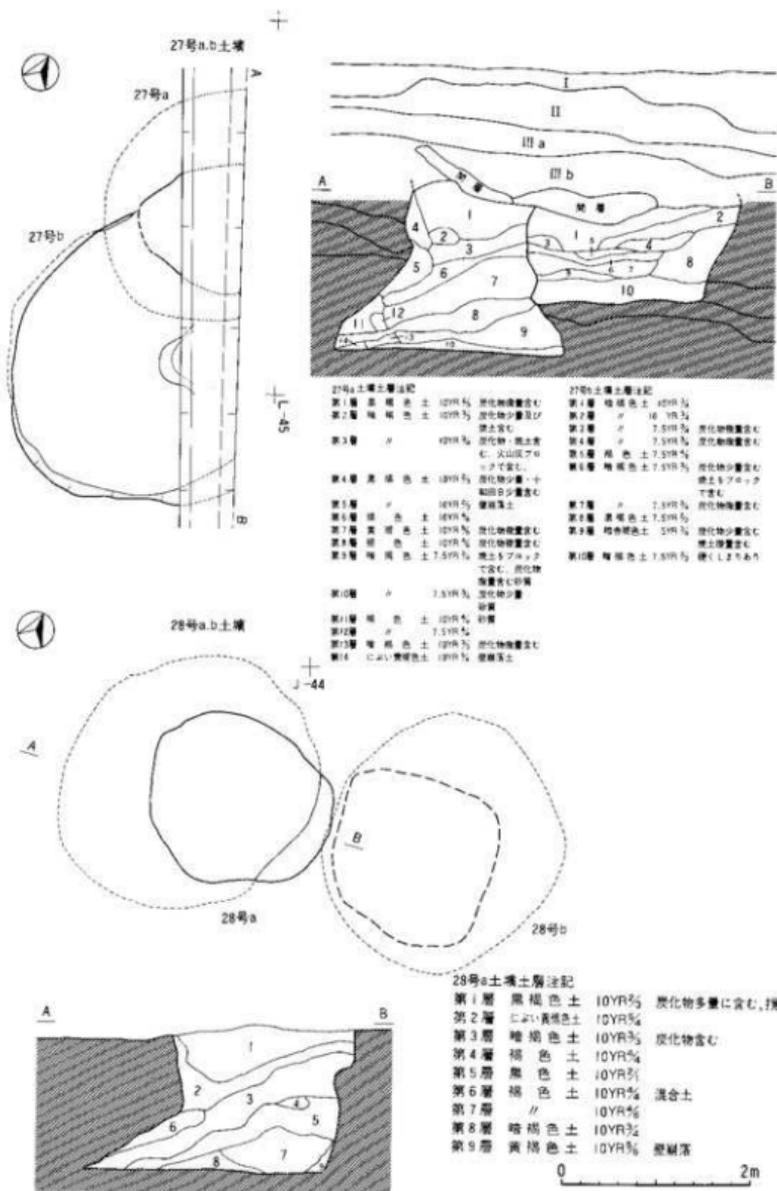
22号土壤土層記

第1層	暗棕色土	10YR 5/3	V層混入、炭化物混入、L、M、R、球
第2層	暗棕色土	10YR 5/3	V <sub>0</sub> 層混入
第3層	暗棕色土	10YR 5/3	
第4層	暗棕色土	10YR 5/3	
第5層	暗棕色土	10YR 5/3	
第6層	暗棕色土	10YR 5/3	砂質

0 2m

第18图 土壤 (Ⅲ区 17-21-23号)



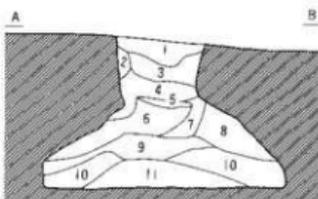
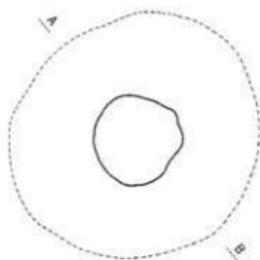


第20図 土壌 (Ⅲ区 27号a.b・28号a.b)

+M-41

50号土壇

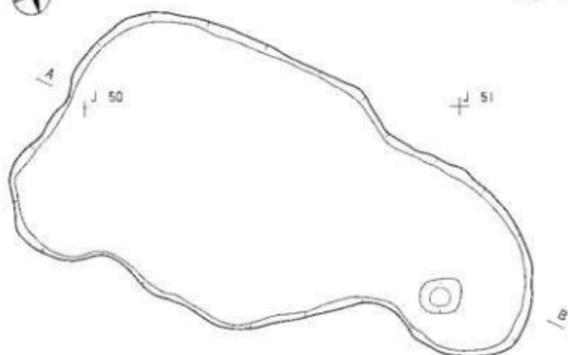
+M-42



50号土壇土層注記

- 第1層 粘 棕色土 10%以下 浮石を全体に多量含む  
 第2層 砂 10%以下  
 第3層 黄 棕色土 10%以下 炭化物を中量含む  
 第4層 粘 棕色土 7.5%以下 炭化物・塊土を含む  
 第5層 粘 黄棕色土 10%以下  
 第6層 粘 色土 10%以下 浮石、炭化物を少量に含む  
 第7層 粘 棕色土 10%以下 炭化物を少量含む  
 第8層 砂 10%以下 炭化物を少量含む  
 第9層 粘 黄棕色土 10%以下  
 第10層 粘 棕色土 7.5%以下 炭化物を中量含む、砂質  
 第11層 砂 7.5%以下 炭化物を微量含む、砂質

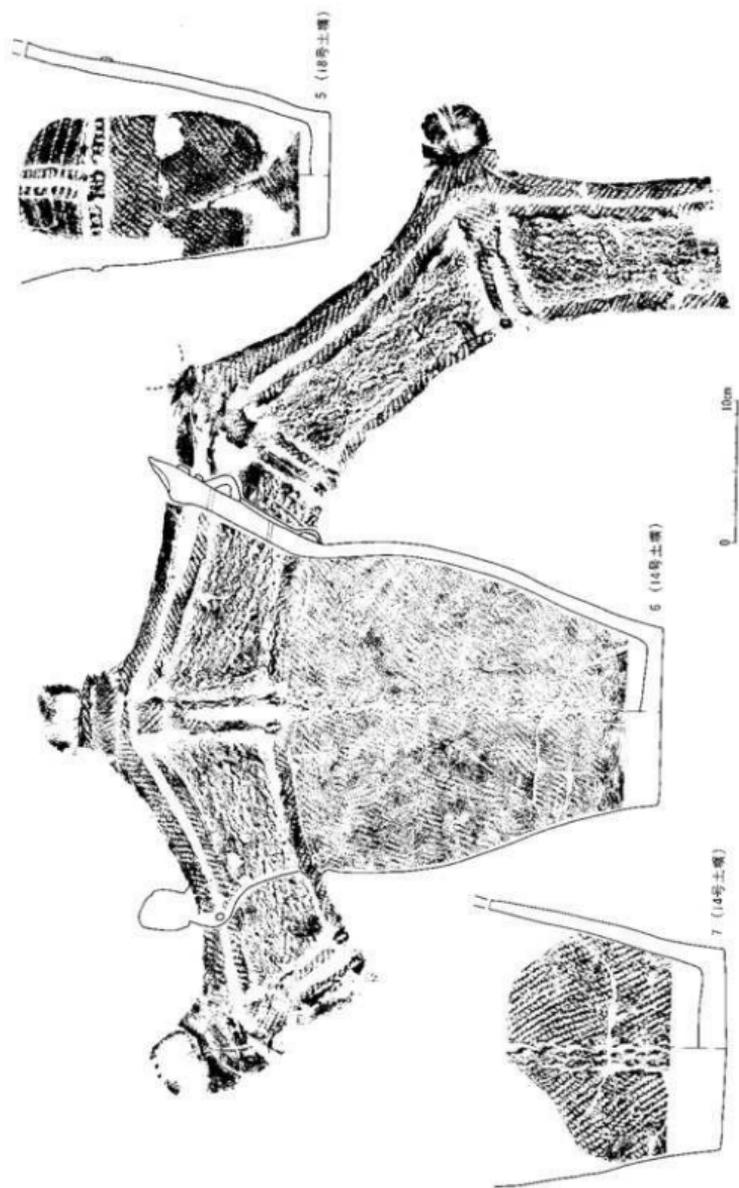
54号土壇



I 層

0 2m

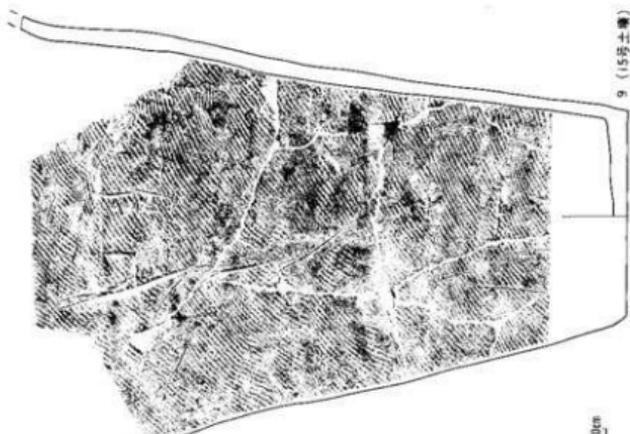
第21図 土壇 (III・N区 50・54号)



第22回 遺構内出土護原土器3



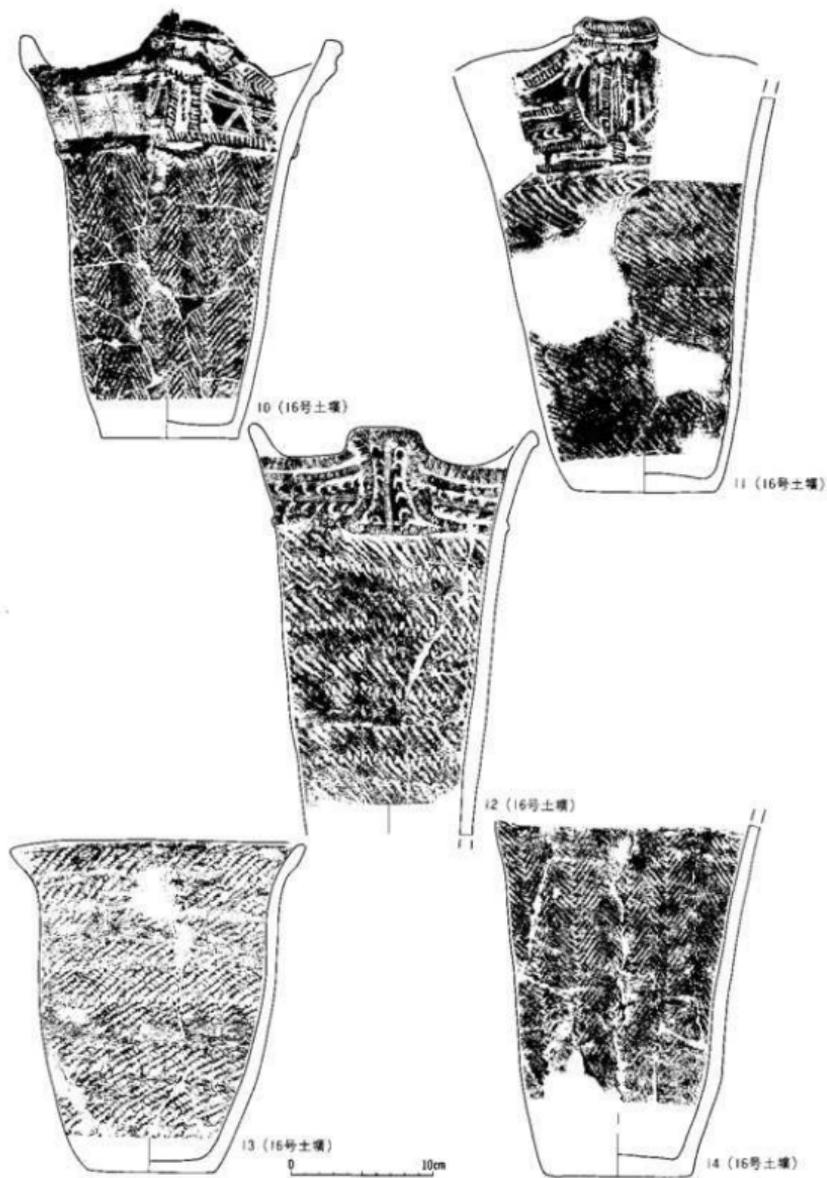
8 (15号土壘)



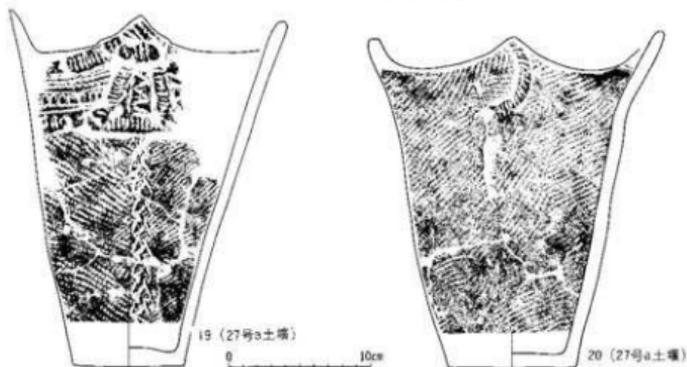
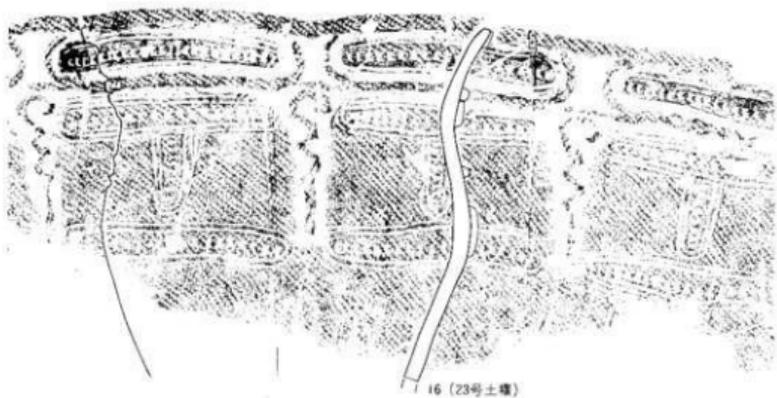
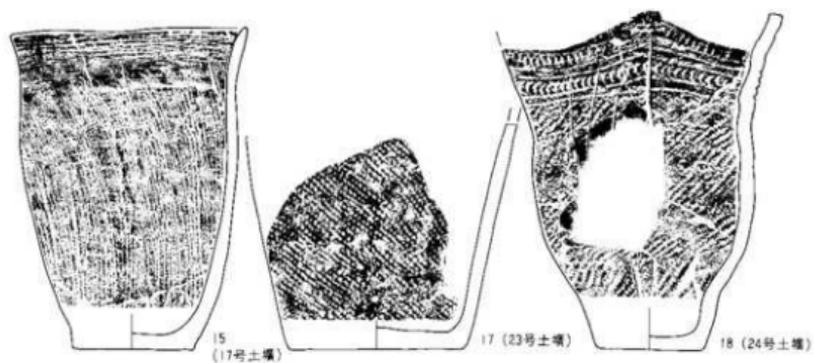
9 (15号土壘)

0 10cm

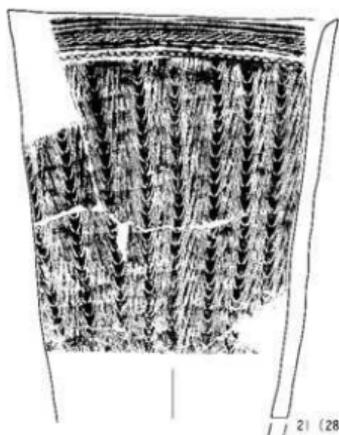
第23図 透網内出土織原土器4)



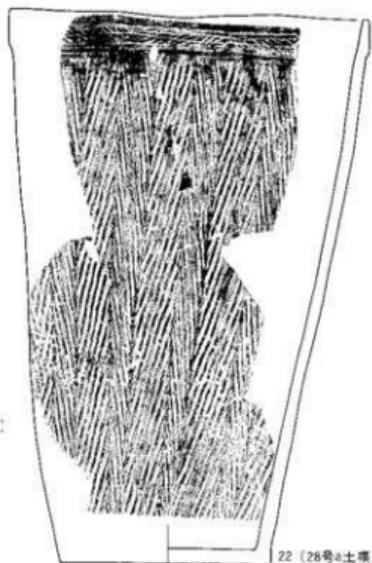
第24图 遺構内出土復原土器5)



第25圖 遺構内出土復原土器6)



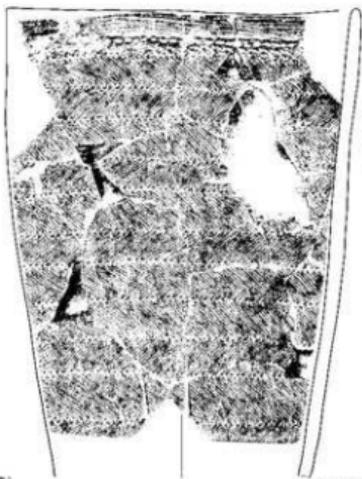
21 (28号a土壤)



22 (28号a土壤)



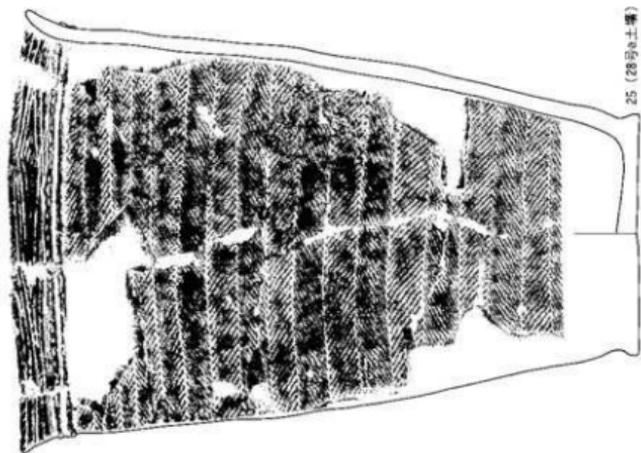
23 (28号a土壤)



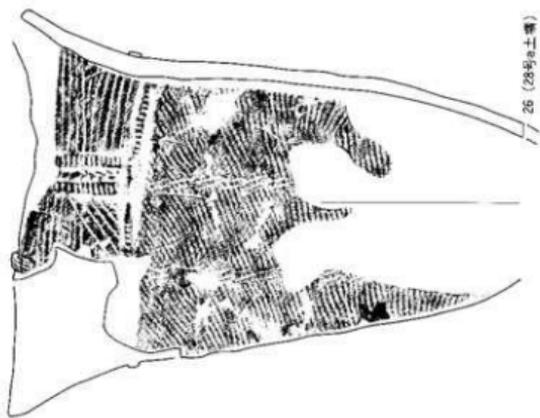
24 (28号a土壤)

0 10cm

第26图 遺構内出土復原土器7)



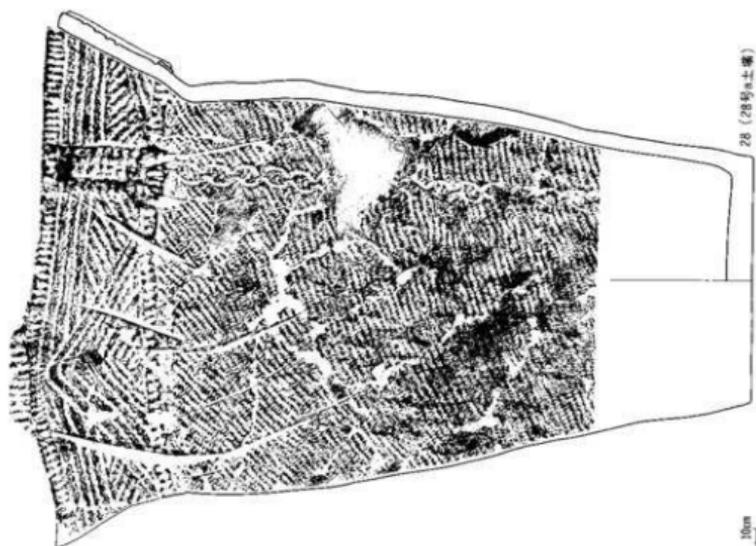
25 (289号土器)



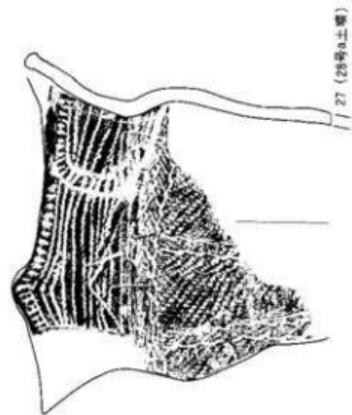
26 (289号土器)



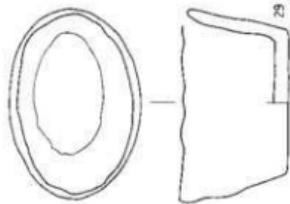
第27图 遺構内出土襦袢土器B)



28 (28号土壙)

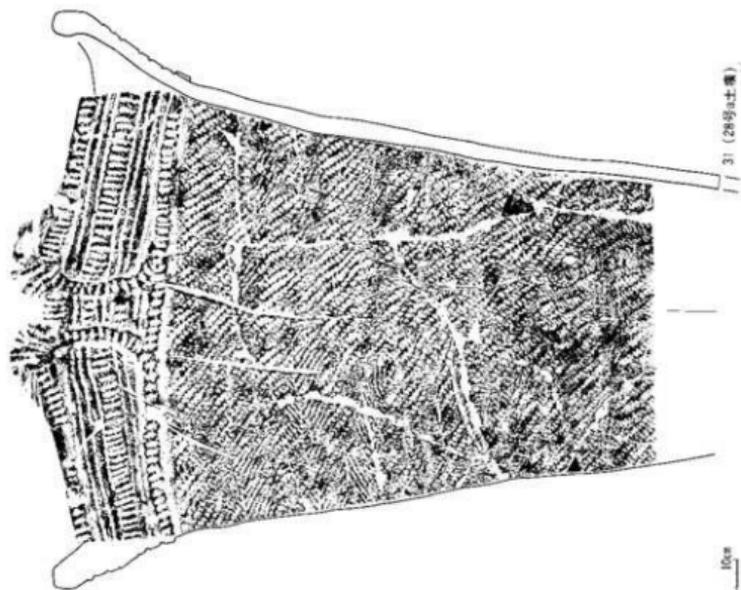


27 (28号土壙)

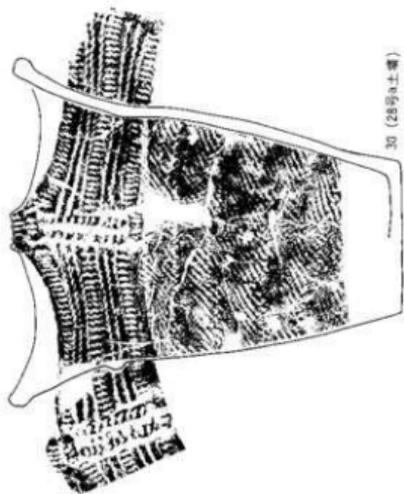


29 (28号土壙)

第28図 遺構内出土復原土器9



31 (28号土器)



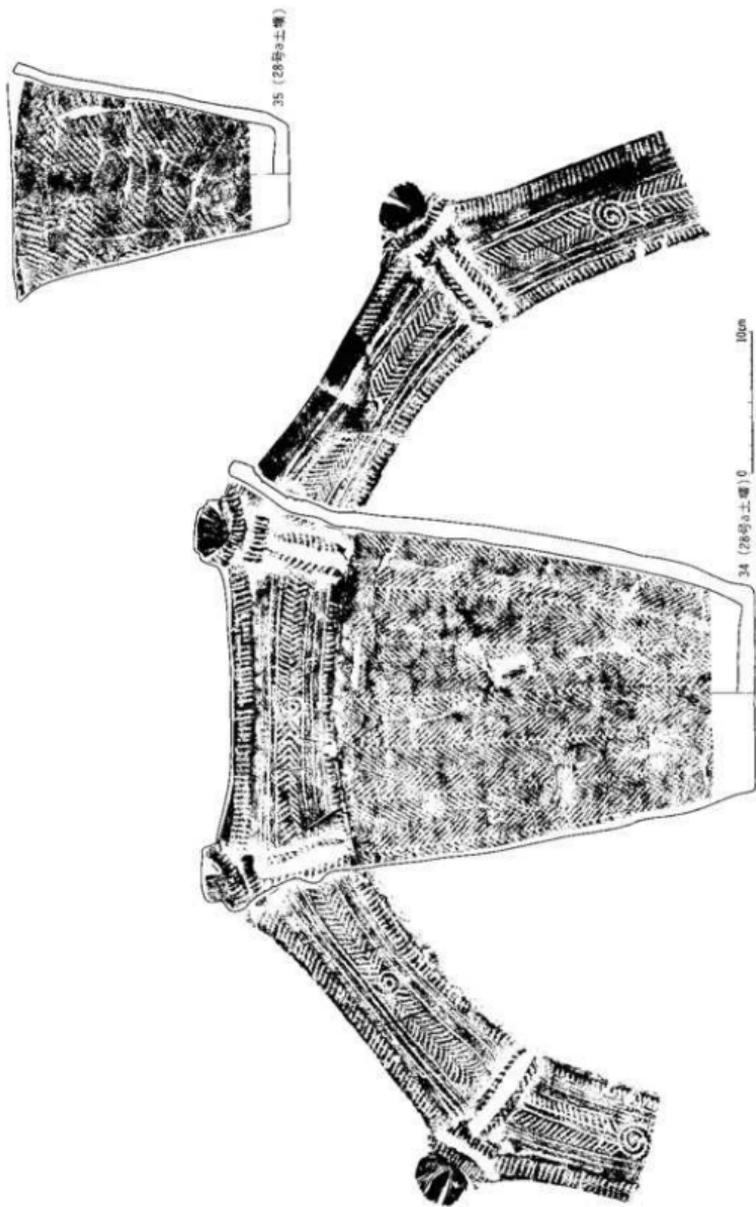
30 (28号土器)

0 10cm

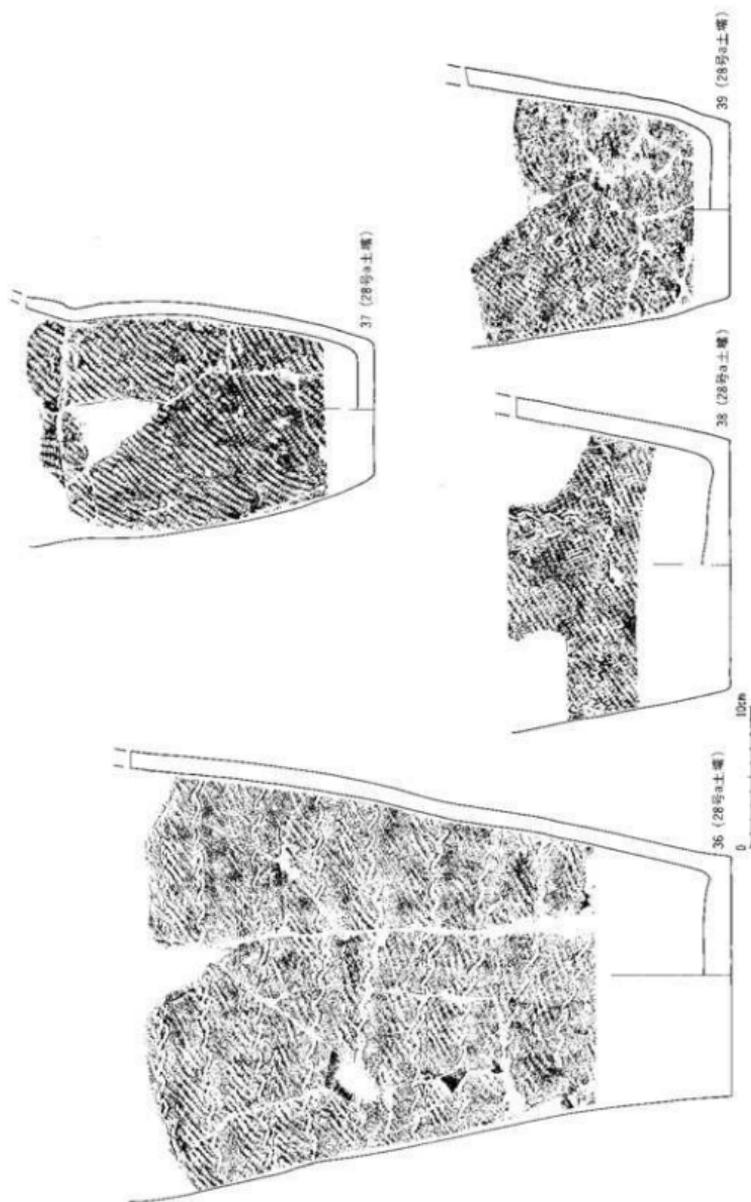
第29図 遺構内出土復原土器10



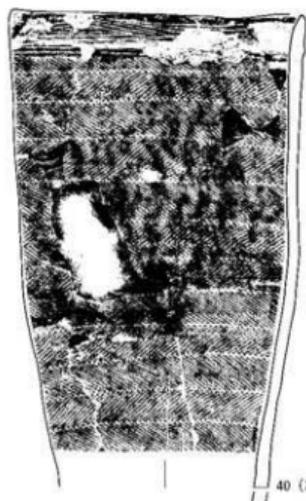
第30図 遺構内出土壺原土器(1)



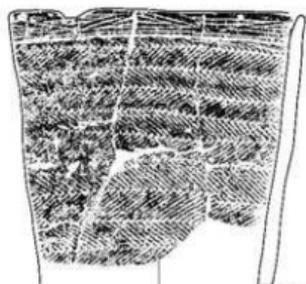
第31图 透模内出土復原土器12



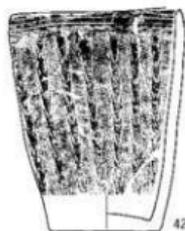
第32回 遺構内出土復原土器13



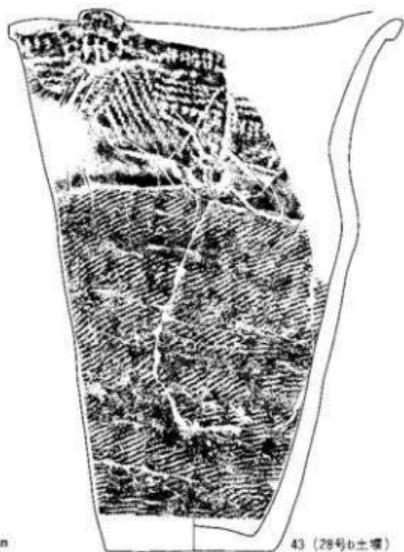
40 (28号b土壤)



41 (28号b土壤)



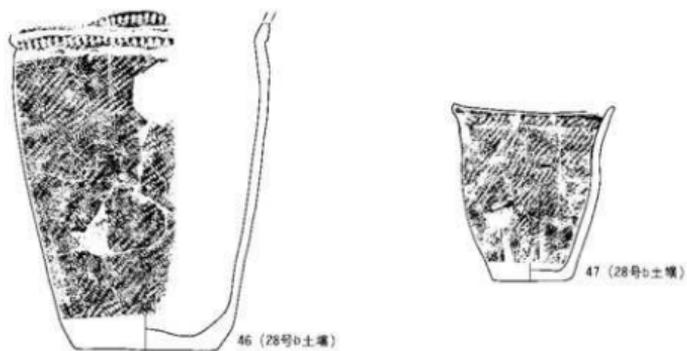
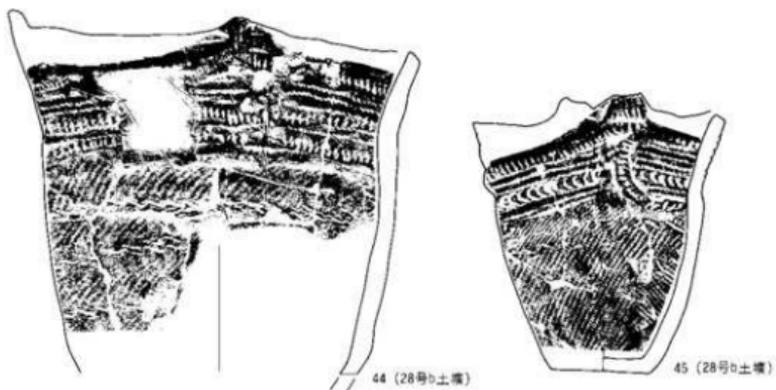
42 (28号b土壤)



43 (28号b土壤)

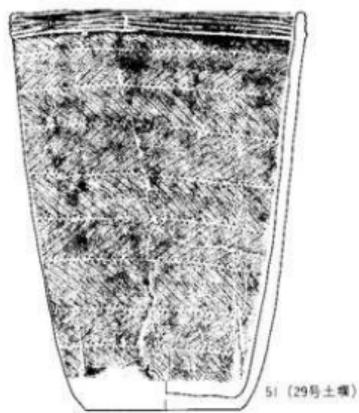
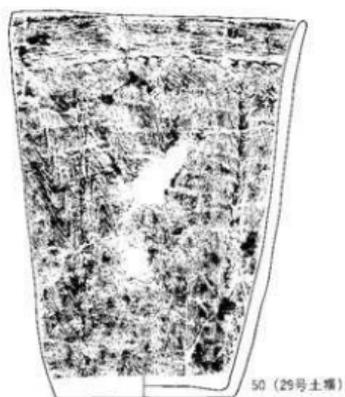
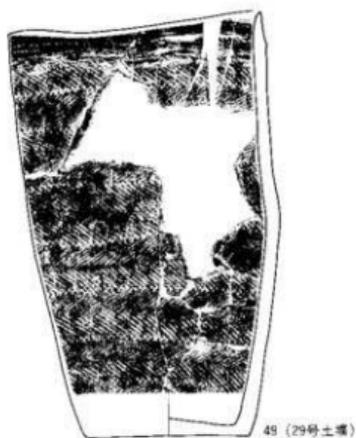
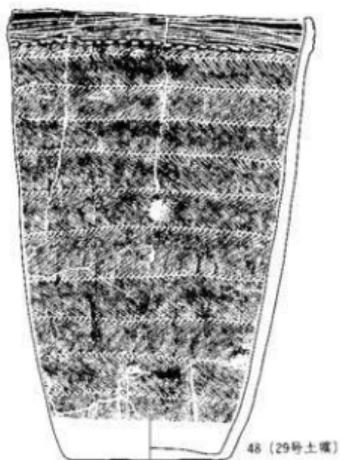
0 10cm

第33图 遺構内出土復原土器14



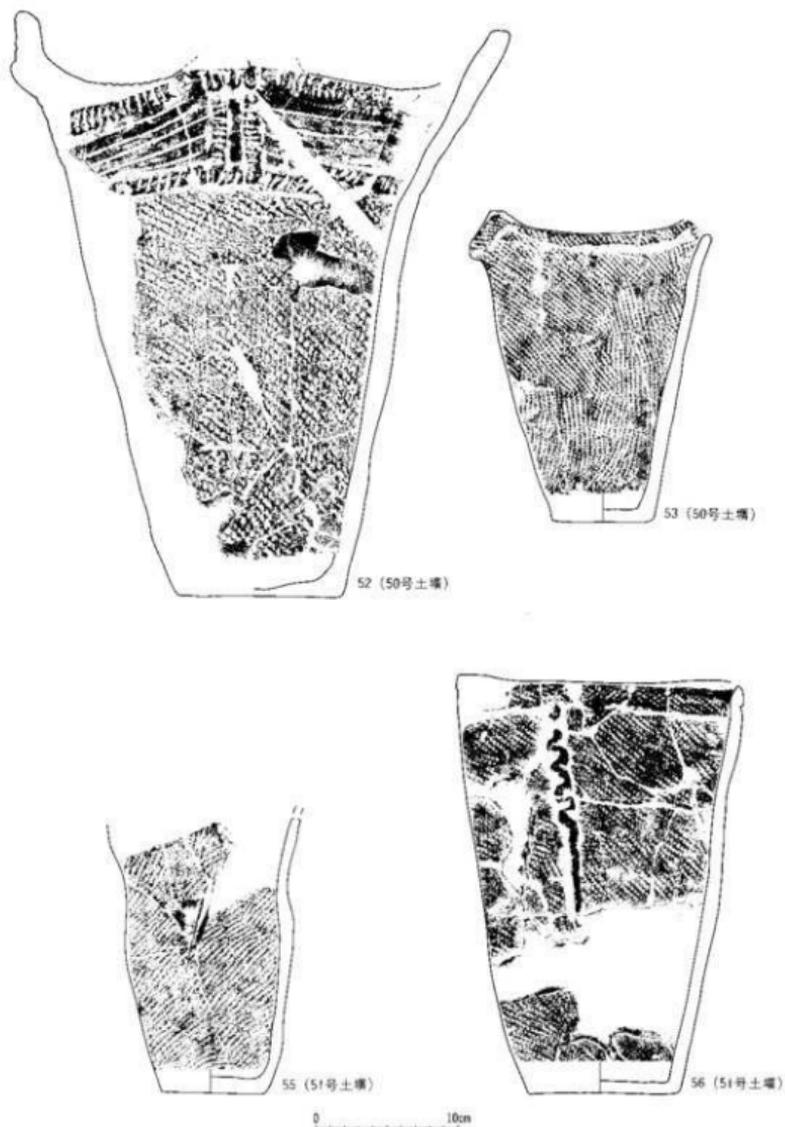
0 10cm

第34图 遺構内出土復原土器15

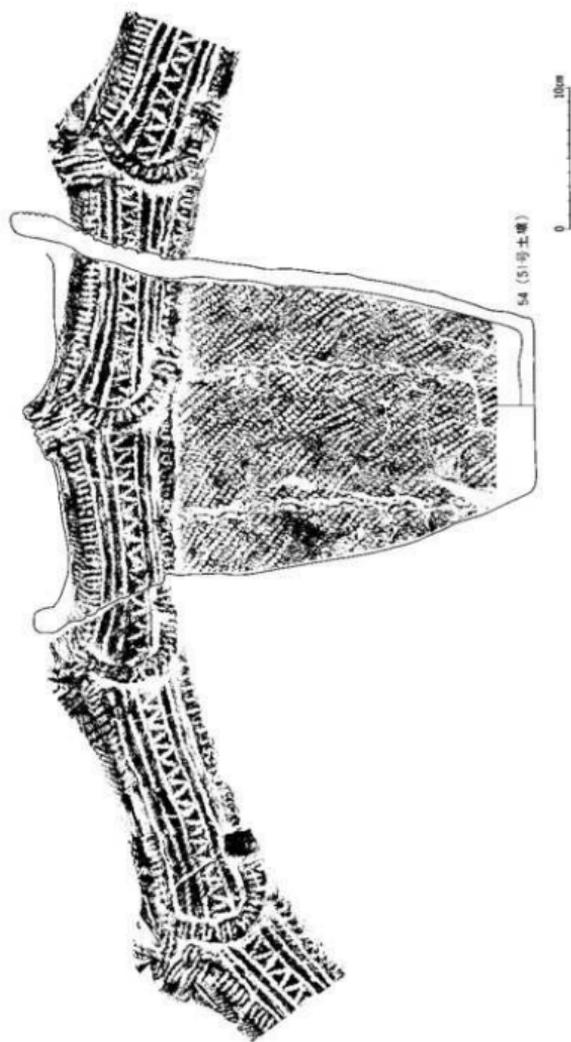


0 10cm

第35図 遺構内出土復原土器⑥



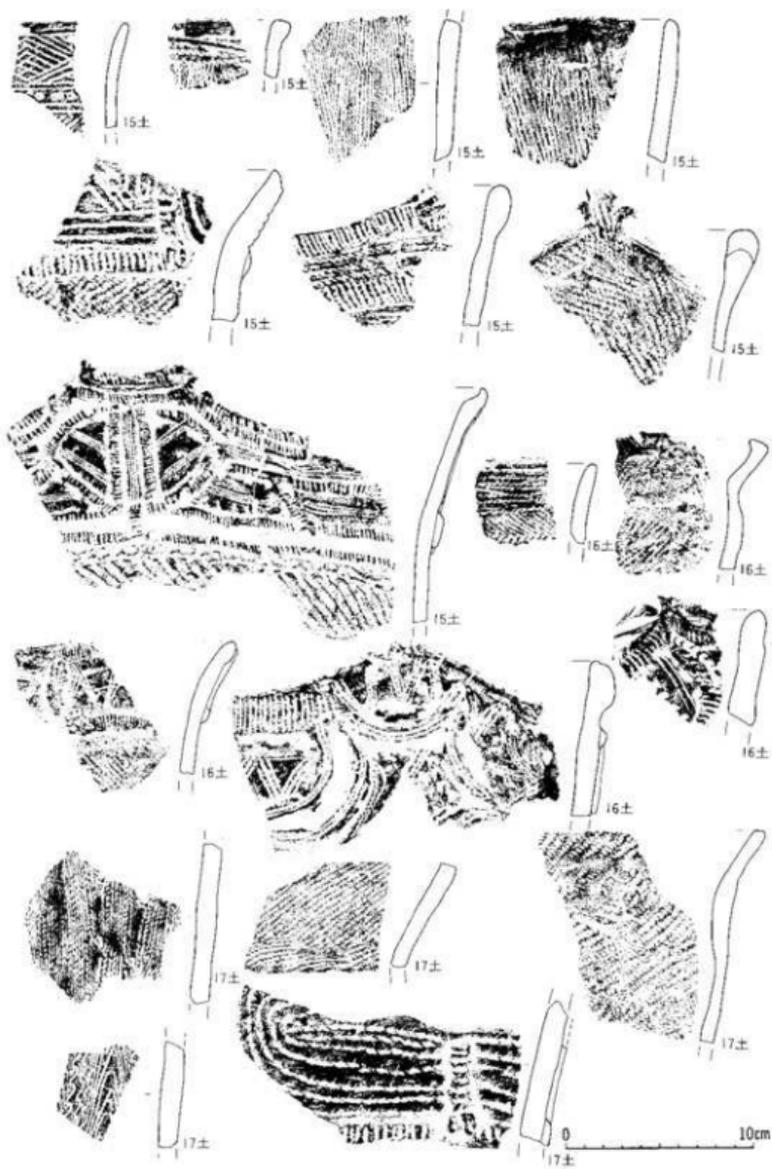
第36图 遺構内出土復原土器(7)



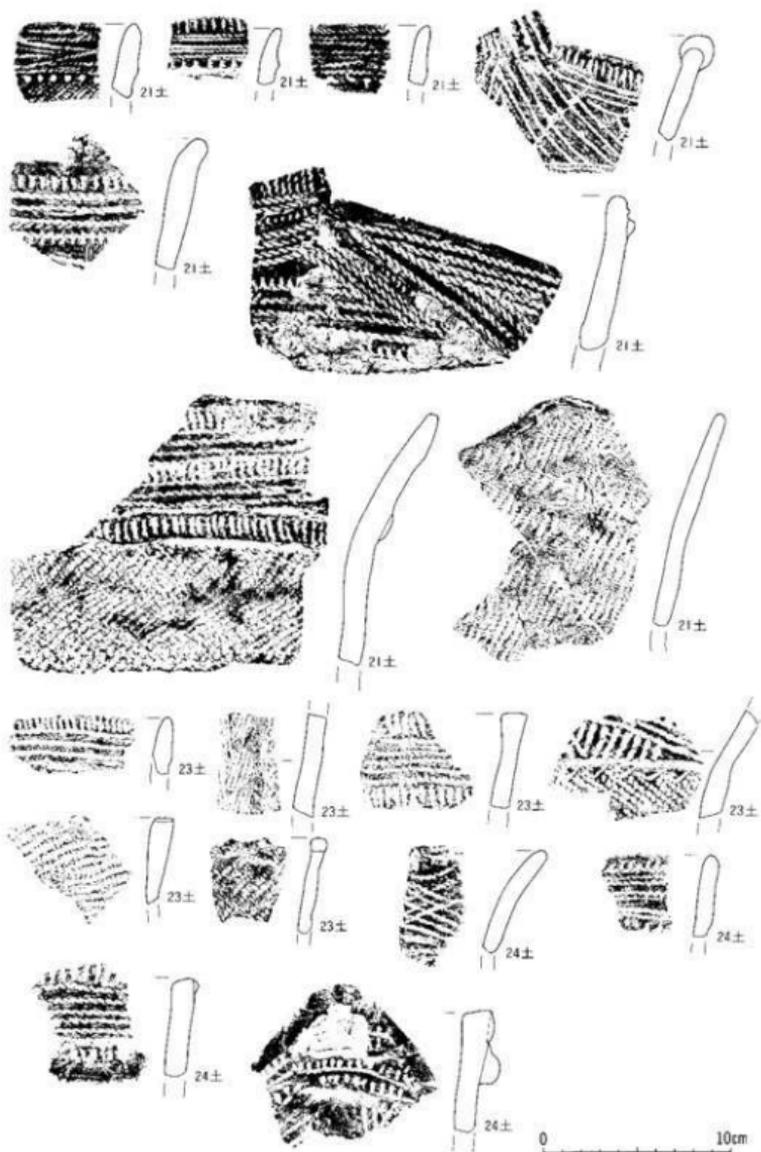
第37圖 遺構内出土復原土器⑧



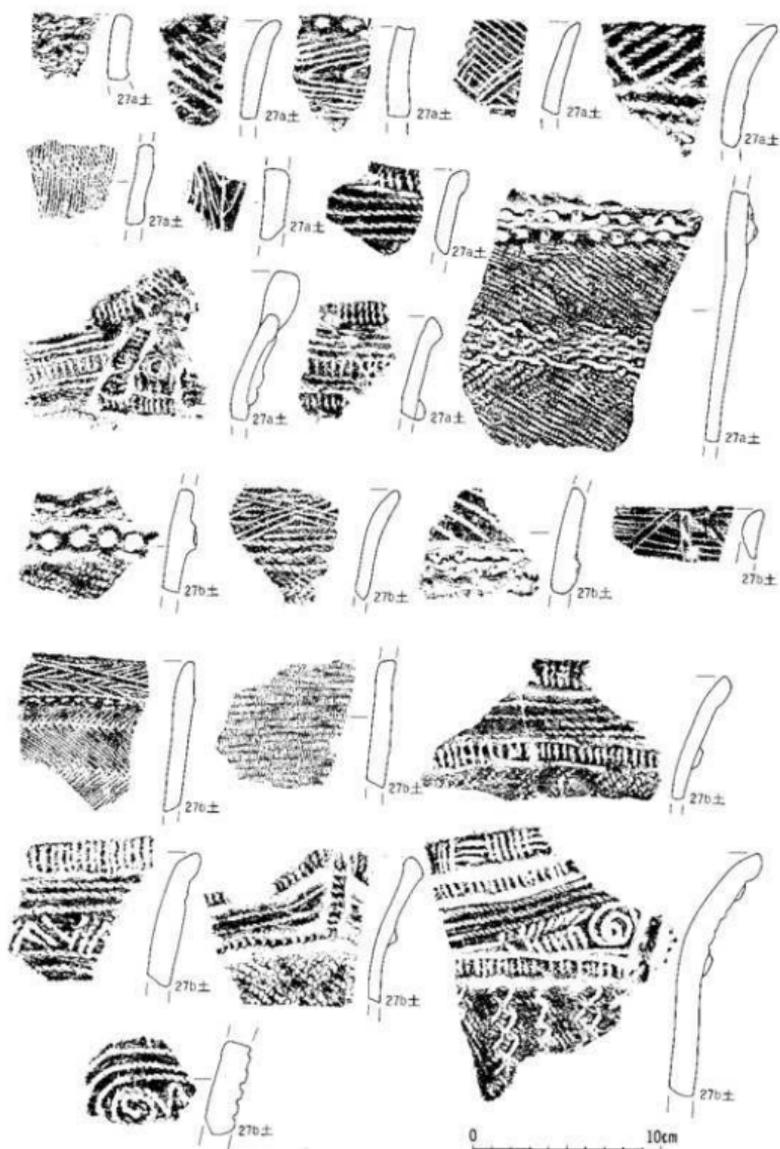
第38圖 遺構内出土土器 (2)



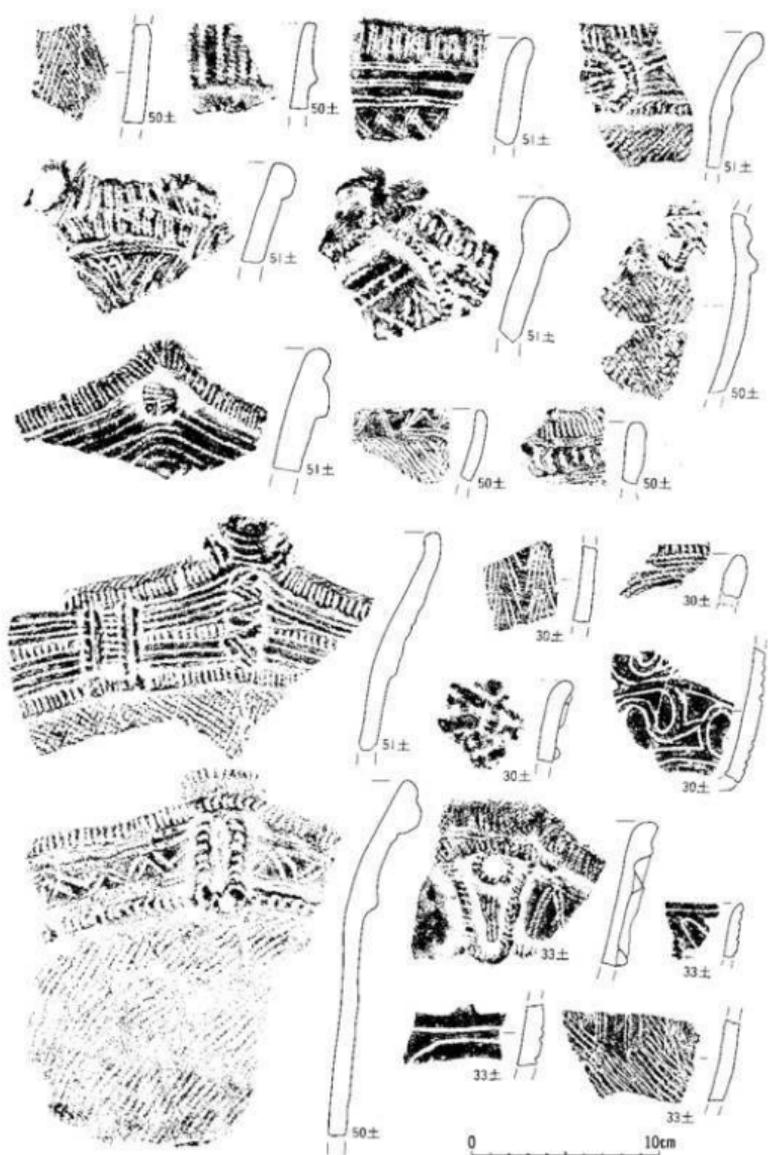
第39圖 這構内出土土器 (3)



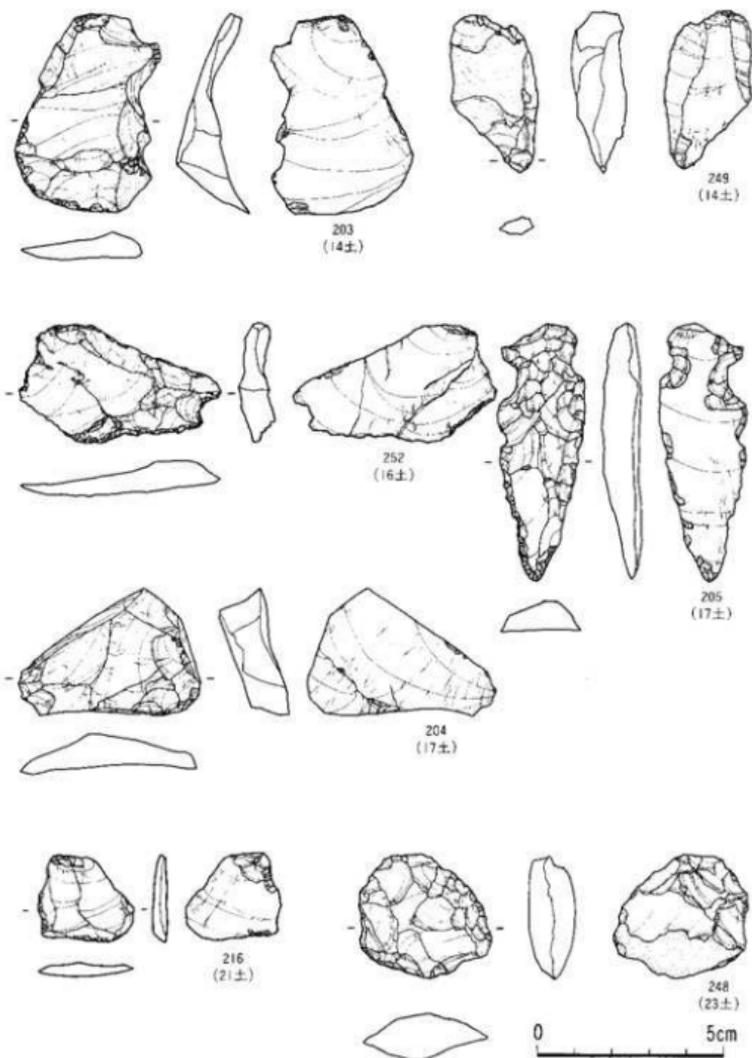
第40圖 遺構内出土土器 (4)



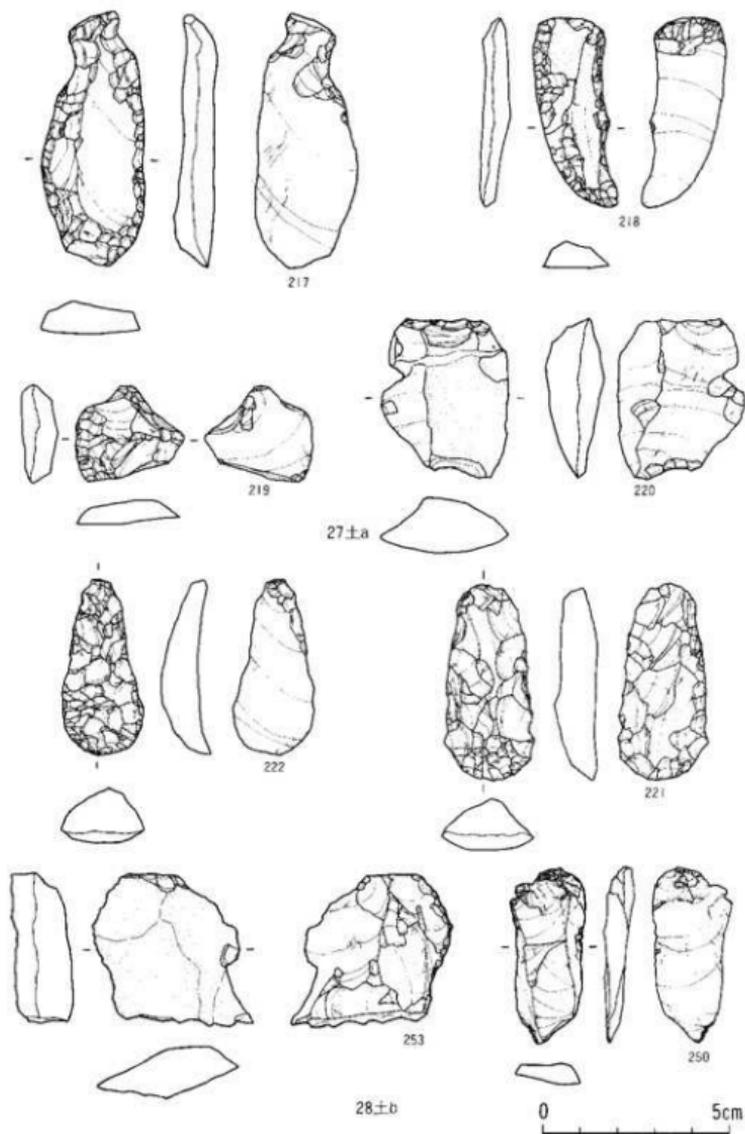
第41圖 遺構内出土土器(5)



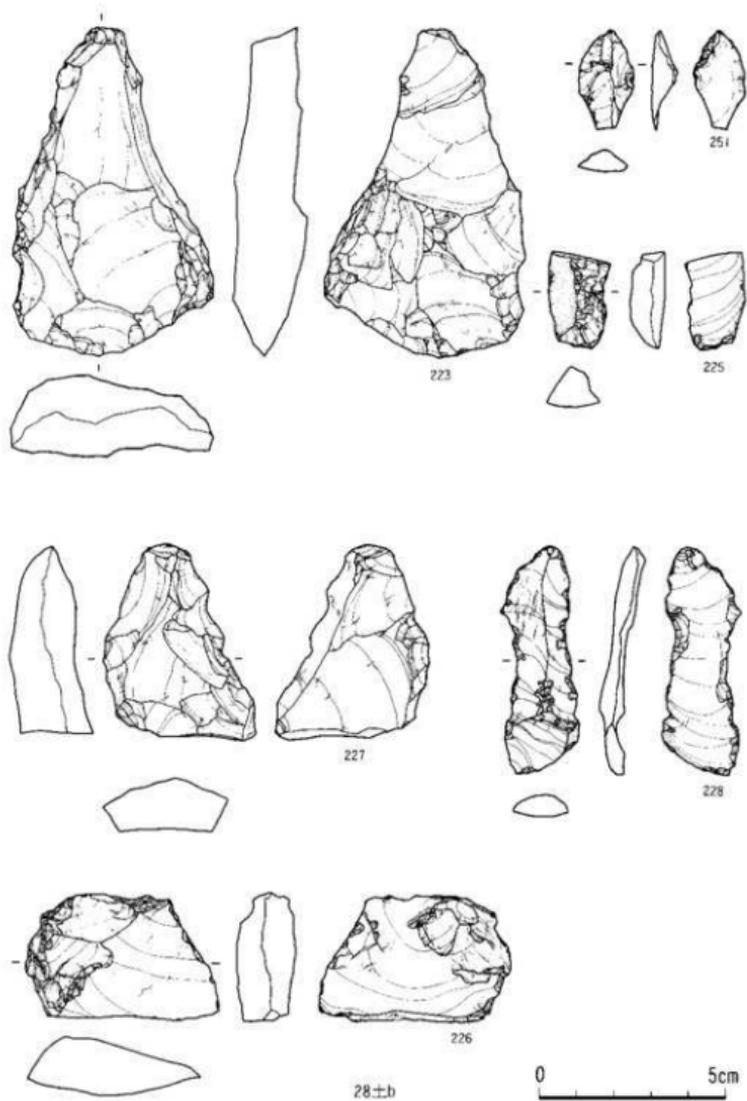
第42图 遺構内出土土器(6)



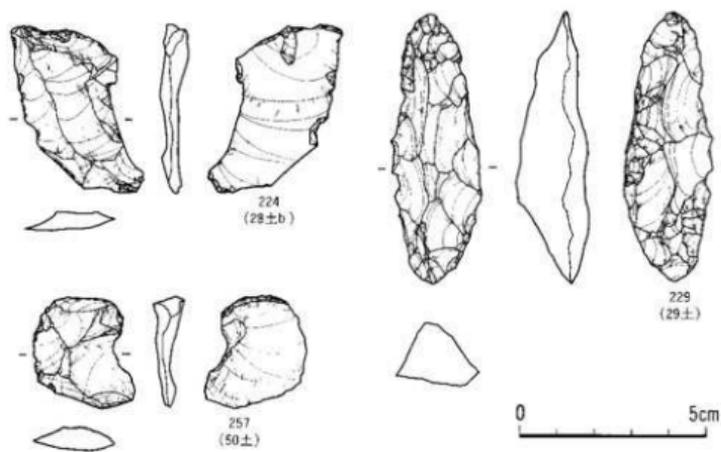
第43图 III区土填出土石器(1)



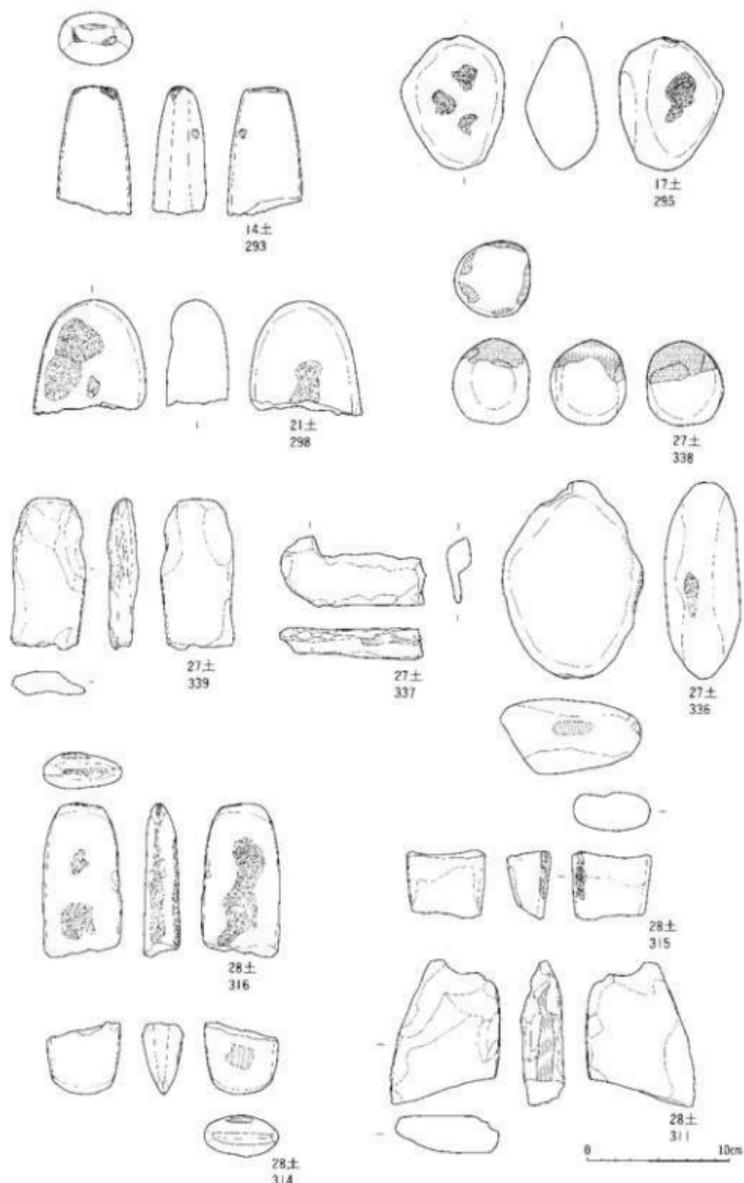
第44图 III区土壩出土石器2)



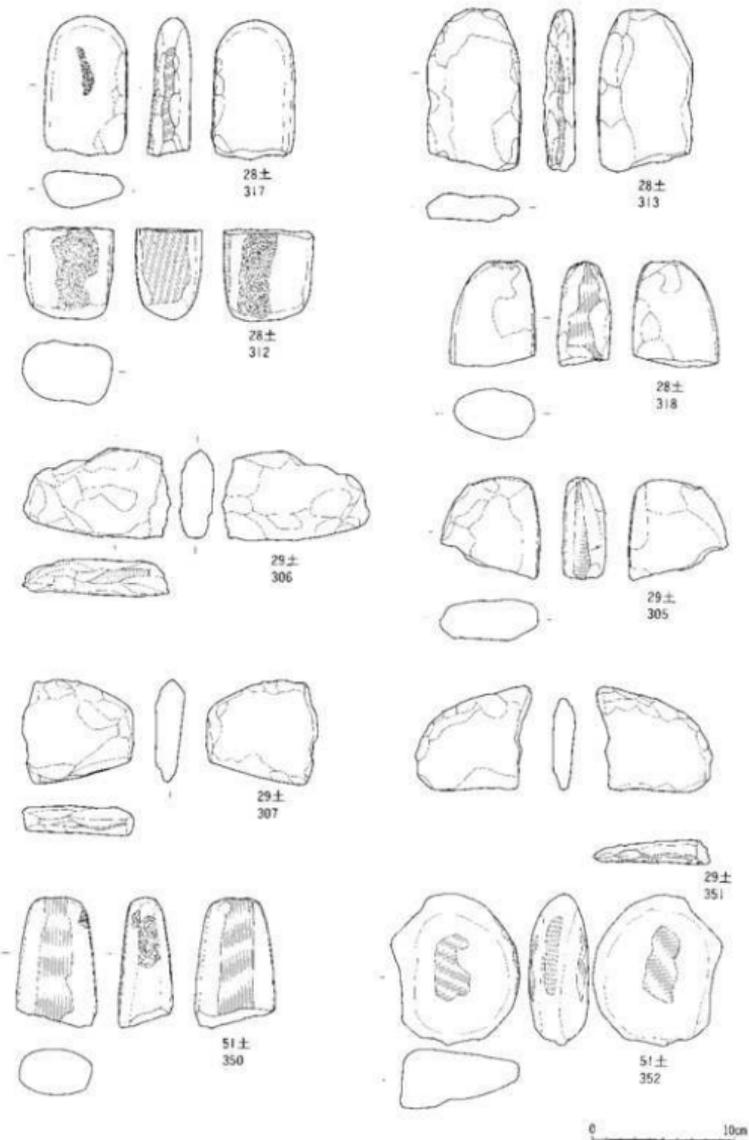
第45图 III区土填出土石器③



第46图 III区土坑出土石器4)



第47图 III区土坑出土石器5)



第48图 III区土坑出土石器6)

#### IV区 (45-52ライン間)

##### 第54号土壌 (第21図)

(位置と確認状況) I・J-49・50、I-51の5グリッドにまたがって位置する。VIc・VI<sub>d</sub>-VII層にかけての面で、最大径約5mの不整な楕円形をした範囲で、完形に近い状態の土器や多数の土器片及び骨粉を含む暗褐色土のしみを確認した。精査当初は、本遺構付近が表土から地山であるVII層の面までわずか50cm程の深さであり、その間にはIV・V層が欠如しており、加えて後世の耕作・攪乱の激しい地区であったこと等から、単に地山の起伏の凹地に土器が廃棄されたものと考えていた。しかし精査の進行に伴い、この範囲にのみ骨粉がみられ、また、土器の出土もほぼ同レベルで集中していることから、壁・底面を明確に把握することができなかったが、一応、この遺物集中範囲を遺構とみなすことにし、土壌に含めることにした。従って、確実に遺構であるということではなく、前述のとおり、当時の単なる地表面上の凹地であることも否定できない。ただ、どちらかと言えば、遺構と考えた方が妥当と思われる。

(規模と形状) 不明瞭な輪郭であるが一応上面は、最大径が5m50cm、最大幅が2m90cmの不整の楕円形を呈している。底面も壁・底面として明確に把握できた訳ではないが、最大径5m30cm、最大幅2m70cmの不整楕円形を呈している。深さは、最深部で15cm、平均10cmである。

(壁) 壁面とした面の大半は、確実性が乏しい。VIc-VI<sub>d</sub>層を壁面としている。壁の低さもあるが、全体にしまりは強くなく小さな凹凸が多い。

(底面) 壁同様、底面の大半も確実性が乏しい。面としては一応VI<sub>d</sub>-VII層のしまりの強い地山まで堅緻な面は確認できなかった。従ってVII層を主体とする地山の面を底面とした。その面は、VII層ということからかしまりは強い。また、全体的には、ほぼ平坦となっているが、小さな凹凸が非常に多くみられる。

(堆積土) 遺構の深さがわずかに10cm余ということで、堆積土についても明瞭さは乏しいが1層だけの層である。遺構とすれば、この層は初期堆積土に相当する層である。

(出土遺物) 遺構確認時から、多量かつ、ほぼ原形を留めた状態の複数の型式に属する土器が10個体近く、堆積土上面に露呈していた。なお、これらの土器は、ほぼ同一レベルからの出土であるが、それらを即同一時期とみなすことや本遺構に伴う土器と推定することには危険がある。従って、土器に関しては結論が出ないため、上記の多量に出土した土器は、遺構外出土で扱うこととした。石器は出土しなかったが、土器の他に骨粉が出土した。(遠藤正夫)

#### V区 (52-60ライン間)

##### 第30号土壌 (第49図)

(位置と確認状況) H-57グリッドに位置する。VI層で暗褐色土の広がりを確認した。

(規模と形状) 開口面で1m×1m50cmの南北に長い楕円形を呈する。底面は65cm×1m20

cmで深さは25cmである。

(壁) VI層を壁面としており、しまりは強い。

(底面) VI層またはVII層を底面としており、しまりは強い。底面は、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 3層に分層することができる。全体にしまりはあるが、浮石粒・粘土ブロック等の混入物を含み、混合土の様相が強い。特に最下層は、壁面の崩落土又は地山の再堆積土と暗褐色土との混合土である。人為的に埋めた戻したものと考えられる。

(出土遺物) 堆積土中から小型完形の石槍が1点出土した(第58図)。また、土器片も若干出土した。(白鳥文雄)

第31号土壌 (第49図)

(位置と確認状況) I・J-57グリッドに位置する。VI層で黒褐色土の広がりを掘り下げて確認した。

(規模と形状) 開口面では1m65cm×1m75cmの不整形を呈する。底面では1m5cm×1m25cmで、深さは30cmである。断面は、ナベ底状を呈する。

(壁) VI層を壁面としており、しまりは強い。全体に緩やかに立ち上がっている。

(底面) VI層を底面としている。しまりは強いが、若干粘性がある。北壁直下に直径約30cmで深さ3～5cmのくぼみを検出したが、付属施設が単なる地山のみかかは不明である。

(堆積土) 4層に分層することができる。全体に砂まじりの層であり、下部は地山のロームが主体となっている。

(出土遺物) 堆積土中からスリ石が1点・挟入扁平磨製石器が1点出土した。また、土器片も出土した(第60図)。(白鳥文雄)

第33号土壌 (第49図)

(位置と確認状況) K-52グリッドに位置する。粗掘中に磨製石斧が4点斜位の状態で検出され、その下部に遺構の存在が推定された、このため、石斧の部分を中心に掘り下げたところ、Vc層最下面及びVI層上面で土壌を確認した。

(規模と形状) 開口面は、70cm×1m20cmの不整の長方形を呈し、北西から南東方向に長い。底面は70cm×95cmで深さは1mである。

(壁) IV層～VII層を壁面としており、しまりは強い。底面から斜めに立ち上がる。

(底面) IX層を底面としている。ほぼ平坦であり、しまりは強い。

(堆積土) 4層以上に分層されるが、第3層より下部はVII層と酷似しており、当初地山(底面)と考えていたが、若干のかたさの差異により、精査後、さらに掘り下げたもので、堆積土の詳細は記述できなかった。調査時においては第3層に類似し、かたさはVII層に近い感じを得

ている。第1層上部は自然堆積した可能性が高い。したがって本遺構の掘り込み面は石斧埋没部分より若干上位であった可能性が考えられる。上部は黒褐色土を主体とし、下部は褐色土を主体としている。人為的埋め戻しによるものと考えられる。

(出土遺物) 北西壁の確認面直下で1個体分の土器片が出土した。また堆積土中から磨製石斧4点・石槍2点・不定形石器1点が出土した。

土器- 第53図 石器- 第58・60図 (白鳥文雄)

#### 第34号 a 土壌 (第50図)

(位置と確認状況) J-52グリッドに位置する。V層最下部及びVI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

(重複) 南壁で、第34号 b 土壌と重複しており、本土壌が新しい。また、北壁の最突出部において第49号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。

(規模と形状) 南壁の重複部分が不明瞭であるが、開口面で1 m50cm×(1 m70cm)・底面では1 m90cm×1 m95cmで、1 m35cmの深さがある。断面は、フラスコ状を呈する。

(壁) VI層～IX層を壁面としており、南壁は第34号 b 土壌の堆積土を壁面としている。地山を壁としている部分はおおむねしまりが強い。

(底面) IX層及び一部第34号 b 土壌の堆積土を底面としており、粘性は強く、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 21層に分層することができる。褐色土～暗褐色土を主体とする。各層でしまりに差が認められる。浮石・砂粒・炭化物粒が全体に混入し、壁際及び底面近くは白色粘土がブロックまたは帯状に混入している。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 堆積土及び底面から土器及び石槍・石環・石篋・石錐・不定形石器・敲き石・凹み石が出土した。

土器- 第55図 石器- 第58～60図 (白鳥文雄)

#### 第34号 b 土壌 (第50図)

(位置と確認状況) I・J-52グリッドに位置する。VI層面では地山との区別ができず、第34号 a 土壌の精査中に重複が判明し、土壌として確認した。

(重複) 第34号 a 土壌と重複し、本土壌が古い。新旧関係は、第34号 a 土壌の壁面精査時に地山に連続して34号 a 土壌の堆積土とは異なる土層が認められたことから、本土壌の堆積土を壁面とした34号 a 土壌が存在することが確認され、新旧を断定できた。

(規模と形状) 全体像は不明であるが、開口面での最大径は1 mであり、底面では2 m20cm×2 m30cmの円形を呈し、深さは1 m80cmである。フラスコ状の断面を呈する。

(壁) VI～IX層を壁面としており、北壁は第34号 a 土壌に切られている。地山を壁面として

いる部分は、しまりがある。下位は浮石層の崩れが認められる。

(底面) IX層の粘土層を底面としており、浮石の堆積などから不明瞭な部分もある。平坦に作られており、粘性が強い。

(堆積土) 17層に分層することができる。全体に浮石・砂粒を混入する。上部はしまりが認められるが、下部はしまりが弱い。人為的堆積の可能性が強い。

(出土遺物) 出土しなかった。 (白鳥文雄)

第35号土壌 (第49図)

(位置と確認状況) H・I-57グリッドに位置する。VI層で、同系色のやや暗い土色の範囲を掘り下げて確認した。

(規模と形状) 開口面では、1 m40cm×1 m80cmの不整の楕円形を呈し、底面では1 m10cm×1 m50cmで、深さは35cmである。

(壁) VI層を壁としており、しまりは強い。立ち上がりは部分的に異なる。

(底面) VI層を底面としており、しまりは強い。全体に起伏が多く、粗雑な掘り込みである。

(堆積土) 4層に分層することができる。黄褐色土を基調としており、全体にしまりはある。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 出土しなかった。 (白鳥文雄)

第36号土壌 (第50図)

(位置と確認状況) I-54グリッドに位置する。VI層中で、色調のやや異なる土の範囲を掘り下げて確認した。VI層と酷似していたため壁面の検出が困難で、南側の一部は明確に精査できなかった。

(規模と形状) 範囲を確認できた部分は、開口面で最大径1 m95cm、底面で1 m45cm、深さ55cmである。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。

(壁) VI層を壁面としており、しまりは強いが、部分的に軟質である。

(底面) VI層と一部VII層を底面としている。東側にやや傾斜しており、東壁直下がくぼんでいる。底面には若干の起伏が認められる。

(堆積土) 10層に分層することができる。全体的には暗褐色土が主体を占めるが、東壁部は黄褐色土が基調となっている。各層とも混合土的な様相を呈しており、人為的埋め戻しによるものと考えられる。また、堆積状況から2基の切り合いの可能性も考えられる(東側の第7・9・10層が他の層に切られている)。

(出土遺物) 堆積土中から3個体以上の土器及び不定形石器・スリ石等が出土した。

土器- 第53・55図

(白鳥文雄)

#### 第37号土壌（第50図）

（位置と確認状況） H・I-55グリッドに位置する。V層最下面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

（重複） 北壁で、第47号土壌と重複しており、本土壌が新しい。

（規模と形状） 開口面では1m5cm×1m55cmで東西に長い楕円形を呈する。底面では、85cm×1m40cmで、深さは70cmである。

（壁） VI層を壁面としており、しまりは強い。全体にほぼ垂直に立ち上がっている。

（底面） VI層・VII層を底面としており、やや粘性がある。概して平坦に作られているが、南壁に向かって若干傾斜が認められる。

（堆積土） 8層に分層することができる。黒褐色～褐色土が主体を占める。全体にしまりがあり、各層とも粘性が認められる。炭化物を混入し、特に7層は2cm大のものを含む。人為的堆積と考えられる。

（出土遺物） 土器片が少量出土した（第55図） （白鳥文雄）

#### 第38号土壌（第52図）

（位置と確認状況） I・J-55グリッドに位置する。VI層で、暗褐色土の落ち込みを確認した。当初、径2m程の遺構として精査したが、隣り合った2基の土壌であることを確認した。

（規模と形状） 開口面は、1m40cm×1m60cmの不整な円形を呈する。底面は1m25cm×1m30cmで、深さは70cmである。断面は、フラスコ状を呈する。

（壁） VI層を壁面としており、しまりは強い。底面上部30cm～40cmにくびれが認められ、フラスコ状ピットとしては浅いものである。

（底面） VII層を底面としており、しまりは強い。若干の起伏は認められるが、概して平坦に作られている。南側へ緩やかに傾斜している。

（堆積土） 8層に分層することができる。暗褐色へを基調としており全体にしまりがある。また、底面直上は地山の崩壊土と思われるものとの混合土が中心となっているが、他の遺構の堆積土に比してきめが細かく、しまりも強い。人為的堆積と考えられる。

（出土遺物） 土器片が少量出土した。 （白鳥文雄）

#### 第39号土壌（第52図）

（位置と確認状況） I-55グリッドに位置する。第38号土壌と同様にVI層で暗褐色土の落ち込みを確認し、精査中に隣接する2基の土壌として識別されたものである。

（規模と形状） 開口面は、西側の壁が不明瞭で確実な計測値は不明であるが、約75cmと推定される。底面は、30cm×50cmで長方形ないし楕円形を呈する。深さは55cmである。

（壁） VI層を壁面としており、しまりは強い。中位までは、ほぼ垂直に立ち上がり、開口部

に向けて緩やかに広がる。

(底面) VII層を底面としており、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 5層に分層することができる。褐色土を主体としており、全体に軟質で、2層以下は漸移層の様相を呈している。炭化物粒を混入し、粘性も認められる。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 土器片が少量出土した。第1層中よりスリ石が1点、また、堆積土中から敷き石及び石棒の破片が出土した(第55・59図) (白鳥文雄)

第40号土壌 (第52図)

(位置と確認状況) I-55グリッドに位置する。VI層で地山と同系色のやや色調の暗い褐色土を掘り下げて確認した。

(規模と形状) 開口面は、1m×1m10cmの不整形円形を呈し、底面は、1m70cm×1m75cm深さは85cmである。断面は、いびつなフラスコ状を呈している。

(壁) VI層を壁面としており、しまりは強い。西壁の立ち上がりは若干急角度である。

(底面) VII層及びVIII層を底面としており、しまりは強いが、やや粘性が認められる。西側は一度鍋底状に上がる。他はほぼ平坦に作られているが南東方向にやや傾斜する。

(堆積土) 8層に分層することができる。上部及び壁際は褐色土が、中位の大部分は暗褐色土が占める。全体にしまりが強く、第38号土壌の堆積土の性状に類似する。浮石粒・砂粒が混入しており、全体には混合土的な様相が認められる。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 堆積土中及び底面直上から土器片が出土した。また、石鏝1点が堆積土から出土した(第56・59図) (白鳥文雄)

第41号 a・b土壌 (第51図)

(位置と確認状況) H-55・56グリッドに位置する。VI層で黒褐色土の広がりを掘り下げて確認した。また41号b土壌の底面及び壁面精査時に2基の重複を確認した。

(重複) ほぼ同一範囲で、a・b2基の土壌が重複しており、bが新しい。重複関係は精査の最終段階において確認された。

(規模と形状) a- 開口面の規模と形状は不明である。底面では、径2m40cm程であり、深さは1mである。断面は、フラスコ状を呈したものと推定される。

b- 開口面は1m50cm×1m85cmの不整形を呈するが、確認時に地山のしみと堆積土の区別が判然としなかったこともあり、本来の形状とは異なるものと考えられる。底面では2m45cm×2m75cmの楕円形を呈し、深さは90cmである。フラスコ状の断面を呈する。

(壁) bはVI-VIII層を壁面としており、しまりは強い。緩やかな袋状の曲面で立ち上がっている。

(底面) VIII層及びIX層を底面としており、全体に軟質である。2基とも平坦に作られており、bが浅いため、aの最下層をその底面としている。

(堆積土) 底面等の精査時に重複が判明したため、aの堆積状況は不明である。bの堆積土は25層に分層することができる。黄褐色-黒色土と各種の土が混入しており、地山の崩壊土及び各種浮石・砂粒との混合土が主体を占める。炭化物粒の混入も認められる。全体にしまりはあるが、混入物の性状及び量により粘性・かたさは異なる。また下位は粘性がある。

(出土遺物) 遺物は確認面直下から底面直上まで出土したが、平面上の分布ではbの範囲に限定される。土器は復原土器2個体及びディスクトレイ2箱分の破片が出土した。石器は不定形石器1点・磨製石斧2点・凹石3点が出土した。また中位には赤色顔料がほぼ環状に確認され、20cm大のブロックが数箇所で見出された。

土器- 第54・56図 石器- 第59・61図 (白鳥文雄)

第42号土壌 (第51図)

(位置と確認状況) H- 55・56グリッドに位置する。VI層で黒褐色土の広がりを掘り下げて確認した。41号土壌の開口部と約20cmの間隔で隣接しているが、切り合いは認められない。

(規模と確認状況) 開口面は、1m55cm×1m85cmで、東西にやや長い楕円形を呈する。底面は、1m×1m30cmで、深さは25cmである。

(壁) VI層を壁面としており、しまりは強い。

(底面) VI層を底面としており、しまりは強い。中央部はほぼ平坦に作られており、開口部に向かって、緩やかな立ち上がり、鍋底状を呈する。

(堆積土) 5層に分層することができる。褐色-黄褐色土を主体としており、しまりが認められる。浮石を混入し、全体に混合土的な様相を呈する。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 土器片が少量出土した。また、1層中から有孔円盤状土製品が出土した(第56・138図) (白鳥文雄)

第43号土壌 (第52図)

(位置と確認状況) G- 55グリッドに位置する。VI層で暗褐色土の広がりを掘り下げて確認した。第44号土壌と開口部で接しているが精査段階では切り合いは確認されなかった。掘り込み面では重複していたものと考えられる。

(規模と形状) 開口面の東壁が地山との区別が判然としないため不明であるが、径1m80cmの円形を呈するものと思われる。底面は、1m25cm×1m35cmで、深さは70cmである。

(壁) VI層を壁面としているが、上部はやや軟質である。全体にしまりがある。開口部に向けて緩やかに立ち上がっている。

(底面) VII層を底面としており、ほぼ平坦に作られているが、若干の凹凸は認められる。や

や軟質である。

(堆積土) 10層に分層することができる。底面直上及び壁際は褐色土を主体とする明るい土層であり、中央部は色調の濃い堆積土である。浮石・砂粒が混入し、全体にはしまりがある。

セクションからは、中央の色調の濃い部分が1基の土壌の堆積状態を示しているようにも考えられ、上下に2基の土壌が重複している可能性も考えられる。人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 土器片が少量出土した(第57図)。 (白鳥 文雄)

第44号土壌 (第52図)

(位置と確認状況) G-55グリッドに位置する。VI層で暗褐色土の広がりを探り下げて確認した。第43号土壌と確認面で接している。

(規模と形状) 西側部分が地山との区別が不明瞭であるため不明である。開口面での確認最大径は1m30cmであり、底面では1m10cmで、深さは45cmである。

(壁) 西壁は不明であるが、VI層・VII層を壁面としており、若干軟質である。

(底面) VII層を底面としており、やや軟質である。ほぼ平坦に作られているが、若干の起伏は認められる。

(堆積土) 6層に分層することができる。暗褐色土を主体とし、壁際上部が褐色土である。炭化物粒を混入しており、浮石の混入が多い。しまりは認められるが、下部は粘性がややある。

(出土遺物) 土器片が少量と不定形石器が1点出土した(第57・59図)。 (白鳥 文雄)

第45号a土壌 (第51図)

(位置と確認状況) G・H-54グリッドに位置する。VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。精査中に2基の重複が確認された。東壁部分は地山との区別が不明瞭であり、断定できなかった。

(重複) 第45号b土壌と南西壁で重複しており、本土壌が新しい。

(規模と形状) 東壁側が不明であるが、確認した最大径は、開口面で1m40cm、底面で85cm、深さは35cmである。

(壁) VI層・VII層を壁面としており、全体に軟質である。

(底面) VII層を底面としており、軟質である。ほぼ平坦に作られているが、若干の起伏は認められる。

(堆積土) 7層に分層することができる。暗褐色土を主体としており、全体に軟質である。浮石粒及び地山の崩壊土の混入が認められる。5層中には炭化物粒が混入している。各層は漸移層的な堆積を示しており、人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 土器片少量と不定形石器が出土した(第57・59図)。 (白鳥 文雄)

第45号 b 土壌 (第52図)

(位置と確認状況) G-54グリッドに位置する。VI層で暗褐色土の広がりを掘り下げて確認した。精査中に2基の土壌の切り合いが確認された。

(重複) 第45号 a 土壌と北東壁で重複しており、本土壌が古い。

(規模と形状) 地山との区別が不明瞭な部分もあるが、開口面は、1 m× 1 m25cmの不整形円形を呈し、底面は、70cm× 75cmで深さは25cmである。

(壁) VI層を壁面としており、やや軟質である。

(底面) VII層を底面としており、鍋底状を呈する。

(堆積土) 4層に分層することができる。暗褐色土を主体としており、aに比して色調が明るく、しまりがある。浮石及び炭化物粒を混入する。全体に漸層層の様相を呈しており、人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 土器片が少量出土した(第57図) (白鳥 文雄)

第47号土壌 (第51図)

(位置と確認状況) I-55グリッドに位置する。VI層で同系色の褐色土を掘り下げて確認した。

(重複) 南壁で第37号土壌と重複しており、本土壌が古い。

(位置と形状) 南西壁が不明瞭であるが、不整形円形を呈すると考えられる。開口面の最大径は1 m80cm、底面は1 m70cm、深さは50cmである。

(壁) VI層・VII層を壁面としている。部分的に軟質で、不明な部分もあるが、概ねしまりは強い。全体に、垂直に立ち上がっている。

(底面) VIII層を底面としているが、一部はXI層に達している。

(堆積土) 10層に分層することができる。褐色土を主体としており、浮石・砂粒・炭化物粒を混入している。上面と底面直上部分はしまりが強いが、中位はしまりが弱くもろい。混合土の様相を呈しており、人為的堆積と考えられる。

(出土遺物) 北西壁寄りの底面近くから、1個体の略完形土器と破片数点が出土した。

土器... .. 第54・57図 (白鳥 文雄)

第48号土壌 (第52図)

(位置と確認状況) I-54グリッドに位置する。VI層で同系色土の広がりを確認したが、地山のしみと混同して、土層観察用ベルトを残さずに掘り下げてしまった。このため底面上35cm程の堆積が観察できたにすぎない。

(規模と形状) 開口面は、1 m50cm× 1 m55cmの円形を呈する。底面は2 m10cm× 2 m15cmで深さは1 m25cmである。断面は、フラスコ状を呈する。

(壁) VI～VIII層を壁面としている。上部はしまりが強いが、下部は粘性があり、軟質である。

(底面) XI層の粘土層を底面としており、粘性が強く軟質である。ほぼ平坦に作られており、中心部に径40cm、深さ25cmの円形ピットが検出された。また、このピットから幅10cm×15cm、深さ1cm～5cmの溝が3本確認され、それらの溝は壁まで達している。ピットの南側部分から長さ10cm程の溝状の掘り込みが認められることから、構築時には、さらに数本の溝が放射状に存在した可能性も考えられる。

(堆積土) 下部35cm程を確認しただけであるが、7層に分層することができる。全体にしまりはあるが、粘性も認められる。地山の崩落土との混合的な様相を呈する。土質からは人為的な堆積と考えられるが、全体像が不明のため断定はできない。

(出土遺物) 土器片が出土した。

土器… … 第54・57図

(白鳥 文雄)

第49号土壌 (第52図)

(位置と確認状況) J-52グリッドに位置する。VI層面では確認できず、第34号a土壌の北壁精査時に重複部分を検出し、土壌として確認できた。攪乱により、東側半分の精査に留まった。

(重複) 第34号a土壌と南壁端が重複している。新旧は不明である。

(規模と形状) 東側を精査しただけであるため全体像は不明であるが、確認部分の最大径は、開口面で80cm、底面で2m、深さは1m15cmである。フラスコ状の断面を呈する。

(壁) VI層～XI層を壁面としており、しまりは強い。他のフラスコ状ピットに比して壁面は均一な立ち上がりではなく、傾斜も部分的に異なっている。

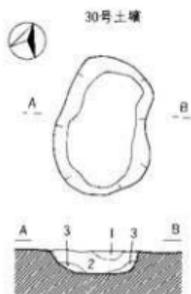
(底面) XI層を底面としており、粘性があり、軟質である。平坦に作られているが、南側に向けて若干傾斜が認められる。

(堆積土) 9層に分層することができる。褐色土及び暗褐色土が主体となり、全体にしまりがある。浮石の混入があり、上部には炭化物粒が混入する。自然堆積したものと考えられる。

(出土遺物) 開口面から底面まで多くの土器片が出土した。石製品では石刀が出土した。

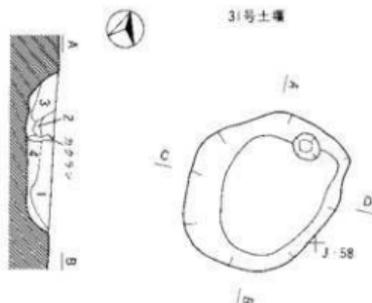
土器… … 第54・57図

(白鳥 文雄)



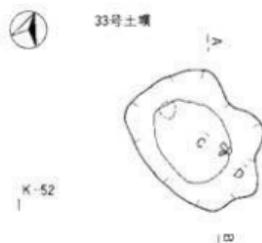
30号土壤層注記

- 第1層 暗棕色土 10YR $\frac{3}{2}$  炭化粒を含む  
 第2層 黑棕色土 10YR $\frac{3}{2}$   
 第3層 褐色土 10YR $\frac{4}{2}$



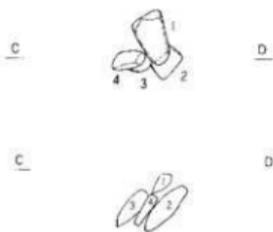
31号土壤層注記

- 第1層 黑棕色土  
 第2層 暗棕色土  
 第3層 赤い・黄棕色土  
 第4層 明黄棕色土



33号土壤層注記

- 第1層 明棕色土-黑棕色土 7.5YR $\frac{6}{2}$ - $\frac{5}{2}$  炭化粒を含む  
 第2層 黑棕色土 7.5YR $\frac{6}{2}$   
 第3層 褐色土 7.5YR $\frac{6}{2}$   
 第4層 棕色土 7.5YR $\frac{6}{2}$  灰白色粘土



35号土壤

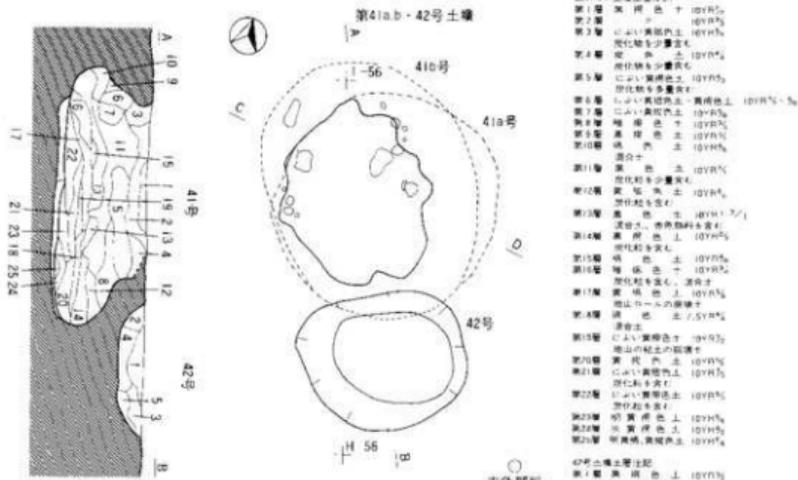
35号土壤層注記

- 第1層 黄棕色土 10YR $\frac{6}{5}$   
 第2層 黄棕色土 10YR $\frac{6}{5}$   
 第3層 // 10YR $\frac{6}{5}$   
 第4層 褐灰色土 10YR $\frac{5}{1}$

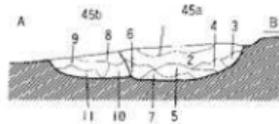
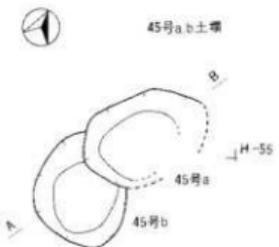
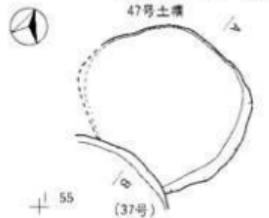
0 2m

第49回 土壤10 (V区 30-31-33-35号)





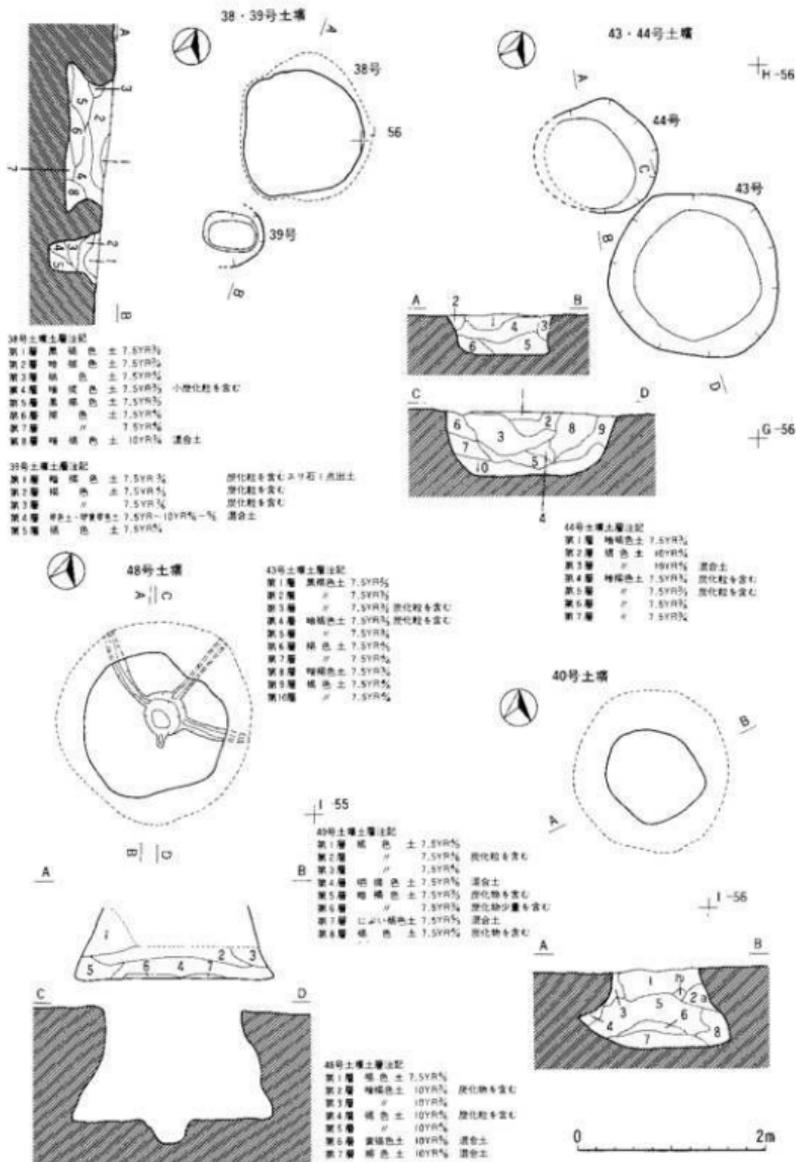
- 第41号土壤土層記
- 第1層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第2層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第3層 10YR5/6黄褐色土 10YR5/6
  - 第4層 灰化粘多量腐质
  - 第5層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第6層 10YR5/6黄褐色土 10YR5/6
  - 第7層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第8層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第9層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第10層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第11層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第12層 灰化粘多量腐质
  - 第13層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第14層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第15層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第16層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第17層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第18層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第19層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第20層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第21層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第22層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第23層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第24層 黄褐色土 10YR5/6
- 赤色顏料
- 第47号土壤
- 第1層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第2層 灰化粘多量腐质
  - 第3層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第4層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第5層 黄褐色土 10YR5/6

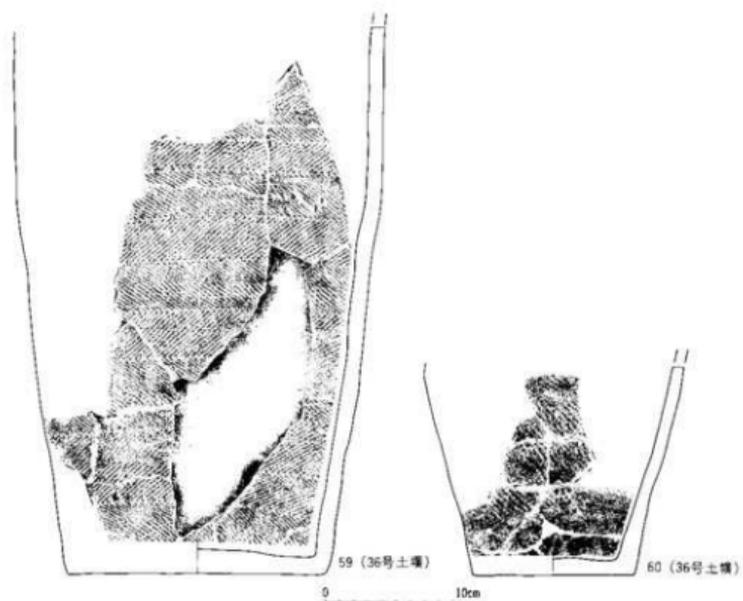
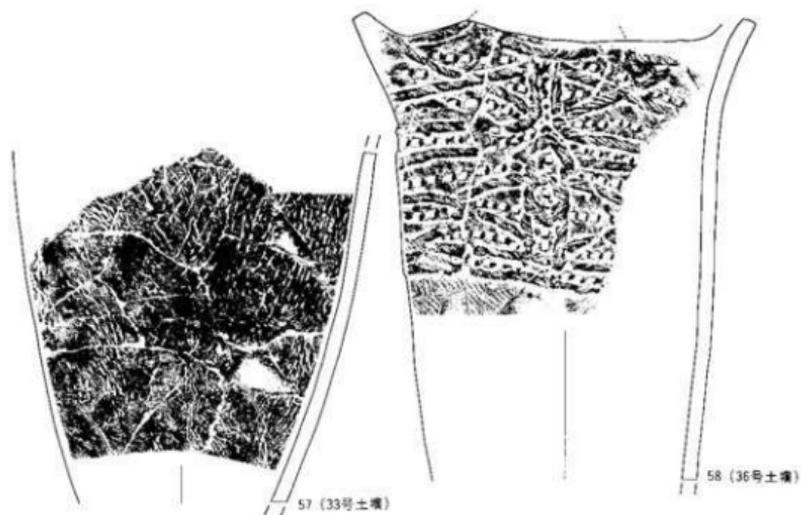


- 45号土壤土層記
- 第1層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第2層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第3層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第4層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第5層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第6層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第7層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第8層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第9層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第10層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第11層 暗褐色土 7.5YR2/3
  - 第12層 暗褐色土 7.5YR2/3
- 47号土壤土層記
- 第1層 黄褐色土 7.5YR5/6
  - 第2層 黄褐色土 7.5YR5/6
  - 第3層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第4層 黄褐色土 7.5YR5/6
  - 第5層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第6層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第7層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第8層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第9層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第10層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第11層 黄褐色土 10YR5/6
  - 第12層 黄褐色土 10YR5/6

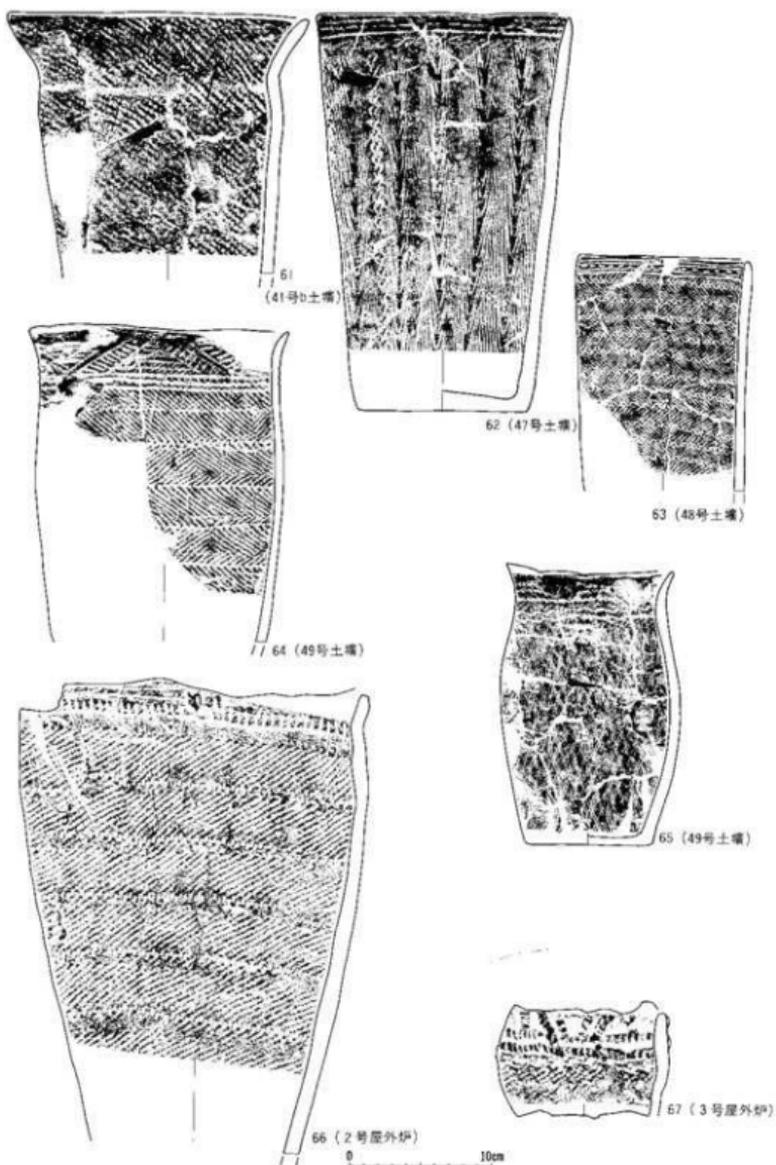
0 2m

第51图 土壤(Ⅴ区 41a.b-42-45a.b-47号)

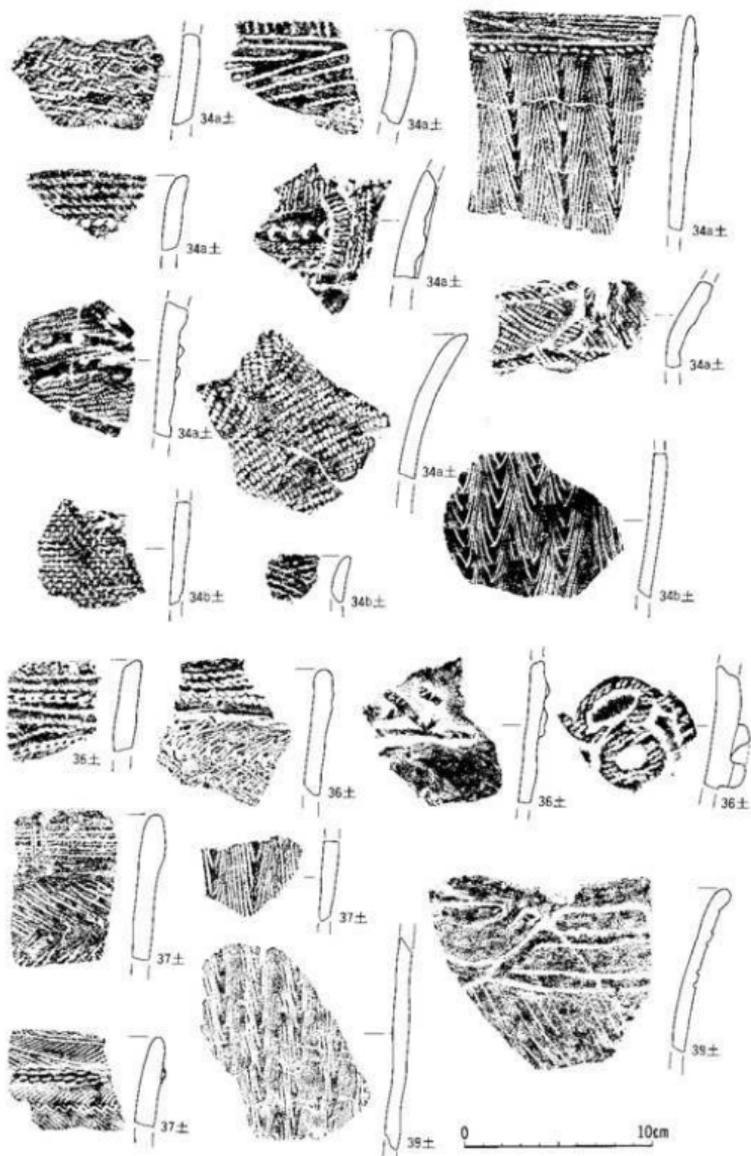




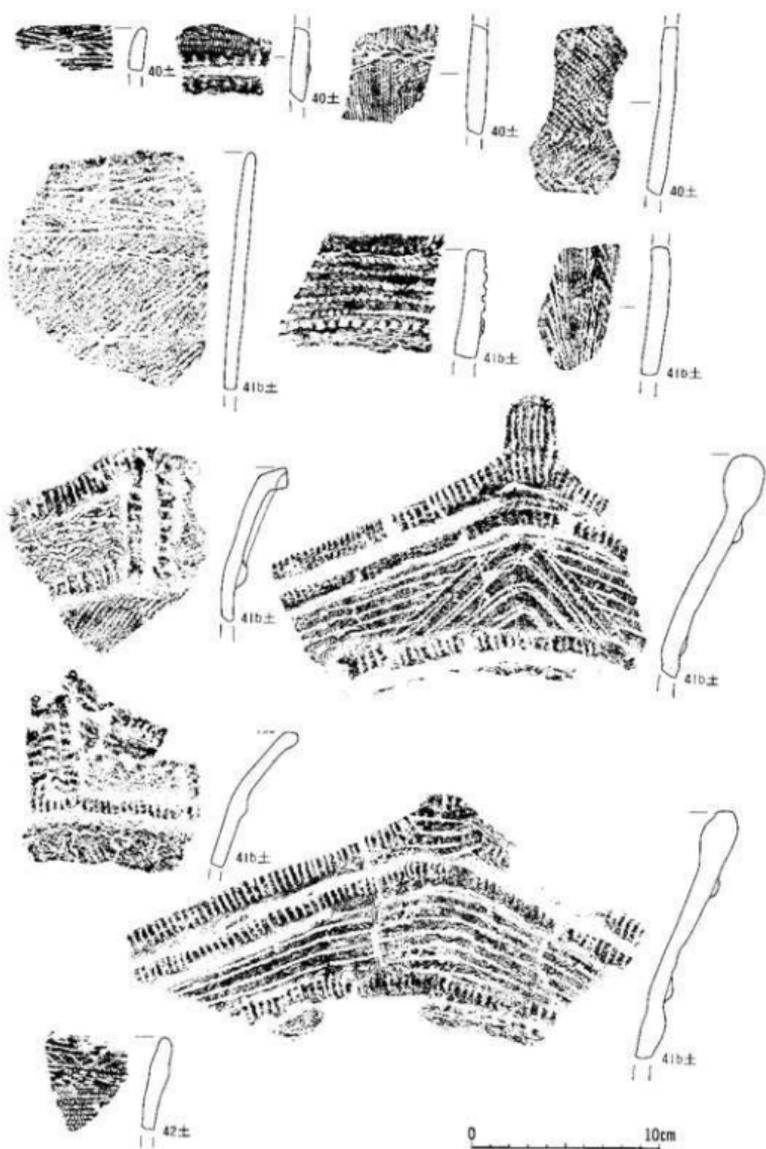
第53图 遺構内出土復原土器19



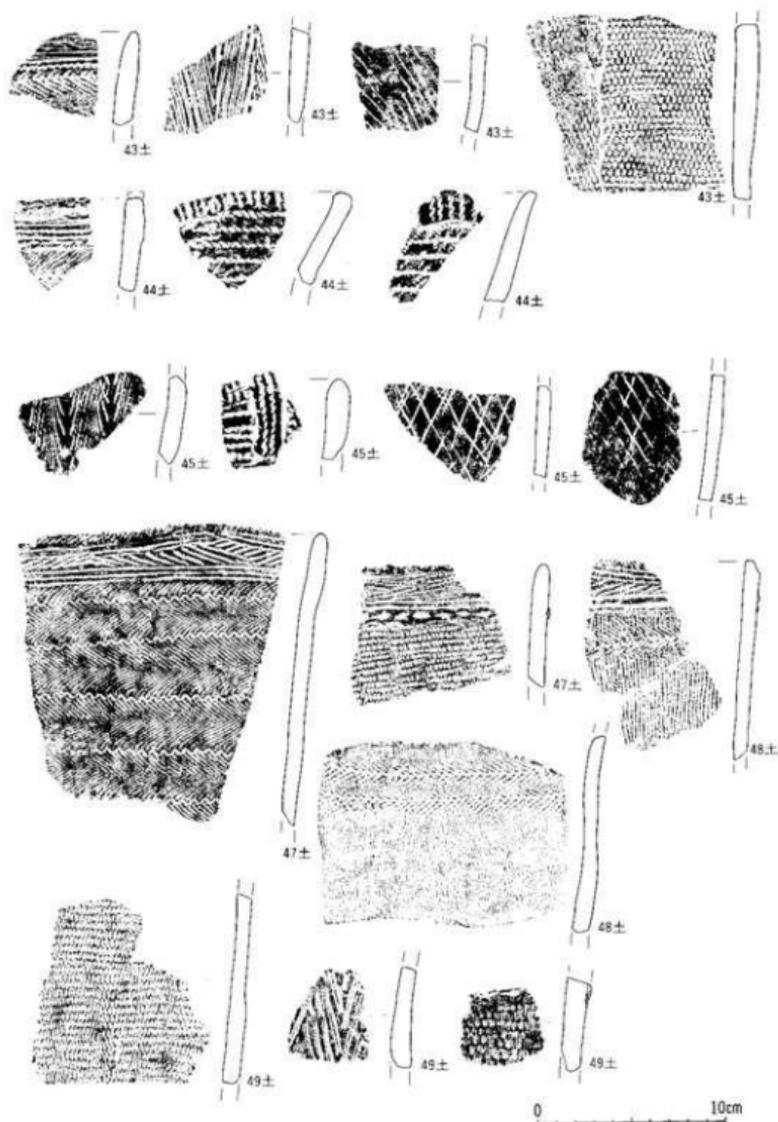
第54图 遺構内出土復原土器20



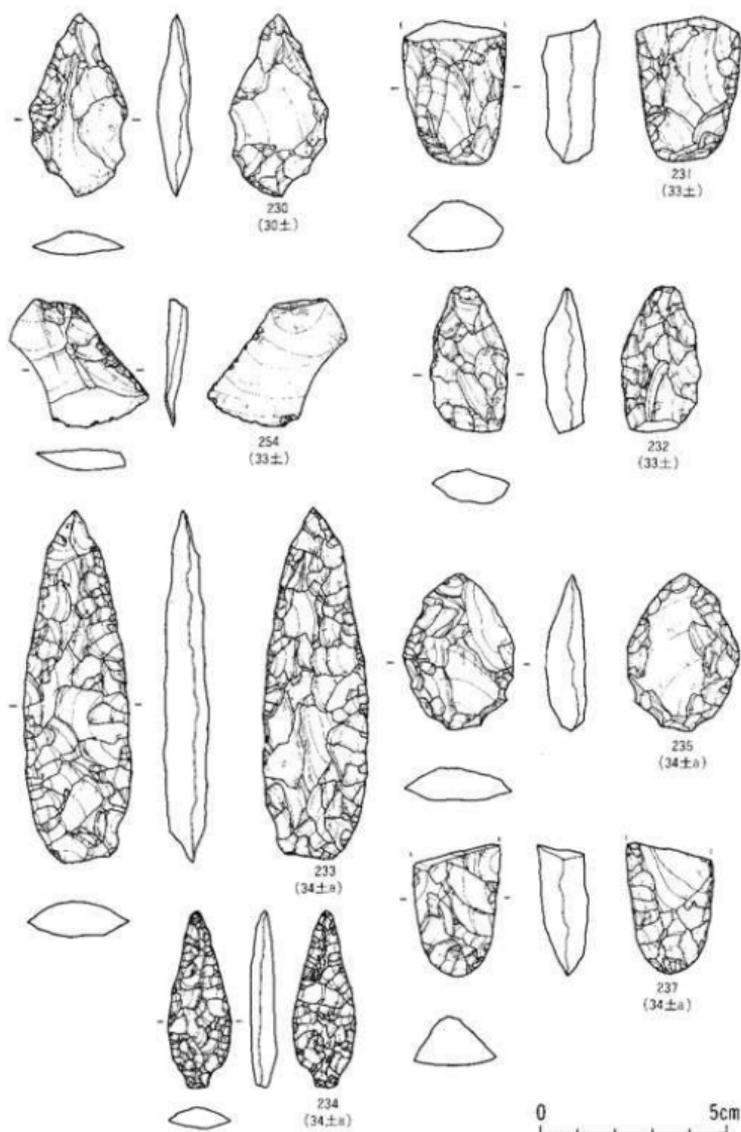
第55圖 遺構内出土土器(7)



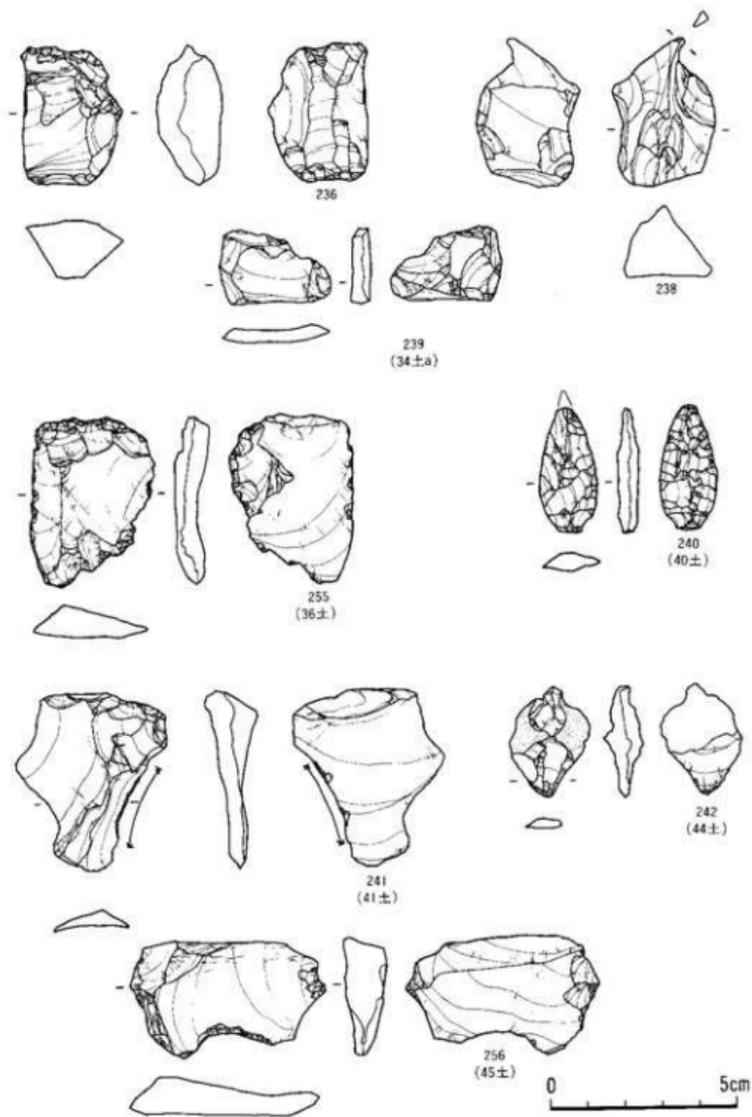
第56图 滇境内出土土器(8)



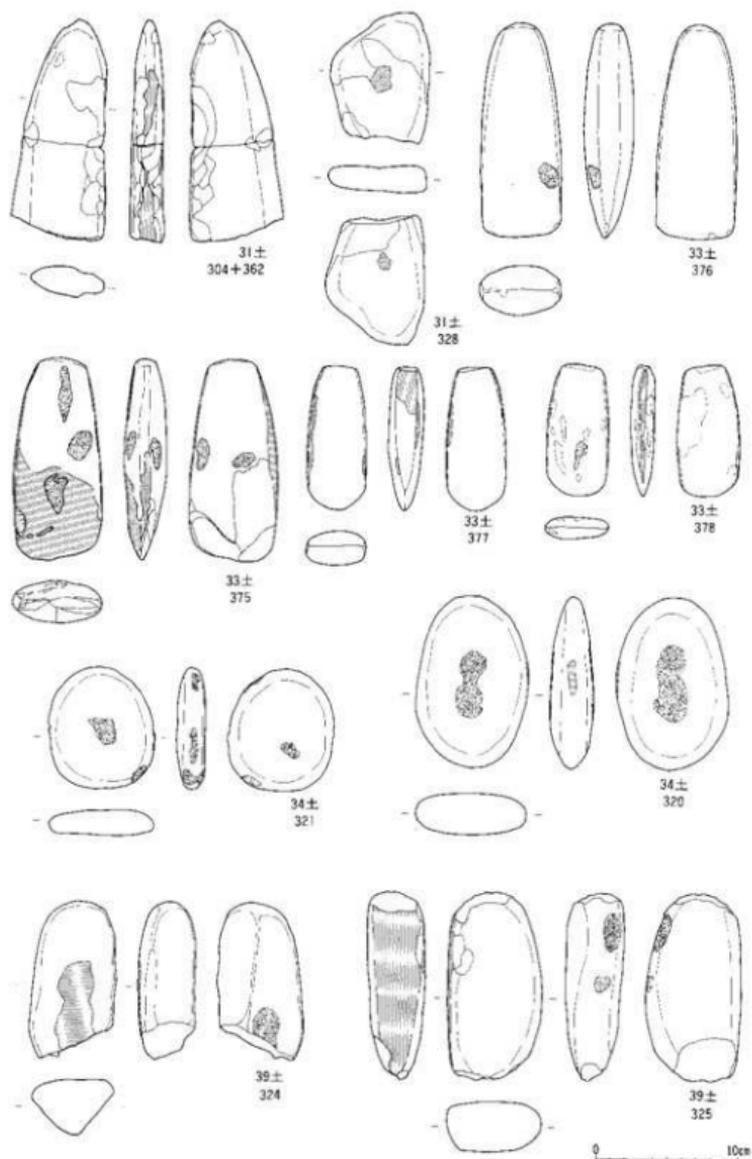
第57圖 遺構内出土土器(9)



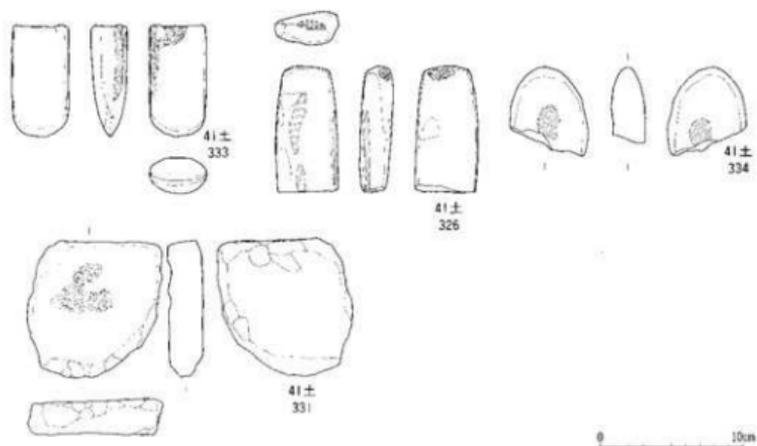
第58图 V区土坑出土石器(1)



第59图 V区土坑出土石器(2)



第60图 V区土壙出土石器(3)



第61图 V区土壤出土石器(4)

### 第3節 屋外炉 (第62図)

屋外炉は、地床炉、土器埋設炉、石田型土器埋設炉で総計5基検出した。重複は認められなかった。

#### 第1号屋外炉

(位置と確認状況) K-33グリッドに位置する。第Ⅲ<sup>b</sup>層下位面で暗赤褐色を呈した焼土を確認した。

(炉の形態) 地床炉である。焼土下部にビットその他の施設はなかった。

(焼土の規模) 焼土上面は、70cm×90cmの楕円形で、堅緻な焼土部分の厚さは4cmであるが、焼土の最深部はさらに8mの深さまで認められる。なお、堅緻な焼土の下位層は、第Ⅳ層の中級浮石層である。

(出土遺物) 本遺構内からは、遺物が出土しなかった。ところが、本遺構の西方約80cmからほぼ原形の土器が横位に潰れた状態で2個体出土している。これらの土器の周囲には、破片化した土器は相当多いが、復原可能な土器はこの2個体以外に認められないことから、本遺構と関連性があるものと推察される。

(時期) 遺構の構築が中級浮石上面であること、周囲の同じレベルから出土している土器が円筒下層d式であること等から縄文時代前期末葉以降と考えられる。

#### 第2号屋外炉

(位置と確認状況) K-45グリッドに位置する。第Ⅲ<sup>b</sup>層中位面で、直立した土器を中心に広がる焼土を確認した。

(炉の形態) 土器埋設炉である。土器埋設のための掘り方が検出された。

(掘り方の規模) 平面は、楕円形で、上面は25cm×45cm、底面が20cm×35cm、深さは35cmである。

(埋設土器) 第54図66の土器で、胴部上半部から底部にかけの土器が利用され、その下半部を正立位に埋設してある。土器の下半には黒褐色土が充填され、その上位には明褐色の焼土が認められる。埋設された土器の上半部は、内外面とも火熱により赤変している。

(焼土の規模) 焼土上面は、径約50cmの略円形を呈して、厚さは、堅緻な部分で3cmをはかるがその下位4cmまで焼土化している。

(出土遺物) 埋設土器が1個体出土した。

(時期) 伴出土器から縄文時代中期である。なお、本遺構はセクション図に示されてあるようにプライマリーな中級浮石層を掘り下げている。なお、中級浮石の降下年代は、少なくとも円筒下層d式以前であることは確実である。

### 第3号屋外炉

(位置と確認状況) K-46グリッドに位置する。第Ⅲ<sub>a</sub>層からⅢ<sub>b</sub>層の間で円形の焼土を伴った礫群を確認した。

(炉の形態) 石囲型土器埋設炉である。焼土の周囲にある炉石は、大型で偏平な石皿1個分の断片を利用している。炉石全体の平面形は、ほぼ円形で、径約50cmである。炉の中央に置かれた礫の下部には土器が正立位で埋設されていて、焼土下部には炉構築用の掘り方(ビット)がみられる。

(ビットの規模) ビット(掘り方)の上面は、石囲いの部分と同様で径約58cmの円形を呈している。底面は、全体的に緩やかに中央部に傾斜し、中央部は10cm×15cmの円錐状を呈している。その最深部は、焼土上面から14cmをはかる。この円錐状のビット(掘り方)に土器が埋設されていた。

(埋設土器) 第54図67の土器で、円筒上層c-d式土器に相当する。埋設土器は、炉中央の掘り方に正立位で埋められ、土器に充填された土の上部は焼土化し、土器自体も赤変している。

(焼土の規模) 炉石の内側にある炉中心部は円形をした赤褐色の焼土がみられ、その厚さは堅緻な部分で約3cmであるが、その下位4cmの深さまで焼土化している。

(出土遺物) 炉石に利用された石皿と埋設土器がある。

(時期) 出土土器から縄文時代中期である。

### 第4号屋外炉

(位置と確認状況) I・J-51グリッドに位置し、第Ⅲ<sub>b</sub>層下位面で暗赤褐色を呈した焼土を確認した。

(炉の形態) 地床炉と思われる。焼土下部には、ビット等の施設はみられない。

(焼土の規模) 焼土上面の平面年は、円形を呈し、直径約85cmの範囲である。厚さは、堅緻な部分が4cmである。その上位には、しまりのない暗褐色土が最厚部が7cmほど塊状に堆積している。

(出土遺物) 焼土化した層中から、縄文土器の胴部紙片が3点出土したが、時期は断定し難い。

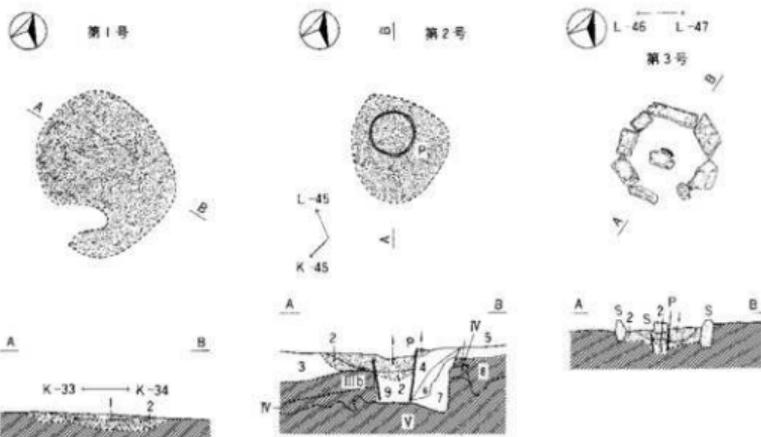
(時期) 出土土器の時期は不明であるが、確認面の層序等から縄文時代中期と考えられる。

### 第5号屋外炉

(位置と確認状況) L-48グリッドに位置し、第Ⅲ<sub>b</sub>層中位面で暗赤褐色の焼土を確認した。

(炉の形態) 地床炉と思われる。焼土下部には、ビット等の施設はみられない。

(焼土の規模) 焼土上面は、略円形を呈し、その径は、約1m5cmである。やや堅緻な部分の厚さは6cmであり、その下位10cmの深さまでが焼土化している。



第1号 暗赤褐色土 堅硬な焼土

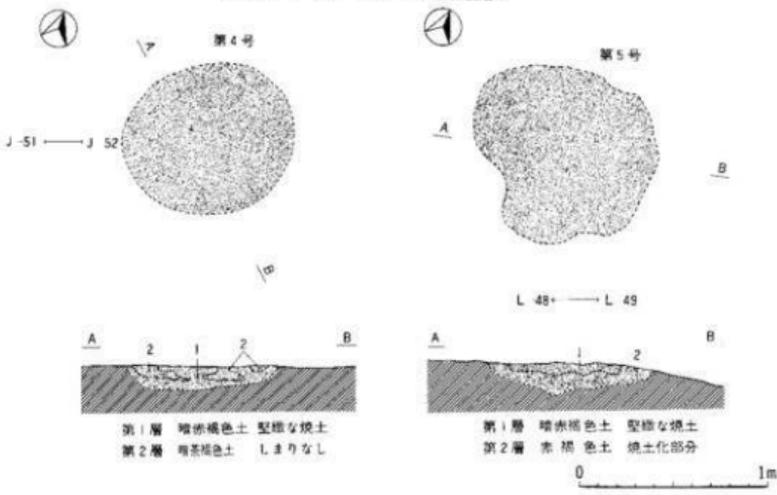
第2層 明赤褐色土 焼土化したIV層土

第2号 屋外炉	色土	7.5YR 5/2	多少程度の焼土
第1層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土化した軟質な土	
第2層 明赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第3層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第4層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第5層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第6層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第7層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第8層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	
第9層 暗赤褐色土	10YR 5/2	焼土混入、LよりなL	

第1層 暗赤褐色土 堅硬な焼土

第2層 明赤褐色土 焼土化部分

第3層 暗赤褐色土 炭・焼土含む



第1層 暗赤褐色土 堅硬な焼土

第2層 暗赤褐色土 LよりなL

第1層 暗赤褐色土 堅硬な焼土

第2層 暗赤褐色土 焼土化部分

0 1m

第62図 屋外炉

(出土遺物) 焼土化した層中から、縄文土器の紙片が1点出土した。時期は不明である。

(時期) 不明であるが、確認層等から縄文時代中期と考えられる。(遠藤正夫)

#### 第4節 焼土 (第63図)

本項で扱う焼土とは、検出された焼土のうち、屋外炉として判別したものの以外のすべての焼土を一括したものである。すなわち、本項に含まれる焼土は、I. 屋外炉という表現で明確にできるまでに至らない、いわば、炉とみなすか否か判断に苦しむような在り方をする焼土と、II. その場で火を燃してできた焼土ではなく、他の場所で焼土化された後、別の場所へ廃棄されたと思われる焼土の2種類である。なお、Iとした焼土は、地床炉としての焼土という見方もあろうが、本項では、炉としてのある程度の規模、焼土及びその下位の焼土他の状況等を判別の目安として、地床炉と区別することにした。また、本項では、IIの場合の焼土も一括したことから、あえて、焼土(状)遺構とせず、単に焼土と表記することにした。

焼土は、総計で11基検出した。

11基の焼土は、いずれも、その平面形は非円形が多いこと、規模が小さいこと、焼土下部に掘り込み等の凹地の施設をもっていないこと等の点が共通して認められる。また、Iとしたものの焼土上面は、それ程堅緻ではなく軟質でバサバサし、焼土自体の厚さも1～3cm程度のものがほとんどである。また、IとIIを問わず、この11基の焼土が、45ラインから52ラインまでのごく限られた範囲に集中して検出されたということも特徴の一つであり、この範囲は、土壌等の遺構がほとんどなく、逆に土器の出土量(復原可能な1個体分のものがより多い)が他に比べ極端に多い地区でもある。

遺構などが少なく、土器の出土が極端に多い限定された地区に焼土が集中して検出される現象は、何かしら相互に関連性があることをうかがわせる材料と思われる。

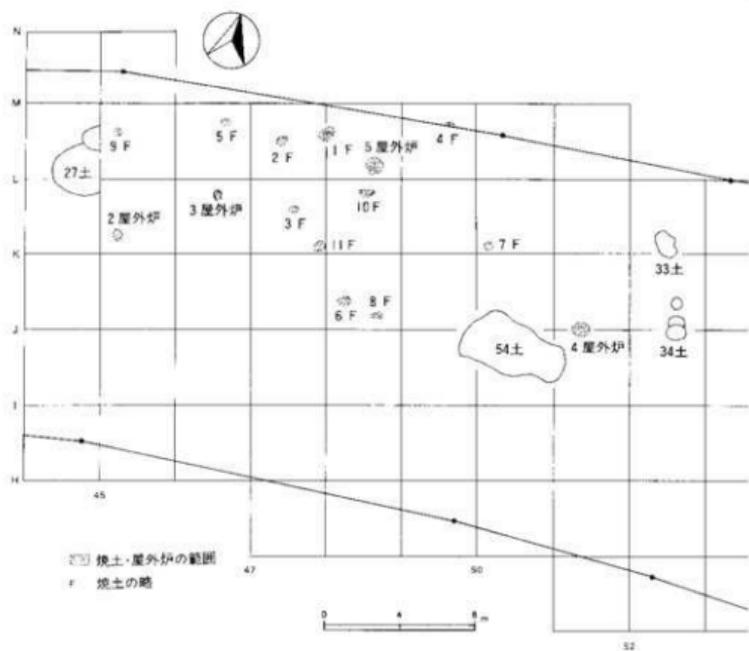
11基の焼土の確認面は、すべて基本層序第Ⅲ層(比較的Ⅲb層が多い)中であり、これらの使用及び廃棄の時期は、層序的にみて縄文時代前期末葉から中期にかけての頃と考えられる。

これらの焼土についての観察事項は表にしてまとめてある。(遠藤正夫)

第2表 焼土一覧表

観察項目 焼土No.	検出 グリッド	地			特 徴	下部地況	出土遺物	分類	備 考	出(調査時) 処
		平面形	平面規模(cm)	厚さ (cm)						
1	L-47-48	略梯形	65×100	4	上面のみやや平飯	なし	なし	I		3号焼土
2	L-47	〃	35×50	2	〃	〃	〃	〃		4 〃
3	K-47	〃	15×30	5	平飯	〃	〃	II	焼土塊	5 〃
4	L-49	(不明)	[不明]	4	やや平飯	〃	(なし)	(I)	調査区域内外境界断面に露出	6 〃
5	L-46	略円形	直径約35	3	平飯	〃	なし	II		7 〃
6	J-48	楕円形	25×50	4	軟質で バサバサ	〃	〃	I		8 〃
7	K-50	方形	30×35	5	やや平飯	〃	〃	II		9 〃
8	J-48	不整形	最大長25	2	平飯	〃	〃	〃	焼土塊	10 〃
9	L-45	略梯形	15×20	3	〃	〃	〃	〃	〃	11 〃
10	K-48	不整形	25×45	5	〃	〃	〃	〃	大きな焼土塊を半割したような焼土塊	12 〃
11	K-47	略円形	直径約45	5	若干軟質	〃	〃	I		13 〃

(単位: cm)



第63図 焼土

## 第5節 溝状ピット (第64図)

### 第1号溝状ピット

(位置・確認) 本遺構は、調査Ⅱ区K-25、J-25・26グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認したが、それより上位の層も考えられる。遺構は南側に傾斜する台地の稜線に沿う形で構築され、本遺構の南東端上部が一部攪乱を受けている。

(重複) 無し。

(規模・形状) 開口面は4m43cm×30cmの長楕円形、底面は4m82cm×14cmの長楕円形、深さは82cmである。長軸方位はN-41.5°-Wである。

(壁) 第Ⅵ-Ⅷ層を壁面としている。長軸方向の壁断面は開口部が狭く、底面に向けて末広がりとなり、短軸方向の壁はY字状を呈する。

(底面) 第Ⅷ層を底面とし、多少しまりがあり、ほぼ平坦に作られている。

(堆積土) 4層に区分した。

(出土遺物) 出土しなかった。

(遺物の時期・性格等) 遺物が出土しないため不明であるが、遺構の確認面等から判断して縄文時代後期の可能性がある。

### 第2号溝状ピット

(位置・確認) 本遺構は、調査Ⅱ区K-34、L-34・35グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認した。

(重複) 第18・19号土壌の2土壌と重複し、本遺構が一番新しい。

(規模・形状) 開口面は3m40cm×52cmの長楕円形、底面は3m50cm×10cmの長楕円形、深さは1m49cmである。長軸方位はN-51°-Eである。

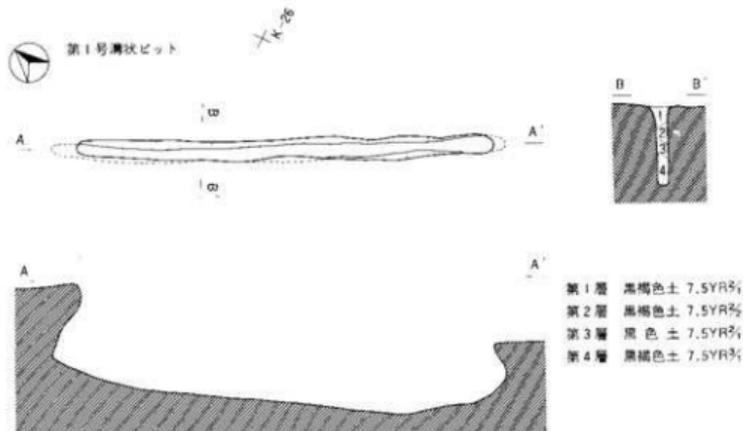
(壁) Ⅲ-Ⅶ層を壁面としている。長軸方向の壁断面は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、短軸方向の壁面は、底面よりほぼ垂直に立ち上がり、中端から開口部に向けて広がりを示す。

(底面) Ⅶ層を底面とし、しまりがあり、ほぼ平坦に作られている。

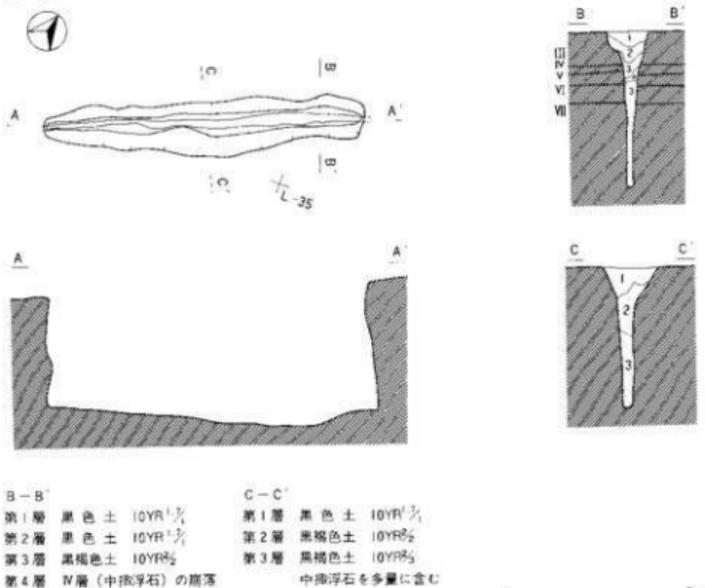
(堆積土) 3層に区分した。各層ともしまりがある。

(出土遺物) 出土しなかった。

(遺構の時期・性格等) 遺物が出土しないため不明であるが、遺構の確認面及び切り合っている土壌の時期等から判断し、縄文時代後期の可能性が高い。(石戸谷 悟)



第2号溝状ピット



第64図 溝状ピット

第3表 遺構内出土復原土器概略一覧表

計測値 口径×底径×器高  
単位 cm  
略 下層→下、上層→上

土器番号	遺構名	計測値	分類	土器番号	遺構名	計測値	分類
第7図1	1住 772	25.4×-(32.6)	上a <sub>1</sub>	第31図35	28a土 772	16.9×7.1×19.8	(上a?)
第7図2	1住 772	27.6×11.2×33.8	十層内I	第32図36	28a土 772	-×17.0×(41.0)	(上層式)
第8図3	1住 772	21.0×10.0×6.9	十層内I	第32図37	28a土 772	(17.7)×9.3×(24.7)	(上層式)
第8図4	1住 772	19.2×12.6×52.6	十層内I	第32図38	28a土 772	-×17.5×(15.0)	(上層式)
第22図5	18土 772	-×8.8×(22.0)	上a <sub>1</sub> -4	第32図39	28a土 772	-×12.5×(18.5)	(上層式)
第22図6	14土 772	33.3×13.0×37.3	上a <sub>1</sub> -4	第33図40	28b土 772	21.0×-(33.0)	Fd <sub>1</sub> -1
第22図7	14土 772	-×14.2×(15.5)	(上層式)	第33図41	28b土 772	21.0×-(18.5)	Fd <sub>1</sub> -1
第23図8	15土 8	33.2×12.5×43.0	上a <sub>1</sub> -2	第33図42	28b土 772	12.3×7.7×15.8	Fd <sub>1</sub> -2
第23図9	15土 8	(33.5)×14.5×42.8	上a <sub>1</sub> -5	第33図43	28b土 772	(22.0)×12.0×39.5	Fd <sub>1</sub> -3
第24図10	16土 772	22.6×9.6×28.5	上a <sub>2</sub> -2	第34図44	28b土 772	(29.0)×-(34.0)	上a <sub>1</sub> -2
第24図11	16土 772	-×10.2×33.6	上b	第34図45	28b土 8	17.5×7.3×19.7	上a <sub>2</sub> -4
第24図12	16土 772	20.2×-(28.5)	上b	第34図46	28b土 772	-×10.0×(24.0)	(上a <sub>1</sub> )
第24図13	16土 772	20.8×9.0×23.5	上a <sub>1</sub> -6	第34図47	28b土 772	11.4×5.4×12.3	(上a?)
第24図14	16土 772	-×10.2×25.5	(上a?)	第35図48	29土 8	20.5×11.0×31.5	Fd <sub>1</sub> -1
第25図15	17土 772	17.0×9.0×23.0	Fd <sub>1</sub> -4	第35図49	29土 8	18.0×11.5×30.0	Fd <sub>1</sub> -1
第25図16	23土 772	28.0×-(23.0)	大木系	第35図50	29土 8	21.0×12.5×27.5	Fd <sub>1</sub> -1
第25図17	23土 772	-×12.5×(16.0)	(上層式)	第35図51	29土 8	20.0×12.0×28.5	Fd <sub>1</sub> -1
第25図18	24土 772	18.5×7.5×23.5	上a <sub>1</sub> -4	第36図52	50土 8	(35.0)×12.0×41.5	上a <sub>1</sub> -4
第25図19	27a土 772	(20.0)×8.0×25.0	上a <sub>1</sub> -4	第36図53	50土 8	18.0×7.5×22.0	上a <sub>1</sub> -6
第25図20	27a土 772	(21.0)×8.5×23.5	上a <sub>1</sub> -2	第37図54	51土 772	29.0×12.0×36.5	上a <sub>2</sub> -1
第26図21	28a土 772	23.3×-(28.5)	Fd <sub>1</sub> -1	第36図55	51土 772	13.5×8.0×19.5	上a <sub>1</sub> -6
第26図22	28a土 772	(25.0)×(24.7)×29.0	Fd <sub>1</sub> -1	第36図56	51土 772	21.0×10.5×29.5	(上d?)
第26図23	28a土 772	(25.0)×14.7×33.6	Fd <sub>1</sub> -1	第53図57	33土 772	-×-×23.0	
第26図24	28a土 772	25.0×-(32.0)	Fd <sub>1</sub> -1	第53図58	36土 772	(28.0)×-×30.0	上c-2
第27図25	28a土 772	(31.5)×17.0×43.0	Fd <sub>1</sub> -1	第53図59	36土 772	-×18.5×(38.0)	(上層式)
第27図26	28a土 772	-×-(35.5)	Fd <sub>1</sub> -3	第53図60	36土 772	-×11.5×(14.0)	(上層式)
第28図27	28a土 8	(25.5)×-×20.0	Fd <sub>1</sub> -3	第54図61	41b土 772	21.5×-(19.0)	上a <sub>1</sub> -5
第28図28	28a土 772	38.0×17.6×49.5	Fd <sub>1</sub> -3	第54図62	47土 772	17.3×12.5×28.3	Fd <sub>1</sub> -1
第28図29	28a土 772	$\frac{13.5}{0.2} \times \frac{10.0}{6.7} \times 7.4$	(Fd <sub>1</sub> ?)	第54図63	48土 772	12.0×-×15.5	Fd <sub>1</sub> -2
第29図30	28a土 772	24.5×10.5×27.5	上a <sub>1</sub> -2	第54図64	49土 772	18.5×-×22.5	(Fd <sub>1</sub> )
第29図31	28a土 772	40.8×-×(47.5)	上a <sub>1</sub> -4	第54図65	49土 8	12.0×8.5×19.5	(Fd <sub>1</sub> )
第30図32	28a土 772	34.5×15.7×43.0	上a <sub>1</sub> -5	第54図66	2号屋外貯	-×-×(31.5)	(上層式)
第30図33	28a土 772	(33.0)×11.0×29.8	上a <sub>1</sub> -1	第54図67	3号屋外貯	-×-×(8.0)	(上d?)
第31図34	28a土 772	-×14.2×39.7	上a <sub>1</sub> -3				

## 第V章 出土遺物

すでに第三章第3節で述べているが、本書では、発掘調査で出土した遺物について、本章で一括して取り扱うこととする。すなわち、遺構内出土・遺構外出土の両者の遺物である。以下、前記第3節に記述した分類に従って述べていくことにする。

### 第1節 土器

何度か記述してあるが、出土した土器の総量は、ダンボール箱で約100箱分に相当する量であった。出土した土器は、比較的接合関係が良好で、復原可能土器は、遺構内出土のものが67個体、遺構外出土のものが約110個体である。遺構外出土土器で推察すると、先の110個も含め遺構外から出土した土器の個体数は、確実に180個を数えることができ、総数としては恐らく200余個と思われる。土器を型式別に分けると、総出土土器の主体を占めるのは、円筒下層d1式から円筒上層d式にかけての土器群である。

円筒下層a式土器 (第65図1~13)(カッコ内には遺構外の該当土器図版番号を掲載し、遺構内の該当土器は文中でそのつど表記する)

本群に属する土器は、極めて出土量が少なく、復原土器3個体と破片が約30点ほどである。

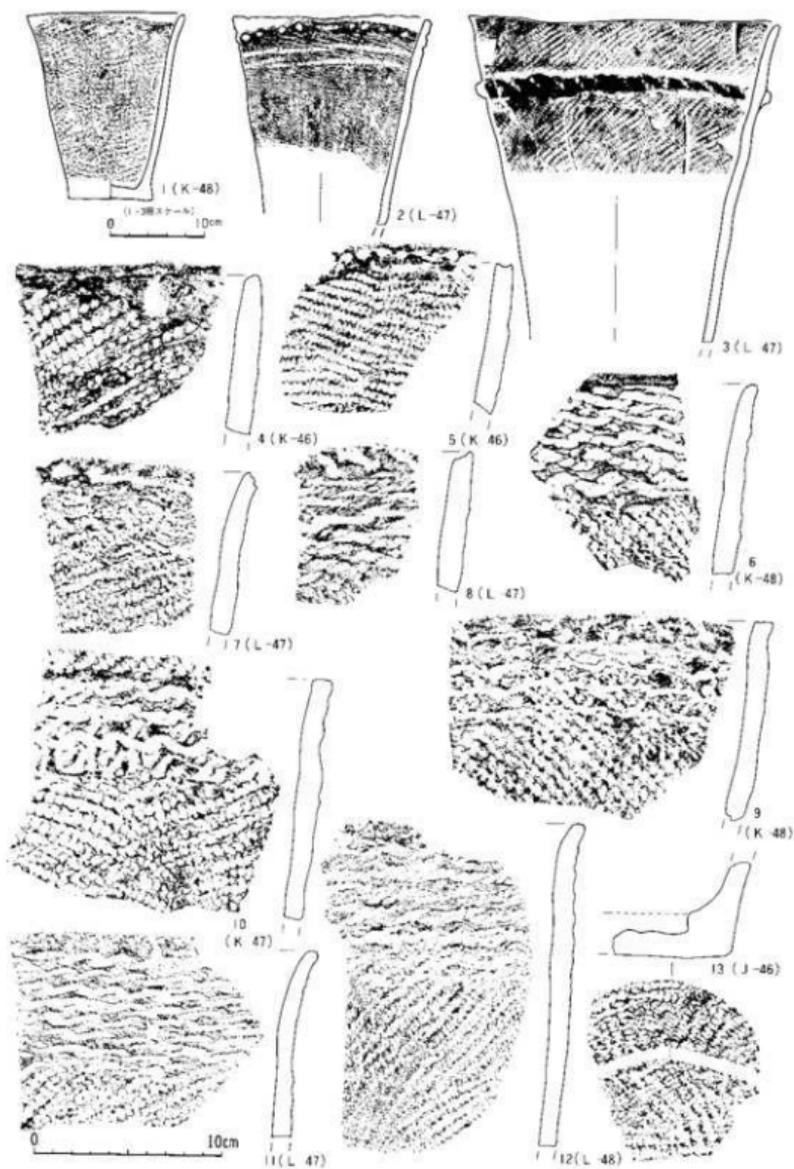
また、遺構内から出土したものはなく、すべて遺構外からの出土である。出土地点は、K-47を中心とした周囲の約6グリッドにまたがり、ごく狭少な範囲に限定されている。出土層位は、I・II層とV層上面の二つがみられるが、前者については、後世の攪乱等による土器の浮き上がりと考えられる。

本群土器の器形は、円筒形と表現するよりは深鉢形と表現した方が適切な程、底辺部から口縁部にかけて直線的に開くいわば筒身の長いバケツに似ている。底辺部は、ほとんどが欠損しており定かではないが、底辺部下位は、わずかに外側に張り出し、底部は若干上げ底となっているものと考えられる。13は、底部外面に縄文が施された土器で、このような例は他にはみられず、本遺跡唯一の出土例である。

文様構成等の面から次のように細分した。

1類 器面全体が地文縄文の単一原体・施文方法による文様で構成される類(1・4・5)、施文原体は、すべて斜行する縄文である。

2類 地文文様を施した後、口頸部に口縁と平行に圧痕文を巡らす類(2)、口頸部に横位に綾絡文を施文し文様帯を構成する類(6~12)、2は、口頸部に2条の絡条体圧痕文が施され、口唇部上面には、原体押圧による刻みが施されている。同じく口唇部についてみると、5・7~11に刻みがみられ、5・7は円形の刺突、8~11は原体の押圧によるものである。



第65図 遺構外出土土器(1) (円筒下層a式土器 1-13)

3類 口頸部に1条の太い隆帯をもつ類(3) 3の土器にみられる隆帯は、つまみ出しによるものではなく粘土紐の貼り付けによる類で、隆帯上には、斜位に約1cm間隔で縄文の圧痕が施されている。隆帯の上下位とも同一斜行縄文が施文されている。

1-3類とも、胎土には、植物性繊維の混入がみられ、また、砂粒の混入も目立つ。焼成は、全般に良好である。内面は、丁寧に研磨したものとそうでないものがある。円筒下層b式土器 (第66-68図14-38)

現在、円筒下層a式に続く土器型式は、円筒下層b1式・b2式と2分類がみられるが、このb1式とb2式の細分基準において各研究者間で若干のずれがみられるため、本書ではあえてb式として取り扱い、その中で細分することにした。

本群に属する土器も下層a式ほどではないにしろ量的には少なく、復原土器が9個体と約80点の破片にすぎない。本群土器もまた、すべて遺構外からの出土である。出土地点は、K-46グリッドを中心に約13グリッドにまたがる。下層a式の範囲よりは多少広目ではあるもののやはり、狭少な範囲に集中している。この集中範囲の他に、34ライン及び58ライン付近から数片が出土している。出土層位は、大半がV層最上面からで、IV層が堆積していない場所では、第III層下位面から出土している。なお、58ライン付近で出土した土器は、I・II層からである。

本群土器の器形は、円筒形を呈するものが多くなり、非常に大型のものもみられる。底辺部の張り出しは、ほとんどみられない。底部もほとんどが平底で上げ底のものは(37)少ない。口唇部に刻みをもつものは、ほとんどみられなくなり、16-18・32の4点だけである。縄の圧痕によるものと指頭押圧のものがある。

本群土器には、隆帯のあるものと、細く低い形態的なもの、及びないものがあり、時間的推移としては、あるものからないものへと推移するものと考えられる。また、b式になると羽状縄文や木目状燃糸文が出現する。後半期になると口頸部文様帯に押圧縄文による文様構成がなされるようになる。胎土には、下層a式同様、植物性繊維・砂粒を多量に含んでいる。

本群土器は、このように、隆帯の有無、施文原体、文様構成等から次のように細分した。

1類 口頸部に隆帯を口縁と平行に1条巡らし、器面を縄文のみで施文する類(14・15・16) 隆帯は、a式のような太く厚味のあるものではなく、低くなっている。隆帯には、押圧縄文(14)や指頭押圧(15・16)による刻みが施されている。口頸部には横位の綾絡文が施され、胴部は斜行縄文である。16は、口頸部文様帯の上下に各1条の横位の押圧縄文が施されている。比較的大型のものが多い。

2類 口頸部に隆帯を口縁と平行に1条巡らし、文様施文に燃糸文(絡格条体回転文)を使用する類(17-19)

隆帯は、1類と同じく、厚味のない低いもので、押圧縄文や指頭押圧が施されている。1類

との違いは、施文原体に縄文の他に結条体を使用することであり、17は、口頸部は斜位に、胴部は縦位に燃系文が施されている。18と19は、恐らく同一個体と思われるが、口頸部と隆帯直下に横位の木目状燃系文が施されている。この類も比較的大型の土器が多い。

3類 口頸部に隆帯を口縁と平行に1条巡らし、無文の口頸部文様帯に圧痕文を施すものや素文のままの類(20-23)

本類になると隆帯は、さらに幅狭く低く作られているが、隆帯上には、継続して押圧縄文や指頭押圧が施されている。20は、隆帯上に縄文を横位に押押し隆帯を上下に二分させている。本類の特徴は、これまで口頸部の文様構成が回転文であったのに対し、原体の押圧文になっていることである。20・21は、口頸部に口縁と平行に数条の横位の押圧縄文が、22は、同じく結条体による圧痕文が各々施文されている。いずれも押圧施文は無文面上に施されている。23は、幅2cmの狭幅無文の口頸部をもつもので、胴部は、網目状燃系文が施されている。20-22の胴部は、斜行縄文が施されている。

4類 口頸部にこれまでみられてきた隆帯は、形態的な形で残存し、高さもほとんどなく微隆起状と表現できる程度のもので、口頸部に縄文を施す類(24-29)

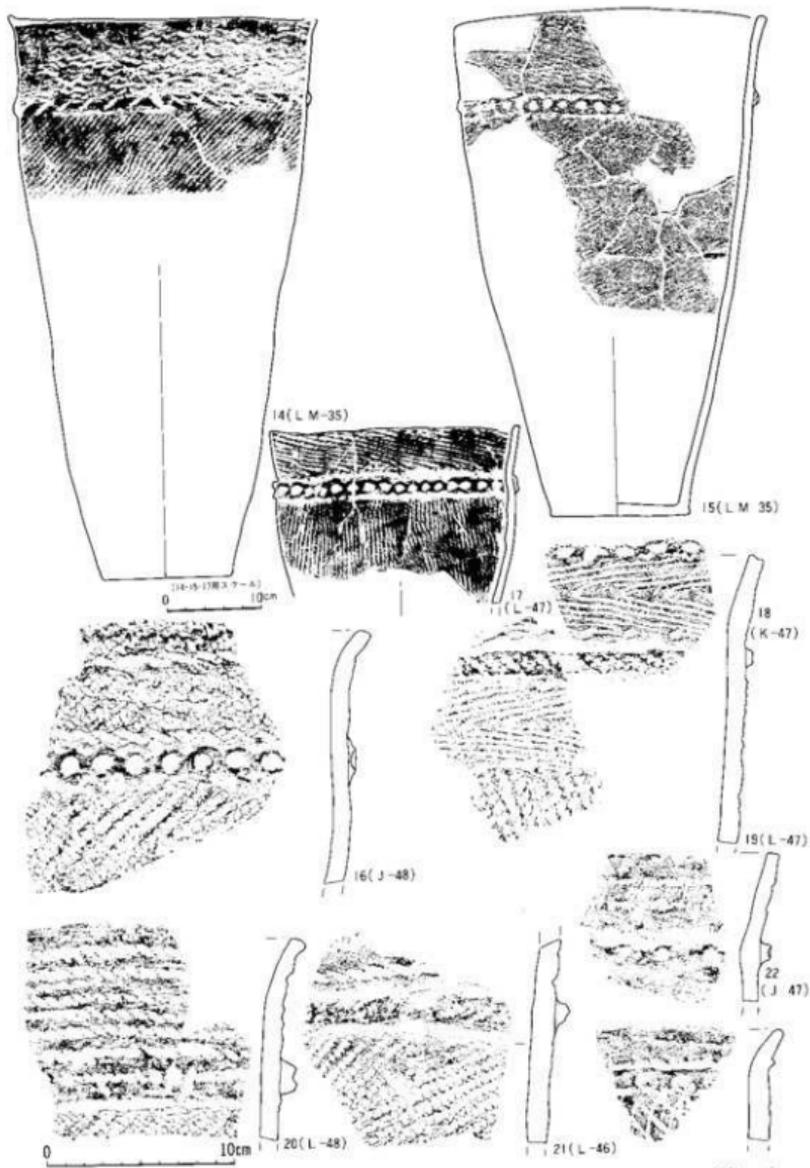
本類になると、隆帯は、ほとんど形態化してしまい、胴部との境を区画するための区画的な役割に変化する。それでも微隆起帯上には、刺突(24・26・28・29)押圧縄文(25・27)が施されている。26・29にみられる微隆起帯の上下にそれと直角方向に施される爪形の刺突の手法は、次の段階の下層c式にも受け継がれている。口頸部には、斜行縄文(24)羽状縄文(25・26・28・29)が施されている。27は、口頸部・胴部とも特殊な撚りの縄文で斜位に施されている。24-27の胴部は斜行縄文が施され、26の胴下半部には縦位の燃系文も施されている。29の胴部には縦位の燃系文が施されている。24の1点のみは口頸部が外反する。28は、微隆起帯の直下にも横位に羽状縄文が施されている。

5類 隆帯はみられず、燃系文を使用する類(30-32)

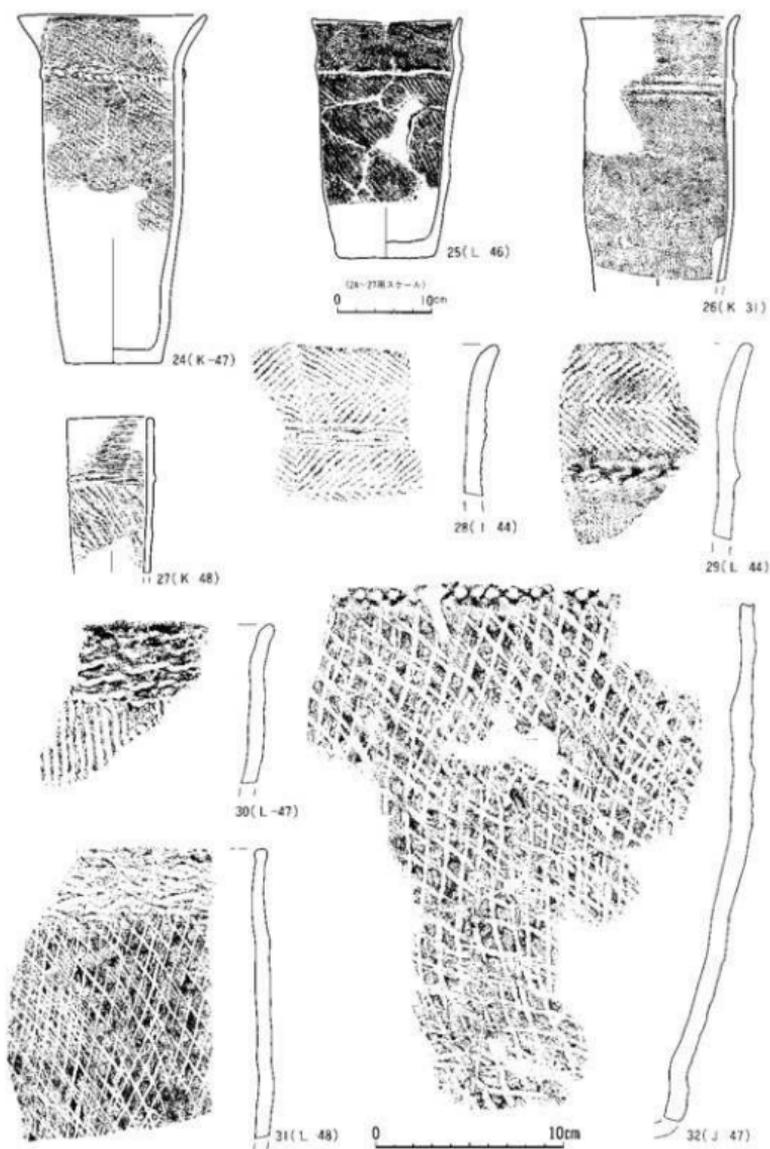
隆帯及び微隆起帯もないもので、燃系文により施文されているものを本類とした。30は、口頸部に横位の綾絡文が胴部に縦位の燃系文が各々施されている。31は、口頸部に横位の綾絡文が、胴部に網目状燃系文が各々施されている。32は、口縁から底部まで左傾・右傾を交互に繰り返した燃系文の回転により網目状に文様を表出させたもので、口唇部には刻みが施されている。これらの土器は、手法的な面から2類に類似する。

6類 口頸部に押圧縄文を施す類(33-36)

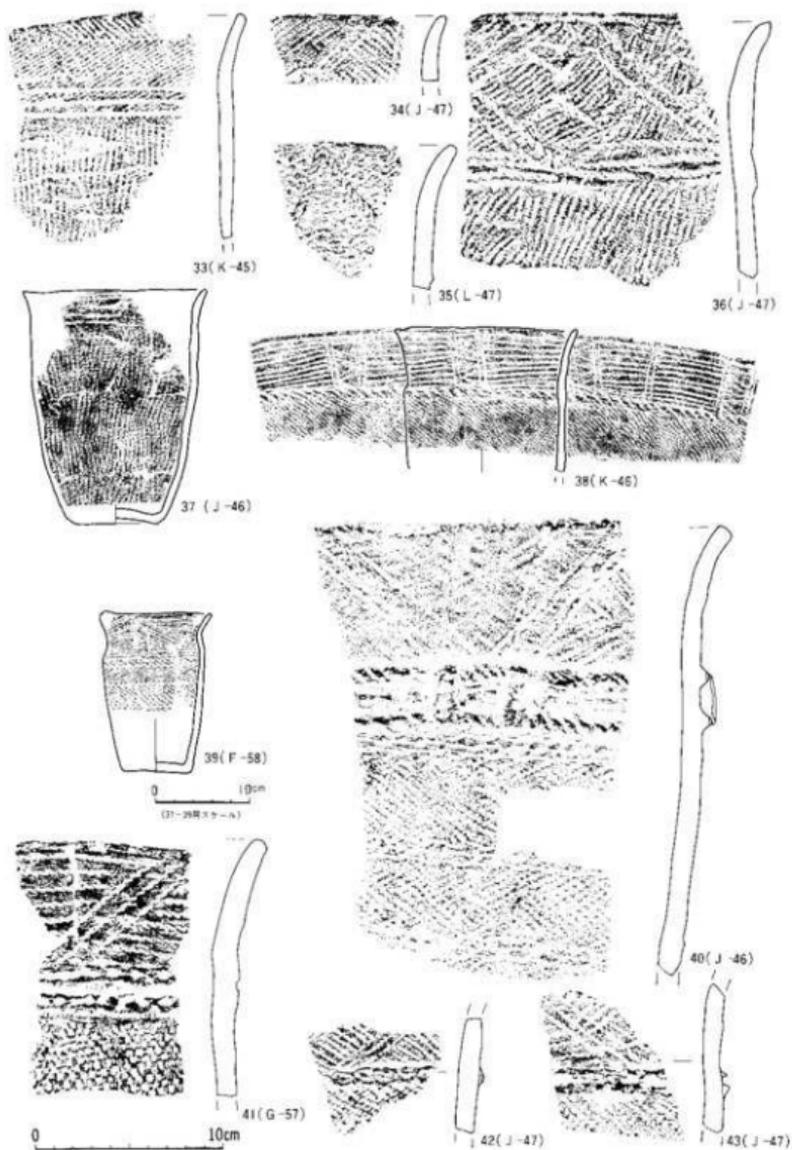
隆帯はなく、あっても36のように形態化した微隆起帯である。口頸部には、斜行縄文・綾絡文・羽状縄文が施され、その上から押圧縄文により簡単な三角形を基調とした文様が描かれている。33については、口頸部に羽状縄文を横位に施し、胴部の縦走縄文と区画する意図で、3



第66図 遺構外出土土器2) (内閣下層b式土器 14~23)



第67図 遺構外出土土器③(内裏下層c式土器 24-32)



第68図 遺構外出土土器(4) (円筒下層b式土器 33~38, 下層c式土器 39~43)

条の口縁と平行な押圧縄文を施しているだけであり、4類に属するかもしれない。34・35は、地文文様の上に三角形を構成するように押圧縄文が施されている。本類は、c式にみられる口頸部の押圧縄文による幾何学文様の萌芽的なものとみることができる。

#### 7類 口頸部に押圧縄文を文様として施している類(37・38)

本類が6類と大きく違う点は、押圧縄文が、6類が地文文様の上に施していたのに対し、無文の面に施すものである。37・38ともに胴部には斜行縄文が施されている。

38には、微隆起帯が1条巡っている。38は、下層b式と下層c式の過渡期的な要素をもつ土器である。

#### 円筒下層c式土器 (第68・69図39～49)

本群に属する土器は、下層a・b式と同様に量的に少なく、復原土器が1個体と破片が約50点程のものである。すべて遺構外から出土したものである。遺構外からの出土地点は、J-46・47グリッドの狭少な範囲に大半が集中し、他に44・45・58ライン付近から数片が出土している。出土層位は、V層最上面であり、下層b式土器との層位関係は、把握することができなかった。

本群土器の器形は、口頸部が若干外反するものの概略的には円筒形か深鉢形を呈するものとこれまでみられなかった頸部が一度くびれ、口頸部中位が多少内反し、そこから口縁に向けて多少の外反を呈する器形のもの2種類がみられる。底部の張り出し、上げ底はほとんどみられなくなる。胎土は植物性繊維を多量に含んでいる。

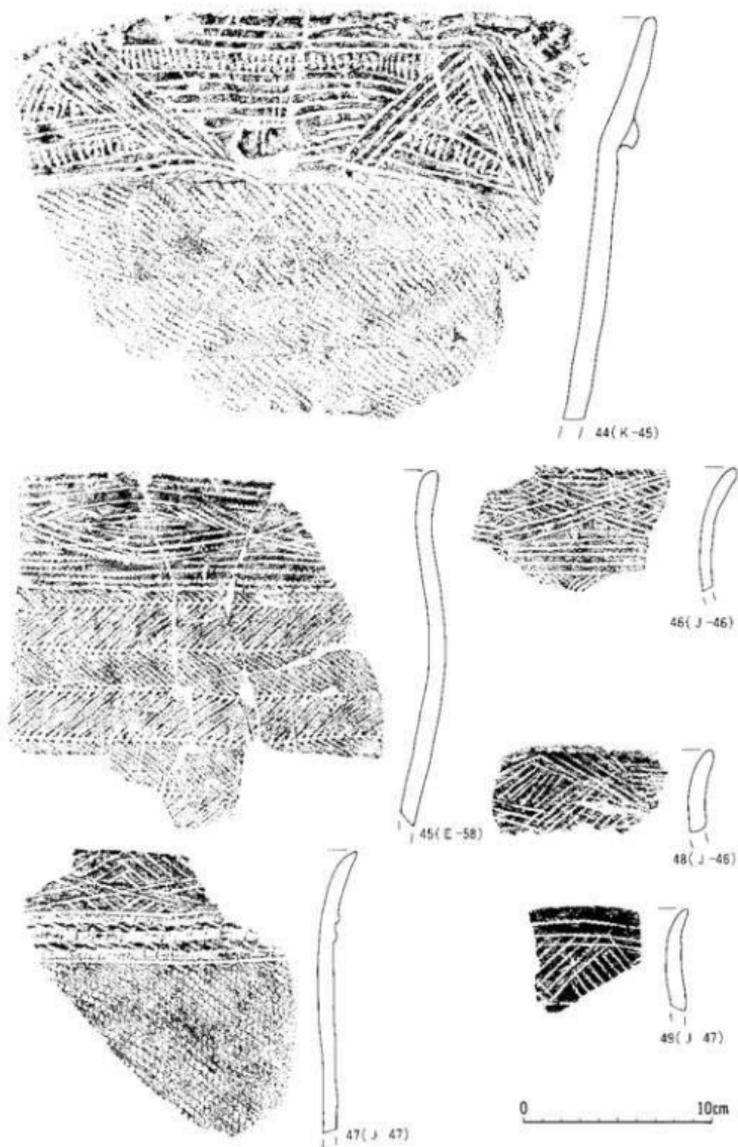
本書では、本群土器を、口頸部文様帯が押圧文による施文文様を有する土器と把入ことにした。そのような観点から、本群土器は、次のように細分した。

#### 1類 口頸部文様帯が幅広く、隆帯を有する類(40～43)

本類は、外反の度合いの弱い口頸部に原体の押圧により鋸歯状と平行文を基調とする幾何学文様を構成し、形骸的な隆帯を有するものである。口頸部は、40が結条体圧痕文と刺突文で、41～43が押圧縄文により各々幾何学文様を施している。隆帯は、下層a・b式にみられるような太く高いものではなく、幅の狭く低いものとなっており、隆帯上には、縄文・指頭により刻みが施されている。41・43は、一本の隆帯上に結条体を圧痕することで(41)また刺突列を施すことで(43)、結果的に2本の隆帯に変化させている。胴部は、斜行縄文(40・42・43)と多輪結条体回転文(41)がみられる。胎土に多量の植物性繊維を含んでいる。

#### 2類 隆帯がなく、幅広い多少外反する口頸部の類(44)

本類に含めたものは44の1点だけである。口頸部の幅が広いことと、押圧縄文により幾何学文様を施している点では1類と同じであるが、44は、器形に特徴がある。すなわち、頸部で一度すばまりをみせやや内湾気味に多少口頸部全体が外反するものである。頸部付近に1個の突起(貼り付け)がみられる。本土器には植物性繊維がほとんど含まれていない。内面は研磨さ



第69図 遺構外出土土器5) (円筒下層c式土器 44~49)

れ光沢がある。

3類 隆帯がなく、器高の割りに比較的幅広い、口頸部中部で一度すぼまりをみせる器形の類(39・45・46)

本類に含めたものは、2類とともに、口頸部の立ち上がりに特徴があり、頸部で一度すぼまり、そこから口縁に向かって多少外反するもので、45・47は、胴部に最大径がある。口頸部の文様は、1・2類と同様、押圧により幾何学文様を構成している。なお、45の押圧には連続V字状を呈する(絡条体圧痕文)がみられる。胴部は、39・45が横位の羽状縄文である。

4類 比較的幅の狭い外反度の弱い口頸部の類(47-49)

本類の口頸部の文様構成は、1から3類まで大差はないが、それらと違う点は、多少狭幅になっている点と、1類に似て外反の度合いが弱い点である。47は、形骸化した隆起帯(線)が2条口縁と平行に1巡しており、その上下3箇所を隆起部と直角方向に爪形の刺突文が連続して施されている。本類も比較的胎土に植物性繊維が多く含まれている。

なお、49号土壌出土の第54図64・65の2個の土器は、一応下層dとしていたが、64は4類に65は3類に属する可能性もある。

円筒下層d式土器 (第70図50-53)

本群に属する土器は、遺構内外から多量に出土し、量的には、円筒上層c-d式に次いで多く、遺構外出土のものでは、復原土器が約4個体で、また遺構内でみても、28号土壌(復原個体数8個)や29号土壌(復原個体数4個)のような本群土器を多量にかつ良好な一括資料として取り扱い得る状況で出土している。遺構外における出土地点でみると、本群土器の場合は、下層a・b式土器に比べ集中してある限定された範囲から出土はせず、およそ33ラインから58ラインの広い範囲にまたがって、比較的均一に散布している。遺構内においては、前述の28・29号土壌で良好な出土状況を目撃している他、複数の土壌の堆積土中からも出土している。恐らく、本群土器の時期には、この付近をある程度広範囲に生活圏として利用したものであろうし、また、次の時代における土壌構築時及び廃棄時には、本群土器が前時代の遺物として多量に混入したと思われる。出土層位は、I・II層中から出土したものもあるが、大半は、III層下位面からである。IV層及びそれ以下から出土したものはない。

本群土器の器形は、本群土器の名称である円筒土器の円筒そのものの形状である。つまり、口径と底径の差がそれ程なく、かつ、口頸部の屈曲及び胴部の膨らみもほとんどなく、底部から口縁部にかけてほぼ直線状をなすものである。

底辺部の張り出しは、まったくみられず、また、底部はすべて平底となり上げ底のものは、まったくみられない。さらに本群土器においては、胴部と底部の接点、つまり底面の曲り角の部分で他の土器は曲線的な曲がり呈しているのに対し、非常に直線的な角がつくられている

という特徴が認められる。整形時に、わざわざ胴最下部の周囲を削り落したものかもしれない。

器内面は、大半が丁寧に研磨され光沢がみられる。胎土には、植物性繊維が少量ながらも含まれているが、ほとんど含まないものもみられる。

本群土器は、口頸部文様帯が非常に狭いもので、単純な円筒形をなす器形という特徴があり、さらには、口頸部文様・胴部文様にも斉一性を窺うことができる。このような斉一性の強い本群土器を次のように細分した。なお、本群以降の各土器群についての記述は、該当資料が豊富であることから、破片資料を使わず復原土器を対象として進めることとする。

また、本群土器は、遺構内出土のものも多いため、これまでの記述とは違い各項目別に記述をすることとする。

#### (分類)

1類 口頸部の文様が押圧手法により、文様帯が幅狭く外反しない類(50・51・52・第26図21～25・第33図40・41・第35図48～51・第54図62)

2類 器高が20cm以下の小型の類(53・第33図42・第54図63)

(器形) 1類は、文字通り円筒形を呈し、土器の断面で言えば、底部から口縁まで直線状に立ち上がりを呈するもので、2類は、分類基準が1類と直接の因果関係にない器高の面で分けただため、1類及び53のようなラッパ形のものも含む。

(口縁) 1・2類ともすべて平口縁である。

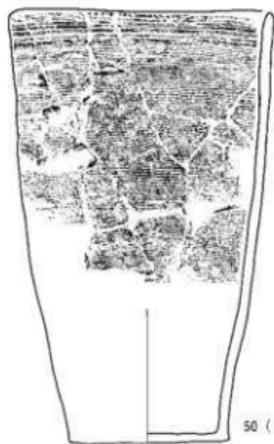
(口唇部) 口唇部上面は、大半が素文であるが、希に縄文のみられるもの(51)もある。

(口頸部文様帯) 器高に関係なくすべて3cm以下の狭い幅となっている。胴部との境を区画する隆帯を有するものはないが境を表現するため、つまみ出しによる高さ3mmもない微隆起を有するものが約半数あり、1・2類に共通してみられる。

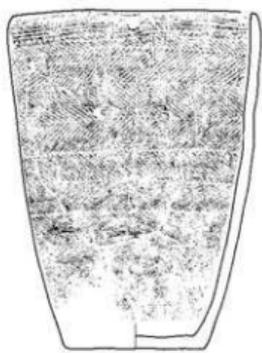
(口頸部文様) 原体の回転手法によるものは1例を除き(第26図21 3段の綾絡回転)まったくみられず、他はすべて押圧が刺突による手法で文様を施している。押圧は、ほとんどが押圧縄文でわずかに結条体圧痕文(第33図41)のものもみられる。

文様は、幅が狭いため、大半が平行線であるが、斜位・鋸歯状のものもみられる。刺突は、細い断面が丸い棒状工具によるもので、大半が斜位方向から突き刺している。従って刺突文は比較的横長に表出される。また刺突文は微隆起線上に施されるのが通例である。

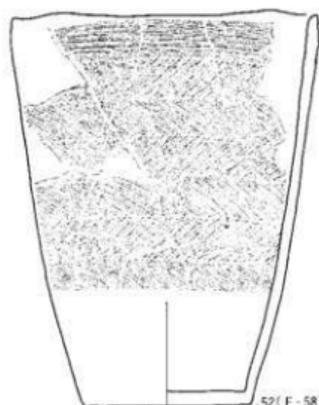
(胴部文様) 胴部に施されている文様は、強い斉一性があり、多輪結条体を施した50の例以外は、すべて縦位の木目状捺糸文か横位多段の羽状縄文である。本遺跡に限って言えば、胴部文様に丁寧にかつきめ細かな原体で施された木目状捺糸文が羽状縄文の破片は、下層d1式であると推定できると言っても過言ではない程である(下層c式及び下層d2式等の羽状縄文とは様相を異にする)。



50 (J-53)



51 (I-43)



52 (F-58)



53 (G-56)



第70図 遺構外出土土器(6) (円筒下層d1式土器50~53)

しかも、この二つの原体による文様は、計算された如く丁寧にかつ面の凹凸がなく施文されている。他の型式の土器の胴部ではみられない施文である。

(底部) 分類に関係なく、底部は前述のごとく底辺部の曲り角に特徴がある。従って当然の如く底辺部の張り出しはみられない。また底部の上げ底もまったくみられない。

(胎土) 前述のとおり、多量ではないにしろ植物性繊維の混入がみられるものとそうでないものとあるが、特にこの有無は分類とは関係ないようである。胎土に砂粒を含んでいることは、本類も変らない現象である。

(焼成) 不良のものはほとんどみられず、10%に近いものが堅緻に焼成されており、この点も本群の特徴である。

なお、先の下層c式土器の項でも述べたが、49号土壌出土の2個の土器は、一応本群の1類に属するものとして扱った。

#### 円筒下層d<sub>2</sub>式土器 (第71図54-58)

本遺跡において出土した土器の中で、従来一般的に円筒下層d<sub>2</sub>式として型式分類されている土器群に属すると考えられるものは、非常に少なく、以下に述べる11個体については、(出土土器を無理矢理に既円筒土器各型式に当てはめようとするつもりは毛頭ないが)強いて、分類するとすれば下層d<sub>2</sub>式として把えても差し支えないと判断した土器である。結論から先に述べるが、下記の細分した中の1類は、前型式の下層d<sub>1</sub>式により近似した土器群であり、第3類は、次型式の上層a<sub>1</sub>式土器に近似した土器群とみることができる。また、3類土器と次の円筒上層a<sub>1</sub>式で述べる土器群は、江坂氏が『... 従来の円筒土器上層a<sub>1</sub>式より古形式で前期末のd<sub>2</sub>式と従来の上層a<sub>1</sub>式との間をうめる時期の形式』と述べているとおり、文様の引けない連続性を強く窺うことのできるもので、本遺跡においては、3類とした土器群は、上層a<sub>1</sub>式土器群とした範疇で把えることも可能であり、とりあえず下層d<sub>2</sub>式としたに過ぎない。

本群に属する土器は、復原土器でみると17号土壌出土の第25図15、28号a土壌出土の第27・28図26-29、28号b土壌出土の第33図43と遺構外出土(54-58)のもの11個体であり、遺構外出土の土器の出土地点は、限定された範囲ではなく広範囲にわたって分散している。また、それらの出土層位は、Ⅲ<sub>b</sub>層最上面である。

本群土器は、前述のとおり、本群土器の前後型式土器の様々な要素の変遷過程を重視し、次のように細分した。

- 1類 口頸部文様帯の幅が比較的狭く、外反の度合いの弱い類(54-57)
- 2類 1類より口頸部文様帯が幅広くなり、波状口縁の類(58)
- 3類 幅広い口頸部が外反し、波状口縁の類(第27・28図26-28、第33図43)
- 4類 文様構成の単純な類(第25図15・第28図29)

1 類とした54-57の4個は、口頸部文様帯の狭幅、口頸部の押圧による平行文様構成、胴部文様等から一見すれば前型式の下層d<sub>1</sub>式とも受け取ることができそうでもあるが、1) 器形が前型式が円筒形そのものであったのに対し、多少変化し、円筒形から深鉢形に移行しつつある形状を呈していること、2) 口縁が小波状口縁となること、3) 口頸部の4箇所に文様帯を区画するが如く縦位の粘土紐貼り付けによる隆帯が出現すること(55・56)、4) 口頸部が、多少なりとも外反の兆しをみせていること等の諸点から、上述のとおり下層d<sub>2</sub>式土器とすることにした。ただし、下層d<sub>2</sub>式の流れの中にあつては、この4点の土器は、前型式の下層d<sub>1</sub>式に極めて近い下層d<sub>2</sub>式土器の古手とみることができ、従来の一般的に扱われている下層d<sub>2</sub>式土器の祖形と考えられる。

その祖形的要素とは、口頸部にみられる縦位の貼り付け隆帯文、ゆるやかではあるが4個の波状突起に代表されよう。

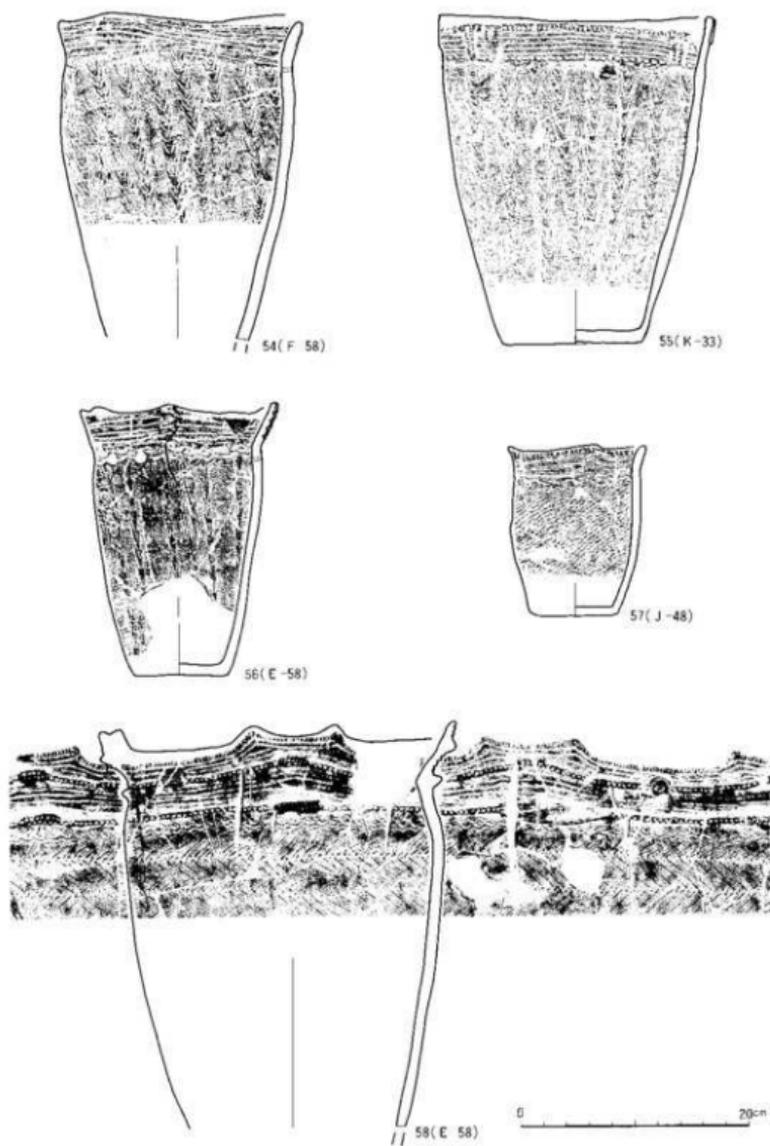
2 類とした58は、本群に含まれた土器の中では比較的従来の下層d<sub>2</sub>式土器の典型に近い土器である。

器形は、頸部でくびれ、そこから口縁に向い外反する口頸部を有する、円筒形に近い深鉢形を呈する。口縁は、弁状突起の萌芽的とも思える横に長い突起が4箇所つけられている波状口縁である。口頸部と胴部との境と頸部中位に各々1条の横位貼り付け隆帯(形骸的なもの)を巡らし、隆帯上に円形刺突文が連続して施されている。口頸部文様は、口縁と平行に複数の押圧縄文により施されている。胴部は、横位多段に羽状縄文が丁寧に施されている。器内面は、化粧粘土を貼り、丁寧に研磨され光沢がみられる。胎土には植物性繊維の混入がみられない。

3 類とした土器は、遺構外から出土した土器にはみられず、4個とも遺構内からの出土である。

なお、この4個のうちの2個を出土した28号a土壌からは、下層d<sub>1</sub>式及び上層a<sub>1</sub>式の各土器が混在して出土しており、この点からも、幾度か述べているように、下層d<sub>1</sub>式から上層a<sub>1</sub>式土器へのスムーズな時代移行を窺うことができる。

さて、3類とした4個がまず1類と違う点は、1) 円筒形に近い深鉢形から深鉢形になったことで、第28図27のごとく肩部に張りをも有する特異なものもある。2) 口頸部が極端ではないにしろ外反の度合いを次第に強めてくること、3) その口頸部文様帯が幅広くなること、4) 口縁が明確に4個の突起による波状を呈すること、5) 胴部文様に羽状縄文や木目状撚糸文を使用せず、斜行縄文で施文することで、縦位の綾結文が出現すること、などの諸点をあげることができ、逆に、1類と共通している点は、1) 口頸部文様帯に通常4箇所縦位の粘土紐貼り付け隆帯がみられること。なお、この隆帯は、第27・28・33図26・28・43のように直線的な懸垂状のものと、第28図27のように逆「ノ」字状のものがみられる。ただし、この4箇所の隆



第71圖 這構外出土土器7) (円筒下層d2式土器 54~58)

帯は、4個とも4波状口縁の各波頂部の直下に垂下せず、波頂部と波頂部の中間位置に貼り付けられているという特徴があり、このような波状口縁でありながら波頂部以外の位置に隆帯が貼り付けられる例は本類だけのようである。2)口頸部に施文される文様が押圧縄文による平行・三角(鋸歯状・菱形状)を基調とした幾何学文様であること。ただし、28・43には、次の上層a1式土器に多用される長さ2~3cm程の通常縦位方向に施文される押圧手法による横位に連続した押圧縄文(江坂氏の捺糸短線の圧縄文、村越氏の捺糸短線圧痕文と表現した文様)が部分的に施されている。3)少量ながらも胎土に植物性繊維の混入がみられること。などの諸点をあげることができる。なお、底部の張り出し・上げ底については、1~3類とも共通してみられない。

第28図27の器形は、恐らく大木式土器(大木6式)の影響によるものであろう。

4類とした土器は、器表面に地文以外の装飾がないもの(第25図15)や無文のもの(第28図29)など、単純な文様構成のもの、器形に特異性のあるものを一括した。本類は、確たる根拠には欠けるが、種々の要素を考慮し、恐らく本群の範疇に含めてよいものと思われる。

#### 円筒上層a1式土器 (第72図59・60)

本群土器の分類基準は、江坂輝弥氏が『石神遺跡』の中で円筒土器各型式を分類した際の『前期末のd2式と従来の上層a2式との間をうめる時期の形式』として設定した円筒土器上層a1式土器の基準に準拠している。すなわち本遺跡の土器に関して言えば、先の下層d2式3類から上層a2式に至る所謂過渡期的要素の土器を本群土器の対象とした。従って、前述の下層d2式3類と分類したものは、本群の範疇に含めることも可能であるといえ、また、逆に以下の分類の1類としたものを下層d2式3類として扱えることも可能であろう。しかし、現時点では、1遺跡内での分類作業であるため、以下に述べる諸点からつぎの土器を円筒上層a1式土器と分類したが将来変更される余地は十分にあるものと思う。

本群に属する土器は、遺構内出土のものが多く逆に遺構外出土のものが少ない。復原土器では、遺構外から2個(59・60)15号土壇から2個28号a・b土壇から5個まとまって出土し計19個体であり破片資料は数量が少ない。2個のみであるが若干の破片資料も含めて、その出土層位をみると、下層d1及びd2式土器さらには上層a2式土器とも混在しIIIb層最上面から出土している。

本群土器の分類基準として、1)下層d2式土器の3類とした中にみられた、口頸部の連続縦位短線圧痕文の存在と、2)口頸部の4箇所に貼り付けられた懸垂状の隆帯文と、口頸部と胴部の境に一巡する横位の隆帯との関連と、3)4個の波状突起の3点を重視した。その結果、本群土器を次のように細分した。

#### 1類 平口縁で、口頸部の外反する度合いが弱く、隆帯のみられない類(59)

- 2類 波状口縁で口頸部の外反する度合いが弱く、口頸部の4箇所に懸垂状隆帯をもつ類（第23図8・第25図20・第29図30・第34図44）
- 3類 平口縁で、口頸部の外反する度合いが弱く、口頸部に懸垂状隆帯と胴部との境に一巡する隆帯をもつ類（60）
- 4類 波状口縁で口頸部の外反する度合いが強く、口頸部と胴部の境に一巡する隆帯をめぐらし明確な口頸部文様帯を構成させる類（第22図5・6・第25図19・第29図31・第34図46・第36図52）
- 5類 ラッパ状の器形を呈し、地文の縄文が主文様の類（第23図9・第30図32・第54図61・第7図1）
- 6類 地文縄文が主文様で本群土器の粗製の土器（第24図13・第36図53・55）

本群土器は、以上のように六つに分類したが、本群土器を考える上で重要なポイントは、多量の遺物を出土した28-特にa号土壌における出土状況であろう。

28号土壌は、aとbの2基から成っているが、堆積土や出土土器の点から、ほぼ同時存在の可能性が非常に高く、かつ、土壌使用終了と共に捨て場として穴を利用したものと考えられる。

そして、この2基の土壌からは膨大な量の土器が出土し、その半数以上を本群土器が占め、残りは、すべて下層d1式とd2式土器である。上層a2式土器以降の土器片は、堆積土最上位層で少量出土したにすぎない。a・b両土壌ともに、底面及び堆積土下位層から下層d式と本群土器が混在して出土した。両土壌が確実に捨て場として利用されたという前提に立ち、下層d1式・下層d2式・上層a1式土器が年代推移を示すものとすれば、両土壌を捨て場として利用し始めたのが下層d1式で土壌が埋りきったのが上層a1式（しいて言えば3類）土器期ということになる。

このような28号a・b土壌内における土器の出土状況は、本群土器の各類の同時存在か、少なくとも長期間に亘るものではないことを物語るものである。

なお、5類に分類した第23図9の土器は、15号土壌底面において、2類に分類した第23図8の土器と互いに口縁を合わせた横位の状態で、かつ安置した如く底面の端に壁と胴部面が接するような状態で出土したものであり、明らかに8の土器と共伴する土器であり、この9と近似する形状の土器が1号竪穴住居跡及び28号a土壌からも出土していたので、これらを本群土器と判断し類を設けたのである。

さて、本群土器についてその特徴を次に述べてみる（6類については文末で記述）。

（器形） 1類及び3類の2個の土器は、下層d2式1類に近似した口頸部の外反がほとんどみられない程度のもので、円筒形を呈する。2類になると、1類よりは外反するものそれでも「く」の字状を呈するような強い外反ではない。4類になると、口頸部と胴部の境に隆帯を貼

り巡らすためか外反の度合いが強くなる。5類は、小さな底部から大きな口縁に向かいラッパ状を呈するような器形が多く、特異な土器として見なす方が妥当であろう。

(口縁) 1・3・5類は平口縁で、2・4類が波状口縁である。2類の波状口縁は、4箇所突起であるが、ほとんどが、ゆるやかな曲線をなす山頂部がわずかな平坦面の山形状突起(第29・34図30・44)と、口頸部に縦位に貼り付けた粘土紐を口唇部上面までまくり上げた結果としての突起(第23図8)とがみられる。両者とも、突起に関しては、単に口縁上を4箇所高く作り上げた程度のもので特別に装飾は加えていない。ところが4類になると、4箇所の波状部は、単なる突起としてではなく、大き目の山形状の突起部を二分させたもの(第29図31)や、波頂部を極端に膨降させ、あたかも上から見ても装飾性を与えられるようにとの意図からであろうか、波頂部上面及び土器内側面を丁寧にナデて平坦面を作り出しているもの(第22図6)等、突起部に装飾を加える特徴がみられる。

(口唇部) 類に関係なく口唇部の上面は、比較的ナデによる整形を施し、丸味をもつものやや平坦気味に作られている。また、口唇部は、全般に肥厚した作りで、これも類に関係なく、口唇部外面に横位に縄文が連続して圧痕され、コイル状(江坂 1970)を呈する文様を施している。

(口頸部文様) 5類を除く各類に関係なく本群土器の特徴の一つでもある連続縦位短線圧痕文が主文様となっており、この文様は、口頸部と平行に施された複数の押し縄文間に施されている。

第22図6の土器だけは、横位の複数の綾絡文が口頸部の主文様となっている。また、第36図52の文様は、識別しにくい、部分的に平行押し縄文だけを施し、一部分にのみ上述の文様を施している特異なものである。口頸部に貼り付けられた隆帯面上にもこの手法による文様がやはり縦位方向に施されている。なお、第30図32の土器の文様は、横位の1条による波状文である。

(隆帯) 1類は隆帯がまったくみられず、下層d式に近似している。2類の特徴は、3・4類と比較すれば明白なことであるが、波頂部から懸垂状に垂下させた粘土紐貼り付けによる隆帯が通常4箇所みられるだけで、口頸部と胴部との境を区画するような横位に一巡する隆帯がみられないことが特徴である。懸垂状の隆帯は、直線状のものと逆「ノ」字状の2種類がみられる。なお第34図45の土器にみられる逆「ノ」字状の下方部が頸部付近で横走するものがあり、この横走が変化して口頸部と胴部の境を区画する横位の隆帯が生まれたのではないかと推察することができる。第29図31の隆帯は、「ノ」字と逆「ノ」字を相対させたもので、これも逆「ノ」字状から変化したものであろう。第25図20の土器は、波頂部に逆「ノ」字状の隆帯のみを装飾しただけのものである。

なお、第30図32の土器にみられる隆帯は、器面をつまみ出したものである。

(胴部文様) 各類とも縄文による施文であり、絡糸体回転文は、まったくみられない。縄文は、60・第29・34図31・44が羽状縄文で他はすべて斜行縄文であり、斜行縄文の施されたものは、大半がその上から縦位に波頂部のライン上に綾絡文が施されており、その数は通常4つの波状口縁のため4本であるが第23図8の如く9本も施されている例もある。比較上言えば、羽状縄文は、1・2類の方に多くみられることになる。

(底部) 底辺部の張り出し及び上げ底の手法は、下層d式土器期で完全に廃れてしまったと思われる。本群土器にはまったくみられない。

(胎土) 2・3類の一部にごく少量の植物性繊維の混入がみられるが、残りのすべての土器には植物性繊維の混入はみられない。ただ胎土には砂粒がある程度混入していることは前土器群から継続してみられる現象であり、本遺跡の土器(索地)の特徴であると思われる。土器内面には、化粧粘土を上塗りし光沢のあるものがほとんどである。

(焼成) 全般に堅緻な作りとなっており、特に4類が良好である。

以上、6類を除く各類を各項目別に記述してきたが、文様面のみならば、1類・2類・4の順に時期の変遷を把握することができそうであり、また、4類から次の円筒上層a<sub>2</sub>式土器へもスムーズに移移していくことが容易に推察できると思われる。

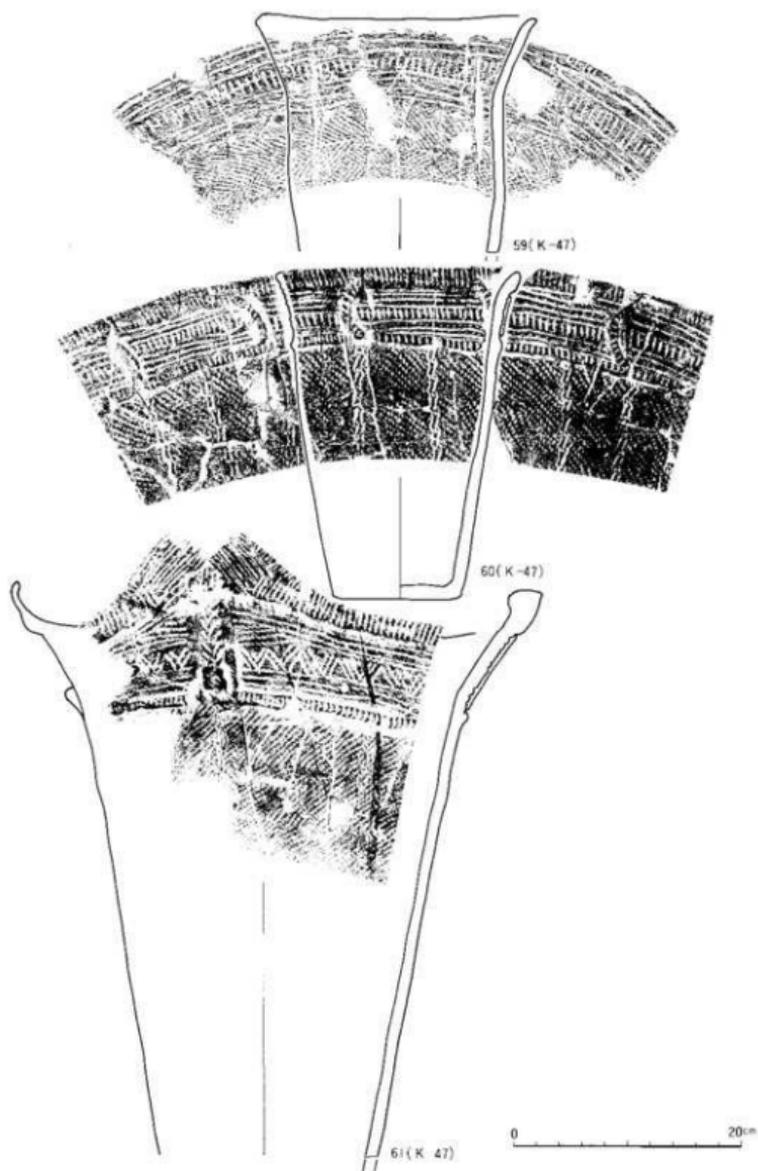
なお、18号土壌出土の第22図5及び28号土壌出土の第34図46の土器は、口頸部が欠損しており定かではないが、現存部から推察し本群4類に含めることができるものと思われる。

さて、以上の他に前述のとおり6類について最後に述べることにする。本類に該当する土器は、3個体あり、本類としたものは、器面に地文縄文のみが施されただけのものを一括した。

口縁は、平縁のもの(第24図13)と波状口縁のもの(第36図53・55)とがある。口頸部文様帯の構成以外の1～5類について記述してきた各項目に関しては、ほとんどで1～4類に共通しており、特に、波状口縁の場合の波頂部の作り、さらには口唇部の膨隆の点から、6類に含めた土器を本群土器の範疇で把握することにし、これらの土器を本群土器期における粗製の土器と考えることにした。5類とともに本群土器は、本群土器の中にあっては異質な存在であるが、換言すれば、器形の分化がより進んだということ意味するものでもあろう。

円筒上層a<sub>2</sub>式土器 (第72～74図61～65)

本群に属する土器分類基準は、江坂・村越両氏の設定された上層a<sub>2</sub>式土器にほぼ比定できるものである。本群土器は、上層a<sub>1</sub>式及び同b式土器との区別の目安として、口頸部に押圧手法により施文された鋸歯状文・菱形状文・「く」字状文を口頸部文様のメルクマールとして把握、さらに、波状口縁における突起部の作りや胴部文様に留意し、それらの特徴を具備するものとした。



第72図 遺構外出土土器8) (円筒上層 a1式土器 59・60)  
上層 a2式土器 61)

本群土器も上層 a 式土器と同様、比較的遺構外からの出土はそれ程多くなく、遺構内出土のものとの数量的にほぼ 2 分している。なお、復原土器は総数で 11 個体である。また、遺構外出土土器の出土地点は、K-47・J-48 の 2 グリッドという極めて限定された範囲であり、破片もこの付近からだけ出土していて、それらの出土層位は、Ⅲ<sub>b</sub>層最上面のものもあるがⅢ<sub>a</sub>層のものが多い。

本群土器は、上記の諸点により、次のように細分した。

- 1 類 隆帯で区画された口頸部が押圧手法による菱形状文・鋸歯状文・平行線文の組み合わせによって文様を構成している類 (61・62・第30図33・第37図54)
- 2 類 隆帯で区画された口頸部が押圧手法による鋸歯状文を主文様として文様を構成している類 (63・64・第24図10)
- 3 類 隆帯で区画された口頸部が押圧手法による連続短線「く」字状文を主文様として文様を構成している類 (65・第31図34)
- 4 類 口頸部と胴部の境の隆帯がなく、押圧手法による平行線文と爪形文の組み合わせによって文様を構成している類 (第25図18・第34図45)

本群土器の特徴を各項目ごとに述べていく。

(器形) 全体の器形は、上層 a 式土器に近似し口径と底径の差が大きく、円筒形を基調とはしているがより深鉢形に近い。また、62のように器高が60cmほどの大型の土器もみられる。口頸部は、全体に外反の度合いが強いものがほとんどである。なかには、63・第25図18のように若干胴が膨らむ器形のものもみられるが数的には少ない。

(口縁) 平口縁のものは、ほとんどみられず、すべて大小の差はあるものの波状口縁である。

波状の突起は、通例 4 箇所である。突起部についてみると、1 類は、さらに二つに分けることができる。一つは、第30図33・第37図54にみられるように突起が山状をなし、僅かにその頂部を肉厚にしてその上面に押圧縄文を施したもので、これは上層 a 式土器に一般にみられる突起である。

もう一つは、61・62にみられるような、突起自体を極端に肉厚に作り、かつ二又状にし、その頂部を土器の内側まで捲れるようにし、そこにやはり押圧による縄文を施した派手な装飾性に富む突起である。この後者のような突起は、2 類にもみられる (64) (この種の突起を以下、「二又状山形突起」と称することにする)。2 類では、この他に、第24図10のような上層 b 式に多くみられる花弁状 (扇状) を呈する突起もみられる。3 類では、突起頂部を平坦に作り出したもの (第31図34) もみられる。このような特異な形で装飾性豊かな突起は、本群土器の前後型式の土器にはみられず、本群の特徴の一つともなり得る程である。このような誇張した肉厚の 4 個の突起が口縁にあるため、本群土器の中には、土器を立てて上方から見た場合、通常は

口縁円周が円を描くのに対し、4個の突起を角にした曲線的ではあるものの略方形を呈するものがある(61・62・64・65)

(口唇部) 類に関係なく、口唇部は、肉厚に作られ、その上面は、平坦にナデの整形を施しているものが多い。また、口唇部外面には、ほとんどのものにコイル状を呈する短い縦位の連続した押圧手法による縄文が施されている。これは上層a式土器にもまた、上層b式土器にもみられる文様である。

(口頸部文様) 隆帯に囲まれた口頸部文様帯には、各類に共通して押圧縄文による文様が施されている。1類は、複数の横位平行押圧縄文間に押圧縄文による連続鋸歯状文を充填させた2種の文様の組み合わせによって文様構成をしているが、2類になると、平行押圧縄文はみられるものの、押圧縄文による連続した鋸歯状文・波状文が1単位を大きくして主文様となっている。3類は、1類と似ており、これも横位平行押圧縄文間に、押圧縄文による横位の連続「く」字状文を施した文様の構成となっている。4類は、本群に含めるべきかどうか疑問の多いところであったが、横位の平行押圧縄文と、指先に縄を絡めて押圧したと考えられる爪形状を呈する横位の連続した圧痕文(以下、この文様を「爪形圧痕文」と称する)の2種の文様のみられるものである。

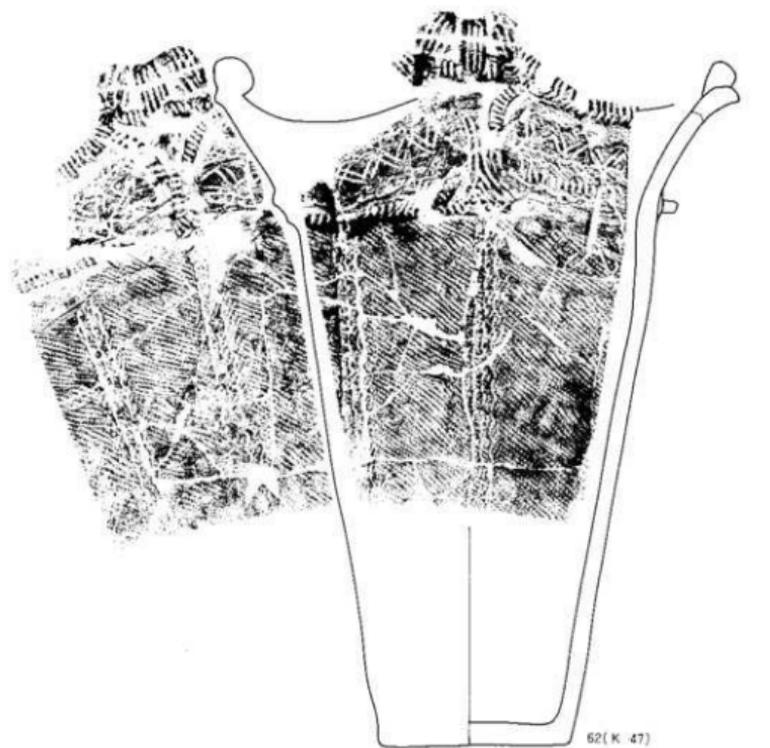
(隆帯) 4類以外は、すべての土器に胴部と口頸部の境を区画する横位の隆帯が1条巡っており、これも4類の第25図18以外のすべての土器には、波状部の突起下に口頸部を区画する懸垂状の隆帯が貼り付けられている。この縦位の隆帯は、通常4波状口縁に合わせて4箇所みられるが、なかには第30図33のように8箇所のものもある。このようなものはむしろ例外的なものである。また、貼り付けられた隆帯は、上層a式で多くみられた逆「ノ」字状、2本平行させた直線状、「X」字状、「八」字状など多種にわたっている。なお、逆「ノ」字状は、1類以降みられなくなる。

(胴部文様) 1類は、斜行縄文を地文とし、その上に4～8本の縦位の綾絡文が施文されている。2類は、1類と同じ(63)、縦位羽状縄文(第24図10)、多段の横位羽状縄文(64)であり、3類は、羽状縄文が施されている。4類は、第25図18が同一燃りの羽状縄文を横位に多段に施し、第34図45は縄文を多方向に雑に施し頸部に1条の横位の綾絡文を施している。

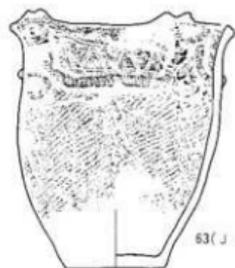
胴部文様は、以上のように斜行縄文と綾絡文の組み合わせのものと、羽状縄文のもの二つに大別することができ、次の上層b式土器に羽状縄文が多用されることを考えれば、4類を別としても1類から3類への推移を推察することが可能である。

(底部) 上層a式土器の項でも述べたとおり、円筒上層式以後の土器に関しては、底辺部の張り出しや底部の上げ底はまったく認められないため、以下は記述を省略する。

(胎土) 胎土には植物性繊維の混入はみられず、下層式土器と比較し砂粒の混入も少ない。



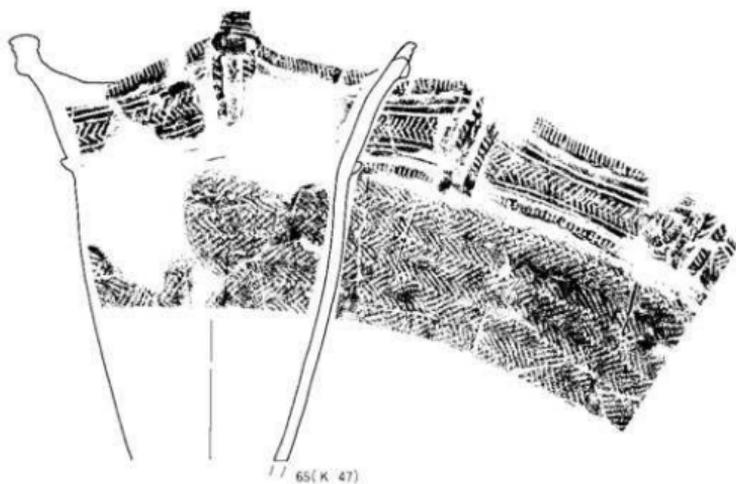
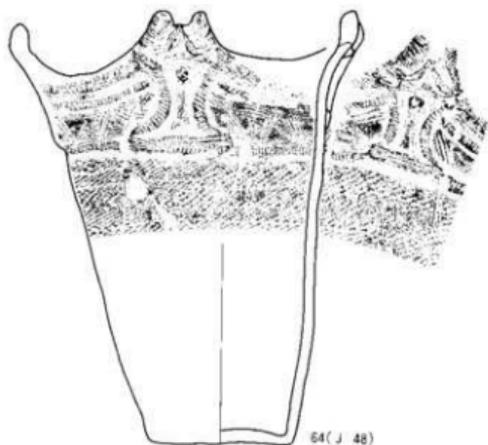
62(K 47)



63(J 48)

0 20cm

第73図 遺構外出土土器⑨ (円筒上層a<sub>2</sub>式土器 62・63)



0 20cm

第74図 遺構外出土土器]⑩(円筒上層a2式土器 64・65)

器内面には化粧粘土を貼り丁寧に整形を施している。

(焼成) 全般に堅緻に作られている。第31図34は、他の土器と素地・焼成に違いを認めることができ、良好な優品である。

以上、本群土器について細分を試み、各項目ごとに記述してきたが、1類は、より上層a1式土器に近似し、2類は、従来の典型的な円筒上層a2式土器と考えられ、3類は、類例が少ないため疑問も残るが、少なくとも1類より時代的に新しく位置づけることができそうである。また、4類に関しては、前述のとおり本群に含めるべきか否か疑問の多い土器であるが、ここでは、一応爪形圧痕文の存在を重視し、本群のなかのより上層b式土器に近似するものとして扱えることにした。

#### 円筒上層b式土器 (第75・76図66～72)

本群に属する土器は、江坂・村越両氏の設定した(江坂 1970、村越 1974)円筒上層b式土器とほとんど変わるところのないものである。本群土器期になって、青森県内における地域性の特徴が薄れ、文様構成等に画一性が出てきたためであろうか。江坂・村越両氏が該土器設定にあたり資料とした津軽地域に属する石神遺跡出土の土器と栗南地域に属する本遺跡出土のそれとは、そこに両地域の差を見い出すことが困難なくらいである。

このような円筒上層b式とした土器は、口頸部文様帯の中にみられる爪形圧痕文の存在を分類基準の大きなポイントとして捉えることにした。この爪形圧痕文が前土器群とした円筒上層a1及びa2式土器にみられた押圧手法による縦位の連続短線状圧痕文から変化し、さらには上層a2式土器3類にみられる同様の「く」字状の圧痕文と多いに関連があると考えたからである。

本群に属する土器は、土器の数量は少なく、復原土器でみても遺構外出土のものが7個体、遺構内出土のもの(16号土壇内出土)が2個体(第24図11・12)の計9個体のみであり、破片資料も数が少ない。

遺構外出土のものは、K-47グリッド付近のわずか4グリッド分の狭い範囲に限定されている。出土層位は、上層a式及び次の上層c・d式と混在してⅢa層からである。

本群土器は、9個体という少量であることと、その中における細区分できうる要因が見当たらない比較的斉一性の強い土器群のため細分類はせず、大きくb式として捉えることにした。ただし、70の土器については上層c式土器に属するかもしれない。

(器形) 上層a2式では、比較的口縁が上方に大きく開く深鉢形であったのに対し、本群になると、一変して、また円筒形に近い器形となる。ただし、下層式土器にみられたような円筒形は、胴の膨らみがほとんどない、通俗的表現で言えば寸胴なタイプであったが、本群の土器は同じ円筒形と言っても、胴に若干の膨らみがあり、比較的胴下半部から底辺部に向かって若干のすぼまりをみせているタイプであり、この言葉では表現しづらい胴下半部のすぼまり方は、口

頸部を欠損した胴部から底辺部にかけての半完形土器の時期決定の際に有力な手掛かりの一つになり得るものと考えている（勿論、この時期決定というのは、円筒土器各型式という細かなものではない）。また、本群土器が比較的円筒形に近い器形となる要因の一つに、上層 a 式にみられたと同じような大型を呈する突起が、上層 a 式土器では強い外反を呈するのに対し本群の場合には、外反の度合いが弱いという点を挙げることができる。

本群土器は、9 個体のみであり的を得ているか否かは定かでないが、円筒上層 a 式土器にみられたような大型の土器はみられない。

（口縁） すべて 4 箇所に突起をもつ口縁で、66 以外は波長の大きな波状口縁である。本群土器の口縁にみられる突起は、66・67 以外のものにみられるような山頂部が横位に平らになる花弁や王冠、さらには逆扇形のような独特の形状（以下、このような突起を「弁状突起」と称する）を呈するもので、66・67 のような突起（山形状等）は、上層 a 式土器にみられるもので本群土器の中では、希な存在と思われる。この弁状突起は、一部上層 a<sub>2</sub> 式土器にも認められるが、多用されるのは、本群土器期から以降であると考えられ、上層 a 式土器と上層 b 式土器の相違点でもある。そうした意味からすれば、66・67 の 2 個の土器は上層 a<sub>2</sub> 式土器に近い土器とみることができる。

前述の如く、この弁状突起は、多少外反はするものの上層 a 式の程ではない。

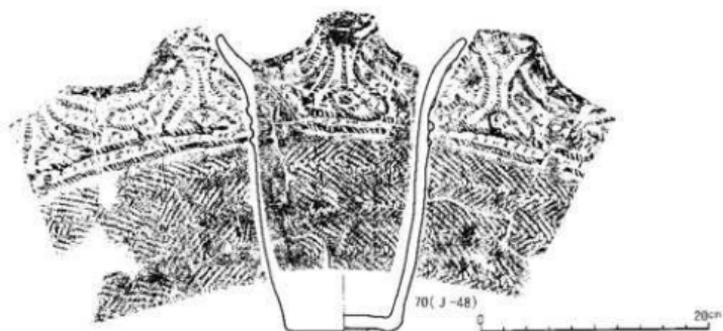
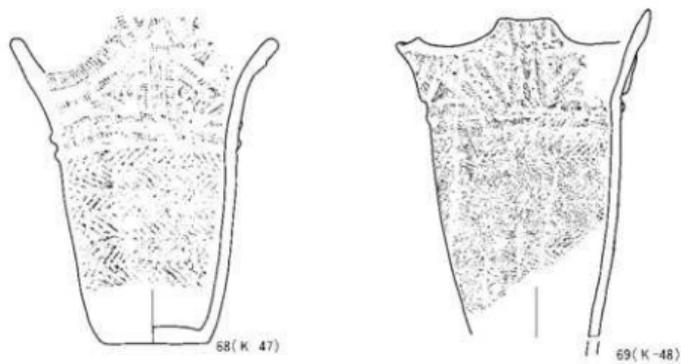
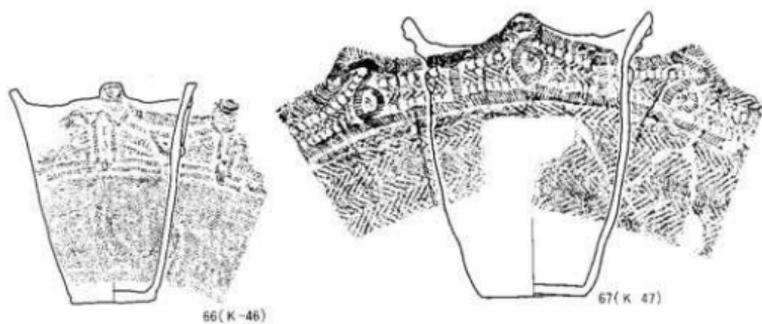
（口唇部） すべて口唇部は肉厚に作られているがその肥厚は上層 a 式程ではない。口唇部上面は、上層 a 式でみられた平坦にする手法は認められなくなるが、口唇部外面に押圧縄文によりコイル状の連続した縦位の短線圧痕文が施されるのは上層 a 式と同様継続してみられる。

（口頸部文様） 隆帯に区画された口頸部文様は、押圧縄文による爪形圧痕文が主文様となっており、この横位・縦位に連続文様として施文される爪形文と隆帯との間に押圧縄文による平行線文が副次的装飾として施文されている。前述のとおり、文様からみた場合、爪形圧痕文は、本群土器のメルクマールとなり得る。70 には、爪形圧痕文の他に刺突文も併用され 71・72 は刺突文が施されており、次の上層 c 式土器に近い土器である。

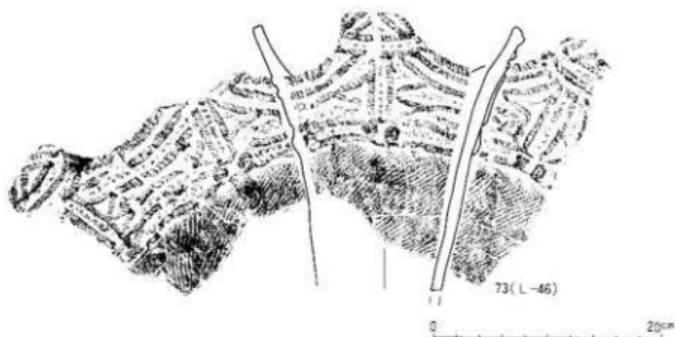
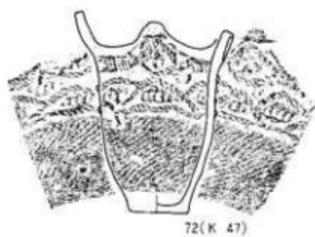
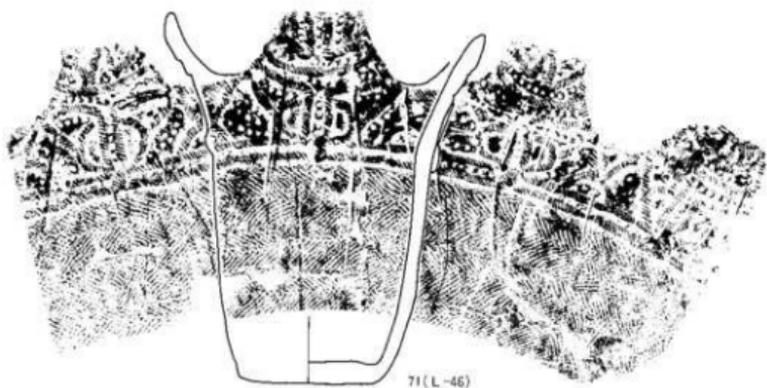
なお、口頸部文様帯の幅は、器高の 3 分の 1 をこえるものはない。

（隆帯） すべて胴部と口頸部を区画する横位の隆帯が 1 - 2 条頸部に巡らされ、4 波頂直下に懸垂状の隆帯が貼り付けられている。この口頸部の縦位の隆帯は、一応 4 波頂部直下の 4 箇所を基本としているが、68 - 70 のように、4 箇所の間をさらに横・斜位の直線状の隆帯で連結させる構成をもつものがある。この隆帯による文様構成の面からみた場合は、第 24 図 12・67 のような口頸部を 4 区画するだけの縦位の隆帯文様は、より上層 a<sub>2</sub> 式土器に近いもので、68 - 72 のような口頸部全面を隆帯で連結させる隆帯文様は、より上層 c 式土器に近いものであろう。

本群土器にみられる隆帯は、円筒下層式土器及び上層 a 式土器に認められるような、幅広く



第75図 遺構外出土土器1) (内面上層b式土器 66~70)



第76図 遺構外出土土器12 (内開上層b式土器 71-72)  
上層c式土器 73

太いものではなく、幅が1cm以下で器面からの高さも5mm程度あるいはそれ以下のいわば繊細なものである。この幅狭い隆帯面上には、例外なく、口唇部上面にみられたと同じ連続した押圧縄文が施されている。

(胴部文様) すべてが羽状縄文を横位に底辺部まで多段に施文しており、本群土器の胴部に関する特徴であろうか。ただ、施文された結果表出した文様は、下層d式土器にみられた整然とした繊細なものとは違い粗雑な施文という印象を受ける。原体は、0段多条の同一撚りの羽状にならないもの(第24図12)もみられる。

(その他) 本群土器は、その内面がそれ程丁寧な研磨はなされておらず、また器内外面に炭化物の付着がみられ、器外面の胴下半部は火熱により赤変し、器面の脆くなったものがほとんどであり、実用的かつ使用頻度の高かったことを物語っている。

以上、本群土器は、一括してその特徴を述べてきたが、前述のとおり、本群土器は、斉一性の強い土器群として捉えることができそうであり、しいて時間差を見い出すとすれば、より上層a2式土器期に近い66・67・第24図11・12と、より上層c式土器期に近い70・72とに分けることができるかもしれない。

#### 円筒上層c式土器 (第76-82図73-95)

円筒土器各型式群のなかにおいて、上層c式土器及び次の上層d式土器と従来型式設定されている土器群については、各々の分類基準及び前後型式土器との相違点に関し、あいまいな点が多く、上層b式から上層d式に至る間の既設定型式名使用に際し、混乱をきたしているのが実情である。

本書では、出土個体数別にみると、所謂上記の円筒土器後半期のものが一番多いこともあり、上層b式及び上層d式土器との比較の上から次のような、円筒上層c式土器の分類基準を設定した。勿論、設定に際しては、『石神遺跡』における江坂氏、『円筒土器文化』における村越氏の見解に準拠していることは言うまでもない。

上層c式土器の特徴は、1)隆帯がみられ、それにより口頸部文様帯を区画するもの、2)その文様帯が幅広いこと、3)文様帯のなかは、隆帯文と刺突文の2種類がみられること、4)特に隆帯は、上層b式にみられたような口頸部を縦位に4区画するだけでなく、横位方向に隆帯自体が連結し文様を構成していること、5)口唇部上面に細い粘土紐貼り付けによる波状、鋸歯状の隆線文がみられること。の諸点であり、簡潔に表現すれば、上層c式土器は、口頸部文様を隆帯(隆線文)と刺突文とで構成しているものと解釈することとし、上述の特徴を具備している土器を上層c式土器として捉えることにした。

このような観点で本遺跡出土の土器を分類すると、本群に属する土器は、24個となる。

これらの土器は、36号土壇出土の1個(第53図58)を除く23個は、すべて遺構外からの出土

であり、その大半の出土地点は、44ラインから51ラインの範囲に集中し、かつその出土状況は、大半のものがその場で押し潰されたような状況で出土した。なお、中の平遺跡でみられたような土器の倒立・直立状態で出土した土器はほとんどみられない。23個の出土層位は、すべてⅢa層中からである。

本群に属する土器は、上記の諸特徴から次のように細分した。

- 1類 諸要素が上層b式に類似し、上層b式土器と上層c式土器の間を埋める移行過程と考えられる類(73-76)
- 2類 波状口縁で、口頸部文様帯が幅広く、隆帯間に刺突文が多用される類(77-83・第53図58)
- 3類 平口縁で、口頸部文様帯が幅広く、隆帯間に刺突文が多用される類(84-92)

以上の分類について、本群で1類に分類した土器は、2・3類に分類した基準とは視点を異にしているため、1類と2・3類に分けて記述していく。

(1類) 本類とした土器は、4個であり、分類基準に示したとおり、上層c式土器の中における時間差を重視して分類したもので、前述のとおり、上層b式土器及び上層c式-2・3類土器との両者の要素を含むもので、この両土器型式間の移行期にあたる土器と考えられる。従って移行期と考えるからには、1類を上層b式土器の仲間とも見なすこともできるであろうが、本書では、より上層c式土器に近い存在と考えたので、上層c式土器に含めた訳である。

73の土器は、4個の大きなやや外反する弁状突起を有し、口唇部が若干肥厚し、その外面にはコイル状に連続した縦位の押圧縄文が施されている。口頸部文様帯は、本群2・3類土器よりはやや狭い。これらの点は上層b式土器に類似している。口頸部文様帯は、縦横位に貼り付けられた隆帯とその間を埋める刺突文との組み合わせで文様が構成されている。隆帯は、細い粘土紐による貼り付けである。隆帯上面には、縄文がつけられている。4個の突起下に懸垂状にみられる隆帯と、口頸部と胴部を区画する横位の隆帯の接点に、直径1cm程のボタン状突起が2個一対で4箇所に貼り付けられている。胴部は、斜行縄文が施されている。これらの点は、本群2・3類土器に類似している。

74の土器は、これまでみられなかった、上層c式土器以降に多用される口唇部外面に貼り付けられた波状の隆帯(以下、この細い粘土紐を口唇部上面から口縁外面に波状あるいは鋸歯状に貼り付けた隆帯の文様を「波状(鋸歯状)隆線文」と称する)がみられることと、口頸部文様帯中に、これも細い粘土紐の貼り付けによる環状を呈する隆線文がみられることが大きな特徴である。この点は、本群2・3類土器に類似している。上層b式土器に類似する点は、口頸部の隆帯間にみられる刺突文と併用される爪形圧痕文(厳密に言えば、これも刺突文の一種であるが)の存在である。この点だけに関して言えば、上層b式土器に含めた第75図70の土器に

類似している。

なお、上層c式土器—特に2・3類—にみられる爪形の文様は、この74の土器にみられるような縄を使用するものではなく、人間の爪そのものによる刺突によるものがほとんどであり、上層b式土器で多用された爪形圧痕文と称する施文手法は、上層c式土器の中でこの74の土器だけにみられる。

換言すれば、上層b式までにみられた口頸部の隆帯間を埋める文様には、縄文原体が使用され（特に押圧）、上層c式になると、それが縄文原体を使わず、かわりに棒状工具を使う（特に刺突）ように変化する。

75・76の2個の土器は、諸要素が74の土器に類似しているが、口頸部文様帯の幅が器高の割りに狭く、また、特に75のように隆帯も若干太目のものであり、口頸部文様帯の幅を重視するならば（幅の広い口頸部文様帯が上層c式土器の特徴でもあるため）比較的上層b式土器に類似していると言える。

以上、1類とした4個について、その移行期を示すような要素について述べてきた。次に、2・3類をまとめ、上層b式までの記載の方法で述べることにする。

（器形） 2類とした土器は、全体として上層b式土器と似ており、胴部が若干膨らみを有し、胴下半部から底辺部にかけて多少のすぼまりを呈し、円筒形に近い深鉢形である。3類とした土器は、これまでみられない器形のもので、胴中央部が膨らみを有して口頸部で一度すぼまり、そこから口縁に向かって度合いが弱いが外反するという器形を呈している。なお、胴下半部から底辺部にかけては、2類のそれより強いすぼまりをみせている。3類とした土器は、器形の面だけで言えば円筒形と名付けるには程遠く、深鉢形である。この種の土器は、器としての使用面で他のものとは明瞭な区別があったのか、あるいは、大木式土器の影響によるものではなからうか。

（口縁） 2類とした波状を呈するものと、3類とした平縁のもの大きく2種類がみられる。2類とした波状口縁の土器は、上層b式土器にみられた弁状突起が若干形を小さくして4箇所に設けられている。しかし、上層b式のものと同類のものとの違いは、その外反の度合いにある。すなわち、上層b式においては、弁状突起が上外側に向かって大きな外反を呈しているのに対し、本類の弁状突起は、全体としては外反するものの、弁状の上位部分は、先端が上方を向くような、垂直に近い角度の立ち上がりを示していることに本類土器の弁状突起に関する特徴がある。また、80にみられるような上層a式土器に似たような弁状をなさず山形状の突起のものもみられる。このような突起のものは、突起上面を平坦にしたり、内面に向けて膨隆させたりする意匠がみられる。さらに、77の土器にみられるような、突起部に穿孔のみられるものが出現する。

(口唇部) 2・3類ともに口縁部は肉厚に作られているが、比較上からすれば、2類は、上層b式土器よりは若干薄く、3類は、上層b式土器のそれより、はるかに厚く作られている。

口唇部上面は、特に特徴はみられない。それは、口唇部上面から口縁外面にかけ、波状隆線文がすべての土器に例外なく施されているためである。前述のとおり、上層b式土器の口唇部にみられたコイル状の押圧縄文による連続した文様は、73の土器以外にはみられない。

この波状隆線文の存在は、上層d式土器にもみられるが、上層b式土器との区別には有効な材料となり得る。

(口頸部文様) 口頸部は、胴部との境を区画する横位の隆帯で囲まれた幅広い文様帯となっている。上層b式の一部の土器にみられたように、2・3類の土器は、その文様帯中に貼り付けられた隆帯が連続し横位に展開する文様となっており、その隆帯間には、先に述べた如く、すべて、爪先か、棒状工具あるいは、植物の茎等による刺突文が連続文様として施されている。なお、刺突する工具による相違と器形等他の要素との因果関係はないようである。

上層c式土器としての特徴は、主として、この口頸部に関する諸要素で占められていると思われる。

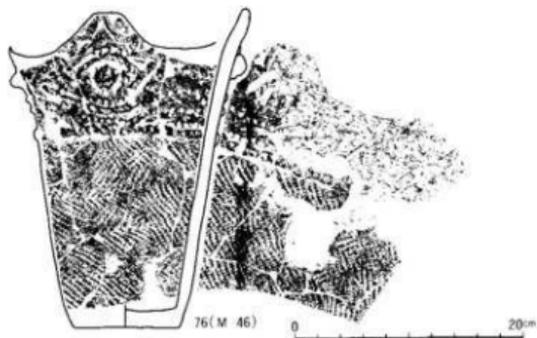
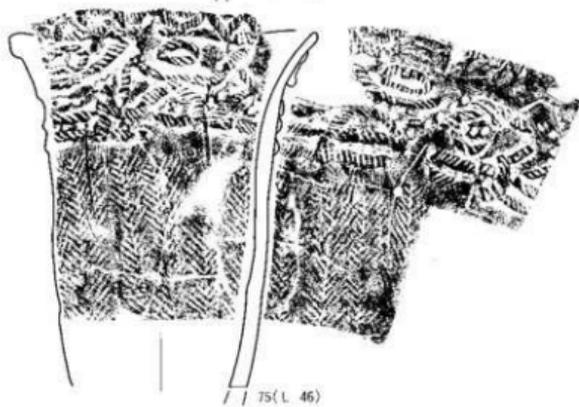
(隆帯) 隆帯に関する最大の特徴は、上層b式土器にその兆しが見えていたが、その太さにある。2・3類土器にみられる隆帯は、幅5mm前後で器面からの高さが5mm以下という、極めて細いもので、紐状を呈している。従って、このように細い紐状を呈する隆帯を、一部すでに使用してきたが、以降は、隆線と称することにする(村越 1974)。

口頸部文様帯が幅広く作られているため、胴部との区画する隆線の位置は、大半が器高の約2分の1の高さの位置にあるものが多く、中には、その位置がすでに胴中央部を越え胴下半部に達しているものもある。

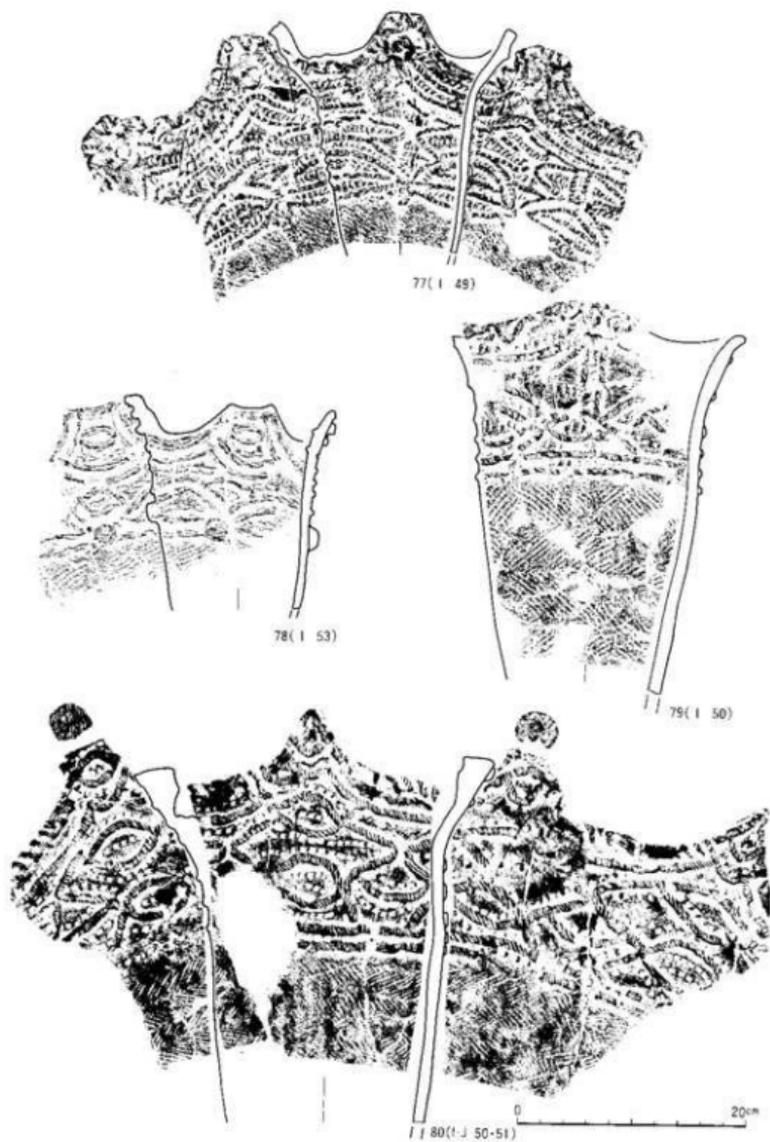
口頸部文様帯中にみられる隆線は、縦・横・斜位の直線状のものと、曲線状のものが互いに連結し横位方向に文様構成を展開しており、それらの隆線文様には、たすき状・めがね状、連弧状等がみられる他、82の土器にみられるような、上層d式土器の文様モチーフに似た単純な横位方向が主体となっているものも例は少ないがみられる。また、例は少ないが、77の土器にみられるような突起下に橋状把手がつけられるものもある。さらに76・78・85の土器のように、ボタン状突起のみられるものもある。

(胴部文様) 斜行縄文のものと羽状縄文の施されたものの2種類がみられ、その比率は、ほぼ同じか若干斜行縄文の方が多い。また、羽状縄文の施されたもの(75・79・80・83)は、2類のみで3類にはみられない。また、羽状縄文の施文も上層b式土器のそれよりもさらに粗雑に施されている。

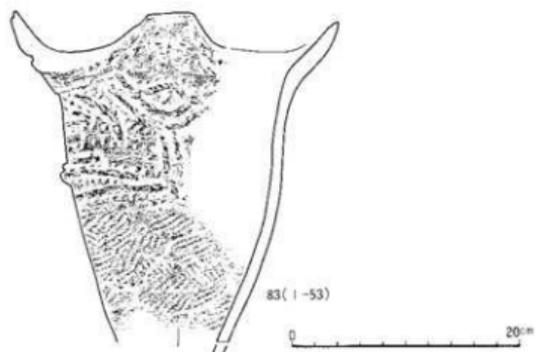
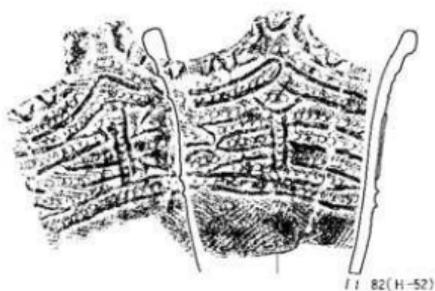
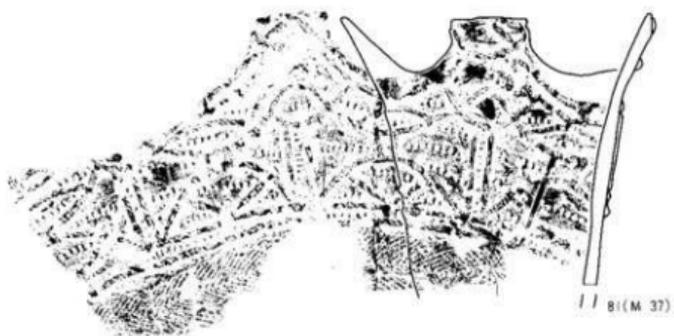
(その他) 本群土器、特に2・3類に関してみると、その内面は、使用頻度が高かったのか



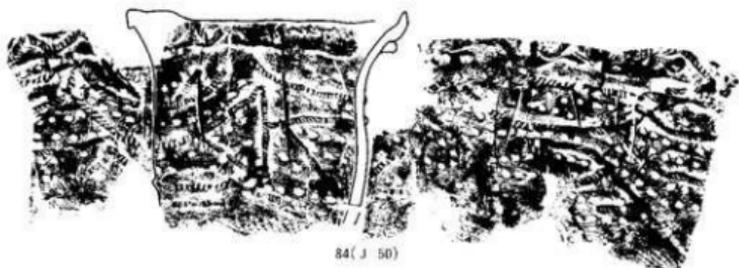
第77图 遺構外出土土器⑬(内簡上層c式土器 74~76)



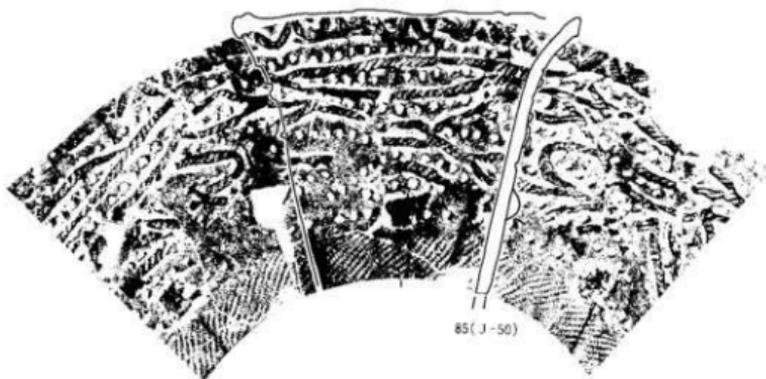
第78図 遺構外出土土器14 (円面上層c式土器 77~80)



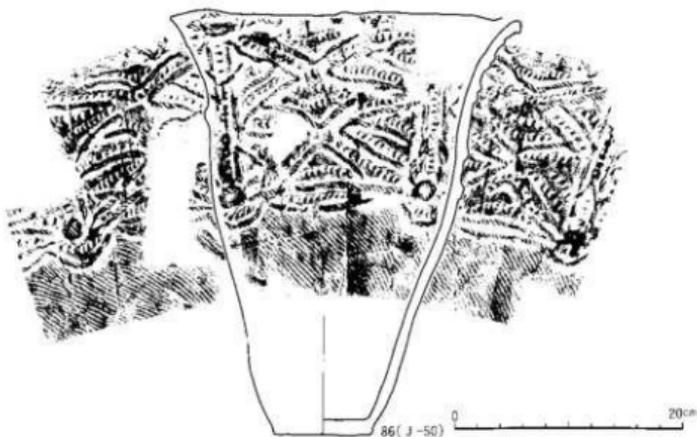
第79回 遺構外出土器15 (円筒上層c式土器 81~83)



84(J-50)



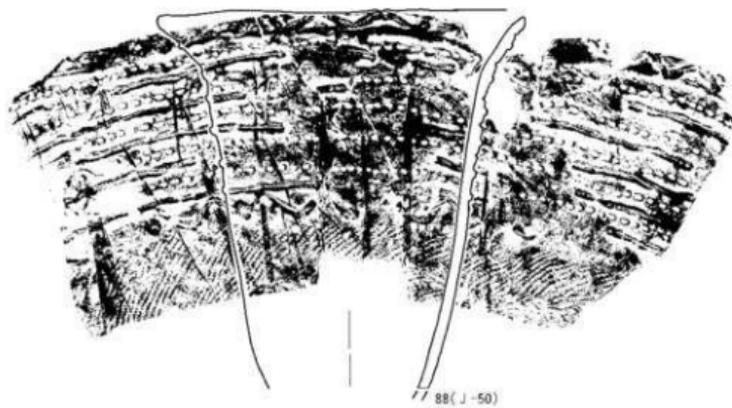
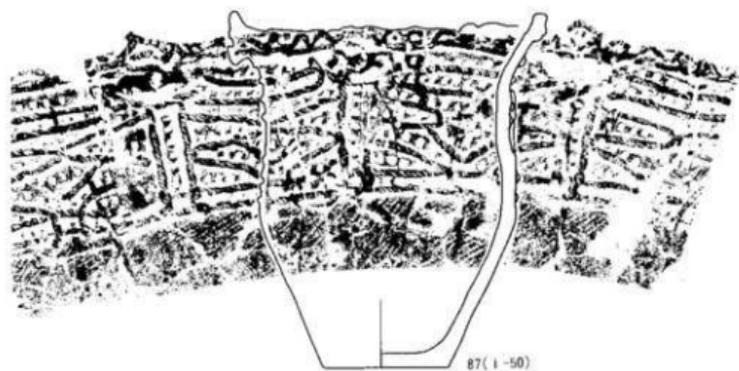
85(J-50)



86(J-50)

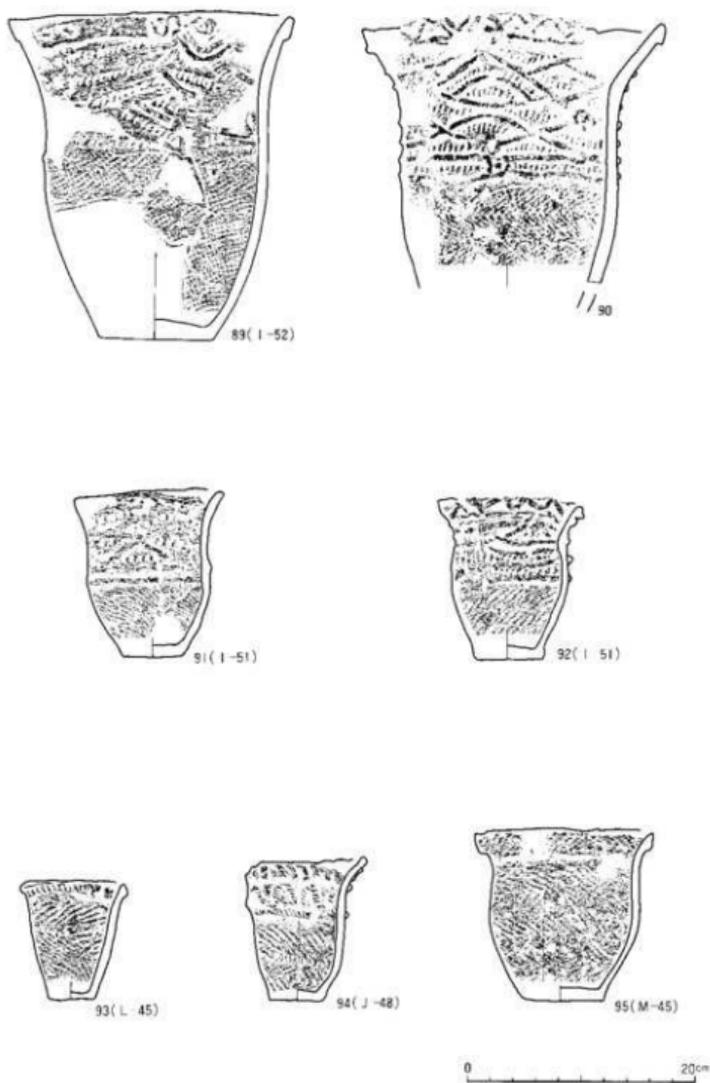
20cm

第80圖 遺構外出土土器16(内陶上層c式土器 84~86)



0 20<sup>cm</sup>

第81圖 遺構外出土土器(7) (内面上層c式土器 87-88)



第82図 遺構外出土土器18 (円筒上層c式土器 89~95)

多くのものに炭化物の付着がみられ、また、剥落して器面のザラザラしたものもある。さらには、本群土器とした24個の土器のうち底部が残存するものは、わずかに6個のみである。使用頻度と底辺部欠損土器及び土器用法には大きな因果関係があるのではないだろうか。

以上、本群土器について述べてきたが、1類とした土器を上層b式からc式にかけての移行過程に位置する土器として捉えた。そうすれば、2・3類とした土器は、従来一般的に分類されている上層c式土器ということになる。本遺跡出土の土器に関してみれば、江坂氏の述べている上層c式土器の細分しうる可能性（江坂 1970）は、見出すことができないと思われ、しいて、その可能性があるとするれば、前述の1類と2・3類の2区分であると考えることができよう。

いずれにしても、本遺跡（正確には調査区域内に限定されるが）出土の土器の主体は、次の上層d式土器とともに、本群土器であることは間違いない。ただ、本群土器は、遺構内出土のものが、僅か1例しかないが遺構外出土の状況を見ると、この時期には、この場所は、捨て場として利用されていたものと推測することができる。

最後になったが、93-95の3個の小型の土器は、種々の観点から推測して、本群土器の範疇に含めてもよいと推測できるものである。その意味では4類と分類してもよかったのであるが確実性に欠けるため、あえて上層c式土器という枠の中で捉えることにした。

#### 円筒上層d式（第83-91図96-121）

本群に属する土器は、江坂氏が『石神遺跡』の中で分類した円筒上層d式及びe式と設定したものと、村越氏が『円筒土器文化』の中で分類した円筒上層d<sub>1</sub>式及びd<sub>2</sub>式と設定した土器に比定できるものであるが、上層c式土器の項においても触れているように、両氏の設定した上層d（d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub>）式とする土器の基準に若干の不明確な部分があり、概略的には両氏の分類に準拠はしているが、細部にわたっては、多少のずれ（例えば、上層c式と上層d式土器との区別）が生じていることは事実である。このような点から、本書では、上層c式土器との比較、江坂・村越両氏の見解を基に、上層d式土器の特徴を次の諸点とした。

上層d式土器と分類した土器の特徴は、1）口頸部文様帯の幅広いもの、2）口頸部文様帯は、細い粘土紐貼り付けによる隆線文のみで文様が構成され、隆線文間には、刺突文等の他の装飾文様が見られない。3）口頸部文様帯の隆線は、地文縄文の施文後に貼り付けるか、または、無文面上に貼り付けたもの、4）地文縄文がなく無文面上に隆線を貼り付けるもの、5）胴部文様は、例外的なものを除き斜行縄文のもの。の諸点であり、簡潔に表現すれば、上層d式土器は、幅広い口頸部文様帯を、上層c式土器よりさらに簡素化した隆線文様で構成しているものと解釈し、上述の特徴を具備している土器を上層d式土器として捉えることにした。

このような観点で本遺跡出土の土器を分類すると、本群に属する土器は26個である。

これらの土器は、すべて遺構外からの出土であり、その地点は、大半のものが上層c式土器と同じ44ラインから51ラインまでの範囲からである。その出土状況も上層c式土器と同じように、1個の土器がその場で横位に潰れた状態のものが多い。26個の土器の出土層位は、すべてⅢa層中であり、上層b・c式土器と混在して出土している。

本群に属する土器は、上記の諸特徴から次のように細分した。なお、上層c式土器の項では、同じような文様モチーフをもつ土器において波状口縁のものと平縁のものとを細分したが、本群土器については、その相違による分類は行わない。

- 1類 無文面上に隆線を貼り付けて文様を構成する口頸部文様帯の幅広い類(96-101)
- 2類 地文縄文を全面に施文後、その上に隆線を貼り付けて文様を構成する口頸部文様帯の幅広い類(102-111)
- 3類 地文縄文を全面に施文後、その上に隆線を貼り付けてより簡略化した文様を構成する口頸部文様帯の下位の境界隆線がなく文様帯の幅狭い類(112-118)
- 4類 全面が無文に作られ、無文面上に隆線を貼り付けて文様を構成する口頸部文様帯の幅広い類(119-121)

以上の細分した土器を次に各要素ごとに特徴を述べてみる。

(器形) ほとんどのものが深鉢形を呈しており、上層b式及びc式土器と比較すると、胴の膨みは多少みられるもののそれらよりは、膨みが弱く、また、胴下半部から底辺部にかけてのすばまりも、それらよりは顕著ではない。従って比較的、底部から頸部付近まで直線的なラインで向い、そこから口頸部がやや外反するという、口径と底径の差の大きな深鉢形である。上層c式土器の中で平縁を呈する第80-82図84・87・89の土器にみられた胴上半部が強く膨らみ、頸部で一度すばまり、そして口縁に向けて外反するというプロポーションの土器は、1-3類の平縁土器にはみられず、4類土器にのみみられる。弁状突起は、上層c式土器のものと同じように強く外反するものは少なく、口頸部全体は外反しているものの、弁状突起の上半部は、外側に向うよりはやや垂直に近い角度で上方に向っているものがほとんどである。1・3類には、100・101・116-118のような器高20cm以下の小型の土器もみられる。しかし、逆に器高が40cmをこえるような大型の土器はみられず、本群土器は、上層c式土器と同様器高30cm台の中型のものが多い。

(口縁) 波状口縁のものが大半を占め、上層c式土器で多くみられたような平縁のものは、96・102・103・117・118・121の6個だけである。ただし、4類とした119の土器は、平口縁の4箇所に粘土塊に意匠を施した小さな突起をもつもので、波状というよりは、突起付平口縁とでも表現できるような折衷型の口縁である。波状口縁のものは、大半が弁状突起で、形状は上層b及びc式土器のものに似ているが大きさの点でそれらよりやや小型化し、かつ器厚も多少

それらよりは薄くなっている。弁状突起の中心部あたりに穿孔のみられるもの(104・109)や、数は少ないが97の土器のように突起頂部上面を楕円形状に平坦にし、その面上方から2個一対の刺突を施し、土器を上方から見た際、突起部の頂上面が、イノシシなど獣の鼻を連想させる(江坂 1970)ような装飾性豊かなものもみられる。なお、上層a式土器にみられるような山形状や二又山形状を呈する突起はみられない。

本群において波状口縁と平口縁の相違とその他の要素(文様他)との因果関係はないものと思われる。

(口唇部) 口唇部の作りは類に關係なく、上面に丸味をもつものと膨降して平坦面となっているものとが混在している。平口縁のもの口唇部は、すべて肉厚に作られている。そして口唇部外面には、ほとんどのものに上層c式土器にみられた波状隆線文が施されている。しかしこの波状隆線文がみられないものには、119のような、同じく細い粘土紐の貼り付けによる口唇部上面から外面にかけて短線状の斜位方向に連続貼り付け文が施されている。

波状口縁の土器についてみると、この波状隆線は、1類ではほとんどのものにみられ、2類になるとむしろ少ないものが多い。104のように口唇部の膨降がないものや、また例外的であるが105のような口唇部に押圧縄文のみられるもの等があるほか、97の口唇部上面には指頭押圧文が一周して施されている。これらは類例が少なくいずれも希な存在である。

(口頸部文様) 本群土器の細分の最も顕著な面が口頸部文様である。すなわち、再度ここで口頸部文様に関し細分の基準を示すと次のようになる。

- 1類 口頸部文様帯は広く、無文の口頸部文様帯に隆線文のみで文様を構成する。
- 2類 口頸部文様帯は広く、器全面に縄文を施文後、口頸部文様帯に隆線文のみで文様を構成する。
- 3類 口頸部文様帯は狭いものが多く、器全面に縄文を施文後、隆線文のみで簡素な文様を構成する。
- 4類 口頸部文様帯は広く、器全面が無文で、口頸部文様帯に隆線文のみで文様を構成する。

本群土器の特徴は、このように口頸部文様帯の文様が細い隆線のみで構成されているものである。隆線文様は、波状口縁のものは、突起下から垂下する通常2本の懸垂状隆線を軸に横方向に隆線同士が連結して文様を展開しており、平口縁のものは、めがね状の連続文様が主文様となっている。

ここで特徴的なことは、3類とした土器で、これらの土器には、下層式から上層c式さらには本群1・2・4類土器まで一貫して口頸部文様帯は、その下位を横位の1~2条の隆帯(線)が文様帯区画文として施されていたが、その横位の隆帯(線)のみられないことである。

隆線文としての文様が、元来本群土器全体として上層c式土器より簡略化されている中で、

さらに簡略化したための結果であろうと思われる。

隆線文の中には、97や113の土器にみられるような、懸垂状の2本の隆線の下端部を丸め、錨状を呈する文様としているものがみられるが、この文様は、類例も少なく円筒土器文化以外の大木系土器の影響とも考えられる。

一般的にみれば、本群土器の隆線文様は、上層c式土器のそれより明確に簡略化されていることは確かである。

(隆線) 上層c式土器の隆線とほぼ同じが、それより若干細い粘土紐を貼り付けており、特に3類は、1・2・4類より細くつくられている。

隆線上には、押圧縄文・回転縄文・ヘラ状工具等による連続刻目状の文様が施されている。

その大半は、隆線と直角方向に施し、コイル状を呈しているが、96や107などのように細い隆線上に縄を平行させて押圧しているものもみられる。

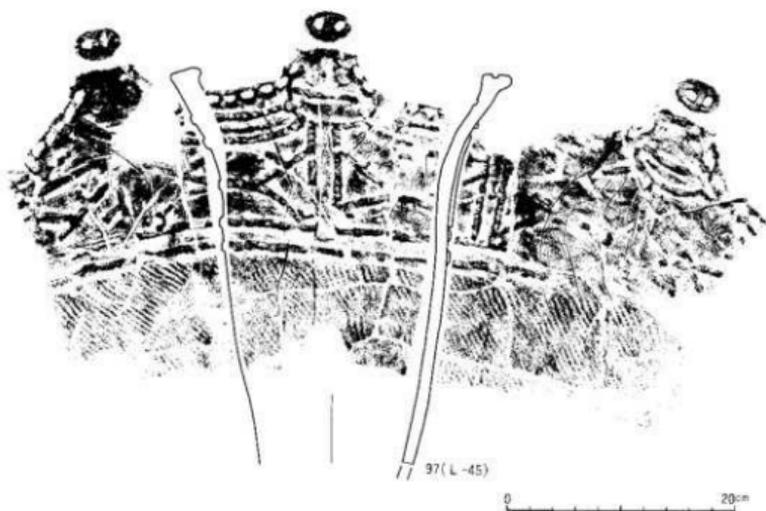
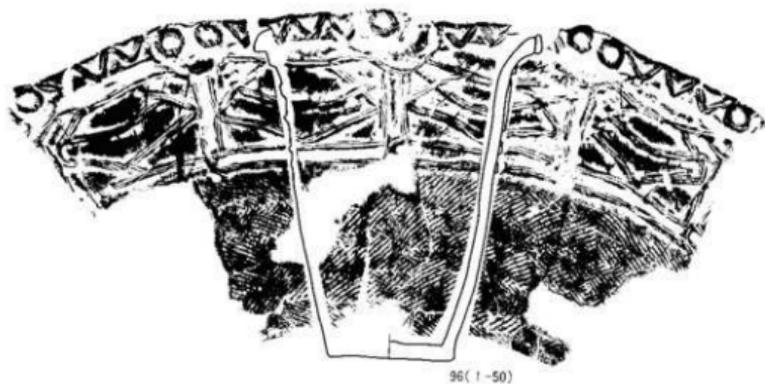
1・3・4類では、それらの文様のあるものと隆線が素文のものの両者がみられ、2類は、すべてのものに隆線上に文様が施されている。3・4類は、しいて言えば素文の隆線が多いと言える。

隆線ではないが、上層c式土器にみられたボタン状の突起は、本群でもみられ(98・105・114)中には、98のように各弁状突起部に各々2個を一對としたものもみられる。しかし上層c式土器にみられた中央部の凹んだ環状貼り付けのものは、本群では96の口縁外面につけられたものの1個だけであり、大半のものにはみられない。

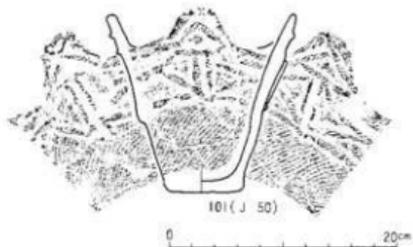
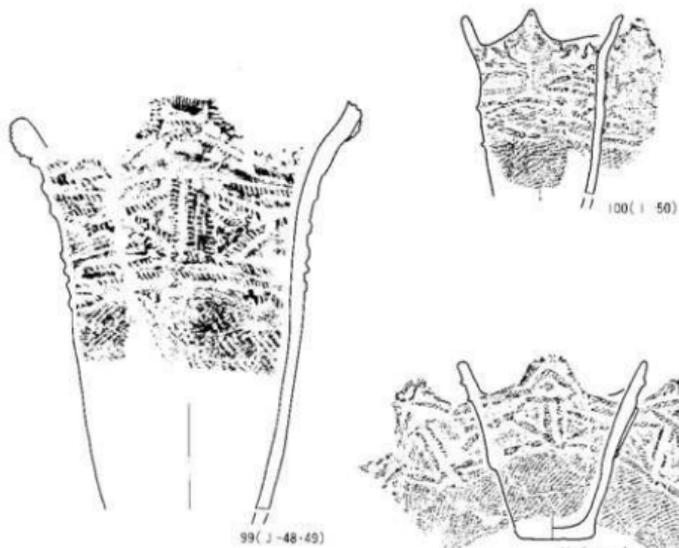
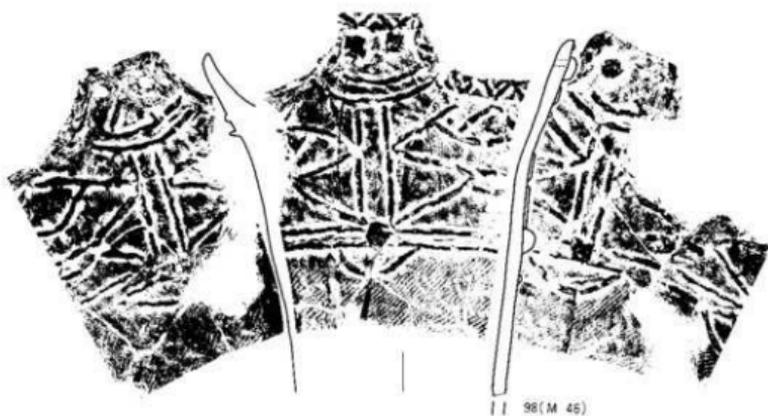
(胴部文様) 地文縄文のみられる1～3類の土器のほとんどは、比較的粗雑に施文された斜行縄文であり、99と111の2個のみが羽状縄文の施文されたものである。114の土器は、地文の上に横位の綾絡文が数段施文されたもので、希な存在の土器である。

(その他) 本群の中で1・2・4類とした土器の隆線による文様構成は、すべて上層c式土器のそれに系統性を見出すことができるが、3類とした115・116の2個の土器の文様構成は、上層c式あるいは上層b式土器の中に見出すことはできず、それらは、本群の1・2・4類より、さらに簡素化した状態で、かつ大木式土器の影響とともに派生したものであろう。

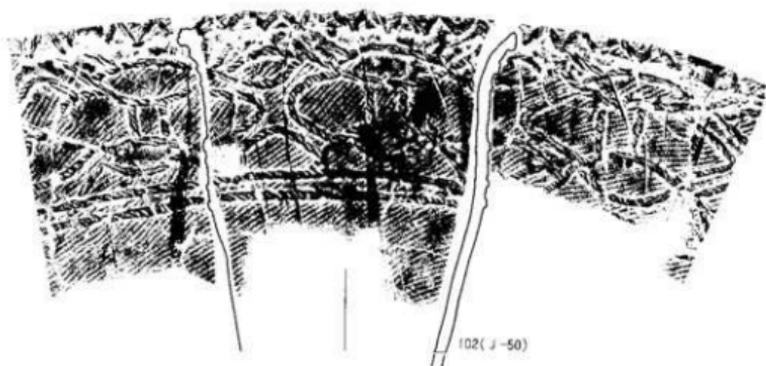
以上、本群土器について述べてきたが、文様構成の面からみるならば、無文面に隆線を貼り付けて口頸部文様帯とする1類は、本群土器の中でもより上層c式土器との系統上に考えることができ、3類は、村越氏設定の上層d<sub>2</sub>式土器の範疇で捉えても差し支えないのではないと思われる土器群である。こうしたことから、あくまでも文様帯に関してだけで推察すると、本群土器の推移は、1類から2類そして3類への移行を推測することができると思われる。なお、4類は、これまで出土例も少なく定かでないので上記の推察からは除外した。可能性として、4類土器は、1類の範疇で捉えることができるかもしれない。



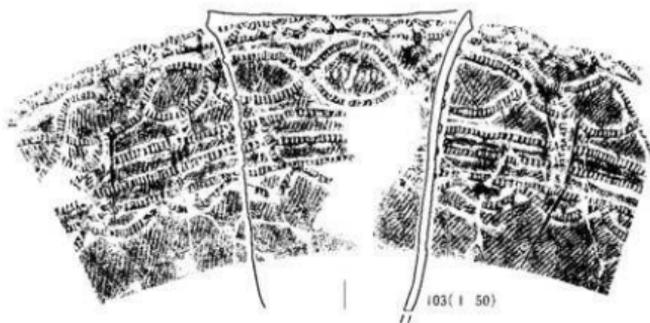
第83图 遺構外出土土器19 (円筒上層d式土器 96-97)



第84図 遺構外出土土器20 (円筒上層d式土器 98~101)



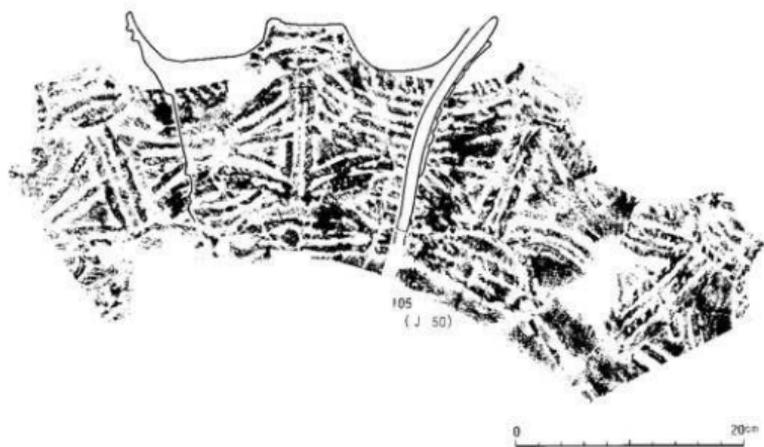
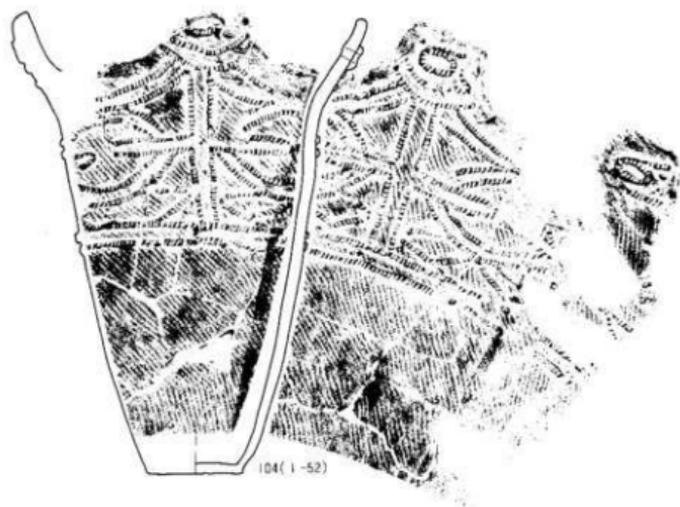
102( J-50)



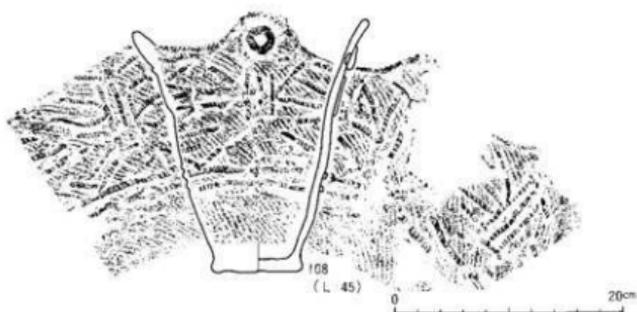
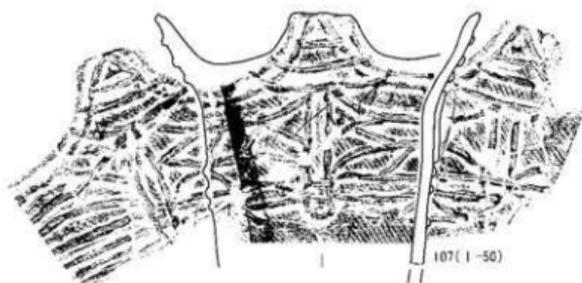
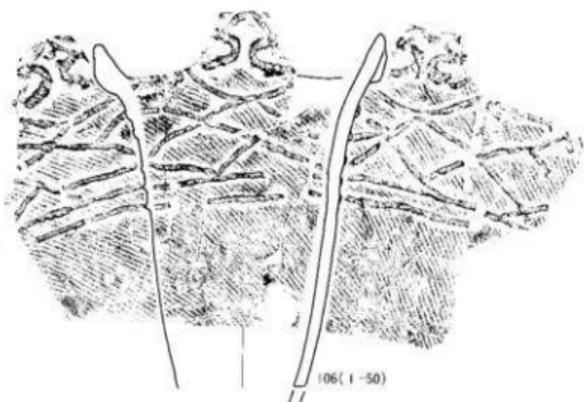
103( I 50)

0 20cm

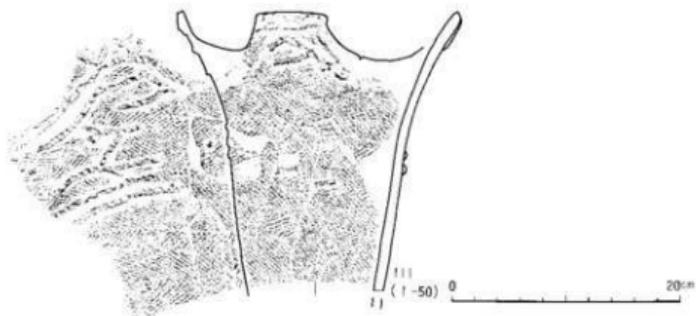
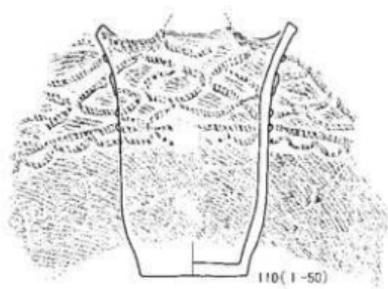
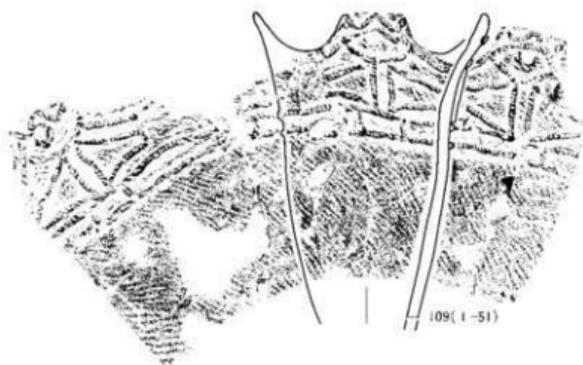
第85圖 遺構外出土土器21(内面上層a式土器 102・103)



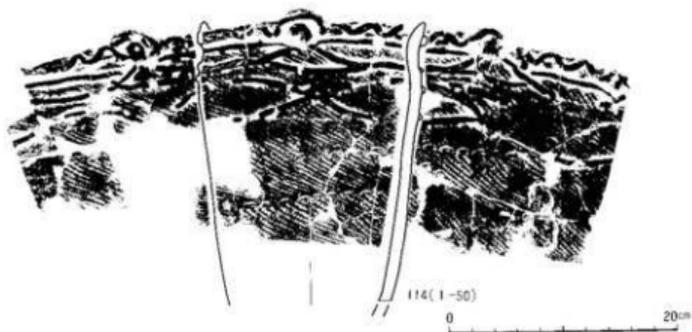
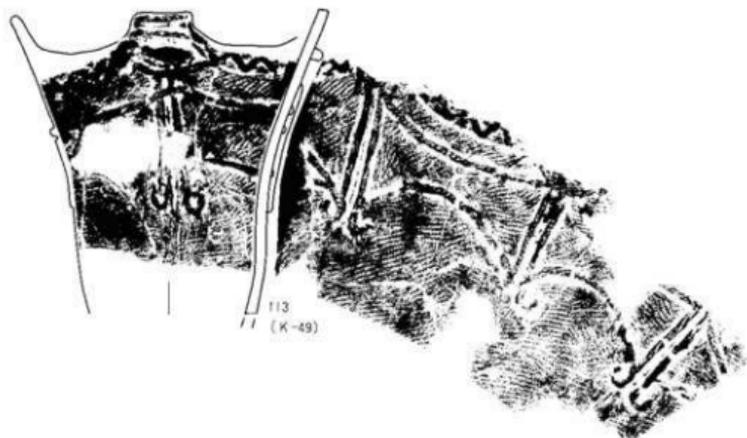
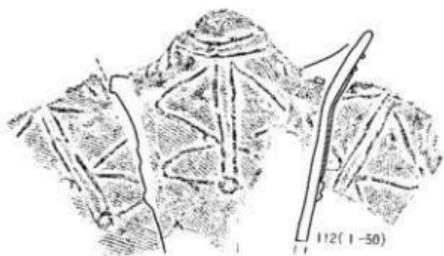
第86图 透模外出土器22 (円筒上層d式土器 104-105)



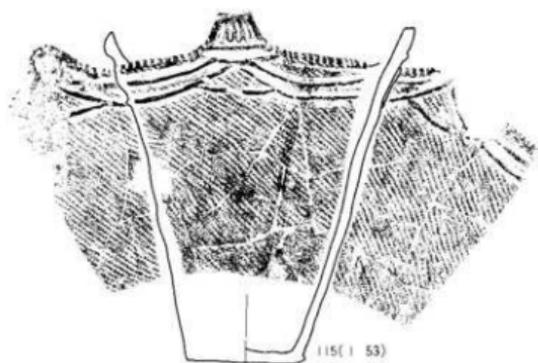
第87図 遠構外出土土器23 (円筒上層d式土器 106~108)



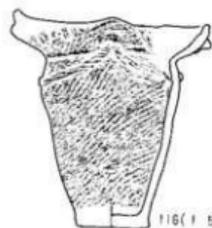
第88図 遺構外出土土器24 (円筒上層d式土器 109~111)



第89図 遺構外出土器25(円筒上層d式土器 112~114)



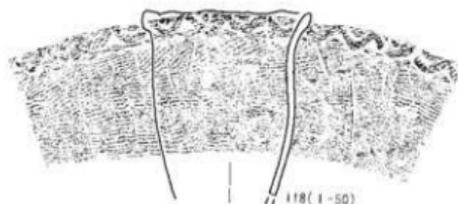
115( I 53)



116( I 50)



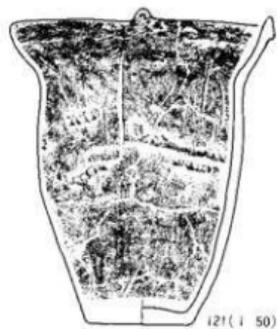
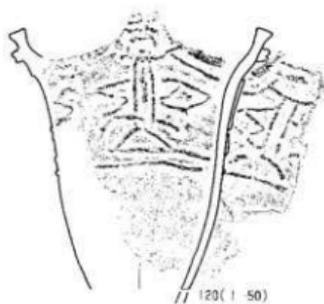
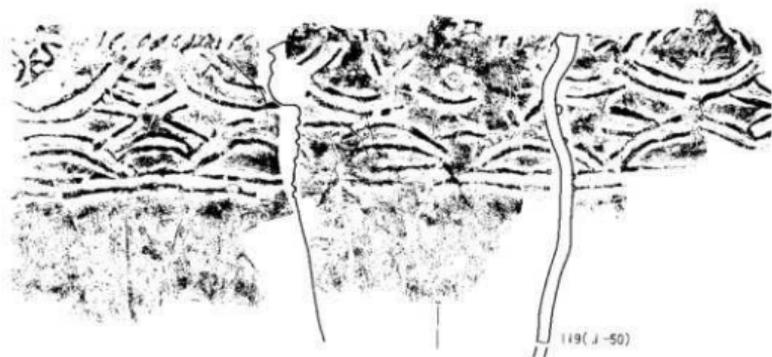
117( L-45)



118( I-50)



第90圖 遺構外出土土器26 (円筒上層d式土器 115~118)



第91図 遺構外出土土器27 (内面上層d式土器 119~121)

本群土器は、本遺跡出土土器の中で復原土器の数も破片数も一番多く、上層c式土器とともに総出土土器の主体を占めているが、村越氏の設定した上層d2式土器の典型的なもの（貼り付け隆帯による胸骨文様等）江坂氏の設定した上層e式土器としたものに比定できるような土器は破片資料の中にもまったく認められない。本群土器を最後に一線を画したように本遺跡における円筒土器は終焉を迎えたものと思われる。

#### X群土器（土器型式を特定し難い土器）（第92図122～130）

本群に含めた土器は、表題のとおり、器面に特徴的な装飾文様のないものや、特異な施文文様が施された土器などで、それらの大半は円筒土器であることには間違いのないと思われるが、これまで述べてきた型式までは、特定し難いという土器である。従ってこの土器群に対し（円筒土器）X群と仮称することにした。

このような土器は、以下の9個体であり、それらを一括して、本群として扱うことにする。

なお、以下に記述していく中で、可能性の高い土器型式名を使用する場合もあるが、これまで記述してきた各土器型式における復原土器の個体数には、これらの土器の数は含まれていない。

以下、各土器ごとに記述する。

122 L-45グリッドⅢa層中から出土した。出土時は、ほぼ原形をとどめ、横位に潰れた状態で出土した。器形は、4個の山形状突起を有する波状口縁で、口頸部は外反し、胴部の膨らみが弱い深鉢形土器である。文様は、肥厚した口縁外面を棒状工具による刺突文が連続して2列並行して巡らされている。この刺突文以下は底辺部まで、同一燃りの原体による羽状縄文が全面にかつ粗雑に施文されている。底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土には植物性繊維の混入はみられない。

胎土及び焼成に関しては、器表面が明黄褐色を呈し、他の大多数の円筒土器各型式のものと容易に識別できる。器内面は、横位方向にヘラ状工具によりナデの調整痕がみられる。恐らく円筒上層式土器には間違いのないと思われ、しいて、既型式に類似点を求めるとするならば、口縁の形状、口縁部外面の刺突文、粗雑な地文文様、及び器形の点から上層c式土器が第一候補に上るとされる。

123 I-53グリッドⅢa層から出土した。平縁の深鉢形土器である。口縁部は、折り返し口縁風に肥厚している。文様は、この肥厚した口縁部から底辺部まで全面斜縄文のみが施文されている。極めて単純な土器である。底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土には植物性繊維の混入はみられない。胎土・焼成は、他の上層式土器とほぼ類似する。器内面は、幅の狭いヘラ状工具による雑な横位方向の調整痕が明瞭に残されている。恐らく円筒上層式土器には間違いのないと思われ、しいて、既型式に類似点を求めるとすれば、口縁部の作りから上

層c式からd式土器を想定することができる。

124 L- 46グリッドⅢb層上面から出土した。123と同じ平縁で若干胴部に膨らみを有する円筒形土器である。口縁部は、若干肥厚し、口唇部上面から外面にかけ、やや斜位に連続してコイル状を呈する押圧縄文が施されている。その直下にあたるややくびれた口頸部上位に横位の綾絡文が1条施文されている。その直下から底辺部までは地文縄文のみが施文されている。

底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土には植物性繊維の混入はみられない。

恐らく円筒上層式土器には間違いなく、上層b式あるいは上層c-d式土器に類似する点が多い。

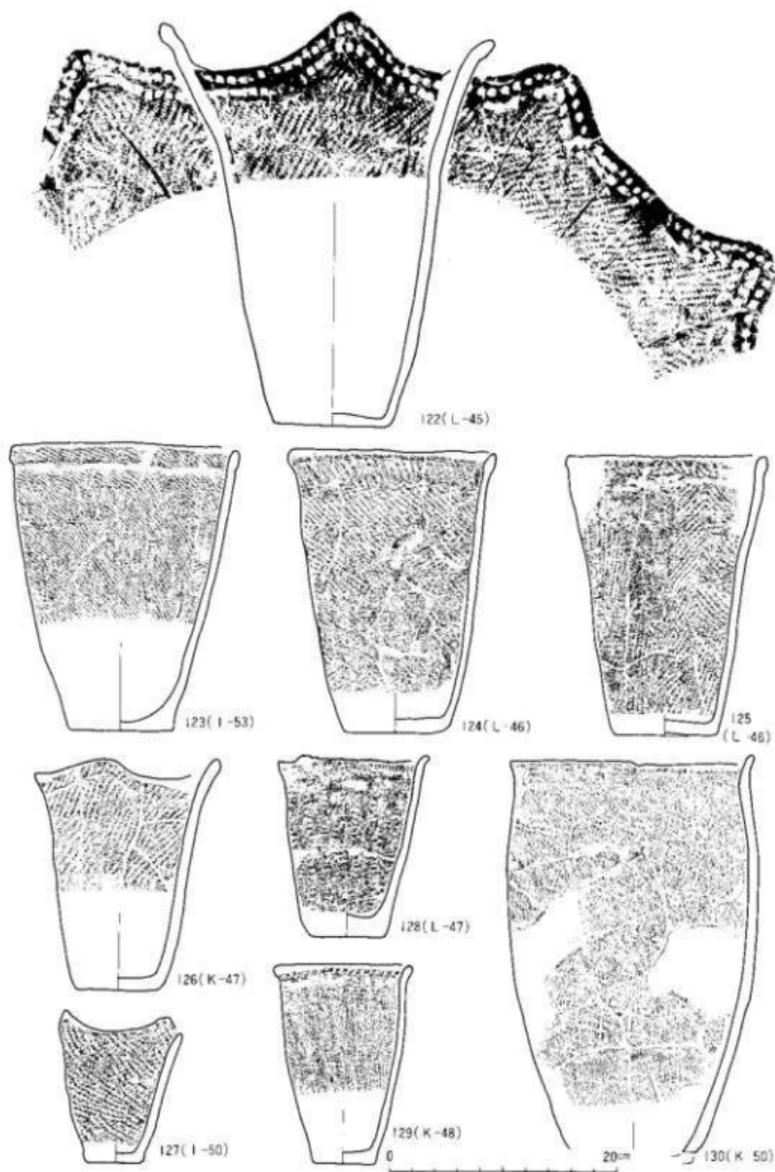
125 124の土器と同じL- 46グリッドⅢb層上面から出土した。胴部の膨らみのない点を除けば、すべて124と同じ特徴をもった土器である。

126 K- 47グリッドⅢa層中から出土した。ゆるやかな山形状突起を有する波状口縁の円筒形に近い深鉢形土器である。口縁は、123と同じような折り返し口縁風に作られている。文様は、口縁部から底辺部まで全面地文縄文のみが施文されている。底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土には植物性繊維の混入はみられない。内面は、123の土器と同じように、幅の狭いヘラ状工具による調整痕がみられる。123の土器と同様に上層c式あるいは上層d式土器の範疇で捉えることができるかもしれない。

127 I- 50グリッドⅢ層中から出土した。2箇所の突起頂部を欠くだけでほぼ完形品で出土した。4個の小さな山形突起を有する波状口縁の小型の深鉢形土器である。口縁部の肥厚もみられず、文様は、全面地文縄文のみである。底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土には植物性繊維の混入はみられない。型式までは推定できないが上層式土器には間違いのないと思われる。

128 L- 47グリッドⅢ層中から出土した。平縁の口縁部のみが若干外反する円筒形土器である。口唇部上面には、口縁とほぼ直角方向に連続して短な刻目が施されている。口縁から底辺部までは、無文面上に縦位方向に刺突が施されている。底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土には植物性繊維の混入はみられない。恐らく円筒土器には間違いのないと思われるが、型式は特定できない。しいて、既型式に類似点を求めるとするならば、刺突文の点から円筒上層c式土器が第一候補に上るとされるのが定かではない。

129 K- 48グリッドⅢb層中から完形品で出土した。平縁の深鉢土器である。口縁は、肥厚し、128の土器と同じ短い刻目が連続して施されている。肥厚した口縁直下には、上下2個一対の刺突が横位に一巡して施され、胴部は、無文面上に縦位の2本並列の条痕(線)文が施文されている。128の土器と共にこの2個の土器は、無文の器面に文様をすべて刺突及び沈線により構成している類別の少ない土器である。底辺部の張り出し及び底部の上げ底はみられない。胎土に



第92図 遺構外出土土器② (円筒土器) X 聯土器 122~130

は植物性繊維の混入はみられない。口縁部内外面には炭化物（煤）が付着している。この土器は、果して円筒土器として取り扱ってよいものか疑問の多いところであるが、他に該当する土器型式が見当らず、とりあえず、円筒土器下層式後半から上層式にかけての時期の土器として扱うことにした。

130 K-51グリッドII-III層中から出土した。平縁の胴部が膨らみ、口縁部の外反しない深鉢形土器であり、器形だけを見ると一見縄文時代後期の土器によく似ている。口頸部のくびれも、また、文様帯もみられない。器全面に、複数の縄文原体を使用し、規則性のない粗雑に施された絡条体回転文や、押圧縄文等がみられ、施文の結果として雑な網目状文を描写している。底辺部は欠損しているため不明である。胎土には、多量の砂粒と少量の植物性繊維の混入がみられる。器内面は、研磨されている。器外面は、加熱のためか器面がザラザラしている。円筒土器には余りみられない器形であるが、植物性繊維を混入している胎土である点を重要視し、とりあえず、本土器を円筒土器の仲間として捉えたが、疑問の多いところである。仮に円筒土器とすれば、類例がないため推定もむずかしいが、下層式土器であることは間違いのないと思われる。

#### 大木系土器 （第93～95図131～147）

本遺跡出土の土器は、幾度か述べているように円筒土器が主体であるが、それらに混在して少量ではあるが、縄文時代前・中期の時期に東北地方南半部を中心とした広い文化圏をもつ大木式土器の影響を受けた、円筒土器と大木式土器の折衷型とも言うべき所謂「大木系土器」と一般的に呼称する一群の土器が出土した。それらの土器を一括して本群で扱うことにする。

大木系土器と判断できるものは、復原土器で6個体と破片資料が約30片程のものである。

6個の復原土器は、1個が第25図16の土器で第23号土壇開口部近くの堆積土中から出土したもので、残りの5個及び破片は、すべて遺構外から出土した。遺構外出土の本群土器は、ほとんどが49～54ラインのごく限られた範囲から出土した。その範囲は、上層式土器の出土範囲の中に大半が含まれている。出土層位は、すべて上層b～d式土器と同じⅢa層中からである。

遺構内から出土した本群土器は、前述の1例のみである。

以下、数量が少ないので、各復原土器ごとに記述し、最後に破片資料を一括して述べることにする。

#### 第23号土壇出土土器 （第25図16）

平縁で頸部がくびれ、胴中央部が膨らみ下半部から底辺部に向けてすばまりをみせる深鉢形土器である。口径と胴部最大径との差は近似している。

口縁部と頸部に各々1条の太い隆帯が貼り巡らされており、この2条の横位の隆帯間、4箇所で各々「ノ、逆ノ」の字状の組み合わせによる「×」字状を呈する縦位の短い隆帯が垂

下し、口頸部を四つに区画している。その四つに区画された中は各々、隆帯側縁に沿うように楕円形をなす、溝の浅い沈線で縁どられ、さらにその長楕円形沈線文の中に口縁と直角方向に連続した刺突が施されている。下位の隆帯の直下には、4箇所の「×」字状の貼り付け隆帯の下に各々、垂下して蛇行する貼り付け隆帯が施され、頸部から胴上半部も、この4箇所の蛇行隆帯文により四つに区画されている。その4箇所の区画内には、先に述べた長楕円形沈線文とその中を充填する刺突文による文様が施され、その長楕円形文は、4本一組で「工」字状をなす文様を構成している。刺突及び沈線は、半截竹管状工具によるものである。横位の隆帯の下位からは、地文として複節斜縄文が施されている。隆帯上面には、縄文が施されている。また、4箇所の蛇行懸垂状隆帯は、先の沈線施文と同じ工具により沈線で縁どりがされている。以上のように、本土器の文様は、地文が斜行縄文で、裝飾文が隆帯と沈線によるものといえる。蛇行する貼り付け隆帯は、本遺跡出土の土器の中では、132の土器と51号土壇出土の第36図56の土器の2個にしかみられず、同じ蛇行する懸垂状の沈線文は、後述する133の土器にみられるだけである。

本土器において円筒土器の要素を見い出せるとすれば、隆帯の貼り付け及び、「×」字状の隆帯、その隆帯により口頸部文様帯が4区画されること、隆帯上の縄文施文、刺突文の諸点であり、しいて円筒土器との併行関係を求めるとすれば、上層b-d式土器ではないかと思われる。また、本土器も典型的な大木式土器ではないため、大木式の型式名をそのまま当てはめるわけにはいかないが、これもしいて求めるとすれば、大木7b式から大木8a式にかけての時期の土器と考えられる。

胎土は、緻密な素地を用い内面には化粧土を使っている。植物性繊維の混入はみられない。

なお、本土器は、その出土状況から、廃絶した土壇の凹地に投げ棄てたのではなく、むしろ、安置したかの如く、ほぼ原形を留めた状態で出土した。

131 I-53グリッドⅢa層中から出土した。口縁は、4箇所に小さな突起をもつほぼ平縁をなし、口頸部は、内湾気味に外反し、胴部は円筒形を呈する土器である。口縁は、折り返し口縁風に肥厚して作られている。その口縁には、口唇部上面から外面に2本を一対にした細い粘土紐を縦位に貼り付けており、その位置は口唇上面に付けられた小突起の中間点であり、結果的に口縁は、8箇所に裝飾が施されていることになる。口縁直下から底辺部までは全面に縄文が地文として施文されている。やや外反気味の口頸部には、地文上に細い粘土紐による隆帯が貼り付けられている。その隆線文は、弧状気味の三角形を横位に連結させたごく単純な文様構成となっている。

胎土は、本土器と混在して出土した円筒上層式土器と大差なく、植物性繊維の混入はみられない。内面は、丁寧に研磨されている。

本土器には多くの点で、円筒上層d式土器（本書における上層d式3類）に共通点を見出すことができる。本土器は、大木式土器の型式でみれば、大木8a式土器に類似している。

132 J-50グリッドⅢa層中から出土した。2箇所に、小さな渦巻状突起と同じく2箇所に小さな二又状の突起を有するがほぼ平縁で、口頸部は、131の土器と同じく内湾気味に外反し、胴部が円筒形を呈する土器である。口唇部上面には、沈線が1条施されており、若干の肥厚がみられる。口頸部は、これも131の土器と同じ細い粘土紐を貼り付けた隆線により文様が構成されている。隆線文様は、弧状気味の線で連続した三角形状を横位に展開させ、4箇所の突起下には、垂下する短い蛇行隆線文がみられる。文様構成としては、131の土器よりは、若干隆線の数が多い程度で、これもやはり単純な文様構成となっている。なお、131及び本土器の隆線は素文である。口縁から底辺部までは、全面に縄文が地文として施文されている。

胎土に関しては、131の土器と同じである。1箇所に補修孔がみられる。内面は、研磨されている。

本土器は、131と類似点が多く、同時期のものと考えられる。

133 I-53グリッドⅢa層中から出土した。4個の小山形状突起を有する波状口縁の円筒形を呈する土器である。4箇所にみられる山形状突起は、上面側に単純な渦巻文を描き出している。口縁は、幅が狭いものの肥厚している。その肥厚した口縁には、縦位の連続した刺突による短沈線が施されている。口縁直下には、2条の横位の沈線が巡りそこから底辺部までは全面に縄文が地文として施文されている。地文上には、突起部の下に2本を一对とした胴下半部まで垂下する蛇行する沈線文が施文されている。

胎土は、131・132の土器と同じである。内面は、若干研磨されている。

本土器には、余り円筒土器の類似点を見出すことはできないが、しいてあげるとすれば円筒形の器形と口縁部に施された短沈線及び口頸部文様帯の簡素化等の点で、上層c-d式土器に若干の類似点を求めることができる。

大木式土器の型式名でみれば、大木8a式か、あるいは8b式土器に併行させることができると考えられる。

134 I-50グリッドⅢa層中から出土した。平縁で口頸部が内湾気味に強く外反し、胴部が円筒形を呈する土器である。口縁は特に肥厚せず、細い粘土紐の隆線が2条横位に一巡して貼り付けられている。この2条の隆線間は、短い縦位の隆線で連結され計5つに区画されている。

この区画内は、かすかに短沈線のみられる部分もあるがほとんどは無文である。隆線上には押圧縄文がみられる。隆線の下は、底辺部まで全面に縄文が地文として施文されているだけである。胎土は、131-133の土器と同じである。内面は研磨されていたと思われるが、使用頻度が高かったのか煤の付着が激しく、それを確認できる状態ではない。

本土器は、特に円筒土器との類似点を見い出すことはできないが、大木式土器の型式でみれば器形・口頸部文様等の点から131・132の土器と共伴すると思われ、大木8a式土器に類似していると考えられる。

135 L-45グリッドⅢ層中から出土した。口唇部につまみ出しによる小さな突起が4個みられ、頸部が強くくびれ、口頸部は内湾気味に若干外反し、胴部が円筒形を呈する特異な器形の土器である。

口頸部は、4個の突起下に縦位に貼り付けられた隆帯により四つに区画され、その区画内には、雑に2本を1組とした押圧縄文が横位に施されている。頸部から底辺部までは全面に縄文（無節）が地文として粗雑に施文されているだけである。

胎土は、131-134の土器と同じである。内面は、媒が付着している。

本土器は、口頸部の隆帯と押圧縄文の手法が円筒下層d2式土器に類似点を求めることができるものの他の器形等の要素を加味すれば、下層d2式土器とも判断しがたく、また、大木式土器の要素も特に見出し難く、ここでは、あえて、大木系という推察で本土器を本群で扱うことにしたものである。本土器は、むしろ、前述のX群で扱う方が妥当であったのかもしれない。

大木系土器破片資料 前述のとおり、大木系土器と判断できる破片は、総量で約30片程のものであった。それらの大半は、131・132・134の土器にみられるような口頸部が内湾気味に外反するもので（136-145）、若干数であるが内湾せず若干外反するもの（146）もみられる。

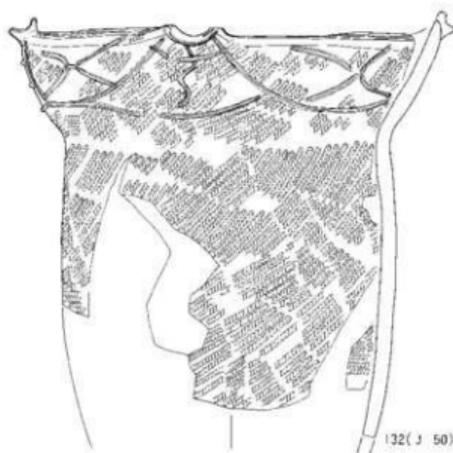
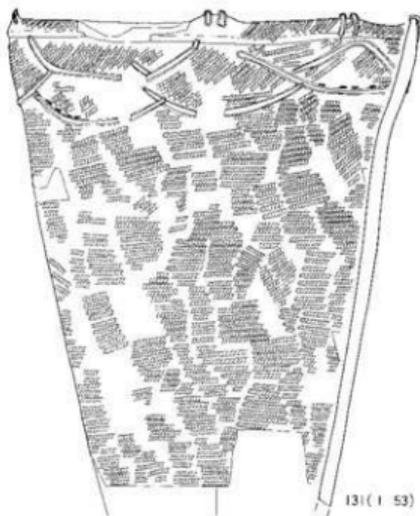
口頸部文様帯は、いずれも極端に幅が狭く、装飾文様は、細い粘土紐による隆線文が主体のもの（136-139）、沈線のみのも（140-143・147）、地文縄文のみのも（144・145）、押圧縄文のもの（141・146）がみられる。胎土には、いずれのものも植物性繊維の混入はみられない。素地は、他の円筒土器のものとはほぼ同質のものである。内面には、ほとんどのものに媒の付着がみられる。

これらの土器は、131・132等の土器と大差ないものと思われ、大木（7b）～8a～（8b）式土器に比定できるものと思われる。また、これらの土器は、大木系土器として異質な土器として取り扱っているが、第23号土壌出土の第25図16の1例を除くと、その他のものは、胎土・焼成等に関し、多量にこれらと伴出した円筒上層式の土器とかわるところがなく、大木式土器の影響を受けその文様・器形等を模倣したもので、大木式土器文化圏からの搬入品とは認めがたく、円筒上層式土器と一緒に、当地において製作された土器と思われる。（遠藤 正夫）

#### 縄文時代後期の土器（第96～99図）

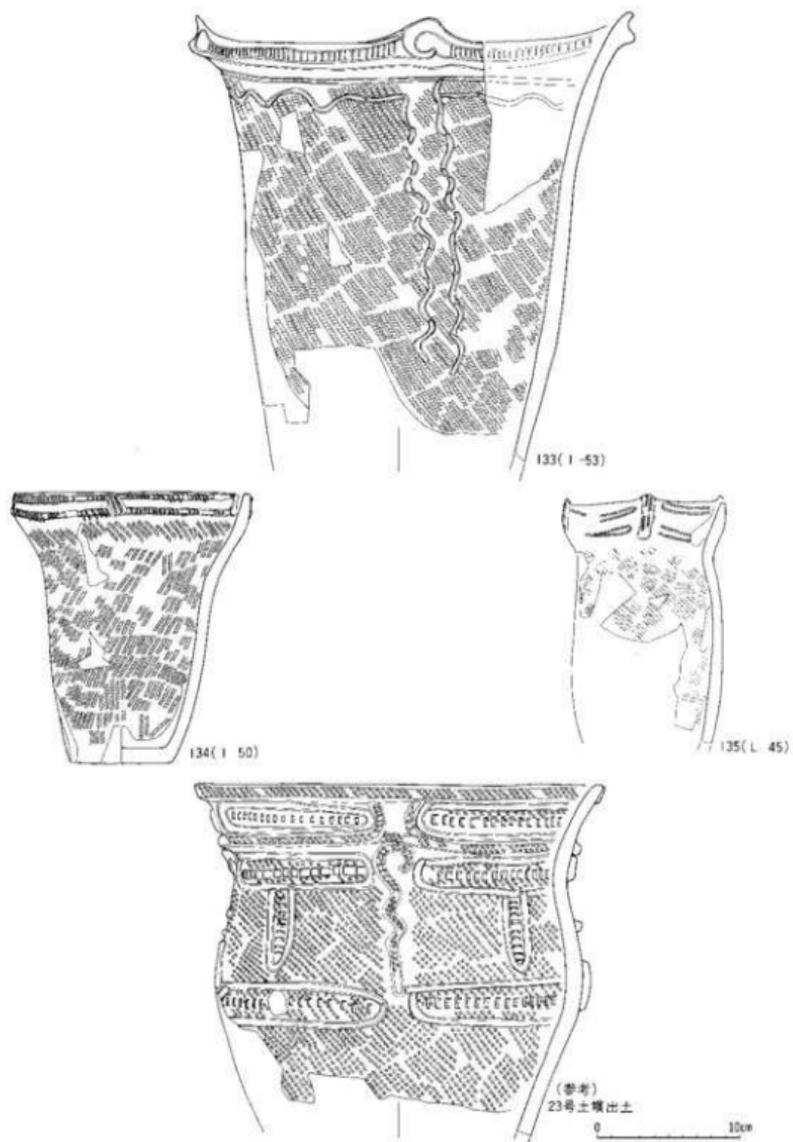
本遺跡の縄文時代後期の土器はダンボール箱で約3箱分が出土した。ほとんどが破片での出土であるため、器形全体を知り得るものは少ない。

復原できた土器を中心に、次の3類に分類した。

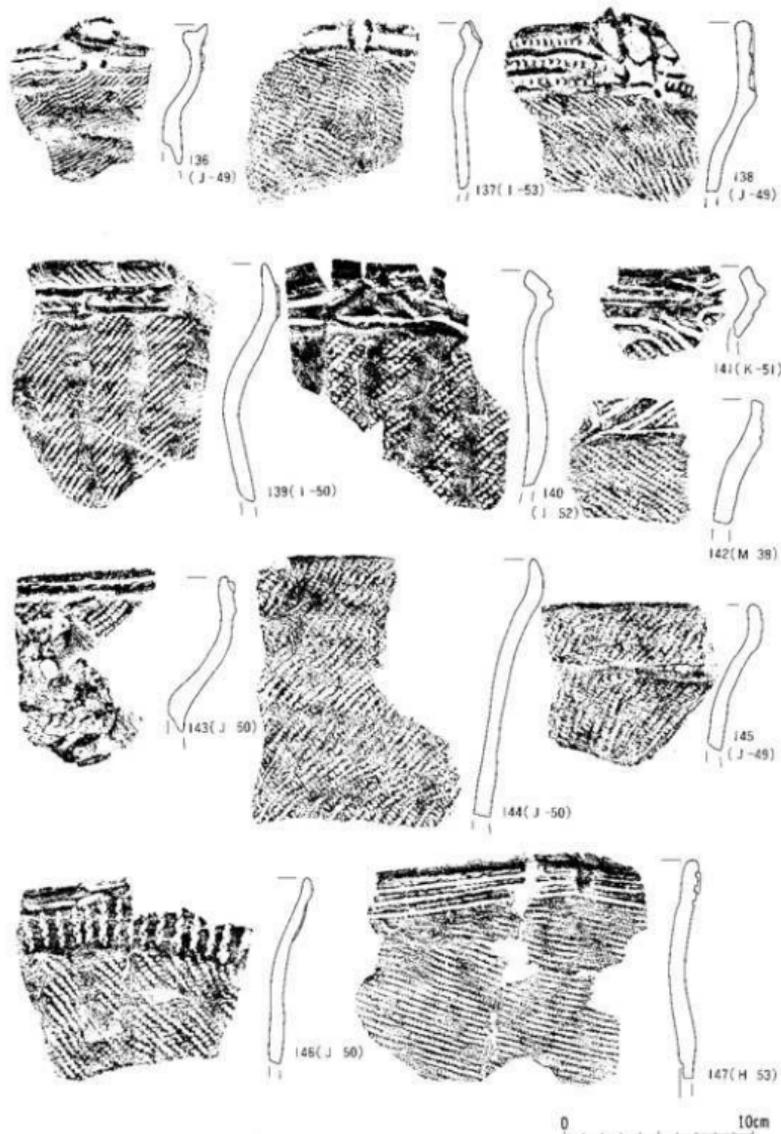


0 10cm

第93図 遺構外出土土器29 (大木系土器 131-132)



第94图 遺構外出土土器3例(大木系土器 133~135・参考土器)



第95図 遺構外出土土器①(大木系土器 136~147)

1類 十腰内I式以前の後期の土器

2類 十腰内I式の土器

3類 十腰内I式以降の後期の土器

1類 文様構成において隆帯の有無により差が認められる。

器形は、深鉢形土器を基本とする。隆帯を有しないものは小型のものが多い傾向が認められる。口縁部は小波状口縁となるものが多く、口唇部直下に1条ないし2条の隆帯をもつものと折り返し口縁のものが認められる。前者は粘土紐貼り付けによる小突起を持つものがほとんどであり、小突起には上下方向の貫通孔が観察されるものがある。159は、貫通孔を有するもので、これらの口唇部は緩やかな波状を呈し、口縁部は内湾している。

文様構成では、隆帯は、おもに口縁部に限定される傾向が認められる。器面の文様はおおむね沈線での区画が行われ、直線的な矩形を基調とする。ほとんどが地文縄文→沈線→磨消縄文の順に行われている。沈線による区画後に縄文が充填される例は未見である。縄文原体はおおむね単節が用いられている。

148は、沈線による区画がやや曲線的であるが、口縁部および文様帯の特徴から、蛭沢式(仮称)に比定されるものと考えられる。

2類

器形は、深鉢形土器を基本とするが、覆棺形土器・鉢・浅鉢形土器・注口土器・小型の土器等が認められる。

深鉢形土器の器形はおおむね、口縁部の直下でくびれ、その後ラッパ状に広がるものと、胴部上半部に最大径を有するものがある。

口縁部は、平縁および小波状を呈するものである。また粘土紐の貼り付けによる小突起を持つものがある。また、折り返し口縁のものも認められる。

文様構成では、沈線だけによるものが圧倒的に多い傾向が認められるが、隆帯を有するものも認められる。隆帯はおもに胴部上半部に認められるが、1号住居跡出土(第7図-2)の例のように胴部文様帯のすべてに、用いられるものもある。この土器は隆帯を貼り付け後にほぼ平坦に押し付け(プレスし)これに沿って沈線で区画し、さらにこの上に縄文を施文しているもので、一見磨消縄文とも取れる効果が得られる手法である。第96図-149は口縁部側と底部側に隆帯が認められるが、底部側には縄文を施文し口縁部側には串状の工具による連続した刺突が施されている。また、単に貼り付けただけのものもある。

沈線だけによる施文のものは、渦巻き文様を基本として種々の文様を展開している。150・175・180のように、3～4本を1単位とした櫛歯状の沈線によるものも認められる。櫛歯状沈線によるものは、このほかにも器体全面に縦位方向に施文したもの(154)などがある。

網目状摺糸文によるものも認められる。この文様帯のものには、口縁部が折り返し口縁のもの(183)も認められる。

このほかに無文のものが数例ある。器形は、小型の深鉢形土器・鉢形土器等が認められる。襜褕形土器は3個体以上の破片が確認された。このうち第8図-4は1号住居跡の堆積土中から出土したもので、破壊された可能性がある。

第97図-157は、小型の吊り手土器で、張り付けによる左右一对の把手を有している。この把手の中央には、紐懸け用に上下方向に穿孔がなされている。外面は棒状工具による沈線文が全面にわたって施文されているが、把手部分は器面との接続部に施文がみられるだけで、把手自体は無文である。内面にはほぼ全面に、煤状炭化物の付着が認められる。底部は上げ底で、丁寧に磨き込まれている。

176は、注口土器の破片で、注口部は非常に短いものである。

口縁部の形状・文様構成から149・150は本類中の古段階の部類に細分されるものである。

3類 ごく少量の出土である。185は単節R Lの地文縄文に沈線で文様帯を区画し、文様帯外の縄文を磨消したものである。破片のために全体像は不明であるが、横位に数条と縦位にS字状の沈線が観察される。十腰内Ⅱ式に比定されると考えられる。

その他、破片のため1～3類に細分できなかったものがある。

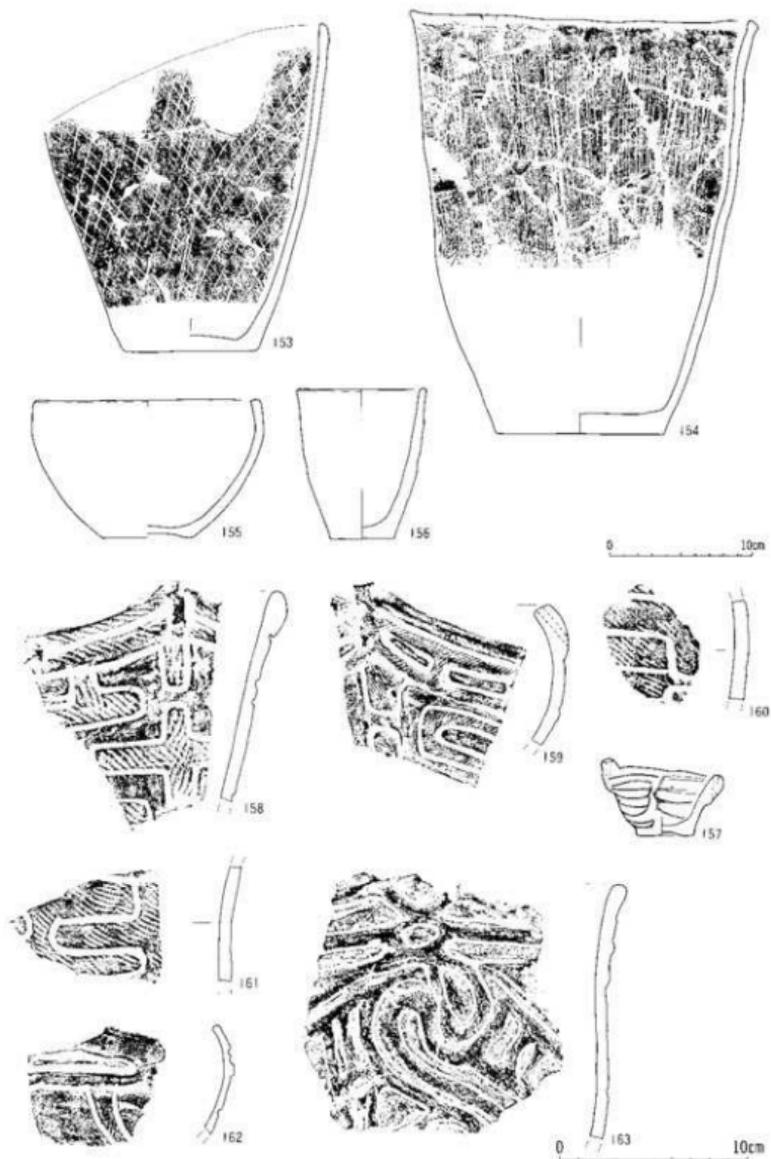
本遺跡出土の縄文時代後期の土器は、おおむね十腰内Ⅰ式に比定され、この中でも古段階のものが認められる。また、十腰内Ⅱ式以降の後期土器は出土しなかった。

本遺跡出土の後期の土器には、赤色顔料を塗付したものが非常に少なく、3点において確認できただけである。

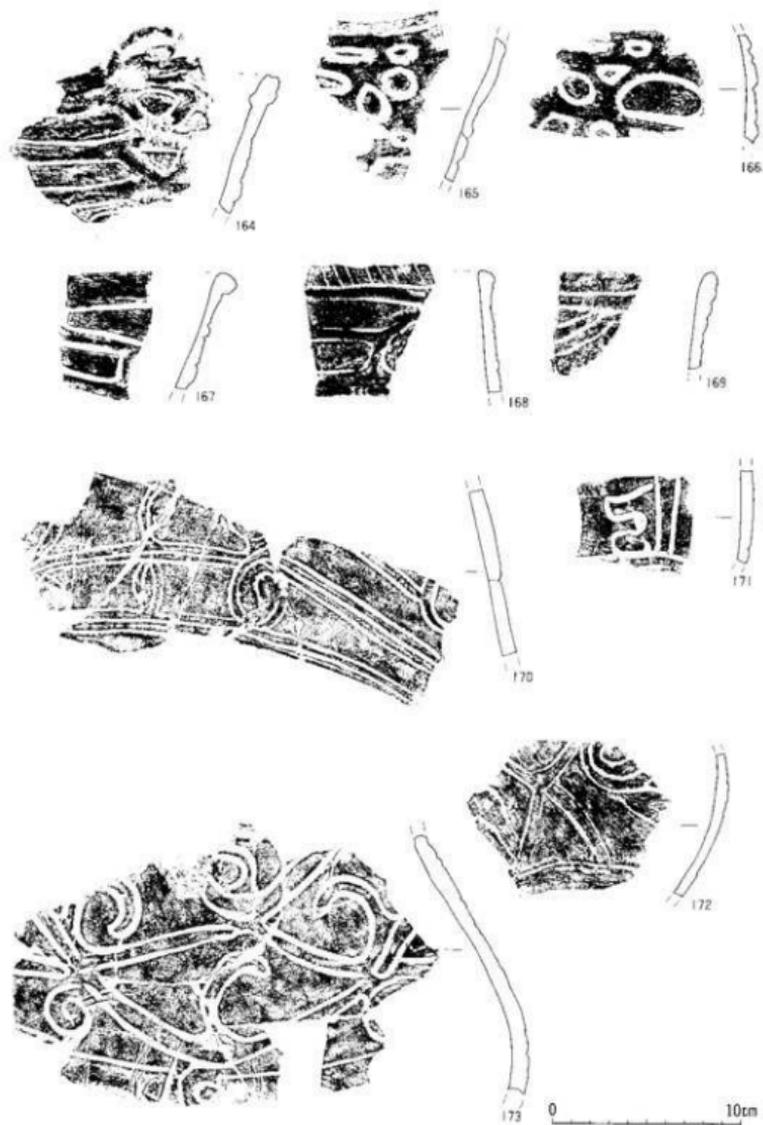
(白鳥 文雄)



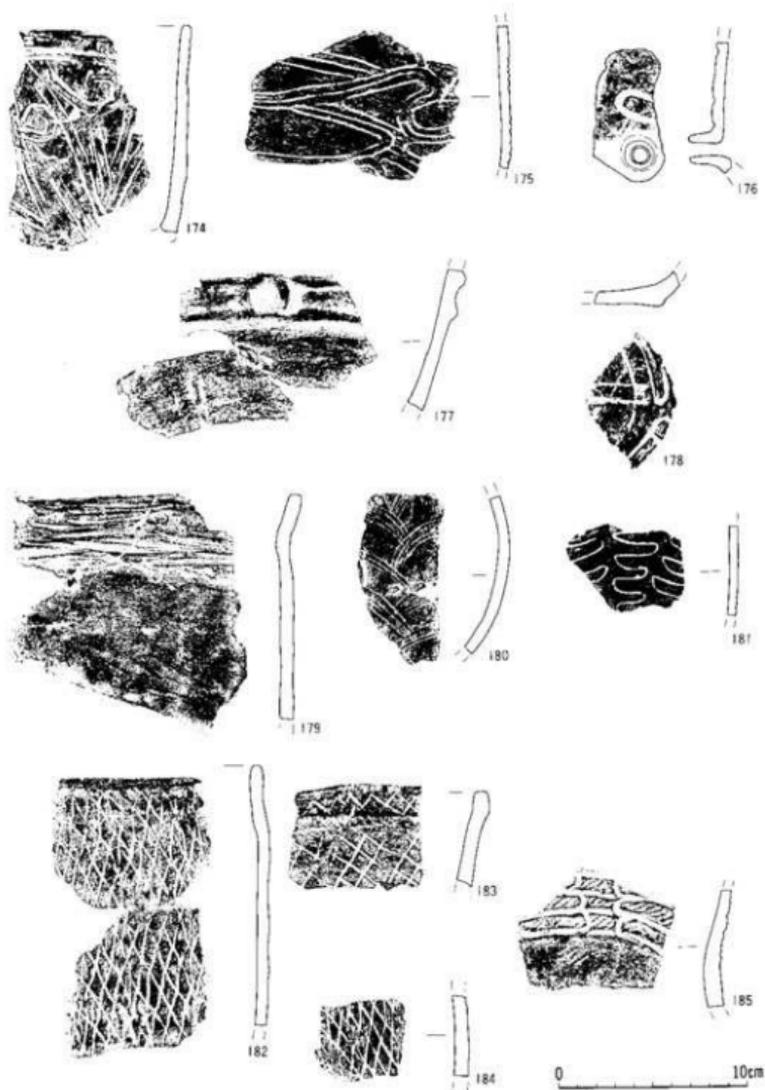
第96图 透孔外出土器32



第97圖 遺構外出土土器33 (縄文時代後期)



第98回 遺構外出土土器34 (縄文時代後期)



第99圖 遺構外出土土器35 (縄文時代後期)

第4表 遺構外出土土器概略一覧表(1)

計測値 □径×底径×器高  
単位 cm  
略 上層→下、土層→土

土器番号	グリッド名	計測値	分類	土器番号	グリッド名	計測値	分類
第65図1	K-48	(17.0)×9.0×20.0	Fa-1	第68図38	K-46	19.5×-×(13.0)	Fb-7
第65図2	L-47	21.0×-×(22.0)	Fa-2	第68図39	F-58	12.0×7.0×17.0	Fc-3
第65図3	L-47	32.5×-×(30.0)	Fa-3	第68図40	J-46	破片	Fc-1
第65図4	K-46	破片	Fa-1	第68図41	G-57	破片	Fc-1
第65図5	K-46	破片	Fa-1	第68図42	J-47	破片	Fc-1
第65図6	K-48	破片	Fa-2	第68図43	J-47	破片	Fc-1
第65図7	L-47	破片	Fa-2	第69図44	K-45	破片	Fc-2
第65図8	L-47	破片	Fa-2	第69図45	E-58	破片	Fc-3
第65図9	K-48	破片	Fa-2	第69図46	J-46	破片	Fc-3
第65図10	K-47	破片	Fa-2	第69図47	J-47	破片	Fc-4
第65図11	L-47	破片	Fa-2	第69図48	J-46	破片	Fc-4
第65図12	L-48	破片	Fa-2	第69図49	J-47	破片	Fc-4
第65図13	J-46	破片	Fa	第70図50	G-55	23.0×-×(28.0)	Fd-1
第66図14	L・M-35	32.5×13.5×59.5	Fb-1	第70図51	I-43	21.0×11.5×30.0	Fd-1
第66図15	L・M-35	33.0×14.5×53.5	Fb-1	第70図52	F-58	(27.0)×14.5×34.5	Fd-1
第66図16	J-48	破片	Fb-1	第70図53	G-56	13.3×6.0×14.5	Fd-2
第66図17	L-47	27.0×-×(19.0)	Fb-2	第71図54	F-58	21.5×-×28.5	Fd-1
第66図18	K-47	破片	Fb-2	第71図55	K-33	(24.0)×12.0×(29.0)	Fd-1
第66図19	L-47	破片	Fb-2	第71図56	E-58	17.5×7.8×24.0	Fd-1
第66図20	L-48	破片	Fb-3	第71図57	J-48	(12.0)×6.0×15.0	Fd-1
第66図21	L-46	破片	Fb-3	第71図58	E-58	31.5×-×(32.0)	Fd-2
第66図22	J-47	破片	Fb-3	第72図59	K-47	24.5×-×(19.0)	Fda-1
第66図23	J-47	破片	Fb-3	第72図60	K-47	21.5×10.5×29.0	Fda-3
第67図24	K-47	(20.0)×10.0×(36.0)	Fb-4	第72図61	K-47	(46.5)×-×(43.0)	Fda-1
第67図25	L-46	15.8×8.0×25.7	Fb-4	第73図62	K-47	(45.8)×6.3×59.5	Fda-1
第67図26	K-31	(17.0)×-×(29.5)	Fb-4	第73図63	J-48	(19.5)×8.0×23.0	Fda-2
第67図27	K-48	-×-×(16.5)	Fb-4	第74図64	J-48	31.0×12.0×38.0	Fda-2
第67図28	I-44	破片	Fb-4	第74図65	K-47	(35.0)×-×(31.0)	Fda-3
第67図29	L-44	破片	Fb-4	第75図66	K-46	16.5×7.0×19.0	Fdb
第67図30	L-47	破片	Fb-5	第75図67	K-47	22.0×9.0×25.0	Fdb
第67図31	L-48	破片	Fb-5	第75図68	K-47	(23.0)×9.0×27.0	Fdb
第67図32	J-47	破片	Fb-5	第75図69	K-48	22.5×-×24.0	Fdb
第68図33	K-45	破片	Fb-6	第75図70	J-48	22.0×8.0×26.5	Fdb
第68図34	J-47	破片	Fb-6	第76図71	L-46	28.0×-×32.3	Fdb
第68図35	L-47	破片	Fb-6	第76図72	K-47	14.0×5.0×16.5	Fdb
第68図36	J-47	破片	Fb-6	第76図73	L-46	23×-×(21.0)	Fdc-1
第68図37	J-46	19.5×8.5×25.0	Fb-7	第77図74	I-49	27.0×-×(33.0)	Fdc-1

遺構外出土土器概略一覧表(2)

土器番号	タイプ名	計測値	分類	土器番号	タイプ名	計測値	分類
第77図75	L-46	28.0××(32.0)	上e-1	第89図112	I-50	23.0××(19.0)	上d-3
第77図76	M-46	21.7×9.0×(27.8)	上e-1	第89図113	K-49	28.0××(23.0)	上d-3
第78図77	I-49	22.0××20.0	上e-2	第89図114	I-50	19.5××(23.0)	上d-3
第78図78	I-51	18.0××(15.0)	上e-2	第90図115	I-53	27.5×10.0×29.0	上d-3
第78図79	I-50	26.0××(32.0)	上e-2	第90図116	I-50	(17.5)×6.0×18.5	上d-3
第78図80	I-J-50-5	32.0××(35.0)	上e-2	第90図117	L-45	11.0××(13.5)	上d-3
第79図81	M-37	27.5××(26.0)	上e-2	第90図118	I-50	15.0××(15.0)	上d-3
第79図82	H-52	24.0××(21.0)	上e-2	第91図119	J-50	27.5××(25.5)	上d-4
第79図83	I-53	28.5××(28.0)	上e-2	第91図120	I-50	23.5××(20.0)	上d-4
第80図84	J-50	25.0××(17.5)	上e-3	第91図121	I-50	22.5×8.5×27.5	上d-4
第80図85	J-50	30.8××(27.0)	上e-3	第92図122	L-45	29.5×10.0×35.0	X群
第80図86	J-50	30.5×8.0×(37.0)	上e-3	第92図123	I-53	20.0×9.0×25.5	X群
第81図87	I-50	27.0×11.0×32.0	上e-3	第92図124	J-46	18.5××24.5	X群
第81図88	J-50	32.5××(33.0)	上e-3	第92図125	L-46	18.0×8.0×25.0	X群
第82図89	I-52	(25.0)×10.5×28.5	上e-3	第92図126	K-47	16.0×7.0×20.0	X群
第82図90		(26.5)××23.0	上e-3	第92図127	I-50	20.5×8.0×13.5	X群
第82図91	I-51	13.5×5.0×14.5	上e-3	第92図128	I-47	13.0×6.5×15.5	X群
第82図92	I-51	(12.5)×6.0×(14.0)	上e-3	第92図129	K-48	12.0×5.5×18.0	X群
第82図93	L-45	9.5×10.5×4.0	上e	第92図130	K-50	21.0××(31.0)	X群
第82図94	J-48	12.0×4.5×12.5	上e	第93図131	I-53	29.0××33.5	大木系
第82図95	M-45	12.0×7.0×15.0	上e	第93図132	J-50	31.4××26.8	大木系
第83図96	I-50	26.0×11.0×29.0	上d-1	第93図133	I-53	31.0××(32.0)	大木系
第83図97	L-45	29.0××(32.5)	上d-1	第94図134	I-50	16.5××(20.0)	大木系
第84図98	M-46	32.5××(34.0)	上d-1	第94図135	J-45	11.3××(16.5)	大木系
第84図99	J-48-49	30.5××(35.0)	上d-1	第95図136	J-49	破片	大木系
第84図100	I-50	13.8××(17.0)	上d-1	第95図137	I-53	破片	大木系
第84図101	J-50	16.5×5.5×15.5	上d-1	第95図138	J-49	破片	大木系
第85図102	J-50	30.0××(26.0)	上d-2	第95図139	I-50	破片	大木系
第85図103	I-50	23.0××26.5	上d-2	第95図140	I-32	破片	大木系
第86図104	I-52	31.3×8.3×40.3	上d-2	第95図141	K-51	破片	大木系
第86図105	J-50	32.5××(21.5)	上d-2	第95図142	M-38	破片	大木系
第87図106	I-50	25.0××31.0	上d-2	第95図143	J-50	破片	大木系
第87図107	I-50	28.5××(19.0)	上d-2	第95図144	J-50	破片	大木系
第87図108	L-45	21.0×7.5×21.5	上d-2	第95図145	J-49	破片	大木系
第88図109	I-51	20.0×(7.5)×27.0	上d-2	第95図146	J-50	破片	大木系
第88図110	I-50	17.5×8.5×21.5	上d-2	第95図147	H-53	破片	大木系
第88図111	I-50	(4.5)××(29.0)	上d-2	第96図148	K-31	(19.2)×6.7×18.2	後期

遺構外出土土器概略一覧表(3)

土器番号	グランド名	計測値	分類	土器番号	グランド名	計測値	分類
第96図149	L-42	26.0×11.0×35.6	後期				
第96図150	L-43	12.6×6.4×7.8	後期				
第96図151	L-34	12.6×11.6×37.4	後期				
第96図152	K-22	24.4×-×[31.0]	後期				
第97図153	J-33	-×10.0×[22.4]	後期				
第97図154	L-43	24.6×11.8×29.4	後期				
第97図155	K-50	(16.0)×(6.4)×9.8	後期				
第97図156	L-45	(9.4)×4.6×10.6	後期				
第97図157		5.5×3.2×4.0	後期				
第97図158	J-25	破片	後期				
第97図159	J-32	破片	後期				
第97図160	M-35	破片	後期				
第97図161	I-35	破片	後期				
第97図162	L-31	破片	後期				
第97図163	K-20	破片	後期				
第98図164	I-31	破片	後期				
第98図165	L-23	破片	後期				
第98図166	L-23	破片	後期				
第98図167	M-38	破片	後期				
第98図168	F-38	破片	後期				
第98図169	I-58	破片	後期				
第98図170	K-25	破片	後期				
第98図171	H-54	破片	後期				
第98図172	K-51	破片	後期				
第98図173	K-22	破片	後期				
第99図174		破片	後期				
第99図175	G-53	破片	後期				
第99図176	J-25	破片	後期				
第99図177	K-32	破片	後期				
第99図178	L-50	破片	後期				
第99図179	L-33	破片	後期				
第99図180	L-31	破片	後期				
第99図181	J-49	破片	後期				
第99図172	L-33	破片	後期				
第99図182	J-25	破片	後期				
第99図184	H-53	破片	後期				
第99図185	K-26	破片	後期				

## 第2節 石 器

第Ⅲ章で述べたとおり遺構内・遺構外出土を一括して分類した。記載は、剥片素材の石器・礫素材の石器の順とした。

### 石 鏃 (第100・101図)

45点出土した。完形品14点・欠損品31点である。遺構内からは16点出土した。特に、1号住居跡からは4点、19号土壌からは10点出土している。

#### I類 無茎鏃

凹基のものが4点出土した。すべて完形品である。1点は19号土壌出土である。

5と11は基部の挟りが浅く、17と207は挟りの深いものである。後者は小型の傾向がある。

#### II類 尖基鏃

凸基のものが3点出土している。すべて完形品である。

8は非常に薄手のもので、柳葉形を呈している。

#### III類 有茎鏃

A 凹基のものが4点出土している。すべて欠損品である。

大きく挟り込んでおらず平基がやや挟れている程度である。

B 凸基のものが20点出土した。欠損品は17点であり、茎部の欠損が多い。

4は切断調整の可能性がある。また、1・21・31は鏃としての機能も考えられる。24の関部分には微量であるが、ピッチ痕が認められる。

C 平基のものが12点出土した。欠損品は8点である。b種と同様に茎部の欠損が多い。

34は関の部分にピッチ痕が認められる。

この他に基部欠損のため、細分できないものが2点ある。

欠損品が多いため、正確な計測値は求められないが、欠損の少ない器体部(茎部を除いた部分)では、長さは、3～5cmに集中する傾向があり、IIIb類ではやや小型のものが認められる。1号住居跡出土の243は、長さ2cmほどで重さは0.5gの非常に小型軽量のものである。

器体の形状は、IIIb類の一部がやや肉厚気味で丸みを帯びているが、全体には、基部に対して長い傾向が認められる。また、基部の形状では、基部端が一方が丸く、一方が平基的なものが多く、相対的にIIIb類としたものが多く含まれる。この、両基部端の形状の相違は、他の多くの遺跡出土の石鏃にも認められる傾向である。本遺跡出土のものでは、15点ほどに認められる。

### 石 槍 (第102・103図)

8点出土した。完形品6点・欠損品は2点である。

遺構内からは3点出土しており、すべて土壌の堆積土中からの出土である。

### I類 基部に石匙様の挟りを作出したもの

38は薄手の作りである。片面の基部側が素材自体の高まりを除去しておらず、また調整剥離がなされていないものを除けば、器体は、全体に非常に丁寧な作りである。先端部側の約半分には非常に光沢がある油脂状の付着物が全体に認められ、特に先端付近には厚く付着している。

槍先としての機能よりも、おもにナイフ的な使用が中心だったと考えられる。片方の基部寄りの側縁に、片面からの小剥離がなされており、この剥離は、刃部調整の後に行われていることから、ナイフとしての使用のために把握用の器体調整として行われたものと推察される。

41は細身で肉厚のものである。石匙の可能性も考えられたが、刃縁が石匙に見られる細かい調整を行っていないことから、本類とした。

### II類 茎部を有するもの

118は茎部の破片であり、尖頭部を欠失している。

### III類 その他を一括した

5点出土した。233は薄手で全体に丁寧な作りであるが、先端部寄りに挟り状の欠失部分が認められる。

40は器体全体に調整剥離がなされておらず、粗雑な作りである。

石鏃 (第103図)

7点出土した。欠損品は3点で、遺構内からの出土は認められない。

### I類 明確なつまみ部分(頭部)を有するもの

1点出土した。

46は楕円形状のつまみ部分を有するが、側縁の一部を加工したにすぎない。鏃部は1cmのところで欠失している。

### II類 石鏃を転用したもの及び石鏃に形状が類似しているもの

6点出土した。欠損品は2点である。

#### A 石鏃を転用したもの

10は、一端が石鏃の尖頭部をそのまま残すが、茎部が延びて鏃部となっている。他の5点とは異なり、鏃部が一個である。

2と29は、小型の凸基有茎石鏃の転用品で、2は先端部を側縁から大きく挟り込んでいる。30も転用品で2と同様に先端部を挟り込んで鏃部としている。欠損品である。

B 肉厚の凸基有茎石鏃の両端部を延ばしたような作りで、両先端が鏃部となっている。

20と117は、横長剥片の両端部を鋭利に加工したもので、一側縁の中央部に打面の一部が残っている。117も打面と考えられる自然面が一側縁に残存する。加工は打面と反対側縁と鏃部に行われ、反対側縁は鋭利な刃部を形成している。器体の中央の肉厚部分には、大きな加

工痕跡は認められないが、錐部との境には挟りが作出されている。

#### 石篋（第104・105図）

20点出土した。完形品12点・欠損品8点である。遺構内からは7点出土している。

#### I類 刃部がほぼ直線を呈するもの

##### A 形状が台形または刃部に最大幅をもつもの

5点出土した。欠損品は2点である。

細かい刃部調整をしたものと、粗い剥離によるものがあり、前者は器体全般にわたって調整がなされている。51の刃部裏面は剥離面をそのまま残存させている。50は腹面にやや粗い剥離痕が認められるが、基端部にも刃部同様の丁寧な調整がなされ、細身の石篋として充分機能できるものである。59は欠損品で、石槍の基端の可能性も考えられるが、本遺跡において平基の石槍の出土が認められないことから、本類とした。59を除く4点は片刃である。

##### B 形状が長方形のもの

4点出土した。欠損品は1点である。

48と57は、打製石斧的な形態である。52は刃部の作り替えが行われており、本器種中もっとも刃部角が小さい。4点とも両刃である。

#### II類 刃部が円形を呈するもの

7点出土した。欠損品は1点である。

##### A 基端が幅狭になるもの

3点出土した。229は粗雑な作りであるが、49と222は器体調整が丁寧である。49は側縁の一方が側縁側から剥ぎ取られている。切断調整がなされたものと考えられる。3点とも片刃である。

B 4点出土した。47は刃部の裏面に剥離面を残す。全体に調整はなされているが、刃部は簡単な調整である。221は片刃で小型のものである。他の2点は肉厚のもので両刃である。

このほかに基部破片が4点ある。

刃部角では、45度～65度に分布し、50度がもっとも多く、片刃のもの角度が大きいく。

#### 石匙（第106・107図）

12点出土した。欠損品は3点である。遺構内出土は2点である。

#### I類 縦形石匙

8点出土した。

先端部が平坦なもの1点、先端部が丸みを持つもの3点、先端部が尖頭状を呈するもの2点である。先端部が欠失しているものが2点ある。

おもに、片面（背面）に調整剥離が行われている。挟り部分は両面からの剥離によって作出

されている。調整が器体の中央部分まで及んでいるものは2点で、先端部が尖頭状のものである。他はほとんど縁辺部分に限られている。64と112は、先端部の刃部角が見かけ上では直角に近く、石筥状の刃部形態を呈する。油脂状の付着物による光沢が認められるものが2点ある。

## Ⅱ類 横形石匙

4点出土した。

すべて、縦長剥片を素材としている。61はバルブの両横に、65はバルブと側縁に、149はバルブの反対辺と側縁に挟りを行って、つまみを作出している。調整は側縁を中心になされており、149は刃部に挟りが作出されている。66はつまみ部分を素材の側縁に持つもので、つまみ部分を残して側縁加工している。縦形のものに対して刃部の角度が小さい。

### 不定形石器 (第107~121図)

143点出土した。遺構内出土のものは28点である。

## I類 不整形の剥片を素材とし、連続した細部調整が行われているもの(スクレーパー類)

### A 縦長剥片の側縁から端部まで細部調整が行われているもの

7点出土した。遺構内出土が2点ある。218は、基端部まで細部調整が行われているもので、石匙の基部欠損品に基部再調整を行ったものの可能性も考えられる。247は、基端部の一部を除いて周縁に細部調整が行われているが、調整は器体全面には及んでいない。114は、先端部が尖頭状を呈する。

### B 縦長剥片の側縁に細部調整が行われているもの

7点出土した。

一側縁に調整が行われているもの5点、両側縁に行われているもの1点である。119は、先端部の形状が石筥に類似しているが、調整がほとんど行われていないことから本類とした。両側縁に調整の認められる83は、反対面からの調整が行われ、一方は非常に鋭利な刃部となっているが、他方は粗い調整である。

### C 縦長剥片の端部に細部調整が行われているもの

2点出土した。遺構内出土は1点である。

87は石筥の可能性も考えられるが調整は粗いものである。203は非常に内湾した剥片を素材としている。

### D 横長剥片を素材としているもの

15点出土した。遺構内からの出土は認められない。

おおむね、打面の対辺に調整を行っている。88は刃部の約半分が鋸歯状に調整されている。

67と111は、打面直下に挟り状の調整が加えられており、横形石匙に形状が類似する。この2点は打面(つまみ状の頂部)が内湾した面を構成し、中央が貝殻状に肉厚である。この特徴は

石錐とした20等にも認められるものである。77は、やや大型のものでほぼ全側縁に丁寧な調整が行われている。96は打面を除く3辺に調整が認められる。

E 尖頭状に細部調整が行われているもの

20点出土した。遺構内出土は1点である。欠損品と考えられるものが6点あるが、不定形石器の性格上断定はできない。おもに全面にわたって調整が加えられているが、定形石器のいずれとも分類し難い。また、完成品か未製品かの区別も判然としない。

多くは縦長剥片を素材としているが、横長剥片を素材としているものも1点認められ、他と同様の調整が行われている。おおむね、先端部が薄い傾向があり、先端に剥離面を残しているものが2点ある。93は、両極石核を素材としたものと考えられるもので、一部分に尖頭器状の調整を行っている。表皮等が残存している。

F 抉り状の調整が行われているもの

10点出土した。遺構内出土は4点である。

連続する抉りで鋸歯状を呈するものが1点ある。抉り以外に調整痕を有するものが主体を占め、抉りだけのものは1点である。101は、切断調整がなされた剥片である。

G 形状が三角形を呈するもの

5点出土した。

56は、二等辺三角形を呈し、三辺とも調整がなされているもので、下辺の一端に錐の先端状の調整がなされ、肉厚となっている。一部に素材自体の剥離面を残している。

91と144は、切断面を有している。162は、石匙などの欠損品の可能性もある。

H 形状が楕円形のもの

3点出土した。

3は、非常に薄手の剥片を素材としており、一部分を残してほぼ周縁全体に調整が行われている。138は、先端部に素材自体の剥離面を残している。

I 形状が方形のもの

5点出土した。このうちの2点は、両極の調整剥片を素材とし、1点は両極石核を素材としている。前者は肉厚である。楔形石器の可能性も考えられるが、相対する辺に階段状の剥離痕が観察されないことから本類とした。

J 定形石器または不定形石器の破損品と考えられるもの

11点出土した。遺構内出土は3点である。

4点は、切断調整が行われている。調整はすべて剥離面側からである。

II類 ビエス・エスキューユ（楔形石器）

19点出土した。遺構内出土は2点である。

#### A 調整剥片を素材としたもの

6点出土した。2個一対の剥離痕を有するものは2点ある。2個二対のものは1点で、3辺および一辺が平坦なものが3点ある。平坦面にはダメージ痕が認められる。

#### B 素材が両極打法によるもの(礫素材)

13点出土した。全て小型の礫を打割したもので、表皮を片面に残すものが5点で、1点は一部分だけに残っている。一側縁に表皮を残すものは2点で、まったく残っていないものが1点ある。使用によるダメージ痕が残っているものは9点で、2個一対のもの8点、2個二対のもの1点である。

この他に、両極剥片が4点ある。

Ⅲ類 剥片の一部分に細部調整が行われているもの、及び何らかの使用痕跡が認められるものを一括した(R-フレイク・U-フレイク類)。

38点出土した。遺構内出土は10点である。

形状・調整の位置及び使用痕跡は多岐にわたるため、細分しなかった。

#### 磨製石斧 (第122・123図)

#### I類 擦切磨製石斧

15点出土した。完形品5点・欠損品10点で、遺構内出土は4点25土・33土(2点)・41土である。

欠損品中、刃部が残存しているもの4点、基部が残存しているもの3点、中央部分が残存しているもの1点、略完形品で刃部の一部を欠失しているもの2点である。

おおむね、擦り切り後の潰しは磨消しきっているが、377は基部側の側縁部に若干残存している。基部端は、ほぼ全資料とも平坦面を作出しており、扁平なものを除いては側縁部も平坦に作られている。器体の面にも擦り切り痕のあるものが2点ある。

刃部は、ほとんどが両刃である。平面形状では、円刃3点・平刃2点・偏刃3点である。

4・23・24は、小型で扁平な石斧で、23は基部再利用の可能性がある。片刃にちかく、先端には細かい使用痕が観察される。24は先端部が摩耗して面にちかい。欠損している基部?にも刃部を作出した痕跡があり、何度も再加工を繰り返して使用したものと考えられる。

309は、基部側の切断部を敲打具に転用しており、刃部は縁辺部を研磨することにより平坦な面に作り替えられている。326は、切断面の一部に研磨の痕跡が認められる。

384は、小型で棒状の細長い石斧で、片刃であり基部が尖頭状を呈している。刃部の先端に細かい剥離がみられる。「ノミ」のような用途が考えられる。

#### Ⅱ類 I類以外の磨製石斧を一括した。

24点出土した。完形品6点・欠損品18点で、遺構内出土は7点5土・14土・28土(2点)・33

土(2点)・41土である。

欠損品18点中、刃部が残存しているもの7点・基部が残存しているもの9点・中央部分が残存しているもの1点・略完形品で刃部が欠失しているもの1点である。

10cm未満の小型で扁平なものが4点ある。22は粗雑なつくりのもので片面がほとんど自然面、もう一方の面は打ち欠きによる粗い面を多く残し、刃部と側縁の一部を研磨しているにすぎない。これに対して、21は、全面非常に丁寧な研磨がなされており、観察される面では潰しの痕跡は残っていない。片面及び面の一部は剥離している。360は、刃部の一部が破損したため再加工したものと思われる。17は、中央部で折損した刃部側破片を用い、新たに基部を再加工したと思われる。

大型の類は、ほとんどが定角式であるが、基部端がほぼ平坦に作出されているものと、丸いものが認められる。後者は、潰し整形時の敲打痕が多く残存する傾向がある。刃部は、両刃である。

全体によく研磨されているが、7はほとんど全面に敲打痕が残り、非常に簡便な研磨を施したにすぎない。本格的な研磨以前の未製品の可能性も強く、使用痕も非常に不明瞭である。

破損後に他の用途に転用したものが2点認められる。これらは基部を使用しており、13は折断面に敲打及びスリを加えている。また、基部端には、両面からの研磨がみられるが、スリ石としての使用が石斧の刃部として再加工を意図したものかは不明である。

I・II類ともに、着柄に伴うと思われる痕跡は不明瞭で、1及び376の側面に軽微な荒れを確認したにすぎない。

#### 石錘 (第123図)

3点出土した。すべて完形品である。245は中央部が分厚い円磔を利用し、その短軸上に決りを有する類で、一方は両面から、他方は片面からの剥離によって作出されている。246は、台形状の磔の短軸上に2箇所・1端部に1箇所の決りを有するもので、短軸上の決りは剥離後潰しが成されている。247は、小判形の磔の長軸上に、両面からの剥離により1箇所の決りを作出しているもので、両面中央部に敲打痕が認められる。また、一側縁の1箇所に片面からの剥離痕が認められるが決りにまでは至っていない。他の器種の可能性も考えられる。

#### 半円状扁平打製石器 (第123～125図)

形状、及び刃部に剥離痕を有する点で、本石器と類似するスリ石(三角柱状磨石)との混同を避けるために、次の様に本器種を規定した。

- 1 基本的には、板状節理による扁平磔を使用し、剥離により周縁部を形成している類
- 2 板状節理以外の素材のものについては、剥離によって器体の厚さを減じている類
- 3 主に、刃部・機能面を直線部分に有している類

以上の点をふまえて次のように細分した。

I類 板状節理のもので周縁を打ち欠いている類

II類 原石の表面を打ち欠いている類

III類 抉りをもつ類

IV類 板状または、断面が菱形ないし三角形の長方形に近い素材を使用している類

IV類は、形状及び器体加工の点からやや異質と考えられるが、刃部の形状が類似しており、同種の機能が考えられることから、本石器の亜種として分類した。

I類 22点出土した。完形品1点・欠損品21点で、遺構内出土のものは6点である。1点を除いて全て欠損品である。

器体の成形は、剥離によって成されており、周縁だけに限定され、器体中央部には及んでいない。薄手のものは周縁際だけで、自然面が多く残存する。やや厚手のものは中央部付近まで剥離が及び、自然面は少ない。縁辺部は非常に薄く作出されており、直線部分がやや鋭角な感じを受けるが、全体的には同程度の剥離である。肉厚のものに関しては、剥離はやや長めの傾向がある。

26は、片面の周縁際を多く除去し、器体の厚さはそのまま、周縁部だけが約半分の厚さとなるように成形されている。66は剥離後、全面に研磨が成されている。59と363は、弧状部を石刀のように研磨している。また、端部寄りに大きな剥離が認められるものもある。

形状は、半円形を呈するが、ほとんどが欠損品のため断定し得ない。弧と弦の部分が接する部分（端部）では、丸みを持つものと抉り状またはやや直線的な形状のものがある。後者は前者よりやや厚みがある。

使用痕は、ほぼ、直線部分に擦痕として認められるが、幅が非常に狭いために詳細は不明である。広めのもは、機能面に対してやや横方向の移動がみられる。また、長さ・幅に対して湾曲面を構成している。使用痕とは断定できないが、弧状部に擦痕が認められるものが4点ある。使用による面の幅は1mmから1cmである。

刃部の使用痕以外には、平坦面に径3cm程の敲打による荒れや若干のくぼみを有するものが2点（64・351）ある。

欠損部位は、器体の中央部において多く、機能面に対してやや斜めの角度で折損しているものが多い。

II類 7点出土した。完形品3点・欠損品4点で、遺構内出土のものはない。I類に比して欠損の度合いが少ない。

器体の成形は、主に原石の片面を打ち欠いて厚さを減じており、剥離により周縁等を加工しているものである。自然面の残る側にはあまり加工が施されていないが、この面の直線部分に

大きな剥離が成されているものが4点あり、反対面がほぼ平坦に加工されているのと好対称をなしている。素材の厚さがほぼ均一なものにおいては、一端側に大きな剥離を加えることによって機能面の厚さを減らしている。

形状は、半円形および長方形を呈し、I類ほど顕著ではないが、一端がやや丸く、一端が直線的な傾向がみられ、後者がより肉厚である。また、弧状部の器体の中で最も肉厚な部分を打ち欠いているものが3点ある。この部分は、これらの剥離による荒れが若干摩滅している。

使用痕は、直線部分に擦痕として認められる。また機能面には細かい凹凸がみられ、後述するスリ石と同様に、スリ・敲打の動作が連続的に行われたものと考えられる。I類よりも使用頻度が高く、使用面の幅も1cmから1cm5mmと広い傾向がみられる。機能面は、長さ・幅に対して湾曲しており、肉厚の側が端部にかけて湾曲するものがみられる。

刃部の使用痕以外では、平坦面に径2cm程の凹み及び帯状の敲打による荒れが認められるものがある。50は、弧状部の頂部にスリの痕跡がみられる。

欠損部位は、器体中央部に多く、やや斜めに折れている。端部が丸みを帯びている35と38は残存する端部とは逆側に、また、端部が直線的である34は、残存する端部側に向けて折損している。

石質では、安山岩3点・凝灰岩・頁岩・砂岩・閃緑岩各1点で、I類とは異なり素材にばらつきがみられる。

Ⅲ類 1点出土した。28号土壌の堆積土中からの出土で欠損品である。破片のため全体像は不明であるが、残存部分は周縁を打ち欠き成形している。挟り部分は剥離によって作出され、擦痕が観察された。特に中心部（最深部）は滑らかである。

機能面には、最大幅1cm5mm程の擦痕が認められる。使用による面は、機能面の幅に対してやや湾曲している。

Ⅳ類 11点出土した。完形品4点・欠損品7点で、遺構内出土のものは1点である。

機能面の状態から半円状扁平打製石器の亜種としたものである。ほとんど素材自体の特徴を残しており、機能面を剥離により作出し、両端部を潰し状の敲打によって調整しているだけである。完形品および略完形品では、長さは15cm程である。

2稜を使用しているものが7点ある。機能面の状態は、I～Ⅲ類と類似しており、やや湾曲した面を構成している。使用による面の最も幅が広いものは44と222で約1cm5mmである。

刃部の使用痕以外には、平坦面に敲打痕または凹みを有するものが3点（61・172・182）認められる。

扶入扁平磨製石器（第125図）

3点出土した。

304は、31号土壌の堆積土中から出土した先端部の破片で、L-48グリッドから出土した362と接合した資料である。この2点は約40m離れて出土したものである。

基部を欠失しているが、全面に研磨がなされ、一側縁に半円状扁平打製石器と同様な剥離による刃部が作出されている。刃縁には擦痕が認められる。

29は、基端部の破片で全体に研磨されているが、器体整形時の剥離痕が多く残存している。挟り部分は、潰し整形が成されている。直線部分には、刃部が作出されており、刃縁には、擦痕が認められる。挟りを有する半円状扁平打製石器ともとれるが、挟りが非常に丁寧に作出されていることから、本類とした。

#### 北海道式石冠 (第126図)

スリ石の一形態であるが、敲击・スリにより帯状に把握部(高橋正勝1971)を作出しているものをこの類として単独に取り扱った。

9点出土した。完形品は3点である。土壌の堆積土中から2点出土した。

28は、把握部が器体を一周するが、片面の調整は浅い。2点の完形品は、おおむね溝状に作出されている。欠損品の内4点は、溝の残存状態から一周していたものと推察される。

350は、磨製石斧の転用と考えられるもので、切断部には加工の痕跡は認められない。

84は、端部が若干凹み、両面に帯状の敲打痕をとどめるが、器面の荒れは軽微なものである。

機能面は、おおむね1面であるが、100は上下2面を使用している。また、機能面の幅は、100と249が約4cmであり、350が最も狭く約2cmである。

出土した全ての北海道式石冠には、規模の大小の差はみられるが、機能面側からの剥離が認められ、また、端部寄りに位置する傾向がある。器体の全容を把握できる完形品の3点についてみると、36と251には機能面の幅を減じる程の大きな剥離がみられる。

また、把握部分については、一方が機能面により近く、他方がやや遠めに作出されており、全体に斜向している傾向が認められる。これらの剥離及び把握部の傾向は、作業上の持ち易さ・握り易さの必要性から生じたものと考えられる。

#### スリ石 (第126～131図)

96点出土した。

素材の形状で大別し、器体調整の状態で細分した。

I類 長楕円形の礫を素材とし、側縁を機能面としているもの。

II類 円礫・円盤状の礫を素材としたもの。

III類 そのほかのスリ石。

I類 長楕円形の礫を素材とし、側縁を機能面としているもの

A 機能面に剥離の痕跡が認められないもの。

4点出土した。

85は、一方の側縁がやや薄い礫を素材としており、薄い方の側縁を機能面として使用している。71と97は、断面がほぼ円形で肉厚の礫を素材としており、前者は2面を主要な機能面とし、両端部に敲打とスリの併用による痕跡が認められる。後者は両側縁を機能面とし、一端に敲打痕が認められる。また、ほぼ全面に研磨様のスリが施されている。218は、一側縁の縁辺部に向かい、両面からスリを行っているもので、側縁端が磨製石斧の刃部のような鋭角な稜となっている。

B 機能面に剥離痕が認められるもので、器体整形がなされていないもの。

24点出土した。欠損品は9点である。遺構内出土は1点(28土)である。

三角柱状磨石を含む。おもに一側縁を機能面としているが、断面形状が三角形のものには2稜使用しているものもある(83・109)。機能面の剥離痕は、おおむね使用に伴うものと考えられ、剥離しきれずに剥げかかっている状態のものも認められる。この痕跡とは別に、意識的な剥離を施したものが9点(43・69・73・74・75・80・81・95・115)ある。半円状扁平打製石器の刃部調整と同様に、厚さを削減させる目的のものと、これとは別に1～2箇所大きな剥離を施しているもののが認められる。後者の剥離の中には、その部分の機能面の幅を大きく減じさせているものもある。端部近くに位置することから、使用時に把握し易くする手掛かり(指を掛ける部分)の可能性が考えられる。弧状部(機能面の対辺)の一部にスリまたは剥離痕を有するものが9点あり、器体の主に平坦面へ敲打による器面の荒れ程度の痕跡を有するものが14点ある。前者は、器体全体の形状を変えるまでには至らない簡易な器体調整と考えられ、使用時によく手と馴染むようにしたものと推察される。また、後者は滑り留めの調整痕と考えられる。これらの調整痕は若干摩耗している。

C 端部を剥離・敲打によって成形しているもの

9点出土した。欠損品は6点である。遺構内出土は2点(28土・39土)である。

72は、28号土壌から出土したもので、318と接合した資料である。

器体の加工は、剥離-敲打の順になされているが、剥離だけのものも1点認められる。また、端部に大きな剥離を行っているものもある。端部の形状は、先細り、または、丸みを帯びたものと決り、または、直線状のもののが認められる。破片の折断面の方向では、後者に向かい折れている傾向が認められる。端部の形状および折断面のこの傾向は、B-E種全般に認められる。

また、B種で述べた器体の荒れは8点において認められ、37と316においては凹みとして確認された。機能面に大きな剥離が認められるものが1点ある。78は、端部の加工が剥離によつてなされたもので、刃部的に作出されており、中央部に潰れが認められる。

D 端部と機能面の対辺（弧状部）を成形しているもの

5点出土した。欠損品は4点である。

端部の加工は、C種と大差が認められない。破片資料がほとんどであるため、全容は把握し切れないが、機能面に対する辺の加工は、素材の形状に沿って行われており、大きく形状を変えているものは認められない。細かい剥離を施した後に敲打によって凹凸を減らしているが、敲打の程度には差が認められる。52は、もっとも肉厚な部分に大きな剥離がなされており、敲打痕はほとんど認められない。この剥離部分には摩滅している部分があり、使用時における手摺の可能性が考えられる。58は、大型のもので機能面の幅が広く、側縁の加工は機能面の端から同規模に丁寧に行われている。45は、機能面の両側縁に帯状のスリ面があらかじめ作出されており、使用による剥離はこの面を破損させている。器体に荒れの認められるものが4点ある。

E D種に器体自体の加工が加えられたもの

8点出土した。すべて欠損品である。

おおむねD種の平坦面に潰しが施されているものと、機能面の対辺を丁寧に加工しているものがある。39は、端部を小剥離と敲打、対辺は片面からの小剥離と敲打、器面は全体に敲打による潰しがなされており、端部には挟り状の深い敲打が行われている。36は、磨製石斧の器体成形と同様に、細かい剥離を加えた後に全体を敲打による潰して成形しており、先細の形状に作出している。30と31は、機能面に大きな剥離痕を有する。また、主たる機能面のほかに対辺も使用しているものが2点（56・63）あり、63は端部に両面からの挟りが認められる。

この他に、本類に含まれると考えられるもので、機能面側からの大きな剥離のため器体の半分以上を欠失しているものが3点ある（25・32・76）。

また、本類の破片資料と考えられるもので、小破片のため細分できなかったものが13点ある。

II類 円礫・円盤状の礫を素材としたもの

A 小型で球状のもの

10点出土した。遺構内出土は1点（27b土）である。

器面は、径または幅が1cm以上のスリ面の集合体として構成されており、完全な球になっているものはない。

232は、凹みが1箇所認められる。233と338は、スリが全面に及んではおらず、一部分に敲打と併用したスリの痕跡が認められるものである。235は、断面形が三角形を呈し、243は、剥離によって一面が構成されている。239と240は、敲打及びスリの連続した動作による痕跡を有するもので、自然面を残している。

B 円盤状のもので、側縁の中央部に稜を構成するもの

6点出土した。この類は、側縁部の平坦な2面から斜位方向にスリ込んでいるもので、側縁

の中央に稜が構成されている。スリは擦痕ではなく、研磨の痕跡として認められる。また、連続した帯状の面構成ではなく、幅 3 - 4 cm程のスリ面が連続したものであり、各面の中央部がやや湾曲する傾向がみられる。器体を一周するものが基本形であると考えられる。230は、両端部だけに研磨面が認められ、238は、側縁の端部寄りに未加工の部分が残っている。370は、側縁の 6 割程が加工されており、片面の約半分が欠失している。236は、両面の中央部に擦痕が認められ、229は側縁の一部に敲打による凹みがあり、敲打後に研磨がなされている。この凹みが、形を整えるためのものとする、本類は石製品の可能性が強くなる。

365は、両平坦面にスリと敲打痕、両側縁にスリ、両端部に敲打痕が認められる。

### Ⅲ類 そのほかのスリ石

8点出土した。遺構内出土は1点である。

352は、51号土壌出土で、扇面形を呈しており、頂部の肉薄部分にスリの痕跡が、また、両面に凹みが認められる。255は大型の礫で、端部に打ち欠き・敲打・スリの痕跡を有するもので、スリが最終痕跡である。93と250は、スリ石Ⅰ類の破片を転用したもので、全面を機能面としている。

373は、棒状の礫を素材とし、両端と4稜を使用している。

凹石 (第131 - 133図)

41点出土した。完形品31点・欠損品10点である。

凹みを有する面の数により細分した。使用面としたものは、明瞭な凹みを有するものとし、器面の荒れだけのもの及び欠損品は細分の対象から除外した。

Ⅰ類 1面使用のもの

Ⅱ類 2面使用のもの

Ⅲ類 3面以上使用のもの(断面形状が円等の幅・厚さの差が接近しているものに関しては、使用部分の数によって判断した。)

Ⅰ類 7点出土した。遺構内出土は1点(41土)である。

おもに、使用痕跡は平坦な面に認められる。141・252・331の3点は、台石の可能性も考えられる。

Ⅱ類 14点出土した。遺構内出土は2点(17土・41土)である。

素材が細長いものが2点ある。他の12点は、円形または小判形の円礫を素材としている。おおむね、平坦な面に使用痕跡が認められ、各面の凹みは1箇所のものが多い。2箇所以上のものである。両面に2箇所ずつのもの1点、片面が2箇所のもの5点、片面に3 - 5箇所のもの2点である。欠損品の内7点はこの類のものと考えられる。

150と201は、側縁に擦痕が認められる。

Ⅲ類 10点出土した。遺構内から出土したものはない。

両面と一側縁を使用しているもの4点、両面と両側縁を使用しているものが5点ある。142は両面と両側縁を使用しているが、一部は端部にまでおよんでいる。この他に、148は4面と2稜を使用しており、面にはスリの痕跡も認められる。

敲き石（第134～135図）

素材の形状及び使用痕跡の位置により細分した。器面の荒れ程度のももこの類とした。

I類 おもに、平坦面に敲打痕を有するもの

Ⅱ類 おもに、端部および側面に敲打痕を有するもの

I類 素材の形状等で細分した。

A 平面形が円および小判形のもの

8点出土した。欠損品は1点である。遺構内出土は3点（9土・34土2点）である。使用痕跡は、両面のほぼ中央に径2cmの円形または幅広の敲打痕として残っており、敲打の度合いが進めば凹凸に分類されるものである。5点は側縁の一部に擦痕が認められる。

B やや大型の礫で卵形または不整形のもの

7点出土した。うち2点は欠損品である。遺構内出土は1点（18土）である。

主に、平坦な部分を使用しており、2面を使用しているものが5点ある。3面使用しているものが1点、欠損のため不明のものが1点ある。

C 細長い礫を使用しているもの

5点出土した。欠損品は2点である。遺構内出土は2点（1住・39土）である。

素材は、平面形が細長い三角形を呈し、幅広い側の平坦面に敲打痕が認められる。292は肉厚のもので、4面に敲打痕が認められる。他は一面に主要な痕跡があり、片面は微細な荒れ程度である。

Ⅱ類 素材の形状で細分した。

A やや大型の細長い礫を使用しているもの

4点出土した。欠損品は2点である。

189と203は、素材自体に内湾する面を有するもので、前者は幅の広い側の両面と端部および側縁に敲打痕を有するものである。後者も両面に敲打痕を有し、幅の広い側の端部に帯状の敲打痕が巡っている。また、幅の狭い側の側縁部にも規模は小さいが帯状の痕跡が認められる。

B 三角形にちかい形状のもの

2点出土した。

129は、3箇所の端部および2面に敲打痕が認められる。123は、両面と一端部および一側縁に敲打痕が認められる。

C 拳大の円礫を素材にしているもの

8点出土した。欠損品は4点である。

やや角張った数箇所の部分に敲打痕が認められる。使用痕の観察からは、単に敲打だけによるものではなく、スル動作との連続によるものも認められた。

同じような規模の礫よりも若干重いような感触を受ける。

D その他のものを一括した。

111は、ほぼ方形の素材を使用しており、連続する2辺に帯状の敲打痕が認められる。

336は、大型の礫で、一側縁の部分だけに敲打痕が認められる。

その他に欠損品が5点ある。

全体にスス状炭化物の付着が認められるものが多い。

砥石 (第135図)

3点出土した。248は凝灰質砂岩製で、一部欠失している。中央部がやや内湾する3面と平坦な2面からなる。253は、安山岩の板状節理の礫で、片面に1条の溝を有する。溝の周囲はスラれている。溝は長軸と短軸線上の両方で湾曲している。254は、2条の溝を有する面とやや湾曲した2面が研磨面となり、裏面は台石状の使用によるため荒れが強い。また、1箇所に凹が認められる。

石皿・台石

石皿と台石の破片が30点出土した。このうち石皿と断定できるものは、27号土壌出土の大型の欠損品(355)だけである。この石皿は、大きく両面が湾曲しているもので、安山岩製である。このほかには276が石皿の可能性もあるが、器面が加熱による火バネを起こしているため断定し得ない。

台石とした28点は、すべて破片である。

そのほかの礫を素材とした石器 (第136図)

367は、欠損品をスリ石に転用したものと考えられるもので、欠損以前に全面が非常に丁寧に研磨されている。研磨用のスリ石としての痕跡は、欠損前の痕跡よりやや粗い。破損による研磨面の途切れた部分は、使用時の手摺によるものか滑らかになっている。この痕跡は、研磨面から破損部にかけてのスリによるものではない。欠損前の器種は不明であるが、形状及び研磨面の状態から非常に大きい磨製石斧の破片である可能性もある。

136は、細長い棒状の礫の両面中央に2個ずつの隣接した凹みを、一方の側縁部には敲打による抉り状の凹みを、他方の側縁には2条の帯状の敲打痕が認められるもので、両端部は球面状のスリ面を構成している。凹み及び敲打痕は2列の線上に並ぶもので、使用の痕跡としてではなく意図的に作出した可能性が強い。

228は、杵状を呈するもので、一端を球面状のスリ面としている。器体の中央やや下寄り最もくびれている。

126と386は、細長い小礫の端部を打ち欠いたもので、前者は両端部を、後者は一端を打ち欠いている。

#### 搬入礫

遺構内外から、流紋岩の柱状節理の礫が数十点出土した。41号土壌内からは20点程の破片が出土し、このうちのほとんどが接合した。長さ30cm程までは復原できたが、これ以上長くは接合できなかった。松山調査員によると、下北半島の懸掛け岩付近から産出された礫の可能性があるということである。

(白鳥文雄)

### 第3節 土製品・石製品

#### 1. 土製品

本調査区から25点出土した。鐎形土製品、土偶、土器片再利用土製品、その他の土製品の4種類に分類できる。遺構内から出土した土製品は1点で残りは遺構外から出土したものである。

##### (1) 鐎形土製品 (第138図1・2)

遺構外より2点出土し、いずれも欠損品である。

鐎身の横断面形及び大きさは、第138図1は、楕円形で、現存高4.2cm、現存幅3.2cm、厚さ0.5cm、第138図2は円形、現存高3.9cm、現存幅2.4cm、原さ0.5cmである。ともに開口部は内湾し、外面に沈線文様が施されている。胎土・焼成は、ともに良好である。どちらも鐎身内壁に煤状の付着物はみられない。時期はともに縄文時代後期前葉のものと考えられる。

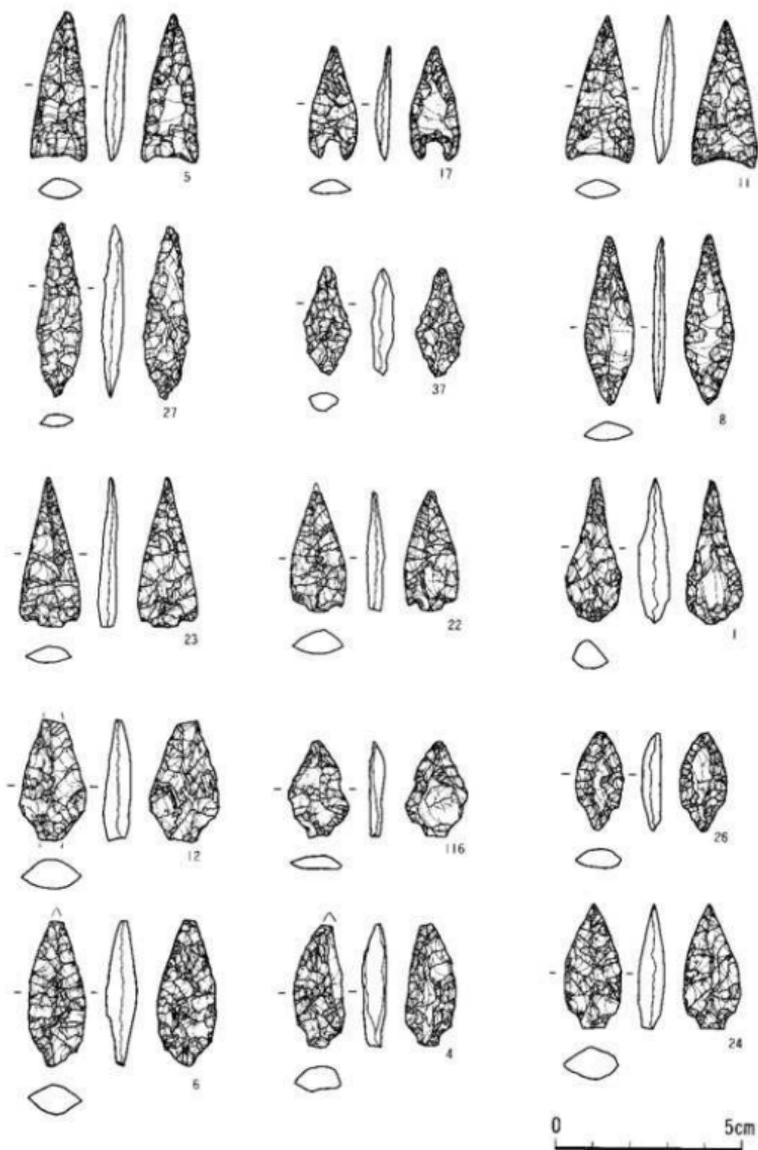
##### (2) 土偶 (第138図3～8)

遺構外より6点出土した。すべて欠損品である。グリッド別にみると、I-53... 1点、L-28... 1点、K-51... 2点、K-53... 1点、L-50... 1点である。

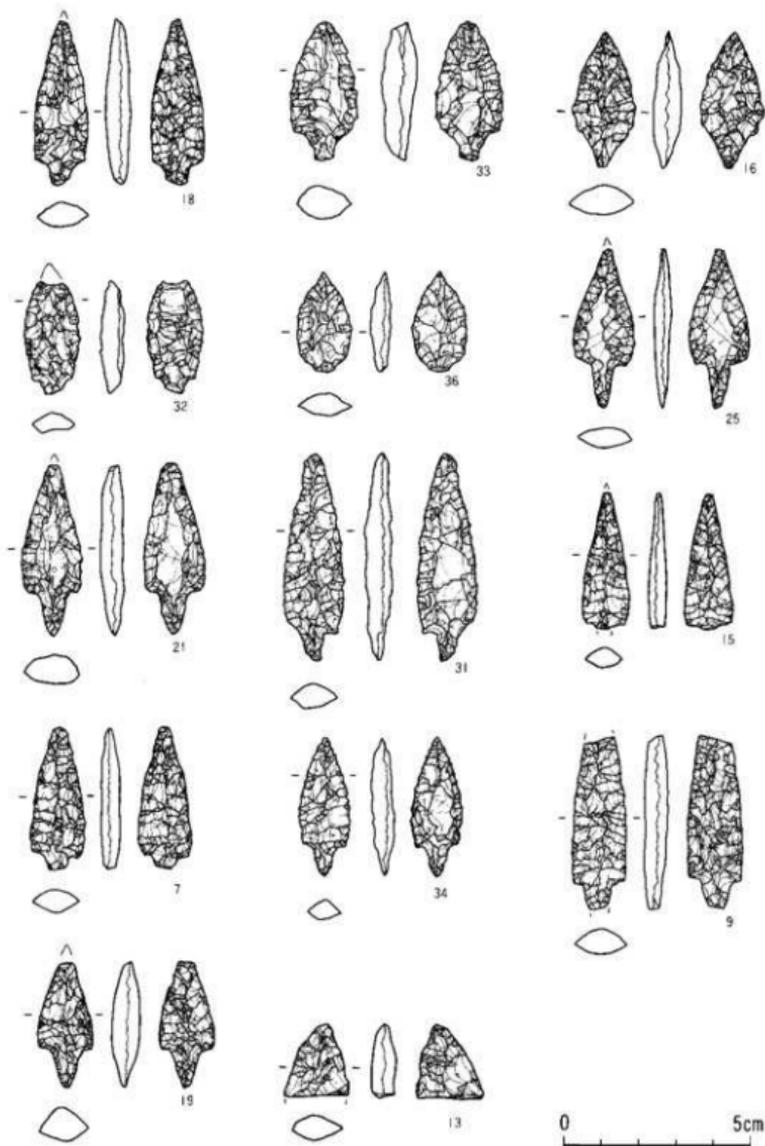
3は、土偶の胸部片と思われ、大きさは現存高3.3cm、現存幅2.6cm、厚さ2.1cmである。胎土・焼成はともに良好である。内外面ともに結条体圧痕による同じ文様が施され、外面に渦巻き状にまたその外側にRL縄文が施文されている。時期は、円筒土器文化期であろう。

4は、板状土偶の右肩から胸部にかけての破片とみられ、大きさは現存高2.9cm、現存幅3.6cm、厚さ0.8cmである。胎土・焼成はともに良好である。正面には乳房と思われる小突起が貼付付けられ、その腕側に不規則な沈線文様が、また背面には押し引き状の沈線文様がみられる。縄文時代後期のものと考えられる。

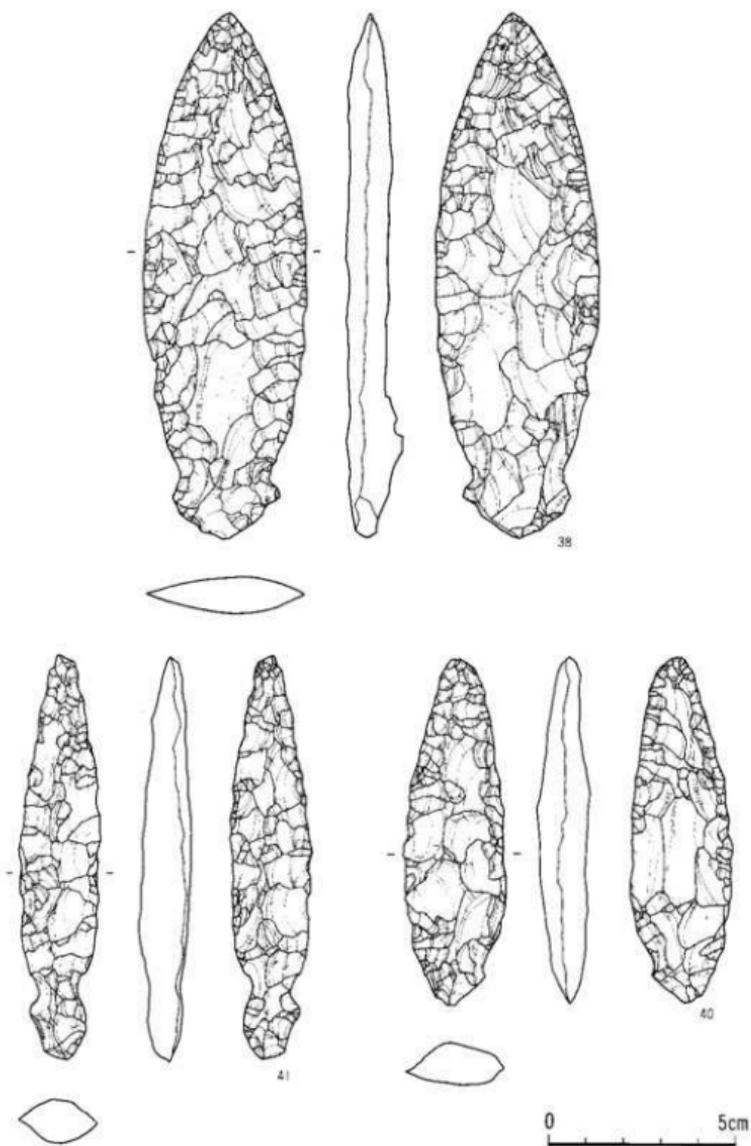
5は、板状土偶の頭部、6は、肩部から脚部にかけての体部で、5・6は同一グリッドの同じ層から出土したので同一個体と考えられる。5の大きさは、現存高3.1cm、現存幅2.6cm、厚



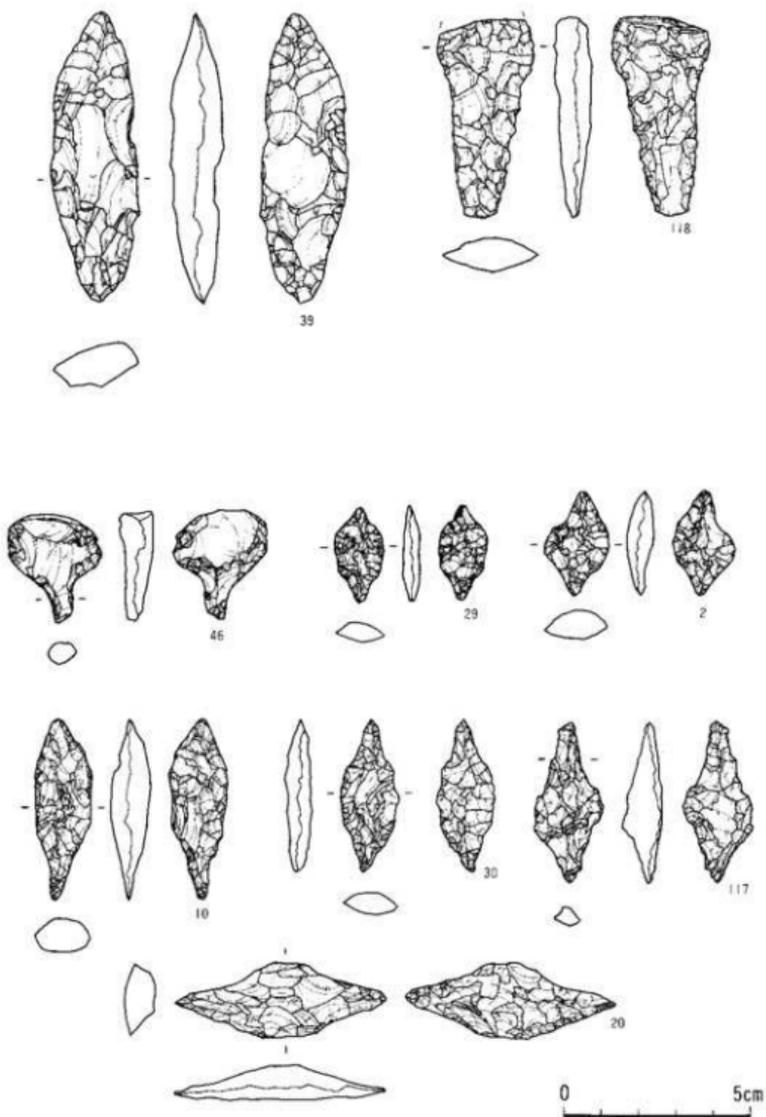
第100圖 遠構外出土石器(1)



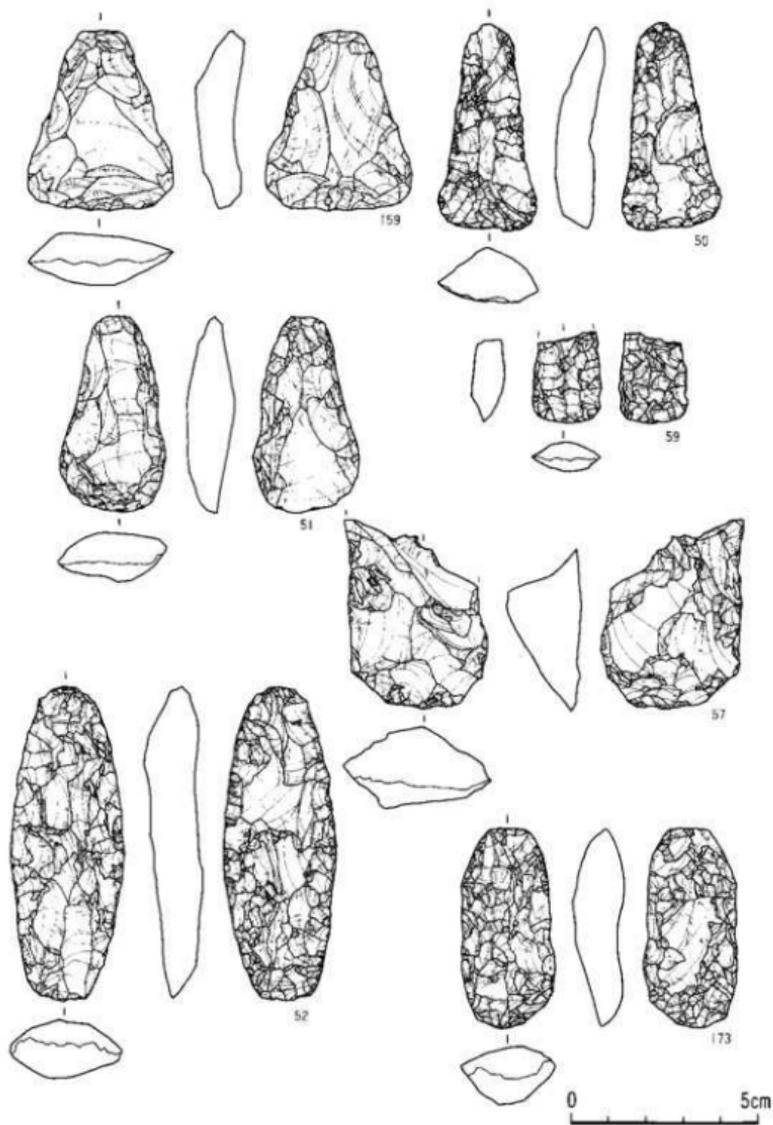
第101图 遺構外出土石器2)



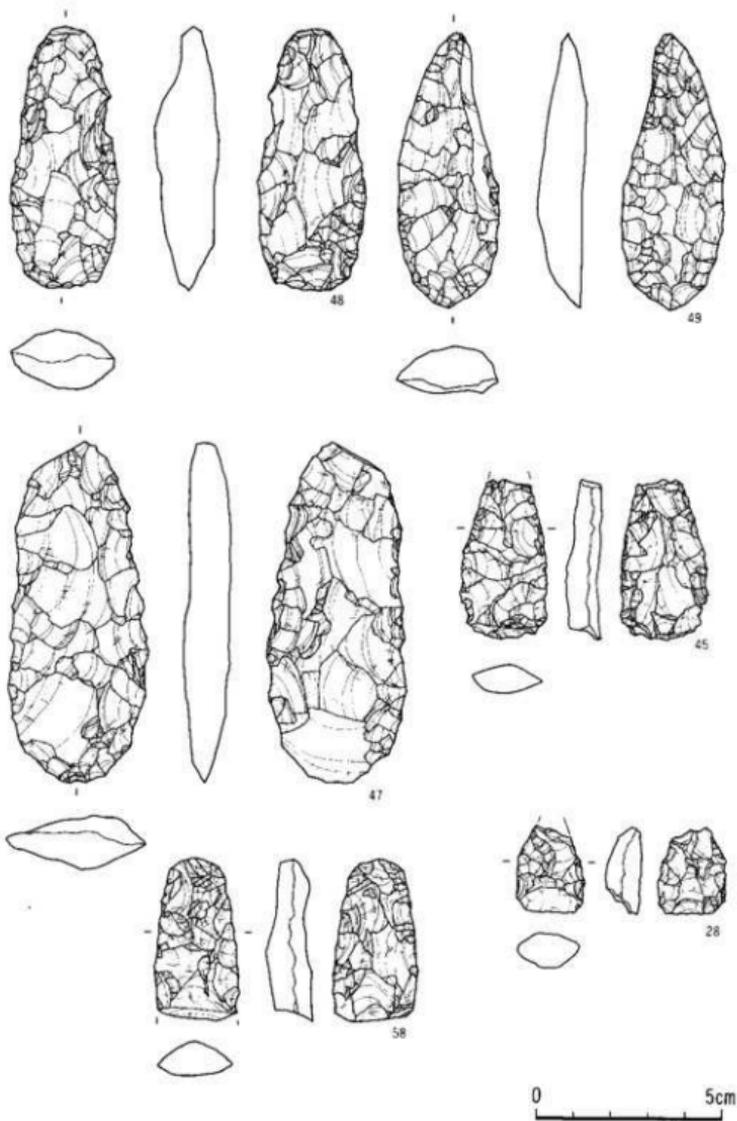
第102图 遗構外出土石器(3)



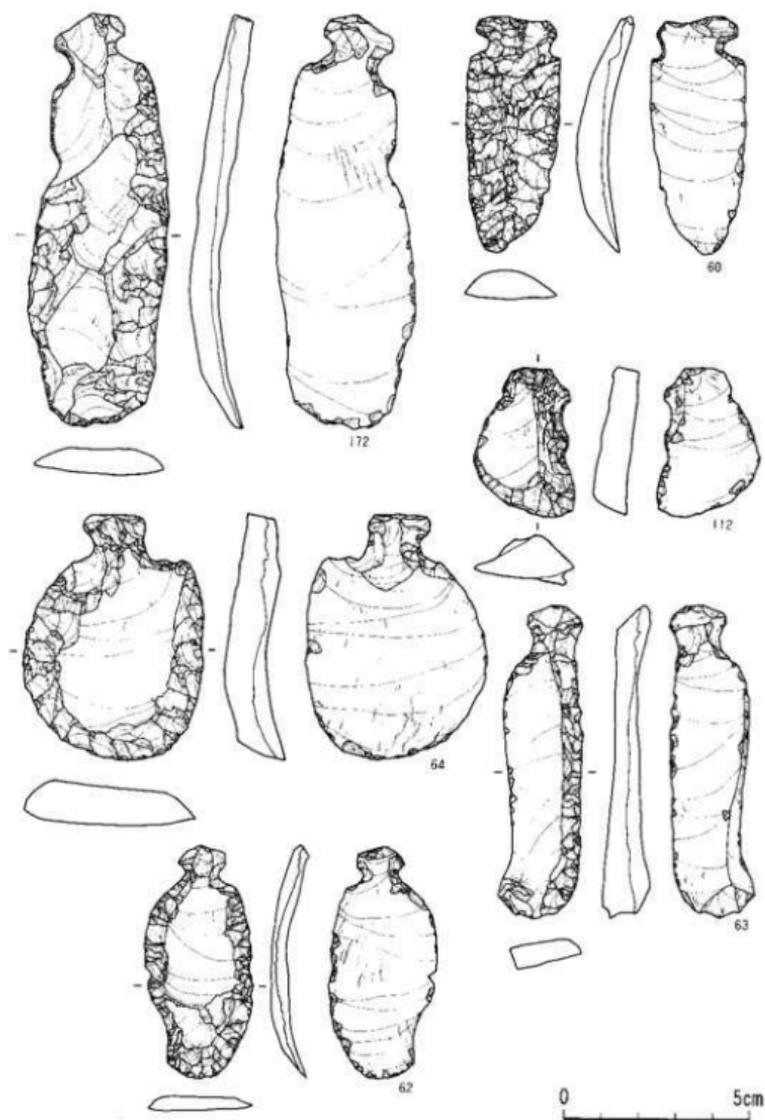
第103図 遺構外出土石器4)



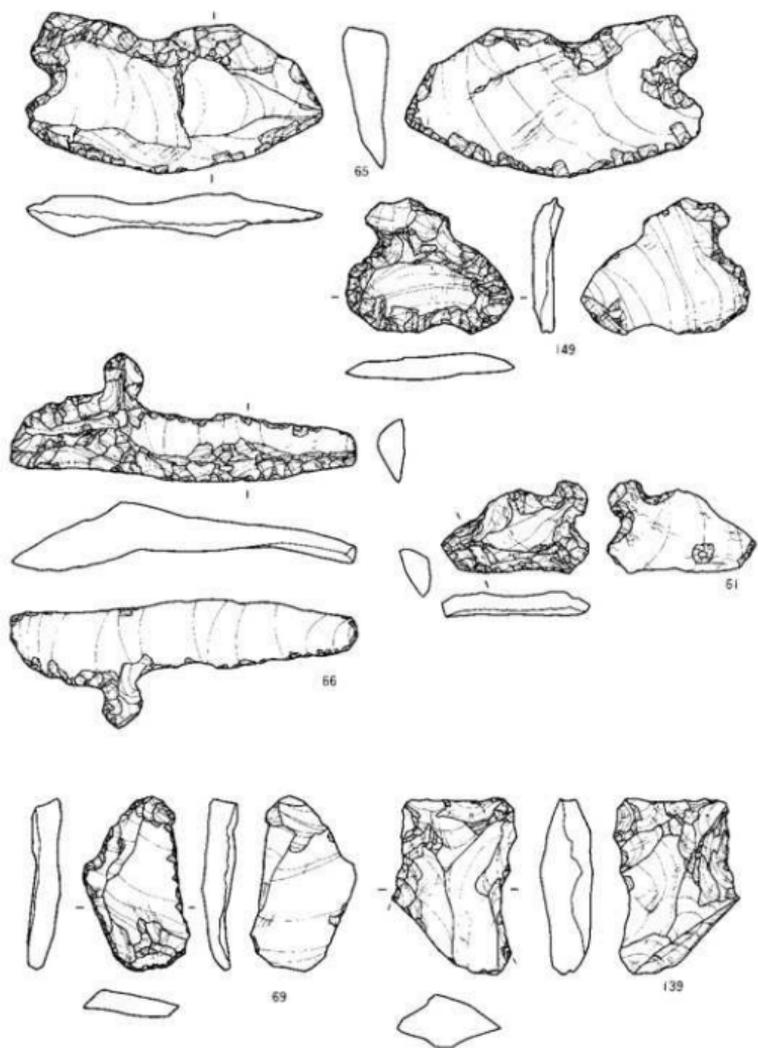
第104図 遺構外出土石器(5)



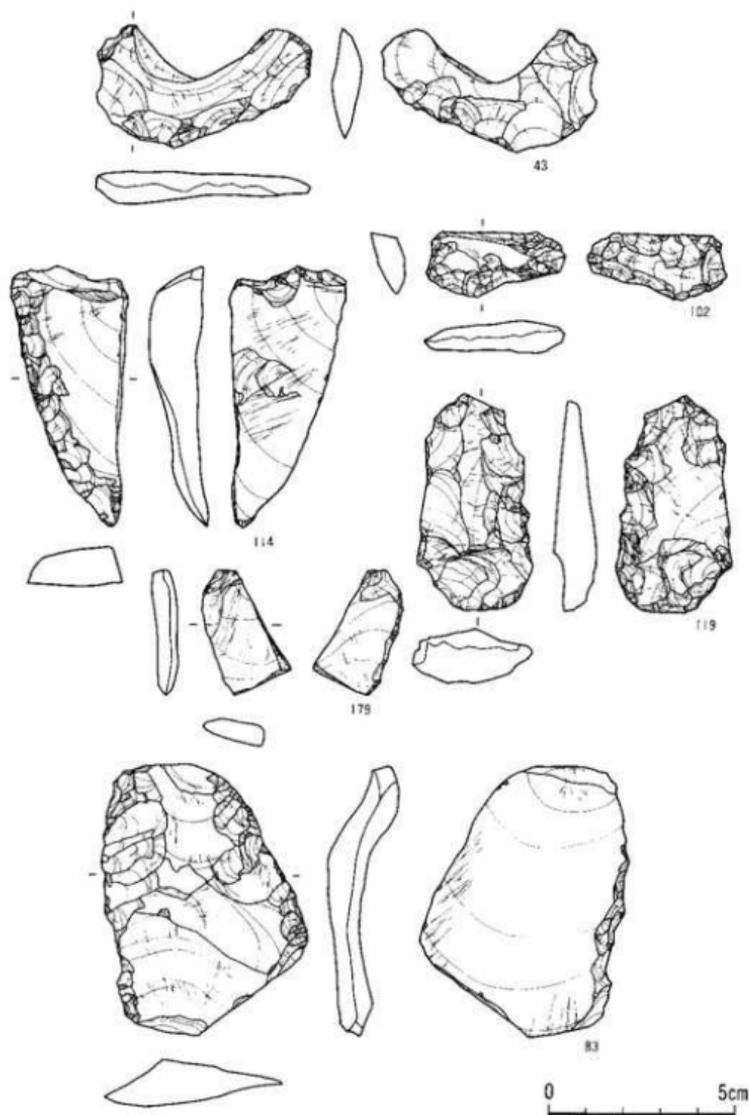
第105圖 遼構外出土石器(6)



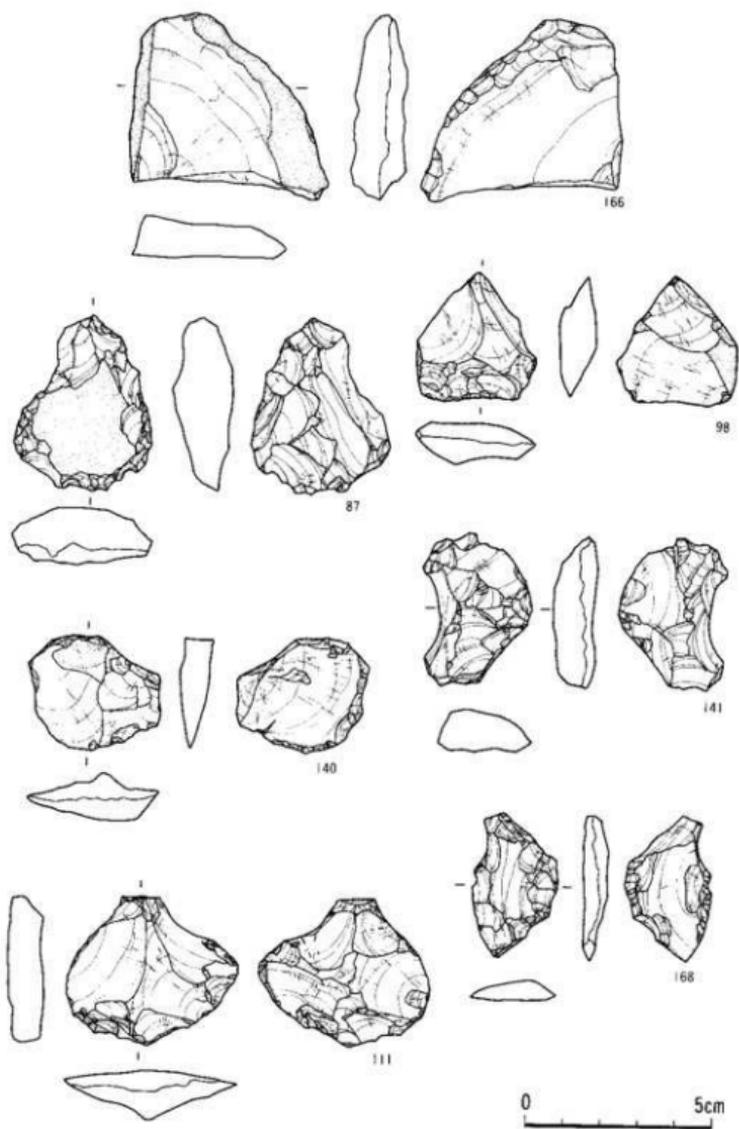
第106图 遗槽外出土石器(7)



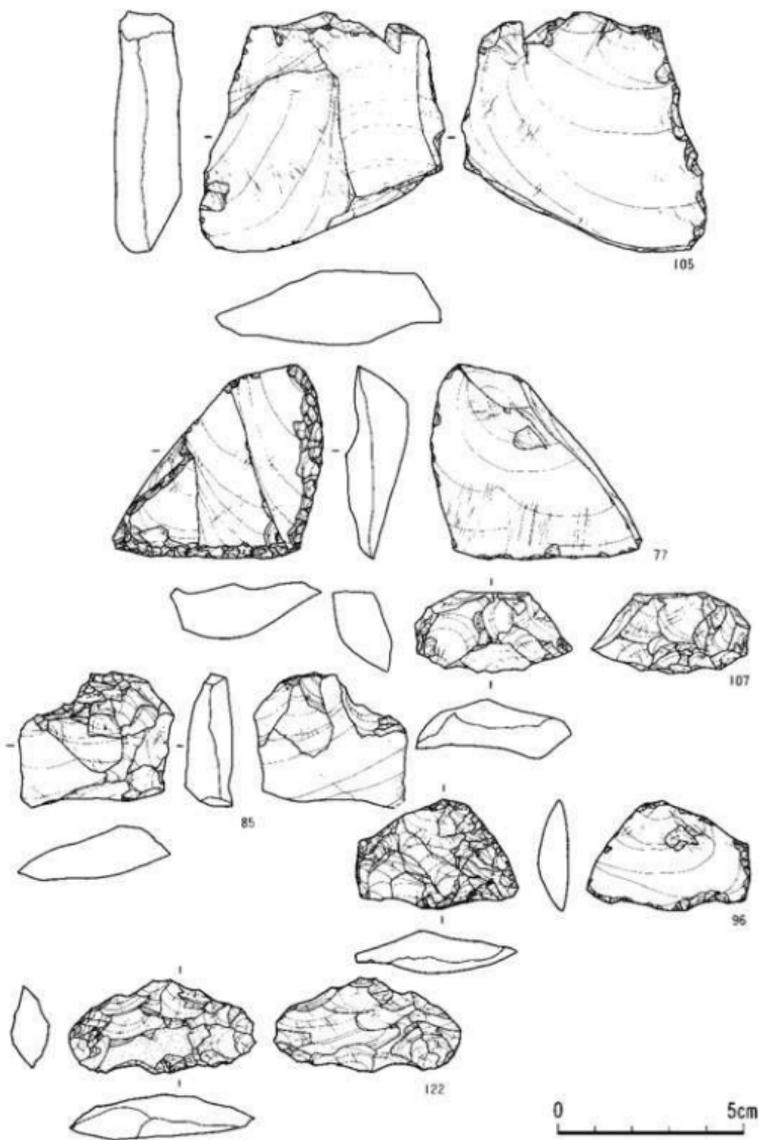
第107図 遠構外出土石器(8)



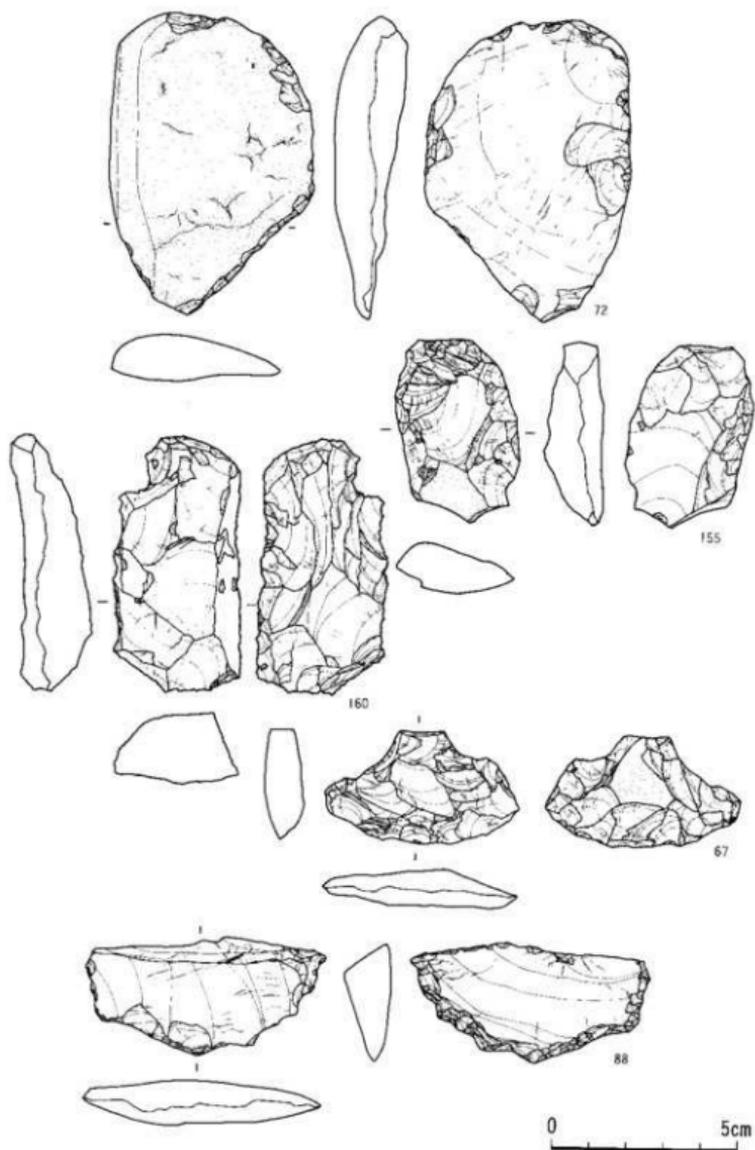
第108图 道橋外出土石器(9)



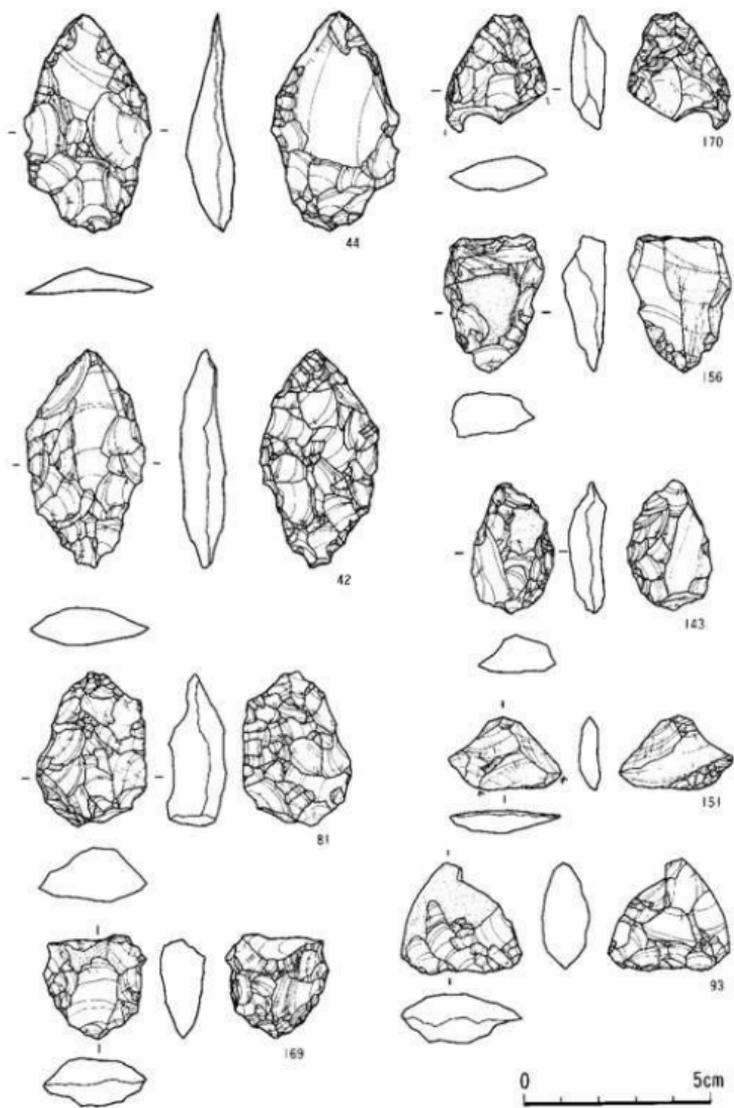
第109图 遗構外出土石器10



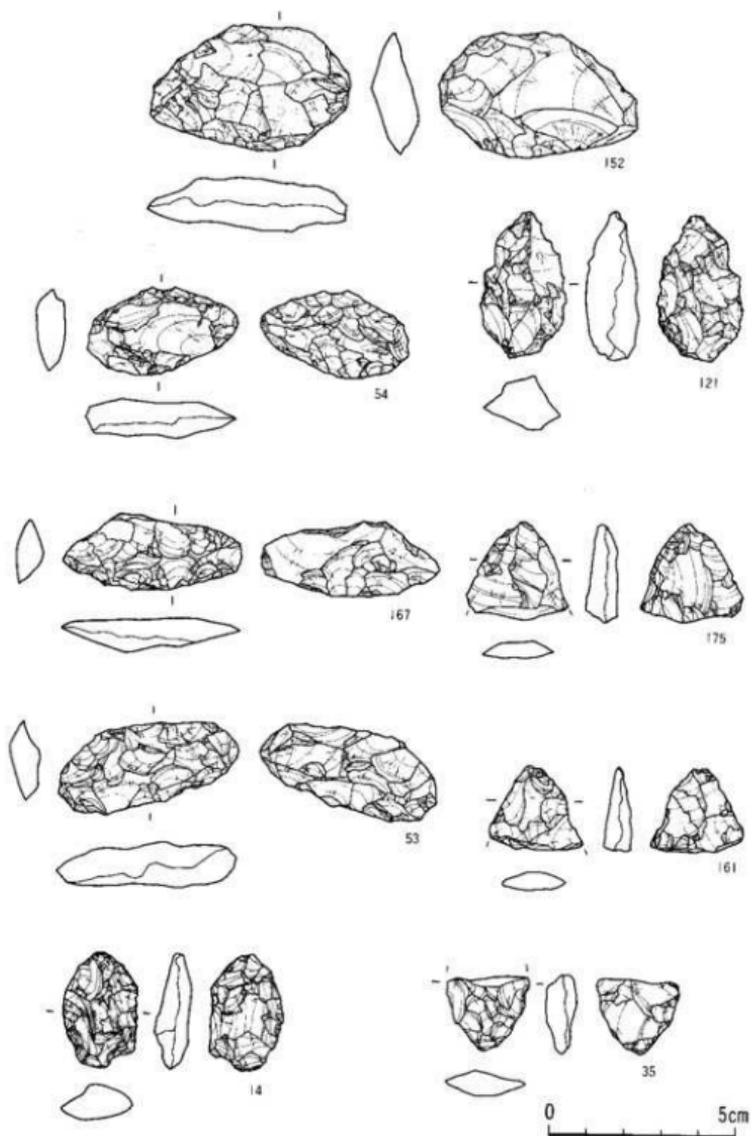
第110图 遗構外出土石器(1)



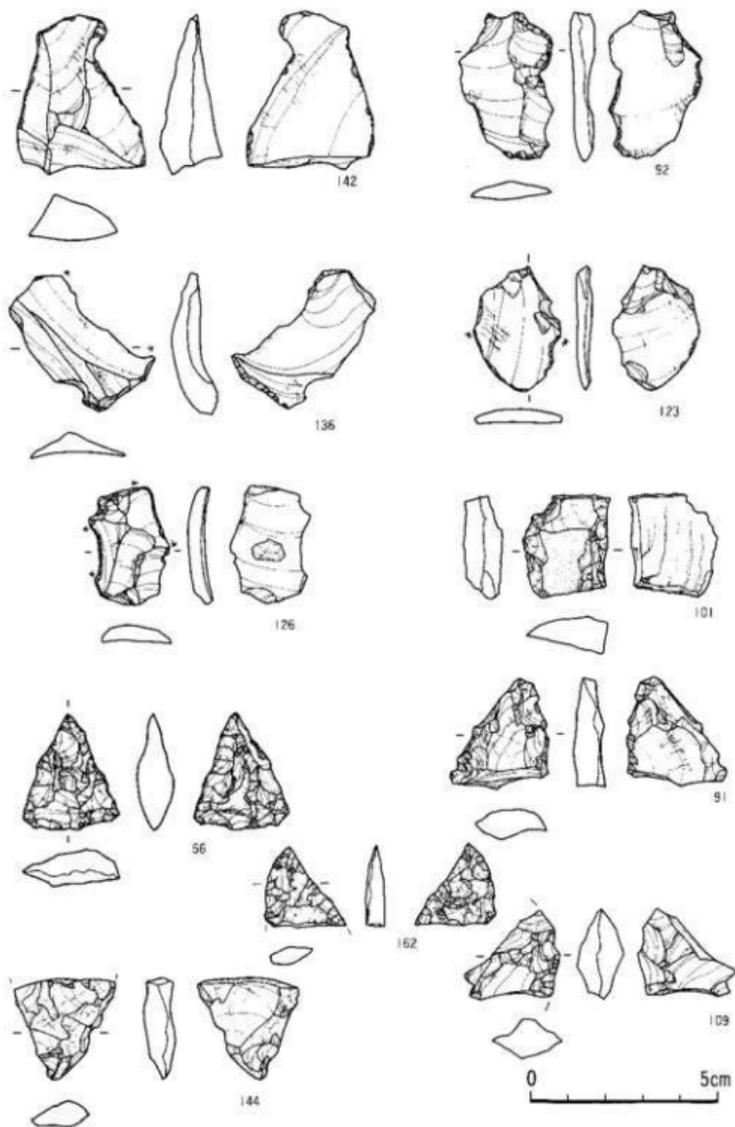
第111圖 遺構外出土石器(2)



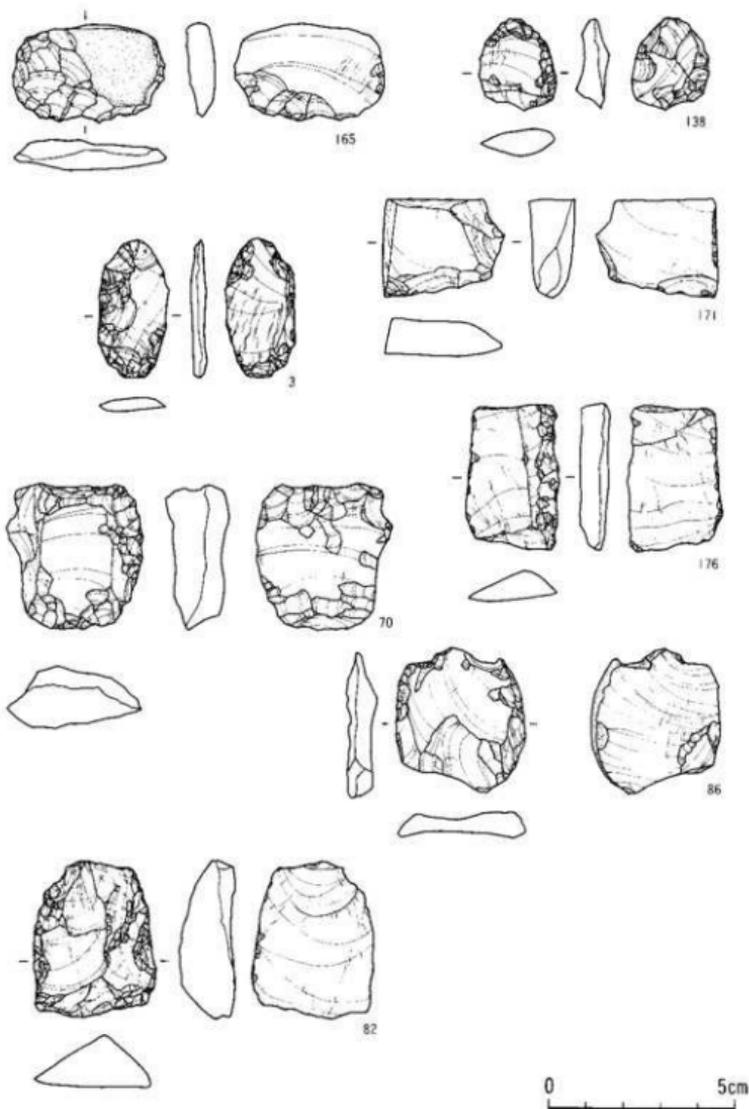
第112圖 遺構外出土石器13



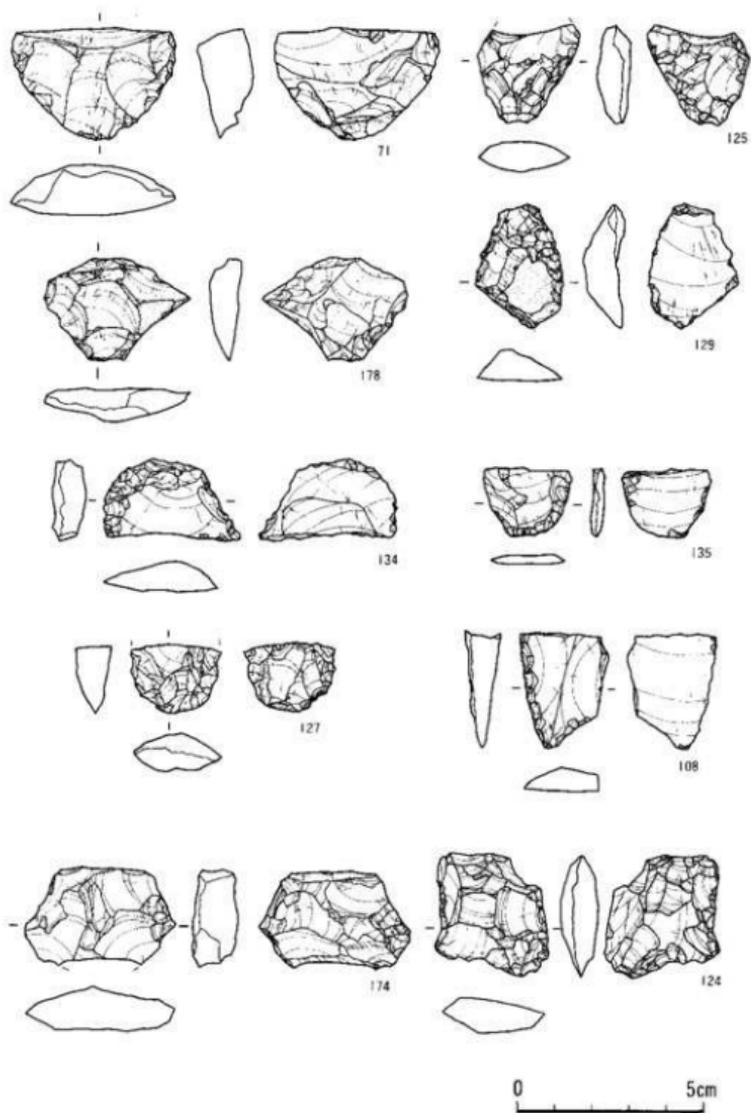
第113图 濠沟外出土石器14



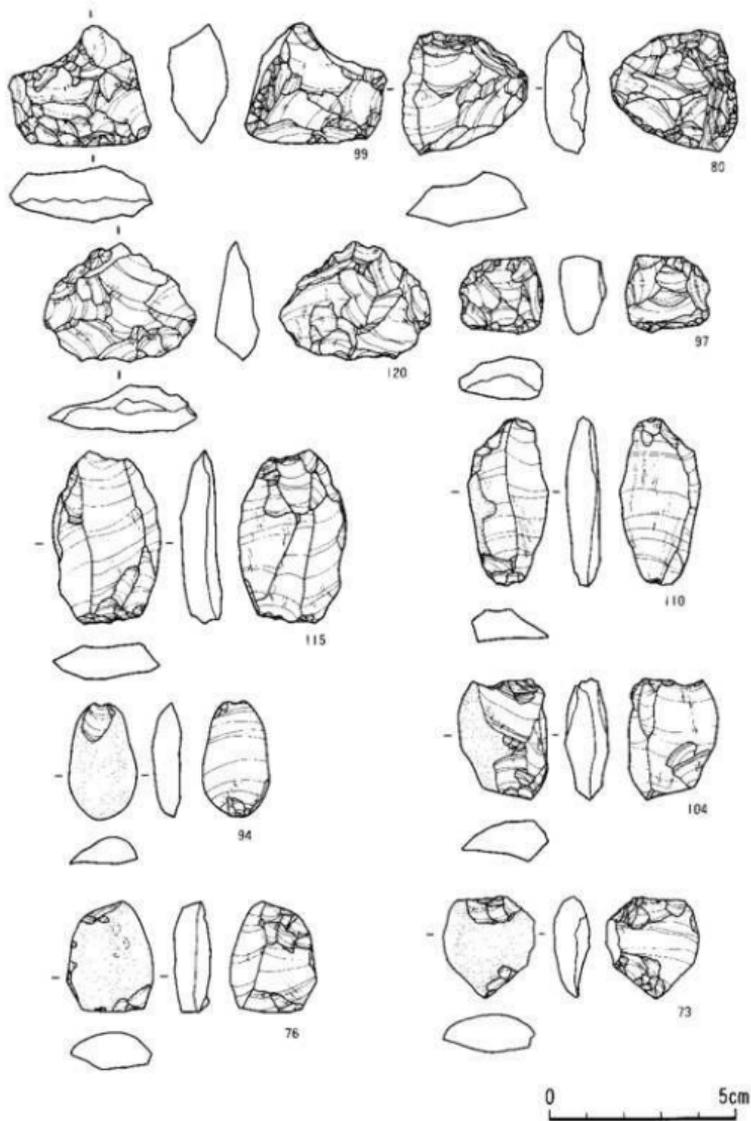
第114图 遼東外出土石器(5)



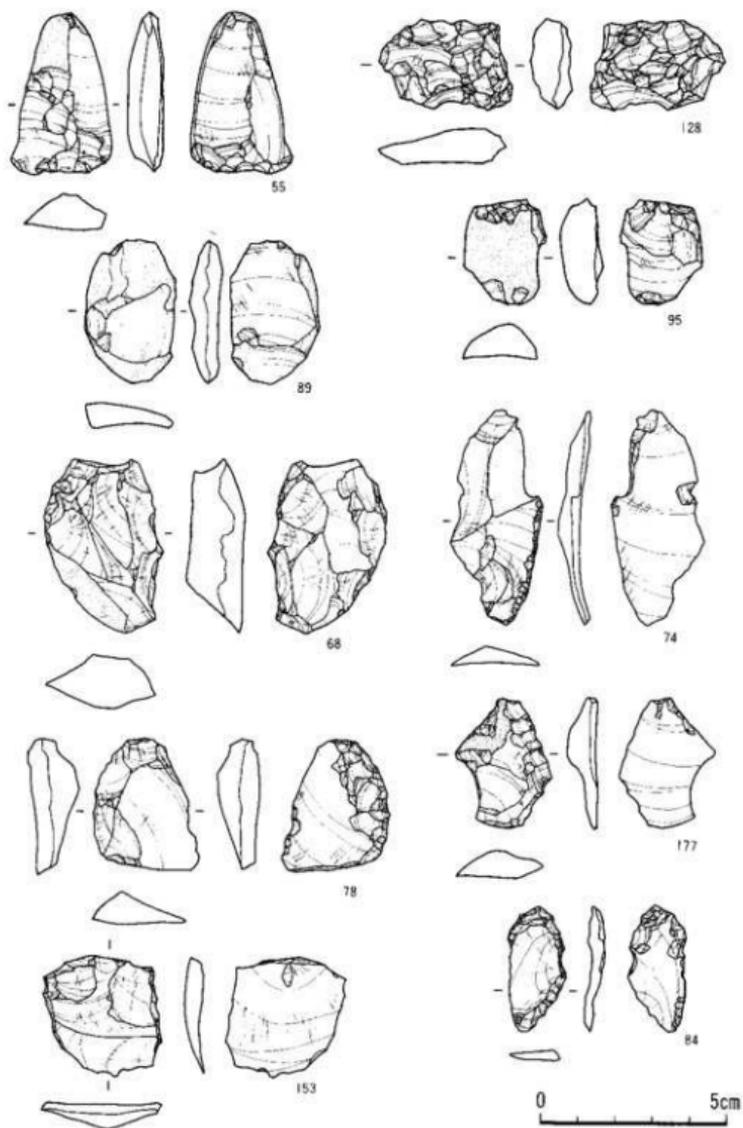
第115圖 遺構外出土石器16



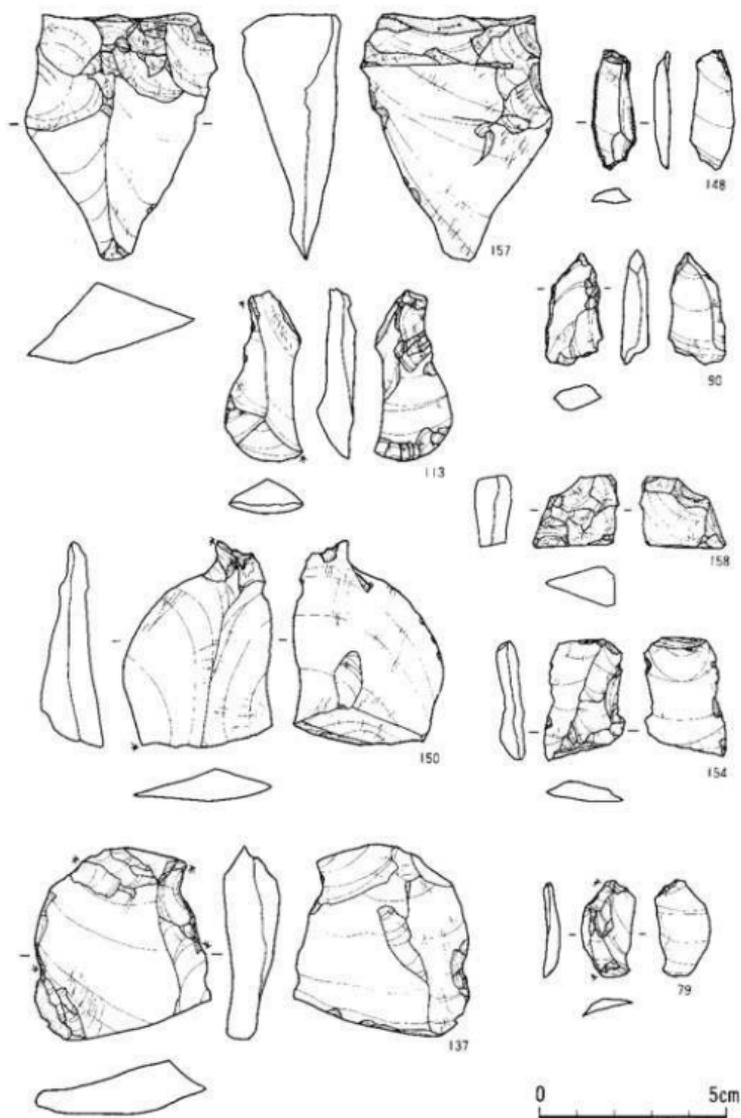
第116圖 遼構外出土石器(7)



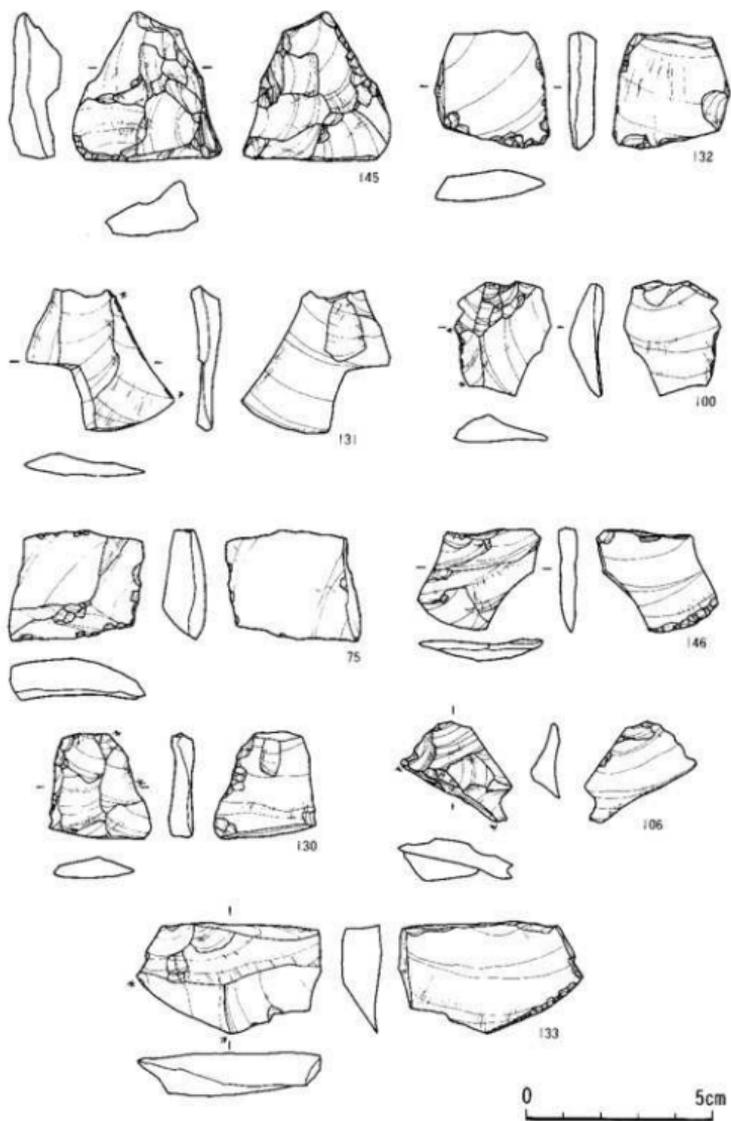
第117图 遺構外出土石器18



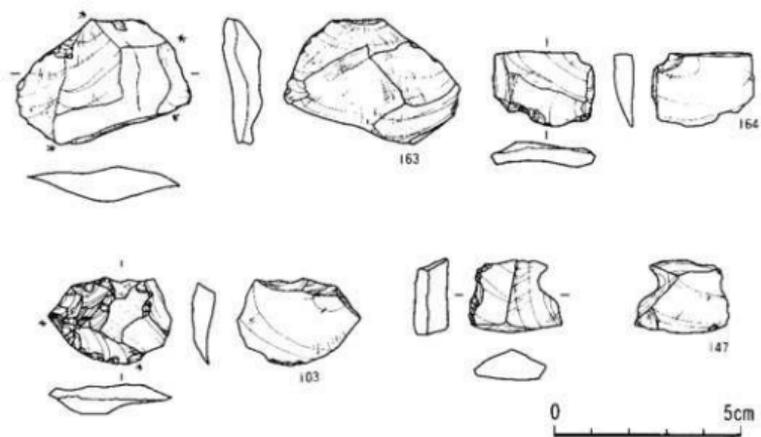
第118圖 遺構外出土石器(9)



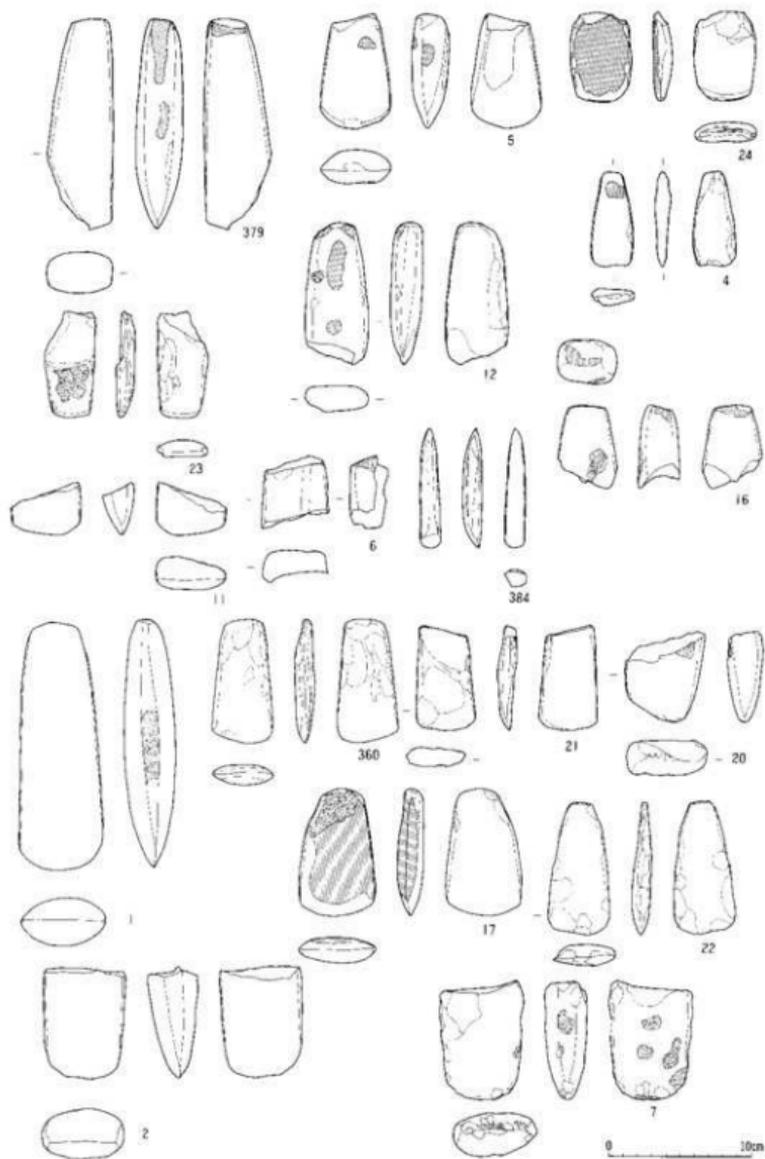
第119図 遺構外出土石器20



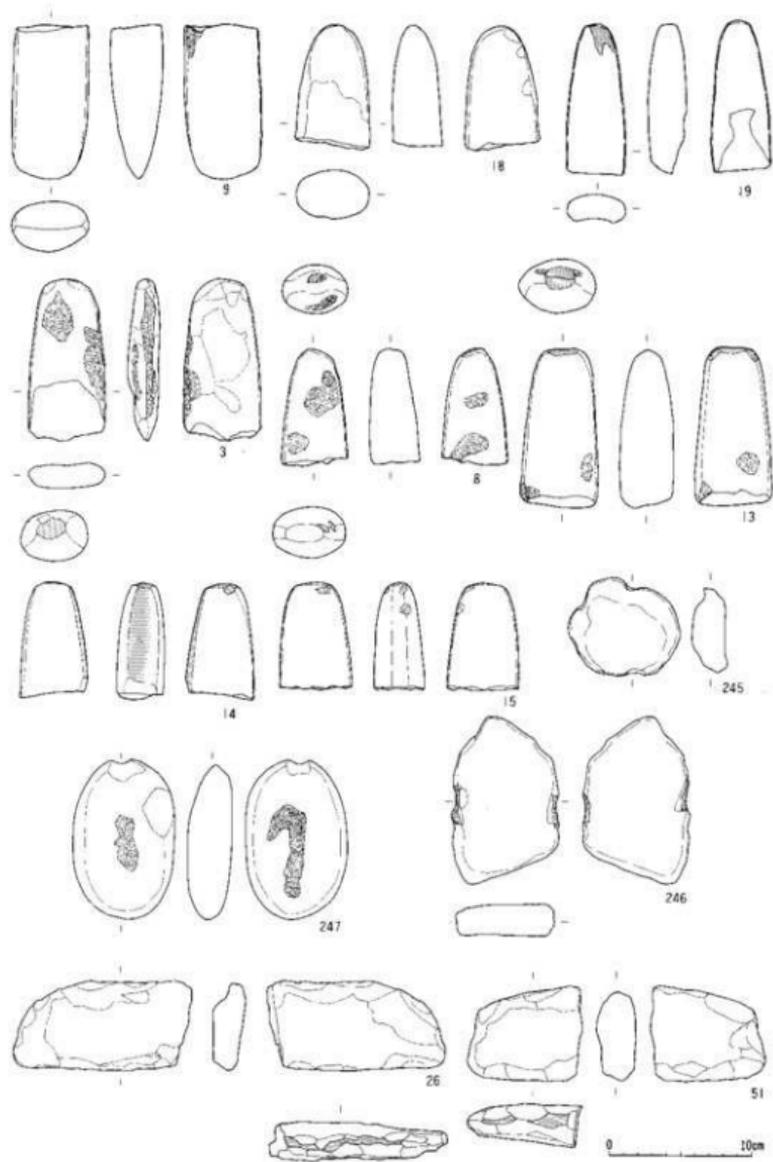
第120図 遺構外出土石器(2)



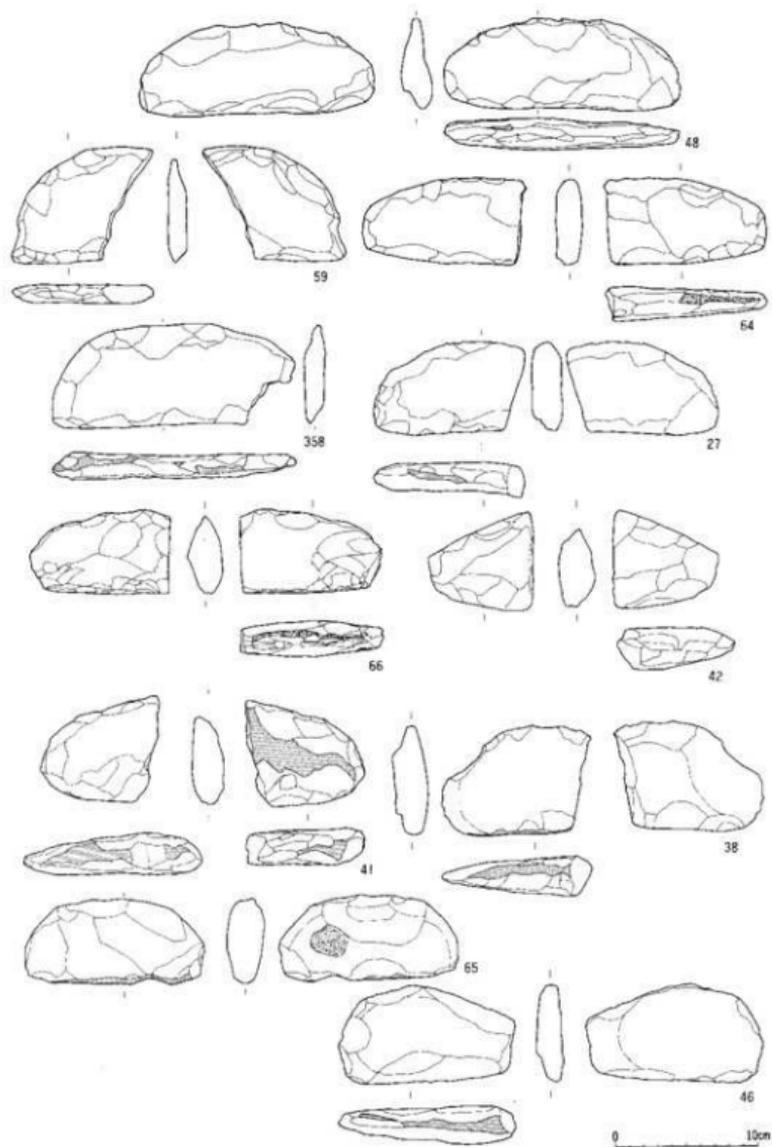
第121图 遺構外出土石器22



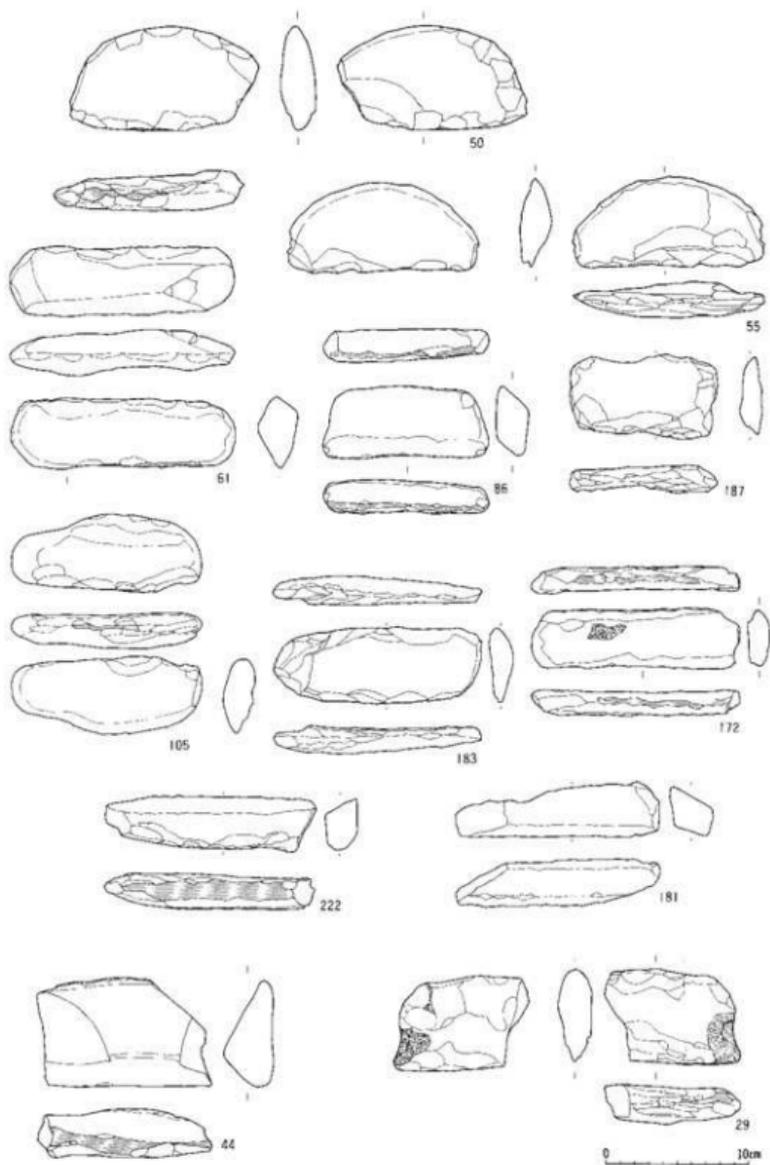
第122図 遺構外出土石器23



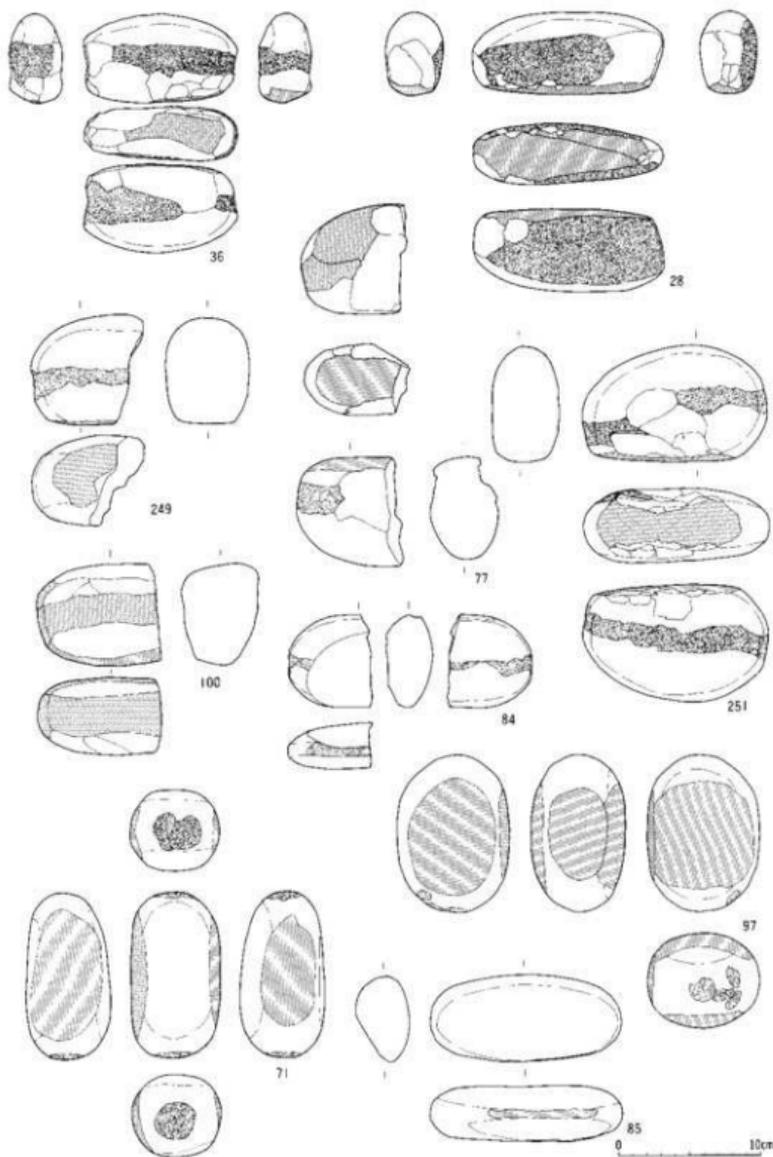
第123圖 遺構外出土石器24



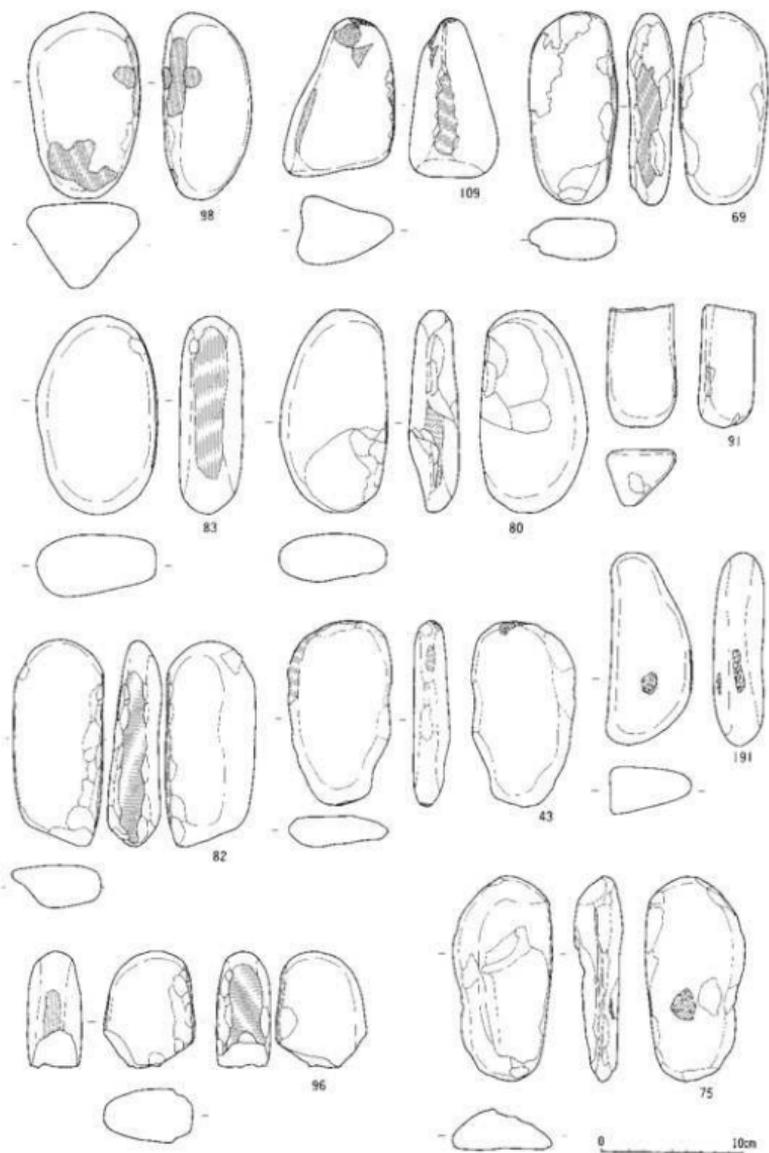
第124图 遺構外出土石器25



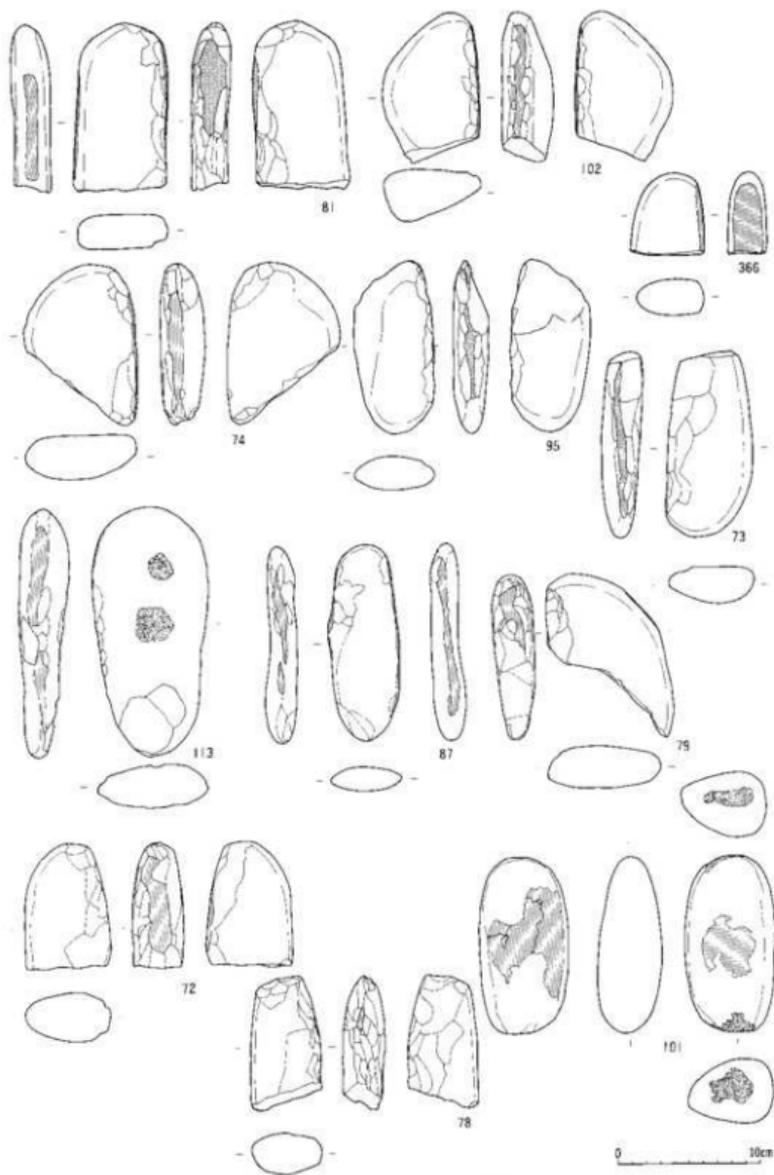
第125圖 遺構外出土石器26



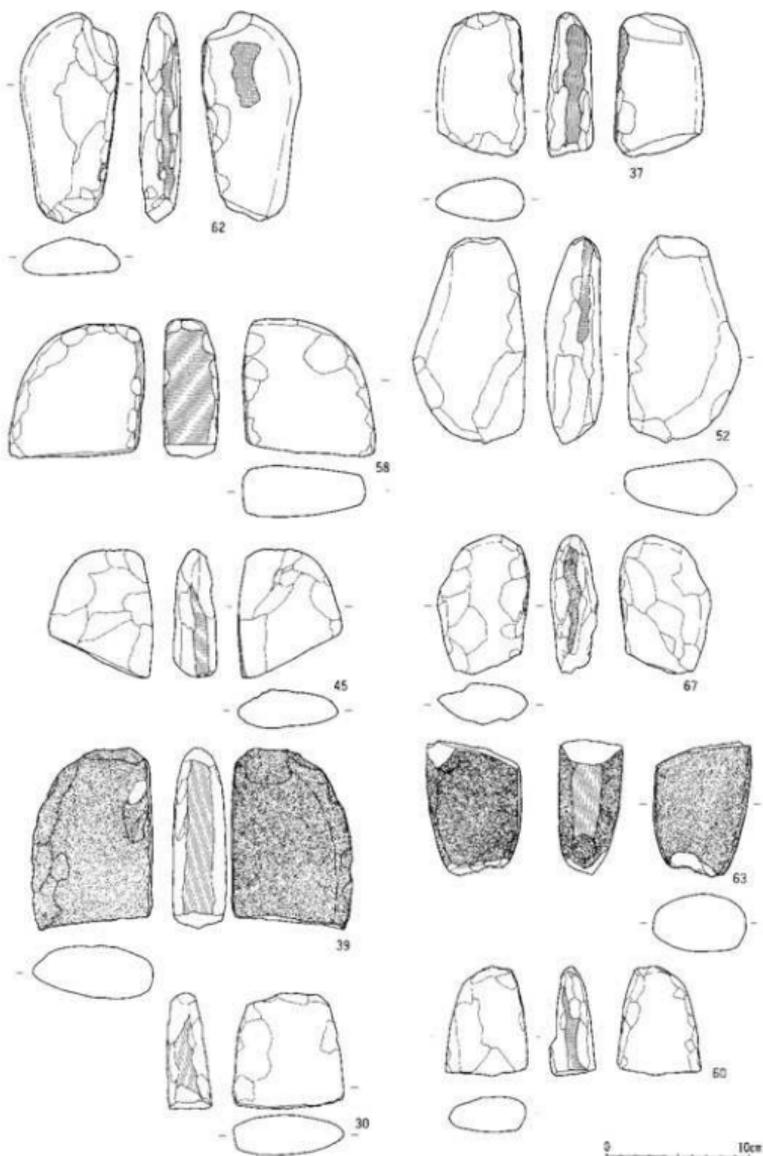
第126图 遺構外出土石器27



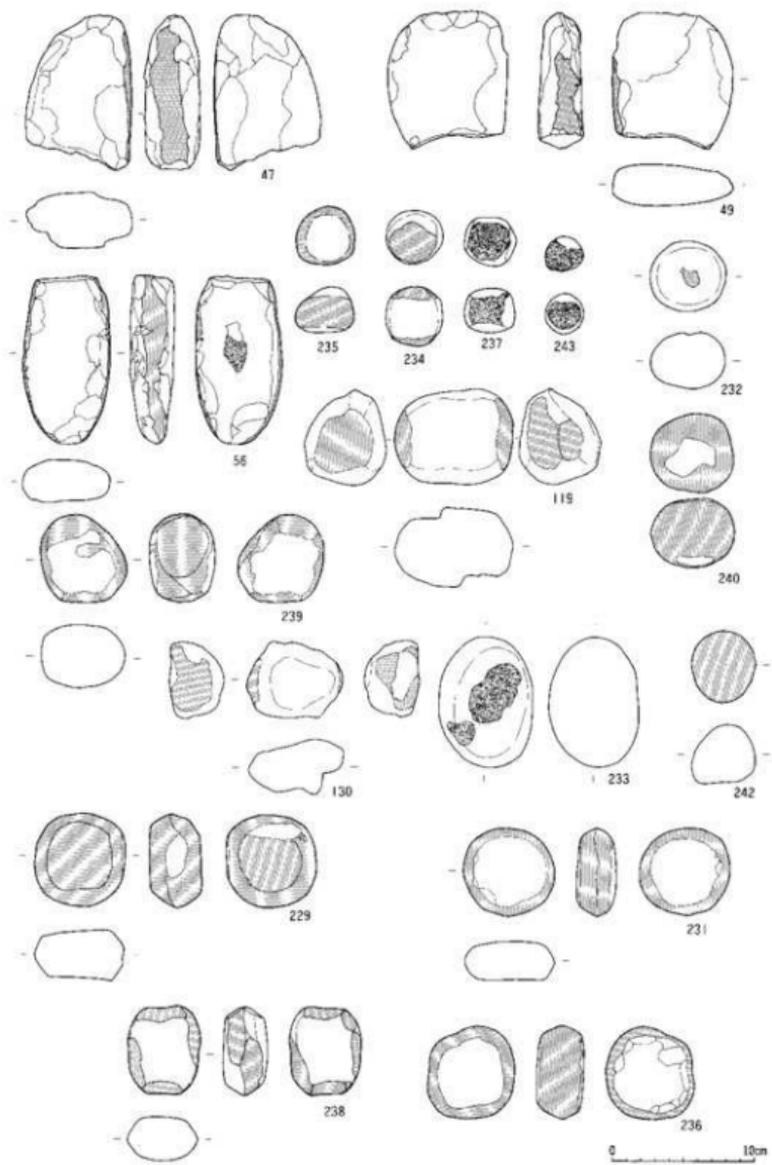
第127图 遗構外出土石器28



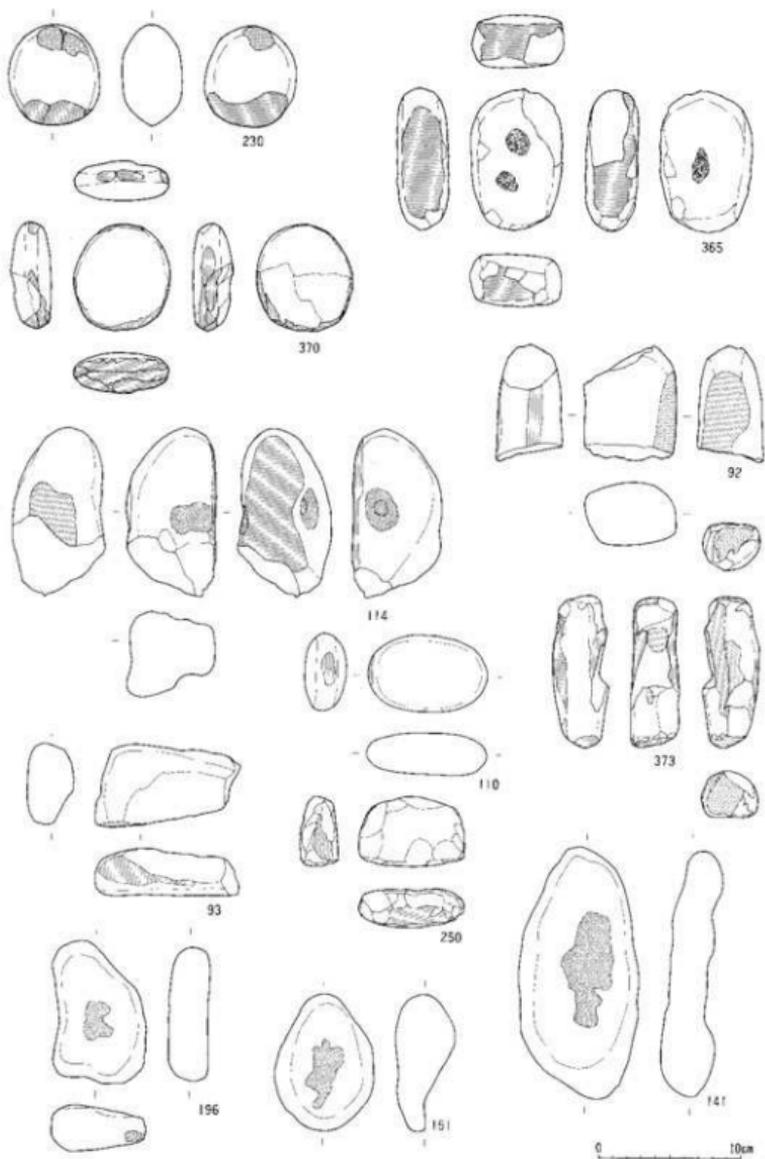
第128圖 遺構外出土石器(29)



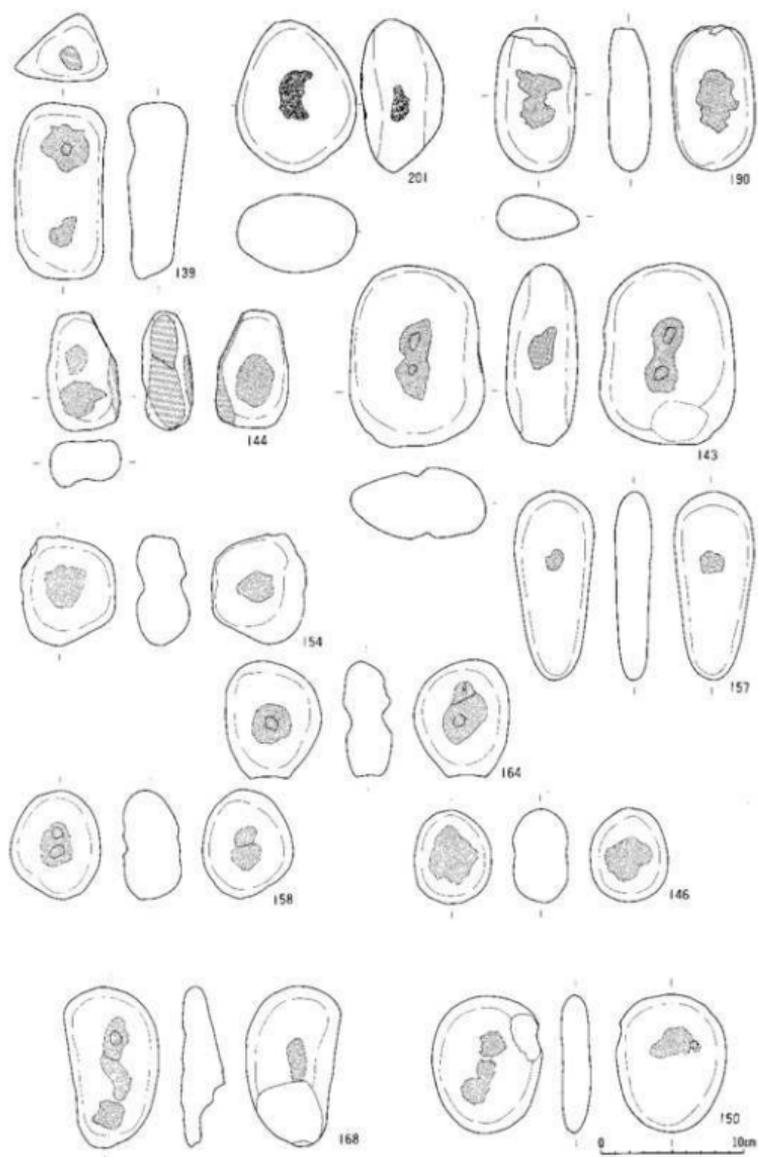
第129図 遺構外出土石器30



第130图 遺構外出土石器31)



第131圖 遠構外出土石器32



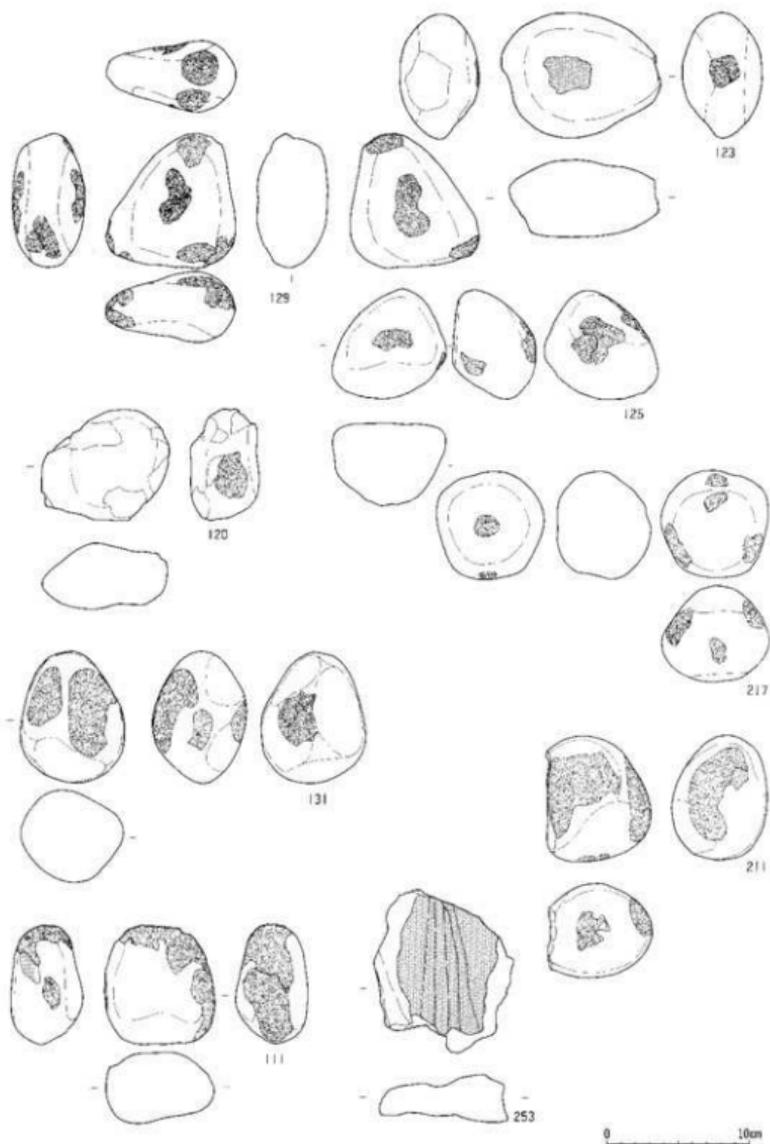
第132図 遺構外出土石器33



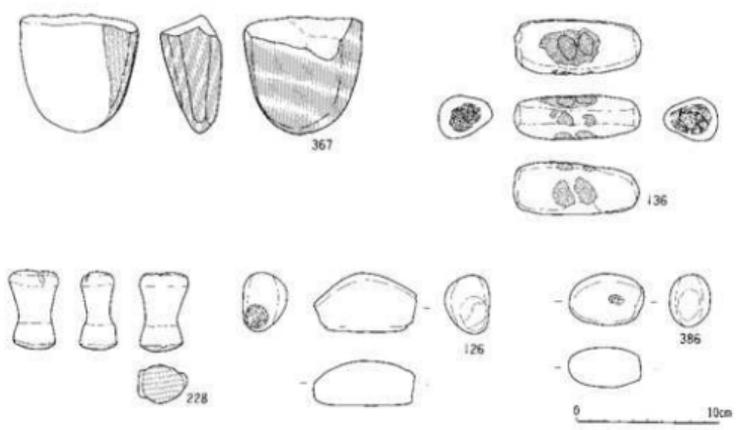
第133图 遺構外出土石器34



第134圖 遺構外出土石器35



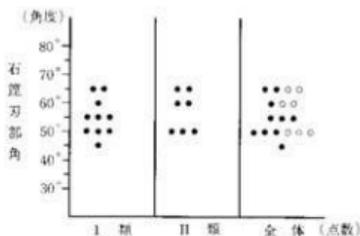
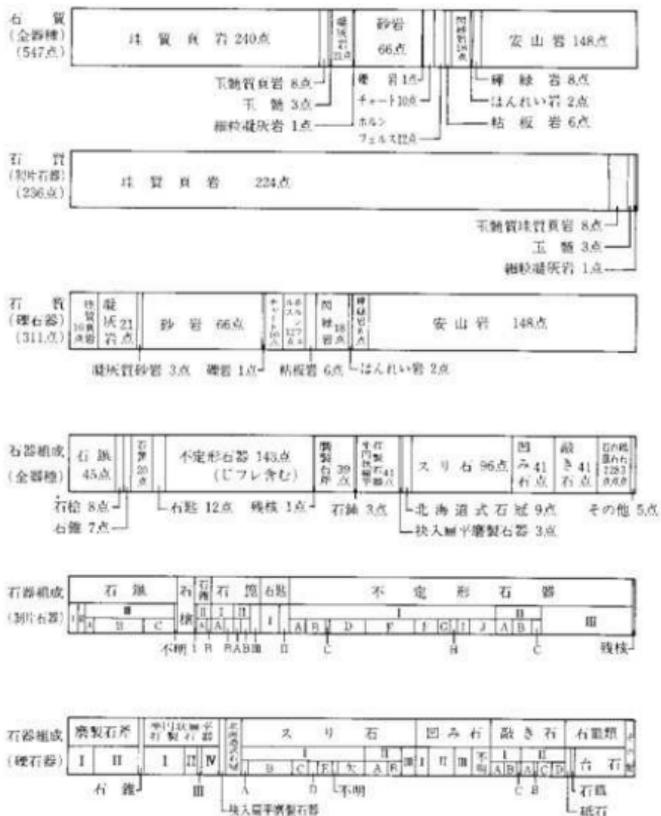
第135圖 遠構外出土石器36



第136図 遺構外出土石器37)

第5表 石器器種・石質別組成表

器種 石質	石	石	石	石	石	不定形石	我	磨	石	半	拱	石	ス	凹	敲	砥	石	台	そ	計	%
	旗	槍	薙	薙	匙	器	核	斧	鏃	器	器	冠	石	石	石	石	皿	石	他		
珪質頁岩	44	8	6	19	12	134	1	9	3	1			2		1					249	43.9
玉髓質珪質頁岩	1		1			6														8	1.5
玉				1		2														3	0.5
凝灰岩								1	1				2	14		1		2		21	3.8
細粒凝灰岩						1														1	0.2
凝灰質砂岩													1			1			1	3	0.5
砂岩									2	8		3	34	10	6				3	66	12.1
礫岩													1							1	0.2
チャート										2			4		4					10	1.8
ホルンフェルス								12												12	2.2
粘板岩										5			1							6	1.1
閃緑岩									9	1			8							18	3.3
はんれい岩								2												2	0.4
輝緑岩									1			1	3		2				1	8	1.5
安山岩									5	1	21	2	5	40	17	28	1	2	26	148	27.0
計	45	8	7	20	12	143	1	39	3	41	3	9	96	41	41	3	2	28	5	547	
%	8.2	1.5	1.3	3.7	2.2	26.1	0.2	7.1	0.5	7.5	0.5	1.6	17.7	7.5	7.5		6.0		0.9		100.0



第137図 石器組成

さ1.7cmである。顔面部には目、鼻、口、耳などが表現され、一般の土偶よりかなり写実的なつくりで、頭部にアスファルトの付着が認められる。右耳は欠損しているが故意か自然か不明である。表情は非常に柔和な印象を受け、縄文人のやさしい心が響きわたってくる様である。6は、左肩胸部が欠損している。大きさは現存高8.7cm、現存幅5.4cm、厚さ1.1cmである。胎土・焼成はともに良好である。正面右上に乳房、また、腹部中央にはへそと思われる小突起が貼り付けられ、へそを中心に逆V字状の凹みが脚部まで続いている。表裏面には細い沈線文様が施されている。首部周辺にアスファルトが付着し、5の顔面部と6の体部を接着したものと思われるが、接着過程は不明である。また右腕部の脇から肩帯にかけて直径0.2cm、長さ1cmの貫通孔がみられ、紐を通して下げる様にも工夫していたかもしれない。5・6ともに縄文時代後期前半の土偶と考えられる。

7は、十字状土偶の右肩部及び胴部上半片と思われ、大きさは現存高9.2cm、現存幅10.8cm、平均厚1.7cmである。胎土・焼成ともに良好である。正面には胸部及び右上腕部に曲線文様、上部右側に乳房が剥落した跡の様な痕跡が、中央に粘土紐を貼り付けた正中線及びその下部にへそと思われる小突起がみられる。背面には懸垂状の沈線が1条みられ、上部に僅か煤が付着している。縄文時代後期のもと考えられる。

8は、十字状土偶の胸部片と思われ、大きさは現存高5.8cm、現存幅4.3cm、厚さ1.6cmである。胎土・焼成はともに良好である。正面には縦位方向に沈線文様並びに直径0.6cmの凹みがみられ、背面にも同様の沈線文様がみられる。第137図7の十字状土偶の正面にある沈線文様と同じ手法、工具と思われる。時期は縄文時代後期と考えられる。

本区域出土の土偶は、50～53ラインに集中している。

(3) 土器片再利用土製品 (第138・139図9～20)

遺構内1点(第138図20)、遺構外10点、表採1点の計12点が出土した。そのうち、円盤状... 11点、有孔円盤状... 1点とに分類して、第6表にまとめた。これらは、すべて土器の破片を利用し、周囲を打ち欠いたものと思われる。9・20は縄文時代前期、10・11・12・13・14・16・17は同様後期のもと考えられ、それ以外は時期不明である。

(4) その他の土製品 (第139図21～25)

第139図21～25の5点が出土し、25以外は破片である。

21は、円盤状の破片で、裏面は平坦、表面は中心部が多少盛り上がっている。推定径4.3cm、厚さ0.6～1.1cmである。胎土・焼成はともに良好である。色調は鈍い黄橙色を呈し、表面の周縁には2条の沈線が施文され、また小円形状の剥離痕が認められる。破損品のため名称は不明な土製品である。時期は縄文時代後期と考えられる。

22の形状は円柱状の断片で、長軸(または左右)の両端は僅かながら外反し、現存高5.0cm、

推定最大径4.1cm、現存厚1.2cmである。胎土には、植物性繊維が混入し、焼成は良好である。外面にL R及びR L縄文が施され、色調は浅黄橙色を呈する。名称、用途の不明な土製品であるが、その時期は、胎土の混入物から縄文時代前期と考えられる。

23は、一見土偶の足のような形状で足首相当部分から折断している。足の裏に相当する部分は凸レンズ状にくぼんでいる。推定最大径5.7cm、現存高2.7cm、折断面の径3.3×2.2cmの大きさである。胎土・焼成はともに良好である。色調は外面が明赤褐色、内面は鈍い橙色を呈し、器内・外とも無文である。口縁部外面に数箇所剥離痕が認められ、その根本にアスファルトの付着がみられる。一応、本分類に含めたが、土器を支える台の一部、把手、ミニチュア土器など、土器片の可能性も考えられる。時期は後期であろう。

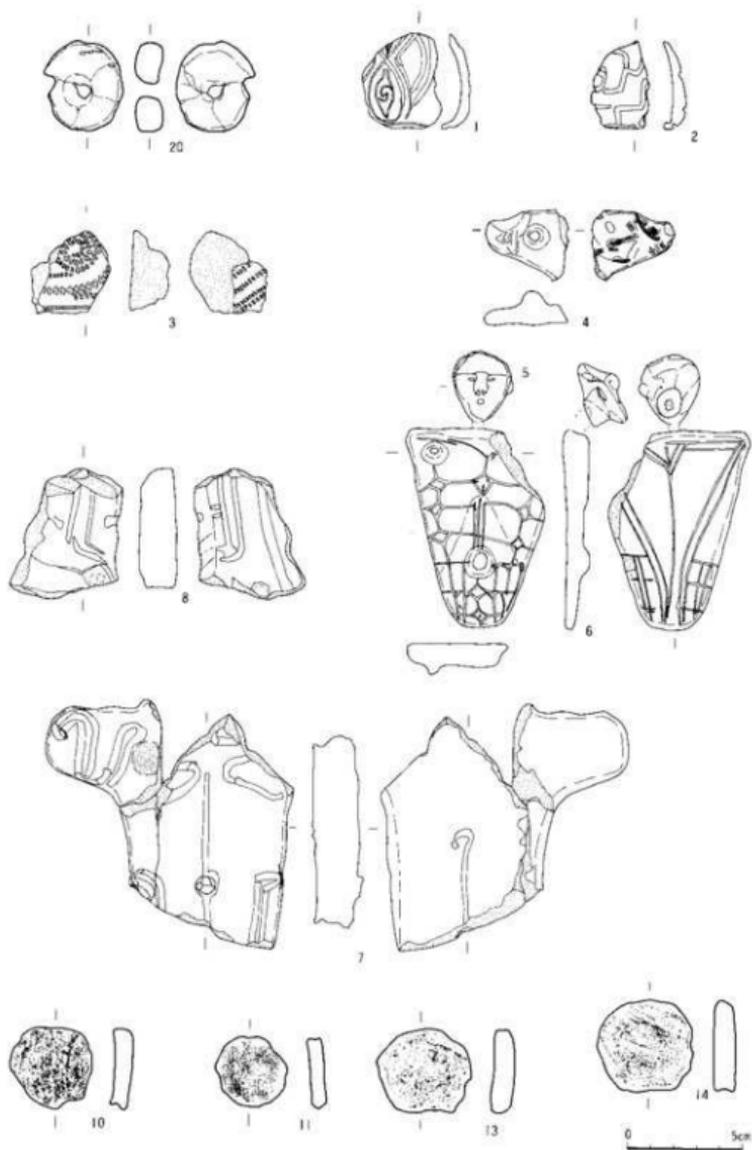
24は、現存高5.2cm、現存幅3.8cm、厚さ1.7cmの板状で、胎土は砂質粘土、焼成はやや不良で表面がザラザラしている。正背面の文様が互いに直交する様に両面に2条1単位の撚糸文が施されている。盤状土偶の胴部もしくは土版等と推察され、その時期は縄文時代中期と考えられる。

25は、I-51グリッドから出土した。紡錘形を呈した完形土製品である。大きさは、長さ3.9cm、最大径1.0cm、重さ2.3gで、胎土を薄く円形に伸し端から巻いて成形したようである。器面に、巻き込んだ胎土の継ぎ目が残っている。用途は不明であるが、化粧粘土の残りを丸めたものようであり、灰黒色に焼成されている。

(石戸 悟)

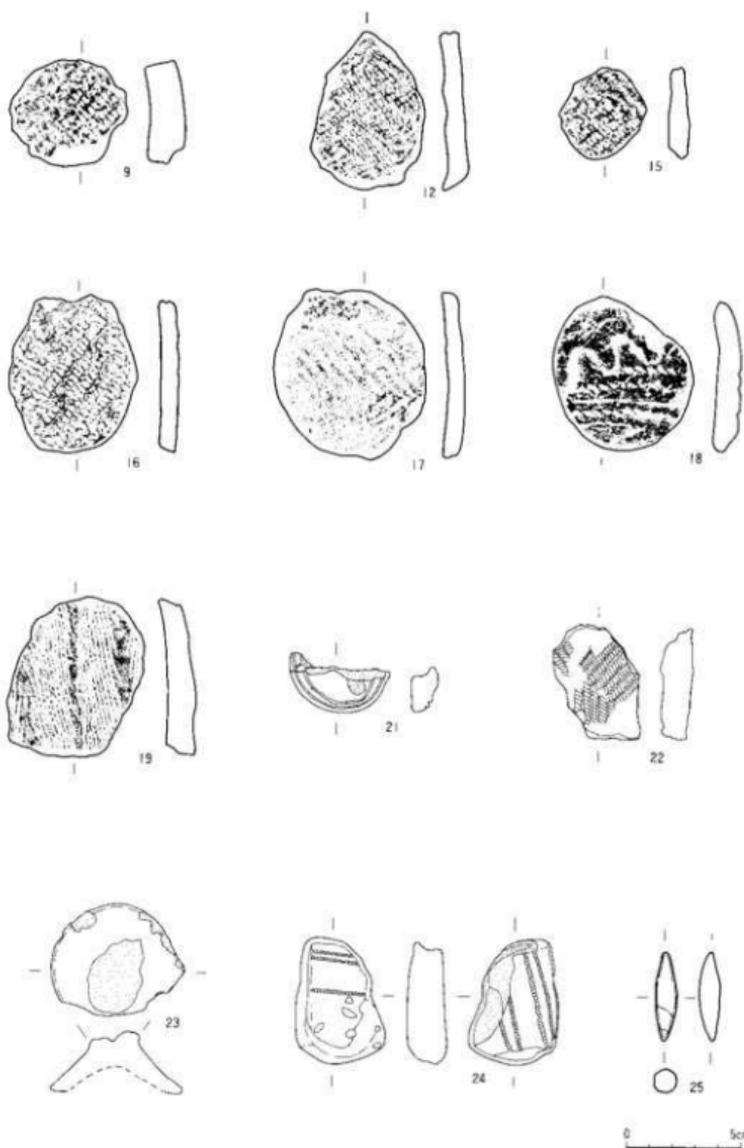
遺物 番号	出土地点		計測値 (cm)		重量 (g)	文様	備考
	グリッド (遺構名)	層位	長さ×短径	厚さ			
9			5.1×4.8	1.6	40.8	L R	円盤状
10	J-26	Ⅲ	3.8×3.5	0.8	12.1	L R	"
11	G-57	I	3.1×2.8	0.7	7.6	沈線	"
12	J-32	I	7.0×4.4	0.9	33.8	L R	"
13	K-52	Ⅱ	4.1×3.5	0.9	14.4	無文	"
14	K-26		4.2×3.7	1.0	18.9	"	"
15	K-47	Ⅲ	3.8×3.3	0.9	13.8	R L	"
16	K-47	Ⅲ	7.0×5.5	0.8	38.3	L R	"
17	K-47	Ⅲ	7.9×6.8	0.9	49.8	羽状	"
18	M-41	Ⅲ	6.8×5.8	1.2	44.2	R L	"
19	K-47		7.3×5.3	1.2	61.0	木目状	"
20	42土	覆土	4.0×3.3	0.7	12.5	R L	有孔円盤状

第6表 土器片再利用土製品計測表



第138図 土製品(1)

(整理番号は  
写真番号と同一)



第139図 土製品(2)

## 2 石製品

### 石刀 (第140~142図)

9点出土した。略完成品1点・欠損品(破片)8点である。遺構内からは29号土壌・49号土壌から1点ずつ出土している。

380は、柄及び片面のほとんどが欠失している。弧状を呈する辺と、直線を呈する辺からなり、全面研磨による整形が行われている。直線部分には、新たに剥離による刃部が形成され、擦痕が認められる。剥離及びこの剥離面にみられる擦痕は、石刀製作時におけるような加工とは認められない。したがって、石刀が欠損した後に転用された可能性が考えられ、弧状部及び刃部の形状から半円状打製石器と同様の機能が推察される。

174と176は、端部に近い部分の破片である。前者は端部が湾曲しており、後者は刃部にほぼ垂直に端部が作出されている。全面研磨による。ともに380と同様に新たに刃部が作出されており、後者は内湾ぎみの刃部形状である。転用されたものと考えられる。

173も、端部近くの破片で、両側縁に潰し加工後に研磨された痕跡が認められる。また、折損部分に、新たな剥離痕が認められ、前出の石刀同様転用された可能性が高い。

178は、細身の石刀の破片で、片面を欠失している。転用の痕跡は認められない。

182は、先端部の破片で、刃部側に剥離がなされ、擦痕が認められる。

186は、先端部の破片で、刃部側に剥離がなされているが、使用の痕跡は認められない。

354(第140図)は、29号土壌から出土した破片で、欠損による鋭利な部分に擦痕が認められる。

355(第140図)は、49号土壌から出土した破片で、片面を欠失している。側縁の欠損部に小剥離が成され擦痕が認められる。

素材は、粘板岩6点・結晶片岩2点・頁岩1点である。

178を除く全資料が転用の痕跡を有しており、新たに作出された刃部及び擦痕は、380に代表されるように半円状打製石器のものに類似している。素材自体の扁平さから同様の使用が成された可能性が高い。

しかしながら、祭祀に用いられるとされる石製品が一般的な雑器に安易に転用されるものであろうか。

### 有孔石製品 (第142図)

3点出土した。

382は、楕円形の小型のものであり、孔は中央から長軸線上のやや一方に偏って作出されている。両面からの穿孔である。頁岩製であり、孔寄りの端部が若干欠失している。

381は、非常に薄い板状の素材に孔を1箇所穿ったもので、平面形は、縦長二等辺三角形の底

辺が丸みを帯びているもので、鈴形・鐔形に類似する。孔は頂部寄りに両面から穿孔されたものである。緑色ホルン・フェルス製である。

390は、薄く小型の素材に2箇所穿孔したもので、本来楕円形を呈していたものと考えられる粘板岩製である。

块状耳飾り (第140図)

第4号土壌の底面から出土した。切れ目を有するほうがやや幅が狭いが、おおむね円形を呈する。切れ目を下においた状態で、最上部に小孔が、その下部に主となる孔が位置しており、この孔から切れ目が延びている。2箇所孔は両面からほぼ同程度に穿たれたもので、断面上では中央で接している。穿孔後、切れ目及び周縁を共に研磨されている。最上部の小孔の存在から単に耳飾りとしただけでなく、垂飾品としての用途も考えられる。

石質は、磨製石斧等に使用されている硬質の緑色ホルンフェルスである。

石棒 (第140図)

3点出土した。いずれも欠損品である。第39号土壌出土の322(第140図)と遺構外出土の256は、断面形がほぼ楕円形で、馬の背状の稜が一稜通っている特殊な形状のものである。

3点ともススが付着している。

その他 (第142図)

244は、笹の葉状の形状をした扁平な石製品で、全面に研磨が施されている。面自体には若干ではあるが、膨らみが認められる。輝緑岩製である。

241は、欠損品であり244と同様な形状をしていたものと考えられるが、多少膨らみの度合いが強い。全面を研磨しているが、前工程の潰しの痕跡が残存している。

秋田県協和町の上ノ山Ⅱ遺跡出土のカツオブシ形石製品と形状は類似するが、上ノ山例が先端部を薄くする特徴があるのに対して、本石製品はこの傾向が認められない。

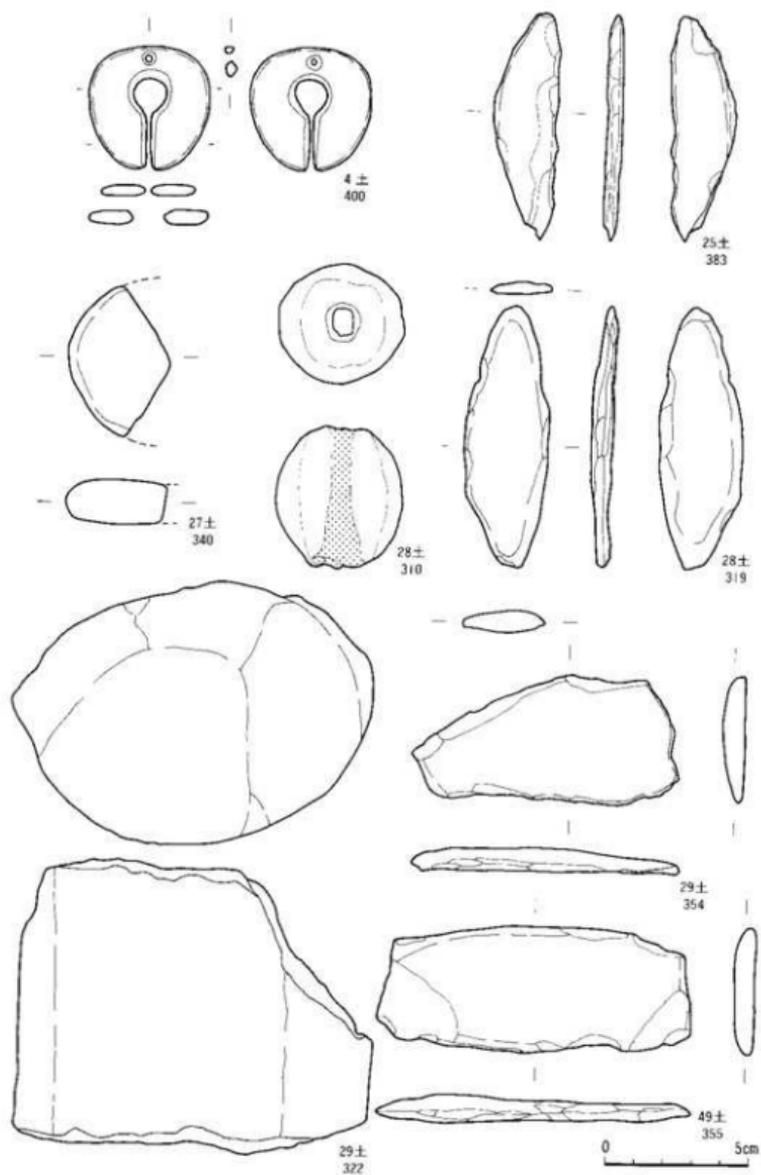
310は、28号土壌出土の軽石製品で、中央に両面から穿孔され貫通孔がある。ウキ(浮子)と推察される。

319(第140図)は、28号土壌の堆積土中から出土したもので、石刀の可能性も考えられる破片を素材とし、一辺を石刀の刃のような形状に剥離で調整し、器端側の両側縁に小さな剥離で抉りを作出したものである。粘板岩製である。

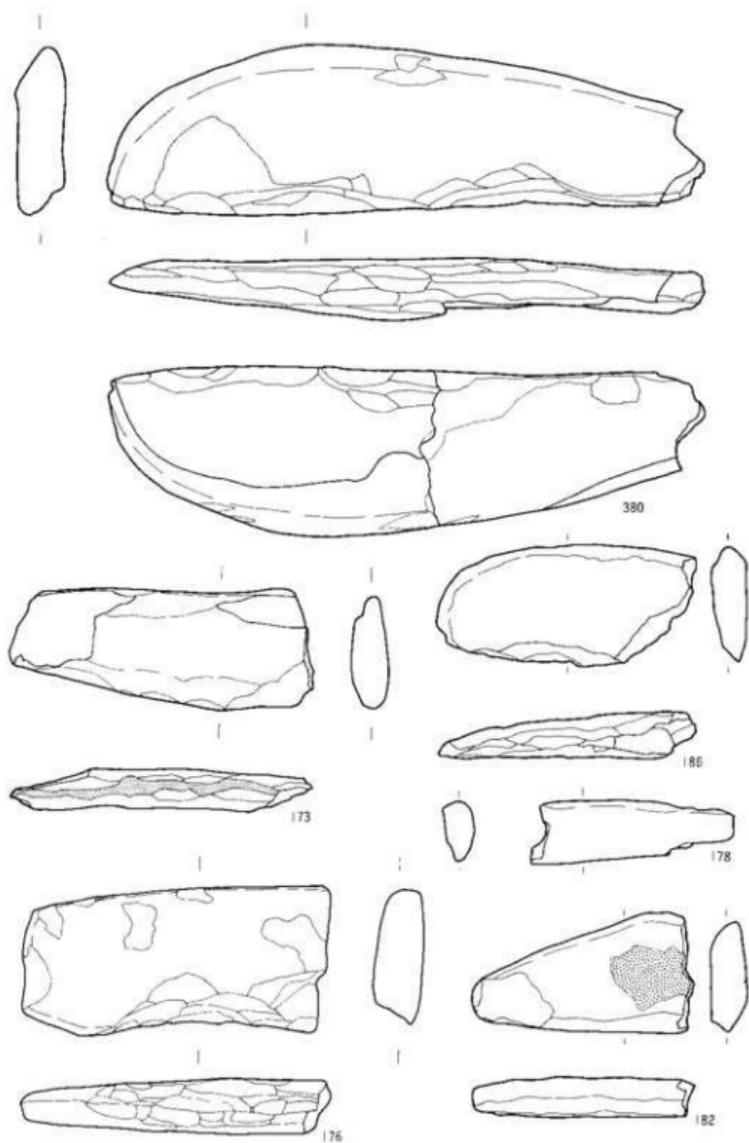
383は、25号土壌の堆積土中から出土したもので、板状の頁岩を素材とし、直線部分に小剥離を施している。

340は、27号土壌出土で、円盤状石製品の破片と考えられる。凝灰岩製である。

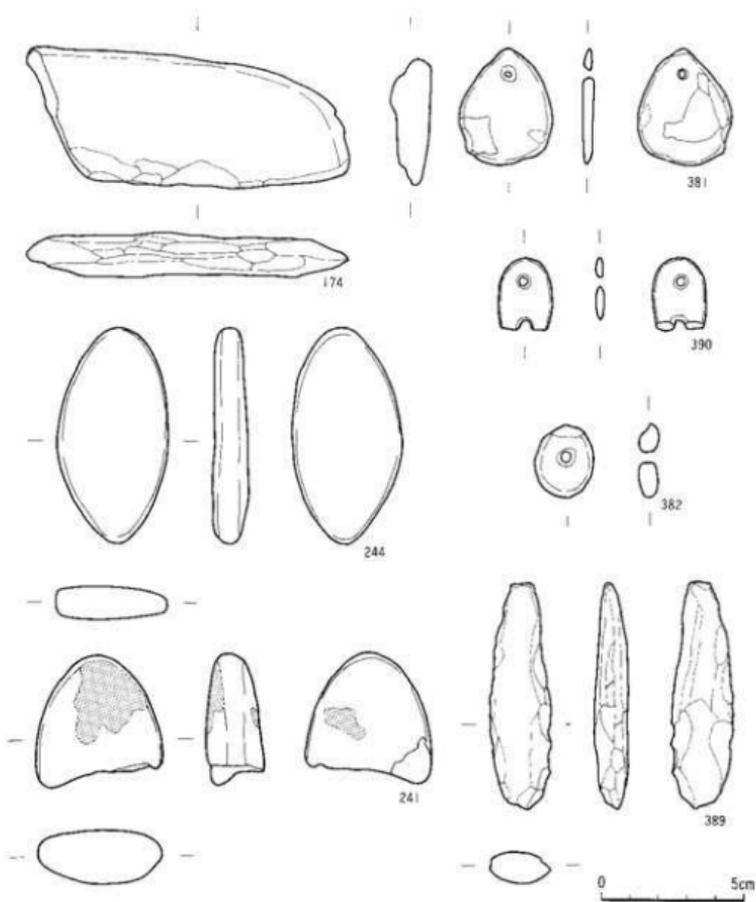
389は、小型で細長い棒状の素材に、両側縁に剥離により刃部を作出したもので、刃部に使用による痕跡は認められない。完成品か否かも不明である。(白鳥 文雄)



第140図 石製品(1) (遺構内)



第141図 石製品(2) (遺構外)



第142圖 石製品(3) (遺構外)

## 第VI章 分析と考察

### 第1節 遺跡について

今回の発掘調査を実施した結果、成果として、縄文時代前期から後期にわたる時期の遺構と遺物を多数発見することができた。まず、遺構についてみてみると、検出遺構総数は、77基であり、そのうち58基が土壌で占められている。当時の居住に関係した遺構は、1号竪穴住居跡とした1軒の住居跡のみである。総検出遺構の時期を度外視したとしても、縄文時代人は、この調査地区の範囲を居住区としては利用していなかったことが解る。彼らは、この地域を居住区外の生活圏の範囲として利用したのであろう。それは、多数の土壌の存在から推測することができる。それでは、調査地区を含めて巨視的にこの地一帯をみて、土壌構築者の居住区は、どの辺りにあったのであろうか。それは、四つの根拠から、当時の居住区は、調査地区東側半分の北側隣接地域と推定することができる。根拠の一つは、第5図にも示してある調査地区南東端に接して広がる当時の捨て場の存在である。通常の遺跡における当時の場の在り方として居住区と捨て場の距離は、それ程離れて位置していない。二つ目は、調査地区を含めたこの地一帯がこれも第5図でわかるように、緩やかな南に面した傾斜地となっており、この点も他の遺跡の例にもれず、南に面した斜面に居住区を構えるのが通常である。三つ目は、その南斜面の先端には、沢が存在している。当時の人々の居住区は、必ずと言っていい程、水の便の良好な地を居住区と選定している。四つ目は、先に述べた、土壌の存在であり、また、次に述べる調査地区内における多量の遺物の出土である。この両者は、居住区が付近に存在していることを物語っていることを如実に示している。

以上の点から、今回の調査地区は、当時の人間の暮らした地域の中の居住区に接した付近に相当する地域と考えられる。本遺跡の復原を推測するならば、調査地区を挟んで、その北側の緩斜面上には住居を構え（集落）、逆にその南側の急斜面には、当時の廃棄物を捨て（捨て場）、その中間にあたる調査地区には、土壌等を構築したという当時の地区選定を知り得ることができる。なお、次の遺物の項で述べるが、調査地区は、前述のとおり、土壌構築の場として利用された地区ではあるが、45-52ライン間の地区は、前述の捨て場と同様、こも捨て場として利用されている。

次に、遺物についてみてみると、出土遺物総量は、ダンボール箱で約180箱分にも相当する量であった。調査面積を併せ考えてみるならば、狭い範囲における180箱分の量は、多量と言うことができる。特に出土遺物のうち土器でみるならば、出土遺物の時期は、およそ縄文時代前・中・後期の三つの時期に大別することができる。3時期の中では、中期の遺物が量的に一番多い。また、土器からみると、前期から中期にかけては、継続しているが、中期から後期にかけ

ては、中期末の遺物が出土せず、断絶の時期がみられる。

以上の点から、今回の調査地区及び周辺の地一帯には、これら膨大な土器を製作・使用した人間が存在していたことが窺い知れる。

今回の調査で得た成果の中から遺構・遺物の両面で、遺跡の概観をしてみた。ここで最後に推測を前提として、「館野遺跡」の概略をまとめると次のように言えるであろう。

発掘調査を実施した館野遺跡は、規模としてみるならば、大規模な遺跡であると言える。

本遺跡は、居住区と調査地区に相当する生活文化区（生業区）及び捨て場の三つの「場」で構成されている。

本遺跡は、縄文時代前期から後期にかけての複合遺跡である。（遠藤正夫）

## 第2節 検出遺構について

今回の調査で検出した遺構数は、計77基である。そのうち竪穴住居数は、わずかに1軒だけであり、しかも、残りの大多数の遺構が縄文時代前・中期のものであると思われる中で、この住居跡は、縄文時代後期のものであり、検出遺構の中にあっては、むしろ例外的存在の遺構である。

検出遺構の主体を占めるのは、土壌であり、計58基になる。ただし、58基の中には、9・13・25・52・53号の8基のように偶然にも横一列に構築され、その位置が、調査地区の境界線上に位置していたため、完掘できないものも含まれている。

いずれにしても、今回の調査で検出した遺構は、土壌が主体であると言える。

（土壌について） 時期に関係なく、土壌の配置についてのみ、みてみると、58基の土壌は、大きく三つのブロックに分かれている。すなわち、Ⅱ区の22～26ライン間、Ⅱ区からⅢ区にかけての30～45ライン間、Ⅴ区の52～58ライン間の3ブロックである。ここでこの3ブロックに先の順序でA・B・Cと群の仮称を付すことにする。

A群とB群の中間地帯は、遺構及び遺物もほとんどみられない。また、B群とC群の中間地帯は、土壌が存在しないかわりに、10余基の焼土と多量の遺物が群んでいる。C群のより東側は、遺構がないものと思われる。

土壌の形状についてみてみると、A群の土壌は、4号土壌を代表例とするように、比較的方形の開口部が底面より広い土壌が集中し、B群の土壌は、比較的大きな形の整ったフラスコ状を呈するものが多く、C群の土壌は、比較的不整形でフラスコ状を呈するものやそうでないものが多いという特徴がみられる。

A群にみられる方形の土壌は、土壌墓の可能性が高い。特に4号土壌では、第Ⅶ章で詳述している土壌分析において良好な結果は得られなかったものの、土壌形態、底面からの球状耳飾りの出土の点から考えて、ほぼ土壌墓と断定して差し支えないものと思われる。

B群にみられる典型的なフラスコ状を呈する土壌群の多くには、各土壌の項でも述べたようにⅦ・Ⅷ層の土で土壌の開口部に蓋をしたようなもの(14・16・24・26号)とそれのみられないものがある。前者の土壌は、人為的な埋め戻しにより土壌内が埋まり切ったものと考えられる。後者の土壌の多くは、自然により堆積し埋没したものと考えられる。ただし、前者の場合において、人為的に埋めた点や遺物の出土状況等から土壌墓と考えられるが、土壌が墓のために構築されたのか、貯蔵用の穴として構築したものの再利用であるかについては不明である。

C群の土壌は、フラスコ状を呈しているものと、そうでなく開口部が底部より広いものとの両者がみられるが、その大半のものは不整形を呈していることが特徴である。

土壌の時期についてみてみると、58基の土壌のうち、底面から土器が出土し、およそ土壌の時期を把握できるものは非常に少なく、大半の土壌は、土器の出土が堆積土中からの状況であり不明である。時期の確定できる土壌は、15・16・29・49・50号の5基のみである。残りの土壌における土器の出土状況は、土器型式の違う土器が混在しており、それらについてはより新しいと考えられる型式の土器により、その土壌が最終的にいつ頃埋没しきったという時期を概略把握できる程度である。

ここで問題となるのは、一つの土壌内に新旧関係にある土器が混在している状況は、どのような解釈をすべきかという点である。このことについては、土壌放棄により仮に土壌がそのまま穴となって自然の力で空洞部に周囲の土等が堆積し埋まり切ったとすれば、復元可能な程度の土器の破片が常に穴の中に入るとは推定しがたく、むしろ、土壌内に新旧関係にある土器が混在しているということは、土壌放棄の際、自然堆積よりもある程度的人為的埋め戻しによる埋没と推測する方がより妥当であろうと思われる。特に多量かつ異型式の土器等を出土した28号a・b土壌は、そのような埋没過程を如実に示す好例であると考えられる。恐らく28号a・b土壌は、放棄された土壌の穴を利用して捨て場としたものと解釈できる。

次に土壌の時期を土器の面からではなく、土層観察により、土壌の構築面からおよそその時代を把握できる点について考えてみる。つまり、本遺跡には、これまでの発掘調査の成果によりある程度時代を把握できる中叡浮石という層が部分的ではあるが存在している。この中叡浮石層を切り込んで構築しているかどうかで、その土壌のおよそその時代を知ることができる。中叡浮石層は、これまでの地質・考古学の両分野の研究の結果、その降下時期は、およそ縄文時代前期中頃もしくはそれ以前——土器型式で言えば円筒下層d式土器期——という解釈がされ現在一般化している。ちなみに、この時期を裏付ける発掘調査の例としては、十和田市明戸遺跡(1983)が好材料であり、また、福田友之氏は、この中叡浮石について論考を発表している(福田1986)。

この中叡浮石層との関係で土壌をみてみると、先に述べた29号土壌では底面から4個の円筒

下層d1式土器が出土しており、この29号土壌は、中微浮石層より上位のⅢ層中から切り込んで構築しており、土壌内の上位壁面に中微浮石層があらわれている。

従って、土器と中微浮石層との関係は、確実に中微浮石層の降下が円筒下層d1式以前ということが判明した。なお、この中微浮石層は、降下堆積した層である。

しかし、前述したごとく、本遺跡においては、中微浮石層の堆積が一定しておらず、部分的にのみ堆積しているという状況であり、土層と土壌の関係はすべてに共通しているわけではないという欠点もある。

なお、土壌の時期決定となりえるような底面からの出土土器で、土壌内底面出土土器をみると円筒下層d1式土器が時期的にみて一番古い時期のもので下層c式土器が出土した土壌はない。

幾つかの視点からみて、58基の土壌構築の下限は、円筒下層d1式土器期頃と思われる、本遺跡で検出した土壌の大半は、円筒下層d1式土器期及びそれ以降の構築であると推定した。出土土器からみて概略的にいえば、土壌の大半は、縄文時代前期末から中期中～後半の時期の構築であると言える。

最後に土壌の用途についてみると、その用途を確実に断定できるような土壌は、先に述べた4号土壌の土壌墓と断定した1基のみで、他は、断定しえるだけの根拠に乏しいものが多い。しかし、可能性としては、58基の土壌の中には、土壌墓と推定できるものもある。

土壌墓と推定できる土壌は、7・8・14・15・16・17・24・29・50・51の10基である。この10基は、先にA群とした範囲の土壌群とB群とした範囲の一部に各々集中した配置をみせており、配置の面でもこの10基及び4号土壌は、土壌墓と推定することが可能である。

以上、検出土壌について概略を記述してきたが、それらをまとめて一覧表としてみた。

(屋外炉について) 屋外炉は5基検出した。形態は、地床炉のもの(1・4・5号)と土器埋設炉のもの(2号)と土囲炉のもの(3号)の3種類がみられる。位置的には、1号のみがⅡ区に位置し、他の4基はすべてⅣ区に集中している。時期的には、土器の出土した2・3号は円筒上層式土器(土器が完形品でないため)期であり、1号は周囲の状況から円筒下層d式土器期と考えられ、4・5号は、確認面の土層から円筒上層式土器期と考えられる。

(遠藤正夫)

第7表 遺構内出土遺物概略一覧表

(注) ・復原光彩 数値は図説に掲載した数と同一  
 ・破片 ”  
 ・石器 ”  
 ・破片区分 微量…1～10片 ・×はなしの意味  
 少量… 30片 ・54号十歳……本文参照  
 中量… 50片  
 多量… 50片以上

遺構名 区別	遺構 番号	土 器			石 器	その他 の遺物	時期	遺構名 区別	遺構 番号	土 器			石 器	その他 の遺物	時期			
		復原光彩	破片	剥片						破片	剥片	破片						
生活跡	1号	4箇	多量		2													
Ⅱ	1号	×	×	×	×	×	不明	Ⅴ	30号	×	微量	4	1	×	×	不確定		
	2	×	微量	×	×	×	不明		31	×	微量	×	1	×	×	不明		
	3	×	×	×	×	×	不明		33	1	中量	4	3	4	×			
	4	×	×	×	×	1	不明		34a	×	中量	3		2	×			
	5	×	×	×	2	0	不明		34b	×	少量	3	×		×	不確定		
	6	×	×	×	×	×	不明		35	×	×	×	×	×	×	不明		
	7	×	×	×	×	×	不明		36	3	中量	4	1		×			
	8	×	×	1	×	×	不明		37	×	少量	3	×	×	×	不確定		
	9	×	微量	2片	×	1	×		不確定	38	×	少量	×	×	×	×	不明	
	10	×	微量	2	×	×	×		不確定	39	×	少量	2	×	2	1	不確定	
	11	×	微量	2	×	×	×		不明	40	×	少量	4	1	×	×	不確定	
	12	×	微量	1	×	×	×		不詳	41a	×	×	×	×	×	×	不明	
	Ⅲ	13	×	微量	2	1	×		×	不確定	41b	1	中量	7	1	4	×	
18		1	中量	8	×	1	×		42	×	中量	1	×	×	1			
19		×	中量	6	10	×	×		43	×	少量	4	×	×	×	不確定		
20		×	微量	1	×	×	×	不明	44	×	少量	3	1	×	×	不確定		
25		×	少量	2	×	2	×	不確定	45a	×	少量	4	1	×	×	不確定		
32		×	×	×	×	×	×	不明	45b	×	少量	4	×	×	×	不確定		
55		×	×	×	×	×	×	不明	47	1	少量	2	×	×	×	不確定		
55		×	×	×	×	×	×	不明	48	1	中量	2	×	×	×	不確定		
									49	2	少量	3	×	×	1			
14		2	多量	12	2	1	×		Ⅵ	1号	×	×	×	×	×	(上層)		
15		2	中量	8	×	×	×			2	1	微量	×	×	×	×	上層	
16		5	少量	5	1	×	×			3	1	微量	×	×	×	×	上層	
17		1	多量	5	2	1	×			4	×	×	×	×	×	×	(上層)	
21	×	多量	8	1	1	×		5	×	×	×	×	×	×	(上層)			
Ⅳ	22	×	×	×	×	×	不明	Ⅶ	1号	×	×	×	×	×	×	不明		
	23	2	中量	6	1	1	不明		2	×	×	×	×	×	×	不明		
	24	1	中量	4	×	×	×		3	×	×	×	×	×	×	不明		
	26	×	微量	×	×	×	×		不明	4	×	×	×	×	×	×	不明	
	27a	2	多量	11	4		1		5	×	×	×	×	×	×	×	不明	
	27b	×	多量	11	×		1		6	×	×	×	×	×	×	×	不明	
	28a	19	多量	×					7	×	×	×	×	×	×	×	不明	
	28b	8	多量	11		7	2		8	×	×	×	×	×	×	×	不明	
	29	4	多量	1	2	1	1		不確定	9	×	×	×	×	×	×	不明	
	50	2	少量	6	1	×	×			10	×	×	×	×	×	×	不明	
	51	3	少量	6	×	2	×		上層a	11	×	×	×	×	×	×	不明	
	Ⅴ	54号			×	×	×		不明	Ⅷ	1号	×	×	×	×	×	×	(後期)
											2	×	×	×	×	×	×	×

### 第3節 出土土器について

今回の調査で出土した土器は、ダンボール箱で約100箱分に相当する量であった。その大半は、縄文時代前期末から中期にかけての時期のもので、円筒土器下層式と上層式の土器である。

土器の出土状況を見ると、圧倒的に遺構外からのものが多く、その大半は、捨て場と考えられる44ライン付近から52ライン付近までのやや平坦な地区から出土している。捨て場らしく土器は、横転し1個体分がその場でつぶれた状況を呈するものが大半を占めており、むしろ個々に散在する破片よりも、ほぼ原形を留めた状態でつぶれた復原可能土器の方が量的に多い。しかし、1個体分の土器が横転してはいるものの、直立・倒立状態で出土した土器は、ほとんどみられない。

なお、縄文時代後期の土器は、1号竪穴住居跡床面から一括して出土したものの他は、出土地点に特別の限定範囲はみられず、調査地区全体から出土している。

本節では、以下、出土土器の主体を占める円筒土器について記述することにする。

出土した円筒土器については第V章第1節で分類し記述したとおりであるが、ここで再度、各型式の土器についてまとめてみる。

まず、本書における同筒土器の分類を掲げると次のようになる。なお、既に述べているように、分類のX群としたものを除く大区分(式に相当)は、江坂輝弥・村越潔氏の分類基準に概略は準拠しており、細区分(類に相当)は、両氏の類別とはまったく違い、あくまでも本書における細分である。



本書では、本遺跡から出土した円筒土器及び一部の関連土器を上記のように分類したのであるが、次に各型式の土器についてその特徴をまとめてみる。

#### 円筒下層 a 式土器

- ・出土量は極めて少ない。
- ・深鉢形の器形が多い。
- ・底辺部は外側に張り出し、底部は上げ底である。
- ・胎土には、植物繊維の混入がみられる。
- ・文様は、単純なものが多く、地文縄文だけのものや、口頸部に綾絡文を巡らしたものが多く、底部に縄文が施文されているものもある。

#### 円筒下層 b 式土器

- ・出土量は少ない。
- ・円筒形に近い器形で大型のものも出現する。
- ・底辺部の張り出しと上げ底は、みられるものとそうでないものの両者がある。
- ・胎土には、植物繊維の混入がみられる。
- ・太い隆帯が口頸部に貼りつけられる。
- ・口頸部文様帯には、回転手法による縄文・捩糸文と押圧手法による縄文が施文される。
- ・羽状縄文・木目状捩糸文が出現する。

#### 円筒下層 c 式土器

- ・出土量は少ない。
- ・円筒形の器形で、口頸部が外反するものとそうでないものがみられる。
- ・底辺部の張り出し及び上げ底は、ほとんどみられなくなる。
- ・胎土には、植物繊維の混入がみられる。
- ・口頸部には形態化した隆帯のみられるものとないものがある。
- ・口頸部文様は、押圧縄文による幾何学文様がほとんどである。文様帯は、比較的幅広い。
- ・胴部には、斜縄文の他に多軸路条体回転文が出現する。

#### 円筒下層 d 式土器

- ・出土量は多く、遺構内からも一括して出土している。
- ・典型的な円筒形の器形である。
- ・胎土には、植物繊維の混入がみられる。
- ・口頸部の隆帯は、みられない。
- ・口頸部文様は、押圧縄文による幾何学文様・平行線文様である。文様帯は、幅狭い。
- ・胴部文様は、斉一性が強く羽状縄文か木目状捩糸文のどちらかが施文され、稀に多軸絡

糸体回転文がみられ、斜行縄文は、みられない。

#### 円筒下層 d<sub>2</sub>式土器

- ・出土量は、下層 d<sub>1</sub>式土器より若干少ない。
- ・器形の分化がみられ、円筒形、深鉢形、その他頸部にくびれをもつもの等がみられる。
- ・胎土には、少量ながら植物繊維の混入がみられる。
- ・口頸部文様帯は、再び広くなる。
- ・波状口縁と平縁のものがみられる。
- ・口頸部に再び隆帯が1巡して貼りつけられる。懸垂状の隆帯が貼りつけられる。
- ・口頸部文様は、押圧縄文により施文されている。
- ・胴部文様は、羽状縄文と斜行縄文の両者がみられ、斜行縄文施文のものには縦位の綾結文が施文される。

#### 円筒上層 a<sub>1</sub>式土器

- ・出土量は、下層 d<sub>2</sub>式土器とほぼ似た量である。
- ・器形は、深鉢形のものが多いが、中には、特殊な器形をなすものもある。
- ・稀に胎土に植物繊維の混入がみられるものもあるが、大半は、みられない。
- ・波状口縁と平縁のものがみられる。
- ・口縁部は肥厚し、外面にコイル状を呈する連続した縦位の押圧縄文が1巡する。
- ・口頸部文様帯は、隆帯により区画されている。
- ・口頸部文様は、連続縦位短線圧痕文が主文様となる。押圧縄文による波状文もみられる。
- ・胴部文様は、すべて縄文となりほとんどが斜行縄文である。結糸体回転文は、まったくみられない。羽状縄文は数的にみると少ない。

#### 円筒上層 a<sub>2</sub>式土器

- ・出土量は、上層 a<sub>1</sub>式土器より若干多い。
- ・器形は、深鉢形である。
- ・ほとんどが波状口縁である。突起は、山形を基調とした派手な作りのものが多い。
- ・口頸部文様帯の懸垂状の隆帯には、「×」「八」字状のものがみられ「ノ」字状は少なくなる。
- ・口頸部文様は、押圧縄文による鋸歯状文が主文様となる。稀に爪形圧痕文もみられる。
- ・胴部文様は、羽状縄文と斜行縄文のものがみられる。綾結文もみられる。

#### 円筒上層 b<sub>1</sub>式土器

- ・出土量は少ないが遺構内から一括して出土したのものもある。
- ・器形は、円筒形に近い深鉢形である。

- ・4箇所に弁状突起を有する口縁である。山形突起はみられない。
- ・口頸部文様帯の隆帯は、複雑化し、隆帯文様が連結するようになる。隆帯は細い。
- ・口頸部文様は、押圧縄文による爪形圧痕文が隆帯と共に主文様となる。
- ・胴部文様は、羽状縄文が多用される。

#### 円筒上層c式土器

- ・出土量が多いが、遺構外からのものがほとんどである。
- ・器形は、深鉢形である。
- ・弁状突起を有する口縁と平縁のものがある。
- ・突起部直下に橋状把手・ボタン状貼り付け文がみられる。
- ・口頸部文様帯は、上層b式土器よりさらに幅広くなる。
- ・口頸部文様帯の隆帯は、複雑化し、隆帯による「たすき」「めがね」状の曲線文様が構成される。隆帯は細い。
- ・口頸部文様は、刺突文が隆帯と共に主文様となり、爪形圧痕文はみられない。
- ・胴部文様は、羽状縄文もみられるが大半は斜行縄文のものである。

#### 円筒上層d式土器

- ・出土量が一番多いが、すべて遺構外からだけの出土である。
- ・器形は、深鉢形で比較的小-中型のものだけである。
- ・小型化した弁状突起のものと平縁のものがある。
- ・口頸部文様帯は、さらに広がるものと、逆に狭くなるものがある。
- ・隆帯文様は簡略化される。
- ・口頸部文様は、細い隆帯だけで文様が構成される。
- ・隆帯は、地文縄文上に貼りつけられるものもある。
- ・胴部文様は、ほとんどが斜行縄文である。

以上、第V章で各型式ごとに述べた内容を再度概略的に列記してみた。次に上記の特徴的な事項を各土器型式の過程の中でみてみることにする。

#### 器形

円筒土器とは呼称しているものの典型的な円筒形を呈するものは、下層d1式土器のみで、上層b式土器がやや円筒形に近いが、他の型式は、深鉢形を呈している。特に下層d2式土器のあたりから大木式土器の影響と思われる器形の分化が進み、胴部に膨みのみられるものが次第に多くなる。全般に下層式土器には大型の土器がみられるが上層b式以降は、みられなくなる。

#### 隆帯

口頸部文様帯下位に貼りつけられる隆帯は、下層d<sub>1</sub>式土器を除きほとんどの型式にみられるが、その作りは、下層b式土器が太く、それ以降形骸化し、再び下層d<sub>2</sub>式土器で若干太いものとなり、また次第に細くなり上層b式土器になると隆線状となる。

口頸部文様帯中に貼りつけられる懸垂状の隆帯は、下層d<sub>2</sub>式土器から多用されるが、そのほとんどは口頸部4区画に区分するものであるが、上層b式土器あたりから以降は、隆帯自体が連結し文様を構成するようになる。

#### 口頸部文様帯

文様帯の幅は、下層d<sub>1</sub>式土器のみが極端に幅狭くなる他は、全般に幅広く、上層式では、a式土器から次第に広くなりd式土器で最も広くなり、同じd式（後半）で再び狭くなる。

#### 口頸部文様

下層a・b式土器は、回転縄文により施文され、下層c・d式土器は押圧縄文により施文される。上層式になると、a・b式土器では押圧縄文と隆帯文の組み合わせ文様で、c式土器は刺突文と隆帯文の組み合わせ文様となり、d式土器になると隆帯文のみになる。

#### 胴部文様

胴部文様には、縄文と燃糸文の2種類が使われ、羽状縄文は、下層b式土器からみられ、下層d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub>式・上層b式土器で多用される。木目状燃糸文も下層b式からみられるが、多用されるのは、下層d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub>式土器である。多軸絡糸体回転文は、少ないが下層c・d式土器で見られるが上層式には用いられなくなる。木目状燃糸文も上層式土器にはみられない。

胴部文様に関してのみ言えば、下層d<sub>1</sub>式土器と上層b式土器に強い斉一性がみられる。

下層式及び上層式土器全般に斜行縄文が使われる土器は多いが、特に上層式土器になると、その上に縦位の綾絡文が施されるようになる。

#### 底辺部の作り

底辺部に張り出しのみられるものは、下層b式土器までで、それ以降はみられなくなり、底部の上げ底も下層c式土器以降みられなくなる。

#### 胎土

下層式土器の胎土には必ずと言ってよい程、植物繊維が混入しており、それは、一部上層a<sub>1</sub>式土器でもみられるが、上層a<sub>2</sub>式土器以降は、まったくみられなくなる。

(遠藤 正夫)

#### 第4節 スリ石の主機能以外の痕跡について

本遺跡出土のスリ石は欠損品が多く、器体全体を把握する資料は少ないが、整理中に確認できたことについて述べてみたい。対象資料は、I類とした長楕円形の礫の側縁を機能面としているものである。

主機能面には使用による剥離が多く認められるが、意識的に打ち欠いた痕跡も認められる。これは、半円状扁平打製石器に見られる剥離痕と同様のものと、欠損ではないかと思われる程の大きな剥離の両者がある。前者は、半円状扁平打製石器と同様の使用から始まり、機能面が幅広になっても、そのままスリ石として使用していったものと考えられる。また、機能面の幅が広がったため再度打ち欠いて幅を減じさせた可能性も考えられる。これとは別に仮定ではあるが、機能面に必要な幅を早く得るために、側縁部を剥離によく薄くし、側縁と直角方向からの打撃によって、剥離により薄くなった部分を取り去った可能性も考えられる。

後者は、機能面を下に置いた場合、中央から左寄りに多く認められる。この剥離は器体の中央部まで及んでいるものもあり、また、機能面を損ねているものもある。従来、欠損部として取り扱ったものであるが、過去の調査で知り得た資料中にも位置的に類似性が認められることから、意識的な剥離として捉えてみた。この結果、器体の把握において手の母指が概ねこの位置にくることが確認された。これは、器体自体に相当の重量があることと、いかに持ち易くするかを考えた結果であると考えられる。

機能面の対辺である背の部分に加工痕の認められるものが多く出土しており、a 欠損様の粗い打ち欠きがなされているだけのもの、b 敲打により潰し加工が行われているもの、c スリ・研磨がなされているものが認められる。cは器体整形も意図したものと考えられるが、これらの痕跡も基本的には持ち易さを求めるための加工と考えられ、背における加工は、前述した置き方の場合、最も肉厚で幅広の部分に多く認められ、出土石器の項で述べたように手ズレによると思われる摩滅が認められる。また、この部分に小さなスリ痕があるのも同様な意識によると推察される。

器体の平坦面に認められる小規模な敲打痕および凹みは、以前からも滑り止めとしての機能が考えられてきたが、前述した大きな剥離痕の認められないものに多く存在する。

この敲打痕は、北海道式石冠においては器体成形時に行われ、この帯状の溝がこの石器の特徴ともなっている。

これらの機能との関係は不明であるが、a 端部に加工痕が認められるものが多く、b 挟り状または端部の丸みを取り去っているものがある。また、欠損品の切断方向からの観察では器体の前後がだまかにでも規定されていたと考えられ、端部の形状が鋭角または丸みを帯びている方から、端部が直角または直線的な方に向かって折損しているものが多い傾向が認められる。

この傾向は本遺跡出土の北海道式石冠や半円状扁平打製石器にも一部認められることから、すべてに対してではないが、後者においては単に主機能面としての直線部分とそれに対する弧状部分としての捉え方以外にも、前後関係が存在し、本論の対象であるスリ石にも存在した可能性が指摘できるものと考えられる。

このことは機能面において、使用に伴う減り方と大いに関係があることであるが、三宅徹也氏が和野前山遺跡（青埋文報第82集）で述べた片減りとの関係からも概ね合致する。しかし、本遺跡出土の該石器に、両端部が相反する方向へ大きく片減りしているものも認められることから即断は出来ない。また、欠損品が多く点数も限定されているため、今後の問題点として指摘するに留め、対象資料を増やして再検討したい。（白鳥 文雄）

## 第5節 塊状耳飾りについて

本遺跡Ⅱ区の第4号土壌底面から塊状耳飾りが1点出土した。土壌は、南北にやや長い長方形を呈し、壁直下に周溝が一周している。塊状耳飾りは底面北西部からの出土であり、この土壌が、墓塚としての機能を持ち、被葬者が耳朵に耳飾りを装着したままで葬られたと仮定すれば、頭位を北に向けた屈葬が考えられる。本資料のほかに伴出遺物がなく、時期を決定するには至らないが、土壌の検出・確認状況からは、中掘浮石の降下以前に構築されたものと考えられ、本遺跡の出土遺物の大半を占める円筒土器に供伴するものと推察される。

出土した塊状耳飾りについては、石製品の項で詳述したが、形状（上下は切れ目を下にした状態で記述とする。以下同様）は、ほぼ円形を呈するが、上部がやや直線的で、切れ目側がややすぼまる。主たる孔は中央やや上寄りに位置する。また、この孔の上部に小孔が穿たれ、耳朵への装着以外にも乗飾品として兼用された可能性も考えられる。扁平な作りであり、緑色ホルンフェルス<sup>31</sup>を素材としている。この素材は、本県において縄文時代早期・前期から擦切磨製石斧の材料として利用されているものである。

前述のように、本資料は円筒土器に伴うものと考えてはいるが、他の円筒土器に伴うものとは形状に差異があり、傍証資料に欠けるため他遺跡出土の該石製品との比較を試みてみたい。

### 1 青森県内出土の塊状耳飾り

現在、青森県内において出土したとされる塊状耳飾りは20点である。しかし、出土地及び出土状況の不詳な、いわゆる伝世品的なものも多くなる。

本県における発掘調査での出土例は、昭和28年の報告になる勝山ヤブシ長根配石遺跡<sup>32</sup>での破片資料1点が初見である。この後、昭和37年には青森市三内霊園遺跡で破片1点の出土が報告され、昭和40年には、石神遺跡で5点の出土が確認された。このうち1点は製作途上の未製品である。昭和48年度の報告になる沢部Ⅱ号遺跡では、未製品が1点出土している。昭和50年

には水木沢遺跡において1点、昭和52年には長七谷地遺跡において1点出土している。したがって、発掘調査における出土例としては本遺跡出土のものは11点目であり、完形品としては長七谷地遺跡に次いで2例目、遺構内出土のものとしては初例である。

発掘調査以外のものとしては、風韻堂コレクション<sup>33</sup>中の4点があり、このほかには、青森市新城岡町出土とされる1点、青森市矢田前出土とされる1点、車力村田小屋野貝塚出土とされる2点、下北地方出土<sup>34</sup>とされる1点である。

これらの資料のうち、現在、所在が不明のものもあり、全資料を実現することができず、各報告書などの記載から収集したのもも多い<sup>35</sup>。

これら県内出土品のうち完形品は2点で、未製品とされるものが2点である。形状は下辺が幅広の三角形のものが多く、ほとんど欠損品である。また補修孔とされる小孔が穿たれているものが多く、折損部を再研磨しているものも認められる。

長七谷地遺跡のものが、環状を呈している点からやや異質と考えられる。また、断面形がカマボコ状・台形状のものは未見である。時期的な面からは、発掘調査例以外は除くが、概ね、縄文時代前期・中期に伴うものである。

## 2 隣接地域の出土例

### ○北海道における出土例

北海道における出土例については、三浦正人氏が川上B遺跡の報告書中において詳述している。報告書刊行後においては、八雲町栄浜1遺跡において1点の出土が報告されている。これによると、縄文時代中期中頃から前期の遺物を包蔵するIV層中からの出土で、形状は下辺の非常に長い三角形のもので欠損品である。器体の中央に小孔が穿たれている。

総数は25点となり、形状的には、円形・三角形または台形・棒状の細いものがあり、円形のもののは概ね肉厚で、断面形状が台形またはカマボコ状を呈している。三角形または台形のもののは薄手である。

時期的な面からでは、円形のもの、縄文時代前期前半に、三角形のものは前後半の土器に伴出する旨の指摘<sup>36</sup>がされている。

### ○岩手県における出土例

おもに、調査報告書からの収集である。35点を確認したが、このほかにも相当数の該石製品が存在しているものと思われる。

確認したのものの中で多数の出土が認められた遺跡は、塩ヶ森I遺跡・鳩岡崎遺跡の2遺跡で11点ずつの出土が認められている。

このほかには、和光6区遺跡3点・手代森遺跡1点・長者屋敷遺跡(Ⅲ)3点・大明神遺跡4点・西田遺跡2点の出土を確認した。

形状では、円形または隅丸の長方形のものが圧倒的に多く、幅の狭い長方形のものが数例認められるが、三角形または台形の場合は、鳩岡崎遺跡の欠損品が1点である。

時期的な面からは、おもに縄文時代前期後半から中期中葉の土器に共存するようであり、形式的には、円筒土器・大木式土器があげられる。

○ 秋田県における出土例

協和町の上ノ山Ⅱ遺跡で、50点の出土が確認されたが、ほかにまとまって出土した遺跡は確認されていない。調査後に隣接地で、さらに数点の出土が確認されたとのことであった。

発掘調査において出土した該石製品<sup>17)</sup>は、黒倉B遺跡1点・大野地遺跡1点・下田遺跡1点・小出Ⅱ遺跡1点が確認されている。

出土状況等が不詳のもの<sup>18)</sup>では、松木台1点・根羽子沢1点・雄物川町深井1点・秋田市四ツ小屋1点・横手市2点?が認められている。

形状では、円形のものがその大部分を占め、幅の狭い長形状のものが数例ある。

時期的には、縄文時代前期に伴うものが多いようである。

### 3 東北北部および北海道における特徴

本項をまとめるにあたっては、<sup>19)</sup>該石製品の出土例に主眼を置いたために伴出する土器を詳細に検討できなかった。このため、詳細な編年を行うまでには至らないが、前述の三浦氏の編年では、前期前半期には円形のものが多く、後半期には三角形ないし台形のものが出土し、後者はおもに円筒下層式に伴うとしている。

また、本県及び隣接の地域の資料を概観した結果からは、a 時期的には縄文時代の早期末から出土が認められ、前期から中期に集中すること、b 形状的には円形が圧倒的に多数で、三角形ないし台形状のものは本県及び北海道に集中する傾向があることが判明した。

伴出土器の型式では、本県は概ね、円筒土器に伴っての出土が認められるが、他県においては、大木式その他と伴出しているようである。これは、該石製品が全国的にも出土していることから、土器型式によって出土が左右されると考えるよりも、縄文時代の早期末から中期にかけての時期的な出土傾向として捉えざるを得ない。しかし、形状においては伴出する土器型式の相異によつての分類が可能かもしれない。

三浦氏の編年における傾向からすれば、本県に円形を呈するものが少ない理由も解決されそうである。また、時期的な面ではなく、形状からだけ考えれば、大木系土器を多く出土する秋田・岩手両県では円形のものが多い理由の一つとなる。

また、氏が時期的に古手とした円形の場合は、断面形状が台形およびカマボコ状のやや肉厚のものであり、秋田・岩手両県で出土の円形のものとは断面形状において異なることから、編年的にもなら矛盾点はないものと考えられる。

これらのことから、東北北部・北海道においての塊状耳飾りについては、初現期のものは数的に乏しいことから除外するが、概ね、円形で断面形が台形状を呈するもの→円筒土器系は三角形（台形）・大木系土器には円形を呈するものの順に出現する傾向が読み取れる。

しかし、これらの中にも、形状等の細部において差異が認められることから、今後の検討が待たれるものである。

#### 4 館野遺跡出土の塊状耳飾りについて

以上のことから、館野遺跡の土壌中から出土した塊状耳飾りは、本県には類例の少ない円形のものであったが、他県出土の例から考えると特異な存在ではないことが理解された。また、円筒土器・大木式土器によって形状に特徴がみられるというものの、各文化圏の接する地域も広範囲にわたることや、両圏が相互に影響し合っていること、本遺跡においても大木系土器が少量ではあるが、完形土器も数点出土していることなどから、津軽地方の円筒土器を出土する遺跡から円形の塊状耳飾りが検出されず、同じ円筒土器を主体とした本遺跡から出土したとしてもなら矛盾点はないものと考えられる。

本資料は、時期的には遺構の確認状態等から縄文時代前期の所産と考えられるが、形状的には大木系の影響を受けたものと推察され、他遺跡の例から中期の可能性もある。

注1 昭和58年に青森県市浦村教育委員会から刊行された、市浦村五月女遺跡の報告書において川村真一調査員（日本地学教育学会員）が磨製石斧等における石質の再確認を行い、顕微鏡的特性から、ホルンフェルスとした。従来の本県で緑色凝灰岩・緑色細粒凝灰岩等と呼称していたものである。

注2 西村正衛・桜井清彦「青森県森田村附近遺跡調査概報-第二次調査-」古代10 1953年7月によるが、現物は実見していない。

注3 青森県立郷土館所蔵のもので、目録だけに記載され、実測図などの掲載がなかったため、今回実測したものである。

注4 東北歴史資料館の藤沼邦彦氏が、青森県下北半島で表採したもので、本人より御教示いただいた。

注5 青森市阿町出土のもの・車力村田小屋野貝塚出土のものは「円筒土器文化」村越潔著によって、また、青森市矢田前出土のものは、東北大学に所蔵されており、須藤隆氏のご好意により実測させていただいた。

注6 川上も遺跡報告書中の三浦正人氏の分析による。

注7 下田遺跡出土のものは未報告であり、1987年の調査で出土したものである。小出Ⅱ遺跡出土のものも未報告で、1988年の調査で出土したものである。共に秋田県埋蔵文化財センターによるもので、前者は谷地薫氏に、後者は高橋忠彦氏に御教示いただいた。また、上ノ山Ⅱ遺跡での新たに検出されたものは、遺跡範囲確認調査においてということである。

注8 「秋田県の考古学」に記載されているものについては、秋田県埋蔵文化財センターの岩見誠夫氏から多くの情報を御教示いただいた。北浦出土のものは東北大学で所蔵のものである。横手市出土の2点は、1点が近年の発掘によるものとされているが詳細は不明である。また、もう1点は高橋宇氏からの御教示で、横手高校にあったとのことであり、小吉山（大鳥井棚）からの出土ではないかということであった。

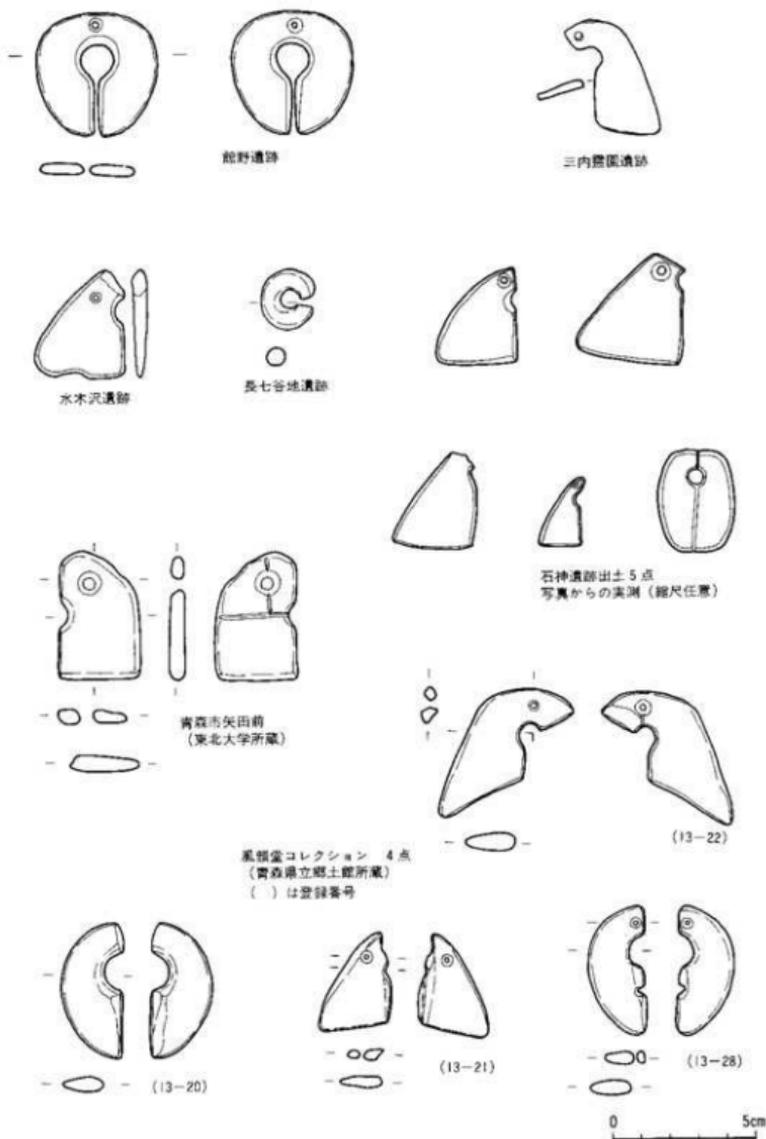
注9 東北北部のほかにも、福島県の出土例について本間宏氏から、宮城県の出土例の一部について藤沼氏から御教示を得たが、本項において充分に活用できなかった。ここに、おわびとともに謝意を述べたい。

（白鳥 文雄）

第8表 玦状耳飾り出土一覧表

(調査・報告年は昭和〇年)

出土地	所在地	数	調査・報告時期	備考
徳山 <sup>1)</sup> 三石 <sup>2)</sup> 三石	青森県西津軽郡森田村	1	28年報不詳	破片
三内雲岡遺跡	青森市三内沢部	1	37年調	円筒下層?
石神 <sup>3)</sup>	青森県木造町	5	40年調	円筒下層山
沢部 <sup>4)</sup> 日号 <sup>5)</sup>	弘前市小栗山字沢部	1	48年調	円筒下層 <sup>6)</sup>
水本沢 <sup>7)</sup>	青森県下北郡大畑町	1	50・51年調	円筒下層
長七谷地 <sup>8)</sup>	八戸市市川字長七谷地	1	52・53年調	前期
新城岡町	青森市新城市岡町	1	不詳	破片
欠田町	青森市欠田前	1	"	"
田小野野貝塚	青森県西津軽郡赤力村	2	"	破片
下北	青森県下北郡	1	"	"
奥田 <sup>9)</sup> ア <sup>10)</sup> シ <sup>11)</sup> シ <sup>12)</sup>	青森市2点・浅瀬1点・不明1点	4	"	"
館野遺跡	二戸郡旭地村字館野	1	62年調	前期?
川上B <sup>13)</sup> ・C <sup>14)</sup>	北海道空知郡青葉町	1	57年調	早期中基跡
吉井の沢1 <sup>15)</sup>	江刺市	1	57年報	前期 銅文
北 <sup>16)</sup> ノ <sup>17)</sup> ノ	銅路市	1	50年報	" "
緑野1 <sup>18)</sup>	旭川市	2	36年報	前期
美々 <sup>19)</sup> ノ <sup>20)</sup>	千歳市	1	55年報	" "
美沢4 <sup>21)</sup>	苫小牧市	1	54年報	" "
北字田 <sup>22)</sup>	栗山町	1	42・44年報	長円形 "
熊の谷貝塚 <sup>23)</sup>	空室町	1	56・58年報	円形 "
寿都 <sup>24)</sup>	寿都町	3	55年報	前・中期
森越 <sup>25)</sup>	知内町	2	50年報	" 円筒
藤山館 <sup>26)</sup>	上ノ国町	2	30年報	前期
サイヘ <sup>27)</sup> 沢	浜館市	1	33年報	" "
東山 <sup>28)</sup>	岩内町	1	33年報	" "
美々 <sup>29)</sup> 4 <sup>30)</sup>	千歳市	1	55年報	前期
入江貝塚 <sup>31)</sup>	虹田町	1	33年報	中期 円筒
共栄B <sup>32)</sup>	盛岡町	2	51年報	早期 油蝋
栄浜1 <sup>33)</sup>	八志町	1	56・57年調	中期
不 <sup>34)</sup> 街		2	8年報	食器2点
塩 <sup>35)</sup> ノ <sup>36)</sup> 森1遺跡	岩手県岩手郡平石町	11	49・50・54・55	完形1・本製品1・円形1・長円形1・長方形2
和光6区 <sup>37)</sup>	胆沢郡金ヶ崎町	3	59年調	円形2(半欠)・長円形1(完形)
手代森 <sup>38)</sup>	紫波郡御街村	1	59年調	前期?
長者原敷田 <sup>39)</sup>	岩手郡松尾村	3	59年報	前期
大明神 <sup>40)</sup>	紫波町	4	50年調	長円形3点・長方形1・半欠3・破片1
坊岡崎 <sup>41)</sup>	和賀郡江釣子村	11	56年報	円形ないし長円形・三角形1・本製品1
西田 <sup>42)</sup>	新渡町	2	54年報	中期?
上ノ山 <sup>43)</sup> 遺跡	秋田県仙北郡滝和町	50	61年調	前期
黒倉 <sup>44)</sup> 区	仙北郡田沢町	1	60年調	中期
大野地 <sup>45)</sup>	南秋田郡井川町	1	59年調	前期
下田 <sup>46)</sup>	平鹿郡大森町	1	62年調	前期?
小出 <sup>47)</sup> 区	仙北郡南外村	1	63年調	前期
松木台 <sup>48)</sup>	秋田市上新城字松木台	1		"
横羽ノ沢遺跡	雄物田町	1		"
深井 <sup>49)</sup>	"	1		"
北 <sup>50)</sup>		1		"
秋田市	秋田市西ノ小泉	1		"
横手市	横手市	1		"
小吉山	横手市杉目(人島井隣)	1		"



第143図 青森県内出土球状耳飾り (一部)

## 第VII章 科学的分析

福地村館野遺跡第4号土壌土壌の無機燐酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成および第16号土壌出土土人骨の焼成温度と第41号土壌土壌中の赤色顔料の化学分析

八戸工業高等専門学校 小山 陽造

〔緒言〕

福地村館野遺跡第4号土壌の用途を考える手掛かりとして、土壌土壌中の無機燐酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成を分析した。また第16号土壌出土のヒト(人)と思われる焼骨の化学構造と焼成温度および第41号土壌土壌中の赤色顔料の分析を試みた。まず燐モリブデン酸法による分光光度定量法を用い土壌土壌中の無機燐酸の含有量を、また各脂肪酸のメチルエステルによるガスクロマトグラフィー法を用いて土壌土壌中の残存脂質の脂肪酸組成の化学分析をおこなった。さらにX線回折法と赤外吸収スペクトル法による焼骨の焼成温度および蛍光X線分析法による赤色顔料の主要成分元素分析を行なった。

さて燐(P)および燐酸( $H_3PO_4$ )は、生物体のすべての組織や細胞に不可欠な構成要素で、その生理機構の中で大切な役割を果たしている物質である。とくに燐酸はカルシウム(Ca)やマグネシウム(Mg)と結合し、とくに水酸アパタイト( $hydroxyapatite, Ca_{10}(PO_4)_6(OH)_2$ )として脊椎動物の骨や歯の主成分として大切な働きを担う物質である。そして土壌に含まれる無機燐酸は、燐灰石を含む各種岩石の風化分解や、動植物遺体の腐朽分解の過程における生物体の有機燐酸成分の無機燐酸への無機化や、動物遺体の骨格の腐朽分解等によって生成し、さらに土壌に含まれるカルシウムイオン、アルミニウムイオン、鉄イオンや粘土等の土壌鉱物と結合して土壌中に保留され、強塩酸性溶液で溶解抽出される土壌中の無機成分で、従来から遺跡内の墓域や墓壇の位置や規模の判定に有効な手掛かりとなる物質である。そしてこの土壌に含まれる無機燐酸の含有量は、まず植物の根等の挟雑物を除いた乾燥土壌約1gを精秤し、一定量の6規定塩酸溶液で加熱溶解した無機燐酸をアミドール還元試薬を用いて燐モリブデン酸の還元生成物である可視部波長790nmに極大吸収波長を持った青色溶液に変え、n-ブタノールで抽出し、なお同様の操作を行なった濃度の決まっている燐酸塩溶液の呈色度と比較する燐モリブデン酸法による分光光度定量法で求めた。そして分析値は土壌試料100gに含まれる $P_2O_5$ のmg数で表わし、分析値の精度は標準偏差と変動係数で表わした。

また土壌中の脂質や脂肪酸は、土壌中の動植物の生体有機物が、土壌中の小動物と微生物の働きや自然酸化等による分解変成作用のため、より炭素数が少なく不飽和度の低い脂肪酸を経て最終的には酢酸、蟻酸、炭酸ガスとして分解消失する過程で、パルミチン酸やステアリン酸及びオレイン酸のような生物界や自然環境において普通に見られる炭素数の少ない、あるいは

不飽和度の低い脂肪酸等に変化し、アロフェン等の土壌中の粘土成分と結合して分解変成の循環や進行から外れ長期間安定に土壌腐植物質の脂質成分として土壌中に保留され、アルコール：ベンゼン混合溶媒やアルコール：クロロホルム混合溶媒で抽出される土壌有機成分である。そして無機燐酸の分析の場合と同じく乾燥土壌試料約30gからメタノール：クロロホルム（1：2）混合溶媒を用いソックスレイ抽出法で脂質成分を抽出し、苛性カリ：メタノール溶液で加熱しケン化反応を行ない分離生成した遊離脂肪酸を5%無水塩酸メタノールで揮発性の脂肪酸メチルエステルに変え精製しクロロホルムに溶かしたものを試料として、島津製GC8A型水素炎検出器付ガスクロマトグラフィー装置に脂肪酸分析用キャピラリーカラムを装着したものに注入し、さらに各脂肪酸の標準試料のガスクロマトグラムと比較して、主にパルミチン酸からネルボン酸までの12種類の脂肪酸を同定し、これら12種類の脂肪酸のピーク面積の和に対する各脂肪酸の面積の比率から各脂肪酸の割合を求めた。さてこのような土壌試料中の残存脂質や残存脂肪酸組成は表層土の各種動植物の生態系を反映して地域による差はあるものの長い年月の間に数十%のパルミチン酸および十数%のステアリン酸や数%のオレイン酸等からなる一様な組成を示すようになる。また天然の脂肪酸は、主に生物体の脂質の構成成分として存在することが多く、そしてこれらの脂質はそれぞれ関連する動植物ごとに大体固有の脂肪酸組成をもっているため、ある遺跡の土壌の覆土や埋設土器の土壌等に局所的に特別高い濃度の無機燐酸を検出したり、またオレイン酸のような動物性脂肪や、リグノセリン酸やネルボン酸等のような高等ほ乳動物の脳や神経組織等の特殊な器官や組織に関連の深い脂肪酸、またエルカ酸やベヘン酸等のようななたね油等のあぶらな科の植物油等に含まれる脂肪酸を手掛かりに、最近土壌及び土器等の什器類と関りのあった動植物の種類を推定し、土壌墓等の遺構の実態や当時の生活の実態を一層明確に把握する試みがなされるようになってきた。

〔分析結果と考察〕

#### (1) 館野遺跡第4号土壌土壌中の無機燐酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成

館野遺跡第4号土壌は北西側の隅から塊状耳飾が出土し、一見土壌墓と思われる土壌である。第144図に示すように、館野遺跡の表土約1m下の遺跡面から約80cm程掘込まれた東西に約80cm南北に約1mの方形の第4号土壌の土壌底部覆土の土壌試料1、土壌上部表面に近い覆土の土壌試料2および土壌底部外側の土壌試料3、さらに比較のため土壌周囲四方の遺跡面の土壌試料4、土壌試料5、土壌試料6、土壌試料7の7土壌試料を採取した。そして遺体埋葬の確認のため覆土と土壌の周囲の土壌の無機燐酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成の分析を試みた。まず第9表および第145図に示すように、土壌中央底部覆土の土壌試料1と土壌中央上部覆土の土壌試料2および土壌中央底部外側の土壌試料3の無機燐酸の含有量が86.4mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g土壌)と76.8mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g土壌)および79.0mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g土壌)の値で、土壌中央底部覆土

の土壤試料 1 の無機燐酸の含有量がやや多い。さらに土壤周囲の遺跡面の比較土壤試料 4、土壤試料 5、土壤試料 6 および土壤試料 7 の無機燐酸の含有量が 98.6mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g 土壤)、116.0mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g 土壤)、80.6mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g 土壤) および 106.2mg (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> / 100g 土壤) で、土壤内覆土の無機燐酸の含有量に比べて多い。このように土壤覆土およびその周囲の土壤試料の無機燐酸の含有量が全体に多く、しかも予想に反して土壤覆土の各土壤試料の無機燐酸の含有量に対して、むしろ土壤周囲の各土壤試料の無機燐酸の含有量が多い。つまりこの遺跡表土における農耕や果樹栽培等で施肥および土地の攪乱等人為的影響が大きく、これらの土壤試料の無機燐酸の含有量の多寡から土壤内の遺体埋葬の有無や状況を推察するのは困難である。そこでさらに第 4 号土壤土壤の残存脂質の脂肪酸組成の分析から土壤の状況を推察しようと、土壤覆土と土壤周囲の各土壤試料の残存脂質の脂肪酸組成の分析を試みた。そして第 10 表および第 146 図に示すように、土壤底部内側覆土の土壤試料 1 と土壤底部外側の土壤試料 3 のパルミチン酸の割合が 69.38% と 62.67% と他の土壤試料に比較してやや多く、またステアリン酸の割合が 12.55% と 12.39%、しかしオレイン酸の割合が 4.95% と 2.93% と目立って少なく、またエイコセン酸の割合が 4.12% と 4.03%、ペヘン酸の割合が 2.48% と 9.09% である。そしてリグノセリン酸の割合が 0.44% および 0.72% と一層少なく、またリノール酸の割合が 2.36% と 0.89%、エイコサジエン酸の割合が 1.78% と 2.21% である。あとはアラキジン酸の割合が 0.19% と 0.47% およびエルカ酸の割合が 1.17% と 1.23%、リノレイン酸の割合が 1.01% と 0.85% である。しかし土壤上部覆土の土壤試料 2 および土壤周囲の土壤試料 4、土壤試料 5、土壤試料 6、土壤試料 7 の残存脂質の脂肪酸組成は、いずれもパルミチン酸の割合が約 50% から 60% 程で、次いでオレイン酸の割合が約 11% から 13% 程、さらにステアリン酸の割合が約 9% から 11% 程、あとはリノール酸の割合が約 0.7% から 4% 程、エイコセン酸の割合が約 1% から 6% 程、ペヘン酸の割合が約 0.5% から 8.5% 程、リグノセリン酸の割合が約 0% から 7% 程、リノレイン酸の割合が約 0% から 6.4%、エイコサジエン酸の割合が約 2% から 3% である。その他に若干アラキジン酸、エルカ酸、ネルボン酸等を含む。このように予想に反して土壤底部覆土や土壤底部外側の土壤試料の脂肪酸組成は普通の土壤試料でよく見られるものである。そしてむしろ土壤周囲の土壤試料の方がパルミチン酸の割合がやや少なく、ステアリン酸やオレイン酸の割合が同じでやや多く、しかもリグノセリン酸の割合が少し多い等動物性脂肪を含む残存脂質との関連性を示唆する脂肪酸組成である。さてパルミチン酸やステアリン酸は、生物界及び自然環境において最も普通に見られる飽和脂肪酸で、特にパルミチン酸は、あらゆる生物の体内で合成することの出来る飽和脂肪酸で、またオレイン酸も大抵の生物体に含まれるが、とくに動物性脂肪や植物性油脂に多く含まれる不飽和脂肪酸である。リノール酸はあまに油等の植物乾性油や高等動物の脂肪に多く含まれる不飽和脂肪酸で、またリノレイン酸はあまに油や大豆油等の植

物種子油に多く含まれる不飽和脂肪酸である。アラキジン酸はなたね油に幾分含まれるが、さらに僅かでもすべての動物組織に含まれる飽和脂肪酸である。ペヘン酸はあぶらな科の種子油の他に、硬化なたね油や硬化魚油等に多く含まれる飽和脂肪酸である。エルカ酸はなたね油やあぶらな種子油等に多く含まれる不飽和脂肪酸である。エイコサジエン酸や魚油等に含まれる不飽和脂肪酸である。さらにリグノセリン酸はなたね油等にも含まれるが、むしろ高等ほ乳動物の神経組織や脳白質のスフィンゴグリコリピドのような糖脂質を構成する主要な飽和脂肪酸で、とくに土壤墓等の判定に有効な手掛かりとなる高級脂肪酸である。また土壤試料中の高級脂肪酸は、長い年月の間に、各種の微生物や自然酸化等による分解や異性化等の変成作用のため、パルミチン酸やオレイン酸のような生物界や自然環境において普通に見られる炭素数の少ない、あるいは不飽和度の低い脂肪酸に変化し、さらに分解消失する。また実際時代を遡るにつれ、その遺跡の土壤に含まれる脂肪酸は、一般に炭素数16の飽和脂肪酸のパルミチン酸、次に炭素数18の飽和脂肪酸のステアリン酸の割合が多く、しかも脂肪酸そのものの含有量が少なくなる。また初めはそれぞれに違った生物遺体由来しても土壤中で腐朽分解する間に、土壤中の小動物や微生物等による摂取、栄養、排せつ、遺体の腐朽分解等の生活作用の幾重にもわたる循環を経て複雑な変成作用のため、各土壤や土壤腐植に含まれる脂質や脂肪酸はじめ各種の有機物の種類や割合等が一様に均質化される。

そして土壤中の残存脂質や残存脂肪酸は、その地域の気候や風土、植生や腐植の古さ等で、それぞれ一様な種類や脂肪酸組成を持つようになる。また土壤に含まれる非晶質粘土のアロフェン等の鉱物成分が腐植生成の促進や腐植有機物の保留や安定化に寄与する。そこで異なった地域の間で、その土壤腐植の脂肪酸はじめ有機物の組成を比較する場合は、まずその土地の過去の経緯、つまり森林、畑地、牧草地あるいは居住地等、過去の歴史的状況と共に、その土壤の土質や土性にも留意することが大切である。さて各種の脂質や脂肪酸が、アロフェン等の土壤中の粘土鉱物と結合し、腐朽変成の循環や進行から外れ長期間安定に保存されるので、ある遺跡の特定の土壤の覆土や埋設土器の土壤等に局所的に、とくに高い濃度の無機燐酸を抽出すると共に、パルミチン酸やオレイン酸等の割合が動物性脂肪との関りを示唆し、またリグノセリン酸やネルボン酸等のような高等ほ乳動物の神経組織や脳組織等に関連の深い特殊な脂肪酸の割合が多い場合、人の遺体の埋葬等が考えられる土壤や埋設土器の可能性が大きい。実際に土壤内部覆土の各所土壤の無機燐酸の含有量が多く、またその残存脂肪酸の組成がパルミチン酸、ステアリン酸等の割合に対してオレイン酸やリグノセリン酸の割合が目立って多ければ、遺体埋葬との深い関りが考えられる。さてこの館野遺跡第4号土壤は、予想に反しむしろ土壤上部覆土や土壤周囲の土壤試料のほうが、無機燐酸の含有量がやや多く、また動物性脂質の残存量が多いようである。これは表上における農耕等の活発な人為的行為の影響が土壤周囲にお

ける動物の解体処理や人々の生活の重要な場所等当時の人達の日常の生活活動との濃密な関わりを示唆するものと思う。しかし埴 状耳飾まで出土しているこの第 4 号土壌が土壌墓であるか否かの判断を確実にするには、なお土壌覆土の各所の土壌試料を多数採取分析し比較検討する必要がある。さて住居跡の土壌や埋設土器およびその土器の中の土壌等に浸透した脂質成分は、周囲の土壌腐植等の影響が少なく、当初の脂質の脂肪酸組成を示唆する可能性が大きいので、その残存脂肪酸組成を調べて、衣、食、住等当時の生活に関連した脂質や動植物の種類を推定できれば、当時の生活の状況をより明確に考えることが可能になるものと思う。

## (2) 館野遺跡第16号土壌出土焼結人骨の化学構造と焼成温度の関係

館野遺跡第16号土壌の覆土の中程から骨灰と一緒に出土し、さらに硬く焼き締まり焼結したヒト(人)と思われる焼骨試料の化学構造と焼成温度を推測するため、実際に各種の動物骨を電気炉で100℃から900℃までの各温度で約1時間焼成しX線回折法によりその化学構造の変化を調べた。なお物質内部の化学構造の解明に赤外吸収スペクトル法が、さらに化学物質の結晶構造の解明にX線回折法が有効である。今回人骨や動物骨の主成分である水酸アパタイトの焼成による脱水や結晶化の過程を赤外吸収スペクトル法とX線回折法で調査したが、いずれも予期した同じ傾向が見られるので、主にX線回折法による結果をのべる。さて十和田市明戸遺跡出土の焼成動物骨と八戸市赤御堂貝塚遺跡第13号住居跡出土の焼成動物骨との化学構造の比較および各種動物骨の水酸アパタイトの結晶化と焼成温度の関係を第147図(A)と(B)に示した。まず第147図(A)の館野遺跡第16号出土の焼成人骨(焼成試料a)と十和田市明戸遺跡出土焼成動物骨(焼成試料b、各種動物の混合骨)のX線回折スペクトルは、これらの焼成骨がいずれも余分な水分や有機成分を失い完全に結晶性水酸アパタイト(hydroxyapatite、 $\text{Ca}_{10}(\text{PO}_4)_6(\text{OH})_2$ )化していることを示すが、八戸市赤御堂貝塚遺跡第13号住居跡土の焼成動物骨(焼成試料c、ウサギ)と焼成魚骨(焼成試料d)はまだ余分な水分や有機成分を含み十分結晶性水酸アパタイトの化学構造に成りきっていないことを示す。さて燐酸カルシウムの一分子の $\text{Ca}_{10}(\text{PO}_4)_6(\text{OH})_2$ の化学組成をもつ水酸アパタイト(hydroxyapatite)は動物の骨や歯等の生体硬組織を構成する無機成分で、普通は微結晶の集合体に余分の水分や生体有機成分を含んだ結晶性の低い水酸アパタイトで、加熱焼成してこの余分な水分や生体有機成分を失い徐々に結晶化度を高め800℃から1200℃で、ほぼ完全な結晶性水酸アパタイトになる。そこでこれらの焼結人骨や焼結動物骨が、それぞれどの程度の温度で焼成されたものであるか、実際にウサギ、イヌ、ネコ等の各種動物骨試料(北里大学獣医学部獣医学部獣医解剖学教室提供)を100℃から900℃まで100℃の間隔で丁度1時間ずつ焼成した。そして第147図(B)の焼成試料1(ウサギ)は未焼成の動物骨であるが、100℃(焼成試料2、イヌ)から600℃(焼成試料7、ネコ)までは少しずつ化学構造が変化し、700℃(焼成試料8、ネコ)から急激に化学構造の変化が進み、800℃

成試料 9、イヌ)から900℃(焼成試料10、イヌ)で完全な結晶性水酸アバタイトの化学構造になる。さて館野遺跡第16号土壌出土焼成人骨(焼成試料a)と十和田市明戸遺跡出土焼成動物骨(焼成試料b)は、おそらく800℃から900℃で土器を焼成すると同じ程度の強い火勢を受け焼結したものである。一方八戸市赤御堂貝塚遺跡第13号住居跡出土の動物骨は、おそらく300℃から400℃程度の低い焼成温度で、また八戸市赤御堂貝塚遺跡第13号住居跡出土の焼成魚骨試料は、さらに低い100℃から200℃程度の丁度調理を行なう程度の火勢を受けた状態である。また館野遺跡第16号土壌出土焼骨には解体調理等の刃物傷がなく、やはり火葬等により強い火勢を受け焼結した人骨の一部と思う。さてこのように館野遺跡第16号土壌の覆土にヒト(人)の焼結骨や骨灰が混入するので火葬のための土壌か火葬墓の可能性の大きい土壌と思う。しかし十和田市明戸遺跡出土の焼結した動物骨は解体調理のため刃物傷が見られ、当時の人々が食餌とした動物の骨の焼結物であると思う。

### (3) 館野遺跡第41号土壌土壌中の赤色顔料

X線回折法と蛍光X線分析法で館野遺跡第41号土壌の覆土底部の土壌に混入した赤色顔料の化学成分の分析を試みた。まず赤色顔料を混入した土壌試料を蒸留水に分散し、粗い土壌分を沈降分離し、上澄みの赤色顔料に富んだ細かい土壌部分を採取乾燥し、まずX線回折法で成分鉱物を、蛍光X線分析法で主要成分元素を、さらに化学分析で酸化第二鉄を分析した。その結果、この赤色顔料は僅かな赤色酸化第二鉄と、あとは大部分が石英成分で極めて純度の低い赤鉄鉱の天然紅殻の粉末である。

### 〔謝 辞〕

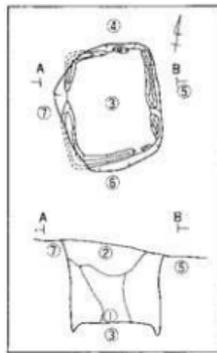
今回の調査で八戸市赤御堂貝塚遺跡第13号住居跡出土と十和田市明戸遺跡出土の動物焼骨試料および解剖動物骨試料の分与と御教示を頂いた八戸市教育委員会と十和田市教育委員会および北里大学獣医畜産学部獣医解剖学教室の方々に感謝します。また土壌の無機燐酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成の分析を担当した本校昭和63年度工業化学科卒業研究生木下拓道君と佐々木進一君およびヒト(人)と動物の焼骨や赤色顔料のX線分析を担当した新堀寛君、さらに今回の調査を援助して頂いた卒業研究生の新藤さとみ君と本校工業化学科技官菊地良栄氏の協力に感謝します。

第9表 館野遺跡第4号土壌土壌試料  
の無機燐酸の含有量

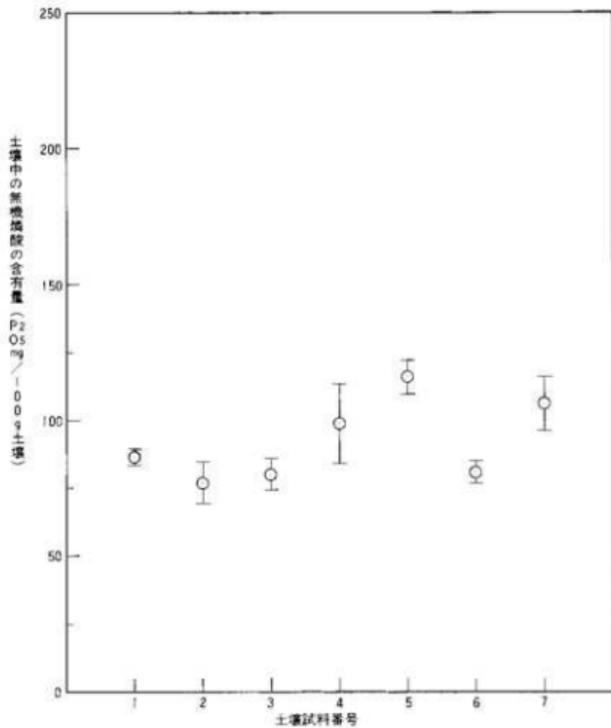
土壌試料 番 号	平 均 値 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/100g土壌)	変動係数 (%)
1	86.4	4.0
2	76.8	9.9
3	79.9	7.2
4	98.6	14.8
5	116.0	5.4
6	80.6	5.1
7	106.2	9.4

第10表 館野遺跡第4号土壌土壌試料の残存脂肪酸の組成表 (%)

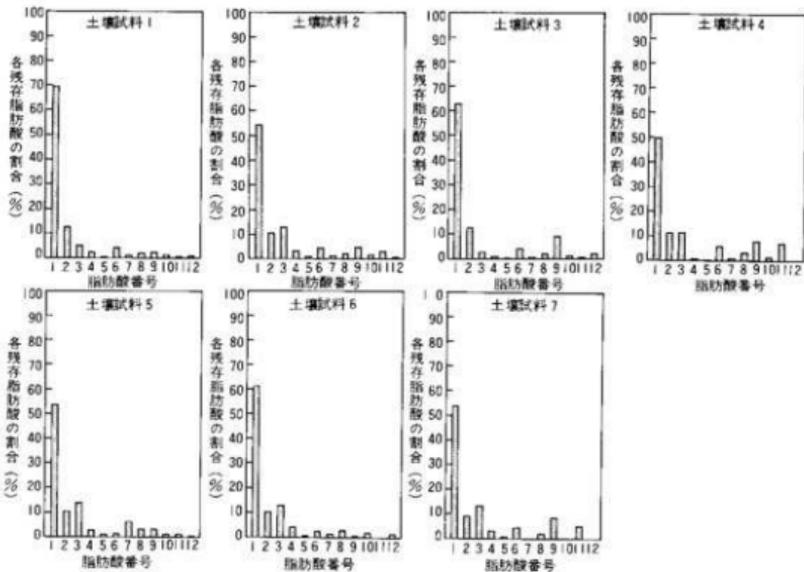
脂 肪 酸 番 号	脂 肪 酸 名	土 壌 試 料						
		1	2	3	4	5	6	7
1	バルミチン酸	69.38	54.42	62.67	49.75	53.50	61.18	53.58
2	ステアリン酸	12.55	10.43	12.39	11.09	10.46	10.36	9.06
3	オレイン酸	4.95	12.88	2.93	11.30	13.82	12.95	13.31
4	リノール酸	2.36	3.33	0.89	0.71	2.82	4.35	3.18
5	アラキジン酸	0.19	1.02	0.47	0.27	1.01	0.71	0.83
6	エイコセン酸	4.12	4.45	4.03	5.88	1.38	2.52	4.46
7	リノレイン酸	1.01	1.28	0.85	1.08	6.35	1.45	0
8	エイコサジエン酸	1.78	1.97	2.21	3.05	3.18	2.84	1.93
9	ベヘン酸	2.48	4.86	9.09	7.92	3.36	0.51	8.45
10	エルカ酸	1.17	1.63	1.23	1.62	2.25	1.99	0
11	リグノセリン酸	0.44	3.13	0.72	7.33	1.05	0	5.21
12	ネルボン酸	0.80	0.60	2.50	0	0.82	1.12	0



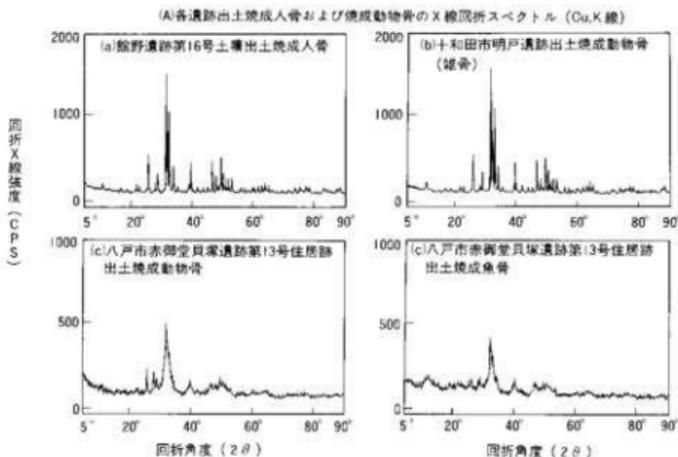
第144図 館野遺跡第4号土壤土壌試料採取位置図



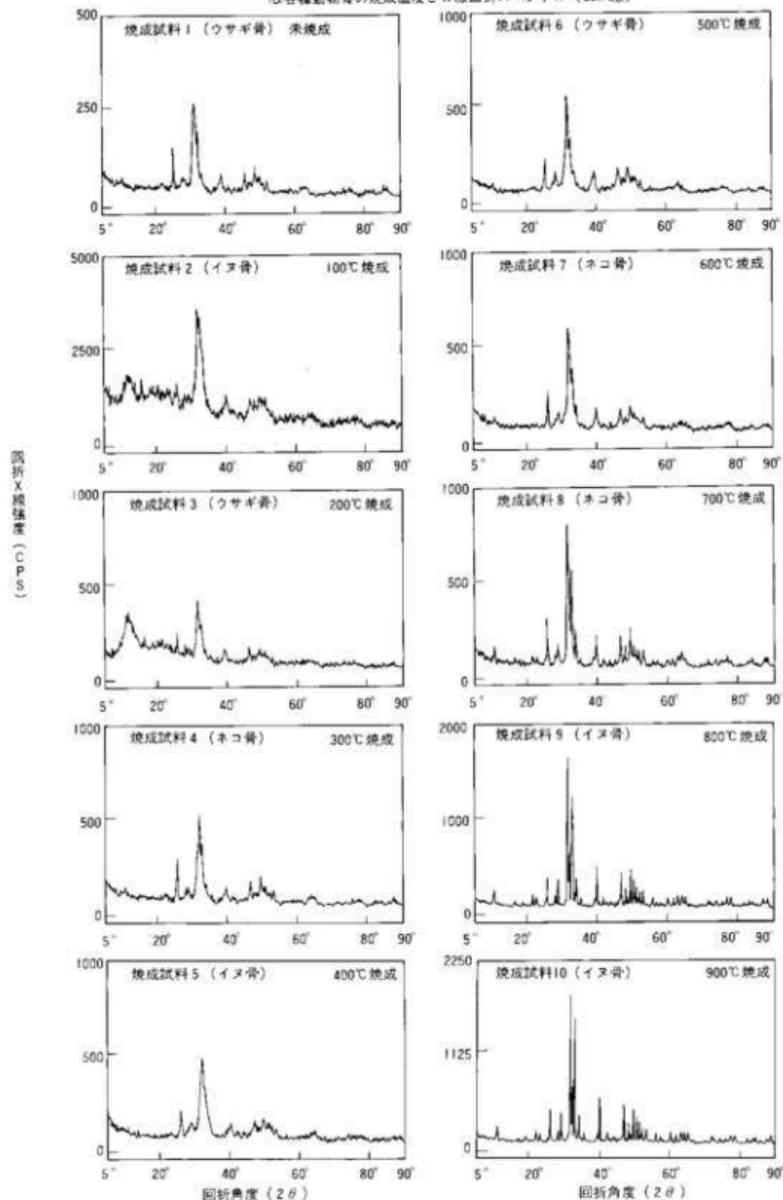
第145図 館野遺跡第4号土壤土壌中の無機磷酸の濃度分布図



第146図 館野遺跡第4号土壌土壌中の残存脂質の脂肪酸組成図



(B)各種動物骨の焼成温度とX線回折スペクトル (CuK $\alpha$ 線)



第147図B 各遺跡出土焼成人骨と焼成動物骨および焼成試料のX線回折スペクトル図

## ま と め

今回の発掘調査で得た成果については、これまで述べてきたとおりである。調査の結果、本遺跡は、集落を中心に捨て場も含む広い範囲に広がる大規模な遺跡であることが判明した。今回の調査地区は、その広範囲のなかの居住区に隣接していると思われる土壌群及び捨て場に相当する地区であった。従って、竪穴住居跡の検出は、わずかに1軒にとどまったが、逆に、多数の土壌と多量の遺物を発見することができた。

狭い範囲における発掘調査ではあったが、遺物の出土量からしても、本遺跡が大規模な遺跡であることは容易に推測することができ、同時に、今回の発掘調査がより密度の濃いものであったとも言えよう。

今回の調査成果の中心は、遺構に関しては土壌であり、遺物に関しては、円筒土器及びそれに伴する石器であると言える。

最後にまとめとして、以下に今回の発掘調査で得た成果について概略を列記する。

- 本遺跡は、縄文時代前期前葉から中期末葉の一時期を除く後期前半までの長い時代にわたって、この地で人間の生活を営んだことが判明した。
- 本遺跡は、集落中心とし、土壌構築地区と捨て場の三つの場から成り立った大規模な遺跡と推定できる。
- 土壌の多くは、フラスコ状を呈している。
- 土壌は、土壌墓と推定できるものと、そうでないものの両者が存在し、前者の土壌は、ある限られた範囲に集中して構築されており、それらは、土壌開口部に粘土質火山灰で蓋をしたように密閉している。
- 土壌内出土の遺物は、その大半が堆積土中からのもので、底面出土のものは少なく、土壌の時期を確定するまでには至らなかった。しかし、出土土器の型式をみると、その大半の構築時期は、円筒下層d1式土器期から円筒上層c1式土器期の間頃と考えられる。
- 遺構の構築面及び出土土器から、アワ砂と俗称してしている中叢浮石火山灰の降下時期は、確実に円筒下層d1式土器期以前である。
- 出土した土器の大半は、円筒土器であり、中でも円筒下層d1式土器から上層d1式土器が主体を占めている。
- 本遺跡においては、下層d1式土器と上層b1式土器に各々強い齊一性を窺うことができた。
- 円筒土器の各型式間を埋めるような移行期とも考えられる土器が出土し、円筒土器各型式は、スムーズに移行したものと推察できる。
- 大木系土器が数点出土した。大木8a式土器に併行するものと考えられ、明確ではないが、

円筒上層C式からd式土器の頃に対応できるものと考えられる。

- 円筒土器では、上層d式以降の土器が1片もなく、この時期に何らかの理由で人々がこの地から離れたと考えられ、再び縄文時代後期になると、この地が使われている。
- 石器は、土器の出土量に比して少ない傾向がみられる。これは今回の調査範囲が捨て場の主体部を構成している部分からはずれたためなのか、また、本遺跡の特徴かは不明である。
- 本遺跡出土の石器の器種組成は、他の円筒土器を中心とする遺跡のものと大差はない。
- 剥片素材の石器では、不定形石器を除いては、石鏃の量が多い。石鏃は両端を有する特殊な形態のものがほとんどを占める。また定形石器の欠損率も高い。
- 礫素材の石器も欠損率が高く、半月状扁平打製石器・スリ石I類は器体の約半分程で折損しているものが多い。
- 礫石鏃の出土量が極めて少量であり、これは地形上の理由によるものかもしれないが、遺跡の一部分である今回の調査区域に限定された特徴かもしれない。
- 土壌底部から玢状耳飾りが1点出土しており、これは完形品であることと、遺構底面出土という非常に貴重な資料である。

以上、今回の発掘調査の概略を簡単にまとめてみたが、成果のすべてを記述するまでには至れなかったが、検出遺構・出土遺物自体は、今後の研究に大いに役立つものでばかりであると確信している。

本書が今後の研究の一翼を担えんとすれば、担当者として望外の喜びである。

引用・参考文献

- 1927 長谷部吉人 『円筒土器文化』『人類学雑誌』第42巻第1号
- 1929 山内 清男 『関東北に於ける縄文土器』『史前学雑誌』第1巻第2号
- 1930 山内 清男 『斜行縄文に関する二・三の觀察』『史前学雑誌』第2巻第3号
- 1955 江坂 輝弥 『青森県女館貝塚発掘調査報告』『石器時代』第2号
- 1958 江坂 輝弥・笹津 備洋・西村 正衛 『青森県蟹沢遺跡調査報告』『石器時代』第5号
- 1958 児玉・大場・武内 『サイベリ遺跡』
- 1962 青森市教育委員会・小野志明編 『三内遺跡』『青森市の文化財1』
- 1965 林 謙作 『縄文文化の発展と地域性 東北』『日本の考古学』2
- 1967 奈良 修介・豊島 昂 『秋田県の考古学』
- 1969 西村 正衛 『縄文中期文化 東北・関東』『新版考古学講座』3
- 1969 渡辺 誠 『縄文前期文化 東日本』『新版考古学講座』
- 1970 江坂 輝弥編 『石神遺跡』
- 1974 青森県教育委員会 『小栗山地区遺跡発掘調査報告書』青埋文報第11集
- 1974 三宅 徹也 『青森県における円筒下層式土器群の地域展開』『北奥古代文化』第8号
- 1974 村越 潔 『円筒土器文化』(単)
- 1975 青森県教育委員会 『中の平遺跡発掘調査報告書』青埋文報第25集
- 1976 青森県立郷土館 『縄文式土器のつくりかわり』
- 1977 青森県教育委員会 『水木沢遺跡発掘調査報告書』青埋文報第34号
- 1977 岩手県埋蔵文化財センター 『大明神遺跡』東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 岩手県文化財調査報告書第52集
- 1977 三宅 徹也 『円筒土器の概念とその崩壊』『青森県郷土館調査研究年報第3号』
- 1978 青森県教育委員会 『熊沢遺跡』青埋文報第38集
- 1979 青森県教育委員会 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅳ)』青埋文報第47集
- 1979 富樫 泰時 『東日本の縄文土器』『世界陶磁全集』1
- 1979 日本鉱業株式会社船川製油所 『大畑台遺跡発掘調査報告書』
- 1980 青森県教育委員会 『長七谷地遺跡』青埋文報第5集
- 1980 青森県教育委員会 『板敷(2)遺跡発掘調査報告書』青埋文報第59集
- 1980 岩手県埋蔵文化財センター 『西田遺跡』東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第51集
- 1981 丹羽 茂 『大木式土器』『縄文文化の研究』4
- 1981 富樫 泰時 『縄文中期の土器東北地方』『縄文土器大成』2
- 1981 三宅 徹也 『円筒土器』『縄文文化の研究』3
- 1982 岩手県埋蔵文化財センター 『塩ヶ森1遺跡』埋蔵文化財調査報告書第31集
- 1982 " 『雄阿崎遺跡』東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 岩手県文化財調査報告書第70集
- 1982 岩手県立博物館 『岩手の土器』
- 1982 東北大学文学部 『考古学資料図録』
- 1983 上北町教育委員会 『上北町古屋敷貝塚・Ⅰ』上文報第1集
- 1983 北海道八雲町教育委員会 『栄浜』
- 1984 岩手県埋蔵文化財センター 『長者屋敷(Ⅲ)』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第77集
- 1984 興野 義一 『大木式土器について』『宮城の研究』1
- 1984 十和田市教育委員会 『明戸遺跡発掘調査報告書』十埋文報第3集
- 1986 石岡 憲雄 『施文原体の変遷・円筒土器』『季刊考古学』第17号
- 1986 岩手県文化振興事業団 『手代森遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集
- 1986 上北町教育委員会 『上北町古屋敷貝塚・Ⅱ』上文報第1集
- 1986 福田 友之 『考古学からみた中庵浮石の降下年代』『弘前大学考古学研究第3号』
- 1987 岩手県文化振興事業団 『和光6区遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第114集
- 1988 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋埋文報第173集
- 1988 秋田県埋蔵文化財振興会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋文報第166集

石器計測表

区画	出土地	層	最大計測値				材質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第15区	19上	フ	25.0	14.5	5.5	1.1	輝石	I	207	
第100区	K-41	II	40.0	15.0	5.3	26.0	*	*	5	
"	F-56	V	39.5	18.0	5.0	2.4	*	*	11	
"	I-50	III	30.0	13.0	4.0	1.1	*	*	17	
"	K-34	*	45.5	13.5	5.0	4.6	*	II-A	8	
"	M-29	*	47.0	12.0	3.5	2.2	*	*	27	
"	表層	*	29.0	13.0	3.0	1.6	*	*	37	
第15区	19上	フ	(25.0)	15.0	7.0	(2.1)	*	III-A	309	
"	19下	*	(23.5)	14.0	6.0	(1.9)	*	*	210	
第100区	G-58	V	(32.0)	15.0	6.0	(11.9)	*	*	32	両端欠
"	I-54	II	(40.0)	16.5	4.0	(2.3)	*	*	23	基部欠
第15区	19上	フ	(33.0)	12.0	3.5	(1.7)	*	III-B	206	両端欠
"	19上	*	(26.5)	16.0	9.3	(2.5)	*	*	214	基部欠
"	19上	*	(48.0)	17.0	9.3	(5.8)	*	*	295	
第58区	34上	*	(48.0)	17.0	6.0	(4.6)	*	*	234	
第59区	50上	*	(54.0)	16.0	5.0	(2.9)	*	*	240	両端欠
第9区	I-II	*	22.0	11.0	3.0	(0.5)	志賀	*	241	
"	I-II	*	(28.0)	25.0	5.0	(2.1)	野賀	*	244	両端欠
"	I-II	*	(36.0)	15.0	7.0	(2.8)	*	*	246	基部欠
第100区	L-41	II	(39.0)	15.0	8.0	(3.1)	*	*	1	
"	K-21	II	(33.0)	13.5	7.0	(2.7)	*	*	1	両端欠、切頭鋭形
"	K-44	II	(39.0)	16.0	8.0	(3.7)	*	*	6	
"	L-25	III	(32.0)	18.0	9.0	(3.6)	*	*	12	
第101区	L-42	II	(37.0)	17.0	9.0	(3.4)	*	*	16	基部欠
"	I-52	*	(45.0)	11.5	6.5	(3.5)	*	*	18	両端欠
第100区	K-36	V	(33.5)	15.0	8.5	(5.8)	*	*	24	基部欠
"	I-50	III	(26.5)	13.0	5.0	(1.6)	*	*	26	
第101区	I-50	*	(31.0)	15.0	6.0	(2.3)	*	*	32	両端欠
"	K-51	II	(28.0)	16.0	9.0	(2.7)	*	*	33	
"	表層	*	(27.0)	15.0	6.0	(1.7)	*	*	36	基部欠
第100区	M-39	II	(26.0)	17.0	4.0	(1.3)	*	*	116	
第15区	19上	フ	(24.0)	13.0	6.0	(1.9)	*	III-C	308	両端欠
"	19上	*	(24.0)	17.0	5.0	(2.4)	*	*	211	
"	19上	*	(21.5)	18.0	6.0	(1.6)	*	*	212	
"	19上	*	(28.0)	15.0	5.5	(2.2)	*	*	213	基部欠
第101区	G-54	II	(38.5)	15.0	6.0	(2.7)	*	*	7	両端欠
"	K-46	III	(47.0)	14.5	7.0	(4.6)	*	*	9	
"	I-54	V	(37.0)	13.0	8.0	(2.4)	*	*	35	
"	H-54	II	(34.0)	15.0	9.0	(2.9)	*	*	39	基部欠

区画	出土地点	層	最大計測値				材質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第101区	L-33	I	(16.0)	16.0	8.0	(3.9)	珪石	III-C	23	先端欠
"	G-27	V	(13.0)	16.0	6.0	(2.1)	*	*	25	*
"	J-22	II	(51.0)	16.0	6.5	(3.4)	*	*	31	基部欠
"	K-48	V	37.0	14.0	6.0	2.1	*	*	34	
第9区	I-II	フ	(30.0)	16.0	5.0	(1.8)	*	*	242	両端欠
第101区	I-54	II	(20.0)	(17.5)	7.0	(1.9)	*	*	33	基部既存
石 槌										
第58区	30上	フ	49.5	27.0	7.0	8.0	輝石	*	280	
"	30上	*	(40.0)	21.0	9.0	(6.8)	*	*	282	基部欠
"	30上	*	95.0	29.0	9.5	31.9	*	*	283	
第100区	L-40	III	142.0	44.0	10.0	75.0	*	*	28	
第100区	K-46	*	78.0	24.0	12.0	22.3	*	*	39	
第100区	K-83	V	(93.0)	27.0	11.5	30.7	*	*	40	基部欠
"	L-47	III	309.0	22.0	12.0	27.5	*	*	41	
第100区	I-50	VI	(53.0)	26.0	9.0	(11.0)	*	*	116	基部既存
石 鐮										
第100区	I-51	III	(29.0)	25.0	6.0	(5.6)	珪石	I	46	先端欠
"	M-41	II	29.0	18.0	8.0	2.4	*	II-A	2	
"	G-56	III	49.0	15.0	9.5	6.1	*	*	10	
"	K-52	II	26.0	13.0	3.0	1.3	*	*	29	
"	K-47	III	(42.0)	18.0	6.0	3.2	*	*	20	一端欠
"	I-52	*	57.0	20.0	8.0	8.0	*	II-B	20	一端欠
"	K-49	*	(44.0)	18.0	5.0	(5.5)	珪石	*	117	
石 鐮										
第43区	23上	フ	(34.0)	(36.0)	(17.0)	(14.2)	珪石	I-A	246	基部既存
第104区	L-41	II	56.0	27.0	15.0	14.5	*	*	50	
"	I-33	*	53.0	28.0	13.0	18.6	*	*	51	
"	K-48	*	(25.0)	18.0	8.0	(3.8)	*	*	59	基部既存
"	*	*	49.0	40.0	13.0	20.9	*	*	159	
第105区	II-38	I	71.0	28.0	16.0	32.0	*	I-B	48	
第164区	L-51	II	84.0	31.0	16.0	36.9	*	*	52	
"	I-54	V	(51.0)	36.0	22.0	(31.3)	*	*	173	基部既存
"	L-48	III	54.0	25.0	13.0	20.4	土鍔	*	27	
第44区	28上	フ	48.0	22.0	15.0	9.2	珪石	II-A	282	
第46区	29上	III	73.0	24.0	17.0	25.9	*	*	229	
第106区	K-33	III	75.0	27.0	13.0	24.5	*	*	49	
第45区	13上	フ	50.0	30.0	19.0	26.0	*	II-B	202	
第44区	28上	フ	53.0	24.0	14.0	16.8	*	*	221	
第58区	31上	*	(36.0)	24.0	13.0	(12.4)	*	*	237	基部既存
第106区	K-15	I	92.0	38.0	15.0	40.4	*	*	17	
第58区	31上	フ	(24.0)	28.0	14.0	(17.0)	*	*	231	基部既存

图名	出土地点	形	最大尺寸				石质	年代	整理编号	备注
			长(mm)	宽(mm)	厚(mm)	重(g)				
第105图	K-46	V	(24.0)	18.0	10.0	(4.1)	绿泥	—	26	方部残存
第106图	I-53	*	(43.0)	25.0	7.0	(9.2)	*	—	15	局部残存
第107图	L-40	II	(44.0)	22.0	9.0	(12.1)	*	—	56	*
石 器										
第43图	17土	→	69.0	21.0	8.5	13.6	绿泥	I	295	
第44图	27土	*	69.0	26.0	9.0	45.6	*	—	217	
第108图	J-16	III	63.0	25.0	8.0	14.1	*	—	90	
"	K-56	V	63.0	26.0	4.0	9.8	*	—	52	
"	I-49	III	65.0	23.0	8.0	16.8	*	—	63	
"	F-58	V	66.0	48.0	12.0	40.5	*	—	64	
"	K-25	III	40.0	27.0	13.0	31.7	*	—	112	
"	L-47	*	112.0	38.0	7.0	59.1	*	—	172	
第109图	K-43	*	(40.0)	28.0	7.0	(6.6)	*	II	61	先端欠
"	G-57	II	80.0	43.0	12.0	(33.0)	*	—	65	柄部一部份欠
"	K-46	III	93.0	35.0	7.0	23.9	*	—	86	
"	*	*	37.0	45.0	8.0	3.3	*	—	149	
不定形石器										
第44图	27土	→	(51.0)	23.0	7.0	(8.0)	绿泥	I-A	236	
"	I-H	*	(17.0)	27.0	15.0	(26.2)	*	—	247	
第108图	K-44	III	38.0	33.0	3.0	(13.9)	*	—	43	
第107图	H-52	V	47.0	29.0	8.0	7.8	*	—	69	
第108图	L-46	*	70.0	32.0	10.0	28.1	*	—	114	
"	M-45	III	37.0	18.0	9.0	5.9	*	—	102	
第107图	J-16	III	46.0	34.0	15.0	19.5	*	—	139	
第45图	29土	→	89.0	55.0	22.0	91.5	*	I-B	229	
"	28土	*	53.0	42.0	15.0	36.6	绿泥	—	227	
第44图	28土	*	41.5	44.0	14.0	26.2	绿泥	—	250	
第108图	L-16	III	73.0	55.0	13.0	40.4	绿泥	—	83	
第109图	H-13	II	(33.0)	31.0	10.0	(11.5)	*	—	38	
第108图	K-19	*	59.0	31.0	11.0	19.2	*	—	119	
第109图	L-15	III	(50.0)	53.0	11.0	(35.9)	*	—	166	
第108图	表 瓦	*	33.0	28.0	7.0	3.8	*	—	179	
第43图	14土	→	54.0	39.0	8.0	16.0	*	I-C	200	
第109图	L-43	II	47.0	37.0	15.0	24.3	*	—	87	
第110图	I-48	*	51.0	30.0	10.0	19.8	*	I-D	67	
"	I-54	*	82.0	55.0	13.0	76.0	*	—	72	
第110图	L-25	III	52.0	56.5	13.0	33.2	*	—	77	
"	J-58	II	37.0	41.0	14.0	19.6	*	—	85	
第111图	I-33	*	64.0	32.0	13.0	21.6	*	—	88	
第110图	L-44	III	44.0	30.0	8.0	12.0	*	—	96	
"	J-33	绿泥	65.0	65.0	20.0	63.0	*	—	105	

图名	出土地点	形	最大尺寸				石质	年代	整理编号	备注
			长(mm)	宽(mm)	厚(mm)	重(g)				
第110图	K-46	II	42.0	22.0	16.0	13.9	绿泥	I-D	167	
第109图	I-51	*	46.0	40.0	10.0	20.7	*	—	111	
第110图	K-46	V	50.0	25.0	10.5	12.1	*	—	122	
第109图	J-29	III	35.0	31.0	9.0	10.6	*	—	140	
"	J-50	V	42.0	29.0	12.0	11.8	*	—	151	
第111图	*	*	53.0	31.0	14.0	24.6	*	—	155	
"	*	*	69.0	35.0	20.0	50.6	绿泥	—	169	
第109图	I-40	III	39.0	23.0	6.0	4.7	绿泥	—	168	
第108图	34土	→	42.0	30.0	9.0	12.1	*	I-E	235	
第109图	41土	*	(30.0)	21.5	3.0	(2.7)	*	—	242	
第110图	J-56	V	31.0	20.0	9.5	3.8	*	—	31	
"	I-42	II	(20.0)	22.0	7.0	(12.2)	*	—	35	
第111图	H-56	I	59.0	32.0	10.0	17.9	*	—	42	
"	M-56	III	59.0	34.0	7.0	27.6	*	—	41	
第112图	K-47	II	31.0	22.0	6.0	12.9	*	—	53	
"	M-66	*	40.0	23.0	6.0	9.1	*	—	54	
第112图	K-51	*	42.0	30.0	13.0	16.0	*	—	81	
"	J-69	*	39.0	32.5	13.0	11.9	*	—	93	
第113图	M-43	III	40.0	23.0	13.0	9.4	*	—	121	
第112图	I-54	*	35.0	22.0	10.0	5.4	*	—	143	
"	*	*	30.0	19.0	6.0	2.6	绿泥	—	151	
第113图	*	*	53.0	31.0	13.0	23.3	绿泥	—	132	
第112图	*	*	37.0	27.0	12.0	10.8	*	—	156	
第113图	*	*	(22.0)	25.0	6.0	(3.9)	*	—	161	
"	L-65	III	46.0	29.0	7.0	6.8	*	—	167	
第112图	I-46	*	(26.0)	27.0	12.0	(8.3)	*	—	169	
"	I-46	*	(32.0)	27.0	9.0	(6.3)	*	—	170	
第113图	I-49	*	(27.0)	28.0	5.0	(4.1)	*	—	175	
第45图	21土	→	24.0	26.0	4.0	(1.8)	*	I-F	216	
第46图	26土	*	45.0	36.0	5.0	(7.1)	*	—	224	
第43图	16土	*	(32.0)	30.0	10.0	(8.4)	*	—	252	
第59图	45土	*	32.0	53.0	20.0	16.0	*	—	296	
第114图	H-53	II	40.0	25.0	5.0	4.7	*	—	52	
"	M-61	V	(29.0)	24.0	10.0	(6.9)	*	—	101	
"	K-67	III	40.0	22.0	7.0	3.1	*	—	136	
"	G-56	*	34.0	23.0	4.0	2.8	*	—	123	
"	J-14	II	32.0	21.0	5.0	2.9	*	—	178	
第114图	J-48	II	42.0	31.0	13.0	14.1	*	—	142	
"	G-56	III	31.0	28.0	10.0	5.2	I-G	56		
"	I-55	V	(30.0)	20.0	8.0	(6.8)	*	—	91	
"	M-40	II	(24.0)	20.0	10.0	(3.7)	*	—	109	

站号	井号	层	最大岩屑值				石质	岩性	岩层	岩层	岩层	备注
			长 (mm)	宽 (mm)	厚 (mm)	重 (g)						
第114层	L-47	II	(27.0)	27.0	7.0	(6.2)	砾石	I-G	114			
	*		(22.0)	22.0	5.0	(11.7)	下砾	*	102			
第115层	I-52	III	37.3	19.5	4.0	2.8	砾石	I-H	3			
	J-13	II	25.0	20.0	8.0	3.1	*	*	128			
	L-45	III	40.0	26.0	7.0	3.3	*	*	165			
	L-37	II	40.0	37.0	17.0	25.9	*	I-I	70			
	G-37	I	42.0	32.0	11.0	18.8	*	*	87			
第116层	K-33	II	39.0	35.0	7.0	10.2	*	*	86			
	L-47	*	27.0	32.0	10.0	13.0	*	*	171			
	L-50	*	39.0	25.0	9.0	7.4	*	*	179			
	17+	?	35.0	50.0	11.0	20.7	*	I-J	204			
	27+	*	(26.0)	29.0	6.5	(5.7)	*	*	239			
第117层	31+	*	(21.0)	30.0	5.0	(3.5)	*	*	239			
第118层	I-46	II	(30.0)	45.0	14.0	(17.8)	*	*	71			
	I-46	III	(31.0)	34.0	7.0	(6.0)	*	*	106			
	M-14	V	(27.0)	28.0	8.0	(5.3)	*	*	125			
	K-47	*	(18.0)	24.0	9.0	(3.9)	*	*	127			
	K-51	II	34.0	21.0	9.0	5.8	*	*	129			
	K-49	III	22.0	(36.0)	8.0	(6.6)	*	*	134			
	L-47	*	(18.0)	(24.0)	3.0	(1.3)	*	*	135			
	M-46	*	(39.0)	39.0	9.0	(9.4)	*	*	178			
	34+	?	37.5	29.0	16.0	16.2	*	II-A	236			
	I-52	V	33.0	34.0	14.0	12.9	*	*	80			
第117层	K-33	II	22.0	21.0	12.0	6.8	*	*	97			
	I-46	*	39.0	32.0	11.0	16.1	*	*	99			
	I-49	*	40.0	32.0	12.0	14.1	*	*	120			
	K-51	III	33.0	30.0	10.0	9.4	*	*	121			
第116层	L-47	*	(26.0)	40.0	13.0	(11.2)	*	*	174			
	L-51	*	44.0	27.0	10.0	11.1	*	II-B	55			
第117层	L-54	*	28.0	25.0	10.0	6.1	*	*	73			
	L-31	*	30.0	23.0	19.0	7.9	*	*	76			
	L-31	*	31.0	18.0	7.0	7.6	*	*	94			
	L-31	*	32.0	24.0	11.0	6.2	*	*	104			
	L-31	*	45.0	22.0	9.0	14.8	*	*	110			
	L-51	*	47.0	29.0	10.0	9.0	*	*	113			
	L-41	*	36.0	24.0	10.0	9.0	砾石	*	128			
第44层	27+	?	43.0	29.0	16.0	21.7	砾石	砂岩	220			
第46层	29+	砾石	73.0	44.0	17.0	25.9	砾石	*	229			
第118层	L-33	III	39.0	24.0	7.0	9.0	*	*	89			
	L-33	*	28.0	22.0	10.0	5.4	*	*	95			
第45层	28+	?	(26.5)	17.0	11.0	(3.6)	*	III	225			

站号	井号	层	最大岩屑值				石质	分选	岩层	岩层	岩层	备注
			长 (mm)	宽 (mm)	厚 (g)	重 (g)						
第45层	28+	?	31.0	52.0	15.5	29.5	砾石	粗	226			
	*	28+	62.0	21.0	6.0	7.4	*	*	228			
第49层	34+	*	40.5	28.0	20.0	17.7	*	*	238			
	*	41+	(48.0)	41.0	6.0	10.5	*	*	241			
第44层	28+	*	46.0	29.5	6.0	5.4	*	*	250			
第45层	28+	*	(27.0)	15.0	6.0	(1.4)	*	*	251			
第58层	33+	*	35.0	38.0	6.0	4.4	*	*	254			
第59层	36+	*	45.5	33.5	9.0	10.9	*	*	255			
第46层	60+	*	(30.0)	27.0	6.5	4.1	*	*	257			
第118层	K-28	III	47.0	32.0	15.0	21.3	*	*	88			
	I-44	砾石	58.0	25.0	5.0	5.2	*	*	71			
第120层	I-54	II	(36.0)	30.0	11.0	(12.8)	*	*	75			
第118层	L-45	III	36.0	29.0	6.0	8.0	*	*	78			
第119层	I-53	I	26.0	13.0	5.0	1.4	*	*	79			
第118层	L-45	III	34.0	13.0	3.0	2.0	*	*	84			
第119层	J-28	V	30.0	15.0	7.0	2.8	*	*	90			
第120层	H-52	II	(31.0)	21.0	7.0	(3.1)	下砾	*	100			
第121层	I-53	V	34.0	24.0	6.0	3.8	砾石	*	103			
第120层	I-53	*	30.0	27.0	6.0	3.4	*	*	106			
第119层	M-38	II	40.0	22.0	10.0	6.5	*	*	113			
第120层	K-50	III	29.0	26.0	6.0	4.1	*	*	130			
	K-55	II	38.0	(40.0)	6.0	(5.2)	*	*	131			
第119层	I-33	V	32.0	34.0	9.0	3.0	*	*	132			
	L-42	II	50.0	30.0	11.0	15.6	*	*	133			
第119层	K-45	III	52.0	68.0	15.0	24.5	下砾	*	137			
	I-52	*	41.0	40.0	15.0	12.3	砾石	*	143			
第120层	L-44	*	28.0	33.0	5.0	2.7	*	*	146			
	K-51	*	(20.0)	23.0	8.0	(3.6)	*	*	147			
第119层	I-51	V	33.0	11.0	4.0	1.1	*	*	148			
第119层	酒 16	*	56.0	40.0	9.0	17.7	*	*	150			
	第118层	*	32.0	32.0	6.0	4.6	*	*	153			
第119层	*	*	33.0	22.0	6.0	3.2	*	*	154			
	*	*	66.0	51.0	22.0	59.8	*	*	157			
第121层	*	*	20.0	23.0	11.0	4.2	*	*	158			
	L-45	III	34.0	47.0	9.0	13.6	*	*	163			
第118层	L-45	III	27.0	20.0	5.0	9.5	*	*	164			
	M-56	*	(35.0)	26.0	8.0	(4.7)	*	*	177			
第15层	8+	?	62.0	30.0	41.0	94.0	*	*	201	2Y		
第16层	25+	?	72	41	22	125	?	I	209	基岩大 砾石		
第40层	33+	*	102	51	25	189	*	*	277	内壳		

区段	山十 地点	层	最大冲积值				石质	分期	冲积 编号	备 考	
			长(m)	幅(m)	厚(m)	积(公)					
第60段	33上		93	44	16	116	乙	1	378		
第61段	31上	7	(89)	45	22	(167)	庚	2	325		
第122段	J-32		67	29	12	34	乙	1	1/局部欠		
	"	I-33	(89)	49	25	(129)	甲	1	万部		
"	K-21	III	(47)	(47)	(26)	(81)	庚	0	和用		
"	L-41		(38)	(37)	(17)	(24)	乙	0	乱部		
第123段	L-47	III	(20)	19	(12)	(13)	乙	11	万部存在		
	J-51	"	(100)	(41)	(22)	(166)	丙	12	万部欠, 乱部欠		
"	J-51	"	(59)	(41)	29	(114)	乙	16	乱部存在		
"	K-47		(75)	(39)	(12)	(45)	丙	23	乱部		
"	M-39	III	(64)	43	13	(58)	甲	0	34		
"	J-34		140	(46)	34	(205)	乙	379	万部欠		
"	F-58	II	81	22	13	33	甲	0	384		
第16段	5上	IV	(139)	19	29	(284)	丙	11	1/局部欠		
第47段	14上	"	293	52	37	(297)	壬辰	0	4部		
	"	28上	(73)	(51)	28	(86)	乙	0	1/局部欠		
"	28上	"	(47)	(55)	(31)	(100)	丙	0	5上		
第60段	33上		143	64	30	(197)	乙	0	373		
"	33上		152	57	36	(484)	乙	0	376		
第61段	41上		(79)	40	26	(142)	安	0	333	万部	
"	28上		(87)	43	31	(216)	丙	0	366	4部	
第122段	J-54	V	176	59	36	602	安	1	1		
	"	K-46	III	(28)	(58)	37	(223)	甲	2	1/局部	
第123段	H-35	II	(185)	(54)	23	(215)	戊	3	1/局部欠		
第124段	I-37	III	(82)	(56)	30	(229)	甲	7	1/局部		
第125段	I-55	I	(82)	(46)	25	(191)	庚	8	4部		
	"	I-45	III	(109)	53	37	(393)	丙	0	3	万部
"	L-47	II	(112)	55	38	(385)	甲	0	13	无乱, 乱部(局部)~乱部	
"	M-44	"	(82)	(46)	34	(232)	甲	0	14	4部	
"	K-48	"	(75)	(52)	30	(233)	甲	0	15		
第122段	K-53	III	90	54	19	139	安	17	完一局部, 乱部(局部)~乱部		
第123段	K-21	"	(83)	53	36	(265)	丙	0	8	乱部	
	J-50	III	(107)	(42)	27	(197)	甲	0	19	1/局部	
第124段	F-57	I	(64)	53	26	(161)	安	0	1/局部(局部)存在		
	K-46	III	(75)	41	(11)	(47)	庚	0	13	万部	
"	H-52	I	58	43	14	68	丙	0	22	乱部	
"	L-49	III	87	43	14	83	庚	0	360		
石 铺											
第123段	L-38	III	77	60	23	112	甲	0	245		
	"	L-57	V	116	72	23	309	安	0	246	
	"	L-43	III	112	71	22	349	甲	0	247	

区段	山十 地点	层	最大冲积值				石质	分期	冲积 编号	备 考
			长(m)	幅(m)	厚(m)	积(公)				
冲积层(冲积层)层										
第47段	25上	"	80	23	5	10	丙	1	363	
第48段	27上	"	(104)	(50)	(23)	(120)	安	0	337	
	"	"	54上	"	(113)	(65)	20	(268)	甲	0
"	26上	"	(72)	(70)	29	(216)	甲	0	305	
"	29上	"	(97)	(62)	(26)	(239)	甲	0	306	
"	29上	"	(79)	(71)	(19)	(128)	甲	0	307	
第123段	26上	"	(85)	72	17	(133)	甲	0	351	3/7号与乱部
第124段	M-37	III	(125)	63	27	(312)	甲	0	28	
	"	M-46	107	61	23	230	甲	0	27	
"	I-48	"	(86)	(72)	(21)	(210)	甲	0	41	
"	K-22	III	(80)	65	25	(188)	甲	0	42	
第123段	K-47	"	107	64	22	291	丙	0	46	
第124段	J-26	"	(78)	67	31	(279)	安	0	51	
"	K-48	"	(99)	63	11	(140)	甲	0	59	
"	G-57	I	(117)	63	23	(234)	甲	0	61	
"	F-58	"	(100)	60	26	(294)	丙	0	66	
"	K-47	III	(105)	37	18	(132)	安	0	180	
第124段	J-46	"	(172)	70	18	(323)	甲	0	328	
	J-46	"	(89)	(56)	13	(104)	甲	0	363	
"	K-48	"	(84)	(56)	(27)	(133)	甲	0	369	
"	L-46	III	(43)	(42)	(20)	(52)	甲	0	372	
"	表 乱	"	62	57	29	111	甲	0	387	
"	K-21	III	(83)	70	19	(150)	乱	1	34	
"	J-48	"	(82)	70	27	(221)	安	0	35	
第124段	L-45	III	(109)	76	26	(359)	甲	0	38	
	J-27	III	(123)	68	27	(301)	甲	0	40	
第125段	L-39	I	(132)	74	27	(253)	乱	0	50	
	H-56	"	105	63	25	223	乱	0	53	
第124段	F-38	III	126	39	27	399	乱	0	65	
第47段	28上	"	(104)	75	27	(294)	乱	0	311	
	"	"	(107)	(51)	(20)	(142)	甲	0	338	
第125段	表 乱	"	(118)	76	33	(369)	乱	0	44	
	I-49	III	156	50	29	286	甲	0	61	
"	K-51	II	117	54	25	210	甲	0	86	
"	F-58	"	135	54	23	225	甲	0	105	
"	L-44	"	(146)	44	18	(177)	乱	0	172	
"	F-57	"	(93)	(54)	15	(88)	乱	0	175	
第125段	M-41	V	(145)	46	37	(392)	乱	0	183	
	"	L-45	107	54	19	301	乱	0	180	
	"	L-10	104	59	18	145	甲	0	187	
	"	L-11	"	(188)	37	24	(192)	甲	0	222

図号	出地点	層	拡大計測値				石質	分級	処理番号	備考
			径(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
<b>秋入瀬等層群</b>										
第60段	31土	?	(69)	57	22	(156)	安	304	302上様	
第125段	L-12	II	(100)	66	25	(231)	奥	29		
第60段	L-68	III	(68)	66	24	(199)	安	362		
<b>北海道式有層</b>										
第48段	28土	?	(64)	63	45	(307)	砂	312		
	51土	*	90	52	37	322	雑	350		
第126段	I-47	III	125	60	43	583	安	28		
	I-56	III	110	63	48	397	*	36		
	K-41	*	(71)	77	50	(377)	*	77		
	I-52	V	(57)	(66)	(29)	(168)	69	44		
	I-52	III	(66)	76	55	(590)	*	100		
	I-49	*	(87)	77	(62)	(495)	安	249		
	I-44	II	132	81	49	969	*	251		
<b>スリ石</b>										
第126段	M-32	*	136	63	38	705	安	I-A	21	
	K-25	III	124	60	40	513	*	85		
	L-17	II	112	60	66	571	奥	97		
	L-41	III	124	69	48	552	安	226		
第48段	28土	?	(97)	54	29	(246)	*	I-B	317	
第128段	A-18	*	(28)	52	27	(136)	砂	366		
第127段	H-56	III	130	71	27	829	粘	43		
	J-41	III	127	62	33	(424)	安	69		
第128段	K-35	*	(184)	90	27	(382)	粘	73		
	G-57	I	(101)	80	42	(365)	*	74		
第127段	K-33	III	143	70	32	888	安	73	又文	
第128段	表板	(124)	(80)	81	(297)	砂	79			
第127段	A-14	*	143	75	35	487	*	80		
第128段	L-37	III	(120)	66	26	(373)	*	81		
第127段	L-13	*	146	63	25	376	*	82		
	K-33	II	140	85	43	896	安	88		
第128段	I-46	III	138	49	21	294	砂	47		
第127段	J-47	*	(87)	98	20	(266)	*	91		
第126段	K-42	*	(122)	57	25	(218)	*	95		
第127段	L-14	II	(81)	61	36	(267)	安	96		
第127段	M-68	*	132	73	65	(828)	*	98		
第129段	表板	(107)	68	37	(342)	砂	102			
第127段	K-22	III	118	72	62	667	安	105		
第128段	M-41	V	175	82	35	953	砂	113		
第127段	K-12	II	115	62	23	247	*	115		
第127段	K-40	V	137	58	23	411	*	121		
	L-35	III	163	52	19	335	安	759		

図号	出地点	層	拡大計測値				石質	分級	処理番号	備考
			径(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	M-43	III	(78)	(65)	(35)	(182)	雲	I-B	371	
第47段	28土	?	(105)	55	25	(234)	*	I-C	316	
第48段	28土	*	(71)	(60)	26	(266)	奥	318		
第60段	39土	*	132	67	39	(623)	安	325	又文、両端ブタキ	
	I-49	III	(71)	65	27	(189)	*	33		
第129段	I-57	I	(60)	60	30	(300)	砂	37	I層	
	K-46	II	(149)	66	26	(328)	*	52		
第129段	L-55	III	(88)	61	46	(320)	奥	72		
	F-38	V	(83)	51	31	(185)	砂	78		
	K-15	III	124	64	48	550	安	104		
第129段	L-46	*	(68)	73	26	(750)	砂	I-D	45	
第130段	I-39	II	(95)	61	31	(496)	奥	45		
第129段	K-21	III	146	80	40	522	安	52		
	K-17	*	(99)	94	29	(683)	奥	58		
	I-48	II	(99)	64	33	(234)	砂	67		
	K-22	III	(82)	(71)	29	(319)	安	I-E	30	
	L-11	II	(96)	29	31	(314)	*	31		
第129段	M-44	III	(28)	84	40	(285)	奥	29		
第130段	L-15	II	(106)	75	36	(483)	安	47		
	K-24	III	(117)	61	32	(573)	砂	56		
第129段	I-57	II	(75)	58	32	(174)	*	69		
	M-31	III	(97)	65	46	(443)	*	63	又文	
	K-46	*	(79)	62	34	(289)	粘	361		
	B他記		143	(73)	(49)	(567)	粘	75	両端ブタキ	
	I-37	III	(132)	84	39	(567)	安	32		
	L-17	II	135	86	(34)	(382)	奥	76		
	5土	表面	(74)	(31)	32	(136)	雑	302	又文	
第47段	21土	?	(83)	(78)	43	(409)	安	286		
	表板	(71)	73	31	(369)	*	385			
	J-56	V	(64)	66	25	(174)	*	53		
	表板	(120)	69	26	(469)	粘	57			
	K-36	III	(73)	(30)	(36)	(91)	奥	70		
	H-56	V	(97)	89	42	(366)	砂	88		
	I-43	II	(93)	(66)	32	(365)	安	90		
	I-42	*	(114)	(73)	28	(421)	*	304		
	I-41	*	(76)	61	41	(304)	*	116		
	I-37	I	(85)	(56)	37	(226)	砂	112		
	L-42	II	(44)	65	32	(149)	奥	117		
	J-20	I	(89)	(69)	(43)	(117)	安	121		
	J-25	V	(97)	(70)	(63)	(280)	*	127		
	K-44	III	(91)	(71)	30	(419)	*	127		

区 队	出 入 地 点	层	最 大 分 割 块				石 质	分 割	物 理 编 号	编 号
			长 (mm)	宽 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
第 47 区	27 号 6	II	61	33	52	253	砂	II A	338	
第 130 区	I 56	II	65	65	57	453	砂	II	119	
"	I 36	II	66	54	39	185	"	"	130	
"	J 48	II	66	55	(25)	(117)	"	"	135	
第 130 区	J 50	III	54	50	42	130	砂	"	232	
"	K 53	"	63	49	63	513	"	"	253	
"	K 36	II	42	40	36	94	泥	"	234	
"	H 52	I	43	41	33	84	"	"	235	
"	I 54	V	36	35	32	23	石	"	237	
"	J 25	II	67	58	47	276	砂	"	238	
"	表 14	"	56	56	49	286	泥	"	240	
"	I 25	I	50	46	43	118	砂	"	242	
"	L 44	III	28	28	21	25	煤砂	"	243	
第 131 区	表 14	"	100	(61)	38	(360)	泥	II-B	305	
"	表 14	"	56	66	59	398	泥	"	326	
第 130 区	I 55	V	66	61	37	283	砂	"	229	
第 131 区	I 50	III	72	64	41	285	"	"	330	
第 130 区	K 51	II	63	62	29	174	泥	"	331	
"	K 40	III	68	69	33	232	砂	"	336	
"	J 46	"	63	50	31	167	泥	"	338	
第 48 区	51 号	V	107	85	43	326	"	III	362	又文
第 131 区	H 54	V	(79)	45	47	(305)	"	"	92	
"	M 43	II	(96)	60	35	(252)	砂	"	93	
"	J 51	III	84	54	30	208	泥	"	110	
"	M 40	II	(117)	65	63	(436)	泥	"	112	
"	L 21	III	74	30	27	151	砂	"	250	又文
"	L 45	"	(64)	34	47	(730)	砂	"	255	
第 131 区	L 39	V	107	37	39	230	"	"	373	
第 41 区	41 上	V	96	90	36	373	泥	I	321	又文
第 131 区	I 38	II	105	62	16	530	砂	"	139	
第 131 区	K 33	"	178	85	47	861	"	"	141	又文
"	表 14	"	97	70	16	307	泥	"	151	
"	I 56	II	102	65	32	309	"	"	196	又文
第 132 区	J 48	"	107	86	59	685	"	"	201	
"	J 20	III	(399)	98	41	(422)	"	"	257	
第 47 区	17 上	V	93	70	54	451	"	II	295	又文
第 60 区	41 上	"	92	(70)	20	(118)	泥	"	328	又文
第 132 区	I 42	III	129	91	50	576	"	"	143	
"	K 47	"	84	50	34	131	"	"	144	
"	表 14	"	65	51	40	115	"	"	146	

区 队	出 入 地 点	层	最 大 分 割 块				石 质	分 割	物 理 编 号	编 号
			长 (mm)	宽 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
第 132 区	I 51	II	97	76	32	233	砂	II	150	
"	L 36	III	86	68	43	247	泥	"	152	
第 132 区	II 52	I	76	67	39	172	泥	"	154	
"	I 55	I	134	37	26	278	泥	"	157	
"	K 26	III	77	64	51	274	"	"	158	
"	表 14	"	(85)	67	34	(155)	泥	"	164	
"	J 51	II	113	63	32	274	砂	"	166	
"	M 39	"	101	56	32	279	"	"	190	
"	M 41	V	(114)	(69)	31	(133)	"	"	193	又文
第 133 区	I 49	III	(74)	61	35	(256)	泥	III	140	
"	K 43	"	116	96	47	723	"	"	142	
"	G 59	I	107	96	68	541	泥	"	148	
"	I 27	II	106	63	40	378	"	"	149	又文
"	I 37	III	(146)	66	38	(242)	"	"	155	又文
"	I 45	II	122	62	50	217	砂	"	156	
"	表 14	"	102	84	43	511	泥	"	160	
"	K 46	III	87	71	39	359	"	"	163	又文
第 133 区	L 47	"	93	70	53	406	"	"	165	
"	K 46	"	105	89	67	891	"	"	167	
第 61 区	41 上	V	(69)	55	23	(61)	泥	"	84	
"	K 53	II	(97)	48	31	(306)	砂	"	126	
"	J 15	"	(63)	(69)	32	(134)	泥	"	145	
"	J 50	III	(63)	(65)	38	(135)	"	"	147	
"	J 52	II	(62)	(62)	37	(106)	"	"	153	
"	K 46	V	(67)	58	38	(192)	泥	"	159	
"	I 45	III	(91)	63	28	(369)	砂	"	162	又文
"	K 22	"	(76)	64	(43)	(256)	泥	"	169	
"	L 23	"	(74)	45	24	(88)	泥	"	171	
"	K 48	II	(71)	(73)	58	(319)	砂	"	207	又文
第 16 区	9 上	I	76	70	28	193	泥	I A	303	
第 60 区	31 上	"	129	78	30	418	"	"	320	又文
"	31 上	"	82	74	19	269	"	"	323	又文
第 134 区	L 36	III	76	73	30	273	砂	"	121	又文
"	K 23	"	102	75	26	360	泥	"	194	又文
"	L 51	II	92	91	66	372	砂	"	195	又文
第 134 区	I 47	"	95	81	54	395	泥	"	197	又文
"	K 45	III	90	87	(37)	(405)	"	"	202	
第 16 区	16 上	V	(116)	94	(43)	(639)	"	I B	296	
第 134 区	K 46	"	(89)	70	39	(350)	"	"	303	
"	K 45	V	126	90	74	1133	"	"	192	

図 取	出 上 地 点	層	最大計測値				石質	分類	処理 番号	備 考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
第134図	L-24	砂	119	84	56	645	変	1-B	198	火文
	K-40	砂	104	84	52	613	"	"	203	"
第134図	L-34	砂	118	61	55	622	"	"	205	"
	L-32	砂	119	77	70	867	"	"	208	"
第69図	1H	?	112	80	48	429	"	1-C	297	"
	29+	?	(111)	59	40	(257)	"	"	324	火文
第134図	H-53	砂	120	70	33	332	砂	"	132	火文
	F-56	V	(101)	61	31	(286)	変	"	196	"
第134図	L-42	砂	128	60	33	414	変	"	199	火文
	M-43	砂	136	(62)	41	(325)	砂	H-A	133	"
第135図	L-38	砂	88	77	38	290	変	"	170	"
	M-39	砂	138	74	27	351	"	"	189	火文
第135図	1-50	?	165	77	42	797	"	263	火文	
	1-48	?	130	66	67	714	"	H-B	123	火文
第135図	1-50	砂	108	84	50	547	"	"	129	火文
	K-54	?	90	79	47	432	砂	H-C	120	"
第135図	E-58	V	99	70	44	348	砂	"	122	"
	J-33	?	85	72	50	450	変	"	125	"
第135図	L-26	砂	(59)	(47)	54	(232)	"	"	128	火文
	F-58	J	92	68	65	606	砂	"	131	"
第135図	H-55	砂	(73)	64	(25)	(127)	砂	"	134	"
	K-44	砂	80	(75)	(67)	(675)	砂	"	211	"
第47図	J-54	?	76	73	68	36	変	"	217	火文
	27上	?	140	97	52	927	砂	H-D	366	"
第135図	L-47	?	(73)	(70)	(41)	(203)	変	"	168	"
	J-47	砂	84	77	50	668	"	"	111	"
第135図	G-54	砂	(85)	(51)	(36)	(134)	"	"	214	火文
	表 採	?	(60)	53	(25)	(39)	砂	"	216	"
磁 石	1H	?	70	55	36	206	砂	"	291	"
	M-43	砂	59	51	28	100	"	"	374	"
第135図	表 採	?	(101)	60	61	(395)	磁砂	248	"	
	L-49	砂	(115)	(98)	32	(388)	変	253	有漆、火文	
石 皿	L-32	?	(118)	(105)	83	(219)	磁	354	"	
	27上	?	300	150	155	6900	変	335	"	
台 石	K-26	砂	122	64	43	240	"	276	"	
	表 採	?	(102)	(85)	27	(273)	砂	40	"	
第135図	L-48	砂	97	76	35	209	砂	166	火文	
	L-33	?	181	120	51	1530	砂	250	"	

図 取	出 上 地 点	層	最大計測値				石質	分類	処理 番号	備 考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
第136図	G-56	砂	(131)	(119)	(72)	(260)	変	"	219	"
	F-49	?	(167)	102	58	(160)	"	"	264	火文
	L-24	砂	910	130	95	5550	"	"	312	磁研粉
	表 採	?	(126)	(90)	80	(773)	"	"	263	火文
	L-44	砂	(111)	(84)	37	(620)	"	"	304	火文
	H-20	?	(133)	(56)	45	(590)	"	"	265	火文
	J-51	砂	(142)	(132)	30	(1650)	"	"	266	火文
	K-35	?	(157)	(91)	28	(440)	"	"	267	火文
	F-39	?	(124)	(82)	(26)	(460)	"	"	268	"
	L-26	砂	(92)	(104)	57	(640)	"	"	269	火文
	F-36	?	128	78	23	640	"	"	270	火文
	F-56	?	122	125	68	1090	"	"	271	火文
その他	J-19	砂	148	92	133	2900	"	"	272	"
	K-32	?	(78)	(68)	61	(200)	"	"	273	火文
	L-17	?	252	220	33	3020	"	"	274	火文
	L-45	?	(104)	(115)	44	(810)	"	"	275	火文
	T-23	砂	108	108	37	580	"	"	277	"
	M-11	V	(84)	(60)	(37)	(520)	"	"	278	火文
	H-37	?	(61)	(63)	45	(460)	"	"	279	火文
	1-25	V	(125)	107	25	(595)	"	"	280	"
	L-43	砂	(121)	(123)	62	(1710)	"	"	281	火文
	J-31	?	(80)	(34)	53	(340)	"	"	282	火文
	K-47	?	85	59	31	128	"	"	286	"
	J-46	?	(72)	(86)	37	(142)	"	"	364	"
第136図	表 採	?	63	37	38	75	砂	366	"	
	J-53	?	72	49	32	132	"	126	"	
	H-58	?	48	39	30	169	"	136	"	
	J-53	?	55	34	27	50	磁砂	228	"	
第136図	1-46	砂	68	83	(40)	(377)	層	367	"	

石製品計測表

品名	出上 地点	種	結晶計測値				石質	分類	整理 番号	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
第1400区	29上		(93)	(43)	(9)	(44)	粘	碧玉	354	
〃	49上		(111)	(45)	(10)	(61)	〃	〃	355	
第1410区	K-40	田	(107)	43	12	(83)	〃	〃	173	
第1420区	J-25	〃	(118)	45	16	(112)	〃	〃	174	
第143区	J-46	田	(111)	49	18	(109)	〃	〃	175	
〃	M-29	田	(72)	(22)	(11)	(26)	混	〃	476	
〃	J-39	田	(90)	43	16	(87)	〃	〃	186	
〃	G-56	田	(210)	60	21	(325)	粘	〃	380	
第142区	I-58	田	41	33	3	6	粘	石孔	381	ペンダント
〃	K-30	田	26	21	7	2	瓦	〃	382	ペンダント
〃	J-54		(25)	16	2	(1.3)	粘	〃	390	
第1400区	39上		(100)	35	(90)	(170)	混	石林	322	又又
〃	I-45	田	(196)	103	10	(186)	〃	〃	256	又又
〃	丸 採		(53)	(15)	(76)	(111)	混	〃	388	
第1400区	28上	〃	91	30	8	23	粘	龍	310	
第142区	L-38	田	45	44	19	57	混	〃	214	
〃	J-55	〃	77	31	12	62	輝	〃	344	
〃	L-53	田	79	21	12	33	粘	〃	389	
第1400区	28上	〃	39	45	43	26	粘	ウキ	310	
〃	27上	〃	(53)	(25)	(17)	(132)	混	ワタ	340	
〃	4上	〃	43	13	5	16	粘	瓦	400	

## 石質略称

珪頁—珪質頁岩

玉珪—玉髓質珪質頁岩

玉—玉 髓

凝—凝灰岩

細凝—細粒凝灰岩

凝砂—凝灰質砂岩

砂—砂 岩

礫—礫 岩

チャーチャート

ホ—緑色ホルンフェルス

粘—粘板岩

閃—閃緑岩

はん—はんれい岩

輝—輝緑岩

安—安山岩



# 写 真 图 版

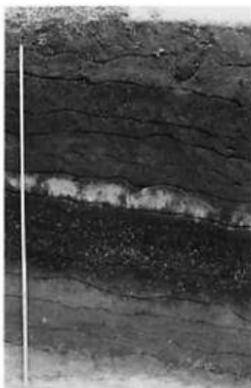




W→E



E→W



基本層序  
(30ライン)



遺構確認状況  
(手前は14号土構)



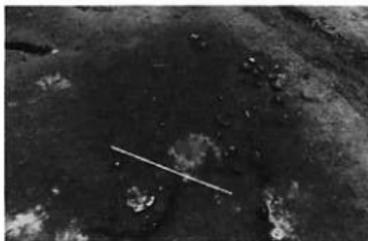
土層地積状況  
(33ライン、白い層は  
中掘浮石層)



遺構確認状況  
(手前は1号壑穴住居跡)



PL. 2 遺構外土器出土状況



確認状況



遺物出土状況



炉



堆積土



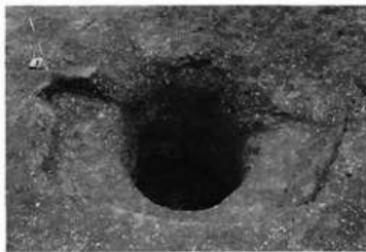
炉痕出土状況



完掘



1号



2号



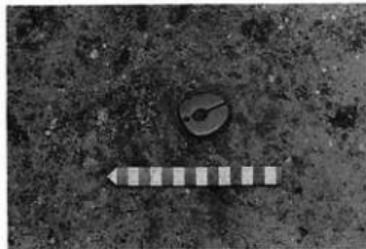
3号



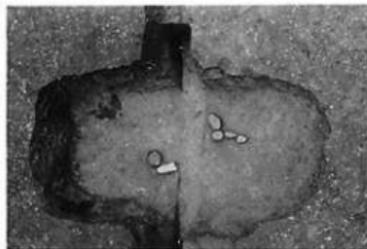
4号



4号堆積土



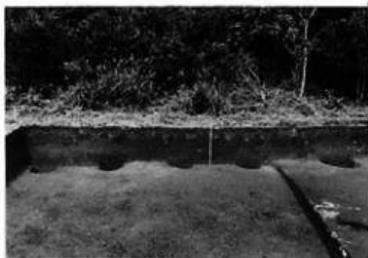
4号球状耳飾り出土状況



5号



6号



9-13号土壤



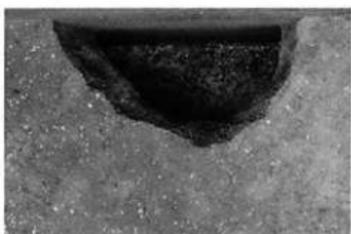
13号土壤



10号土壤



11号土壤



12号土壤



PL. 5 土壤 (II区)



9-13号土壤



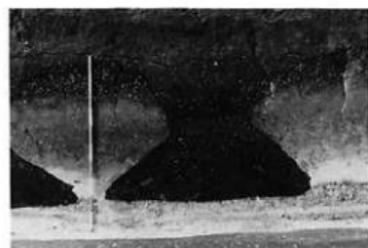
9号土壤



10号土壤



11号土壤



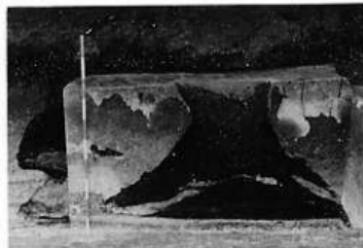
12号土壤



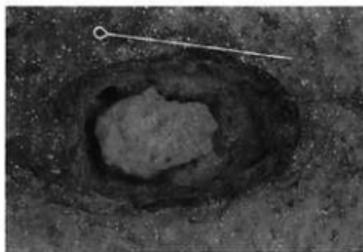
13号土壤



52·53号土壤



52·53·25号土壤



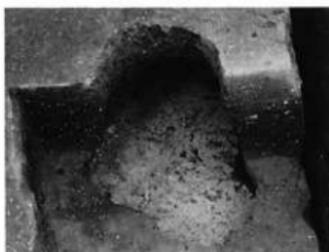
7号



8号



18(左)・2号溝状ビット(中)・19(右)号



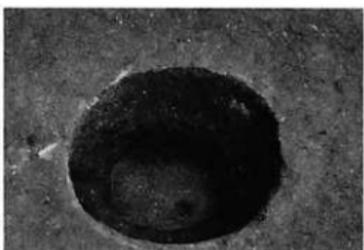
18号



19号



20号 (確認状況)



20号

PL.7 土壌 (II区)



14号



14号



14号



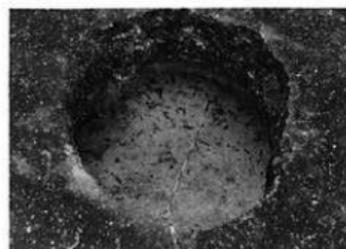
14号



15号 (確認状況)



15号 (土器出土状況)



15号



15号 (土器出土状況)



16号 (確認状況)



16号 (遺物出土状況)



16号 (骨粉出土状況)



16号 (骨粉出土状況)



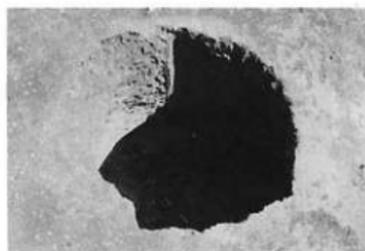
16号 (骨粉出土状況)



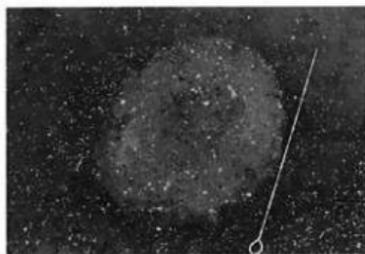
16号



17号



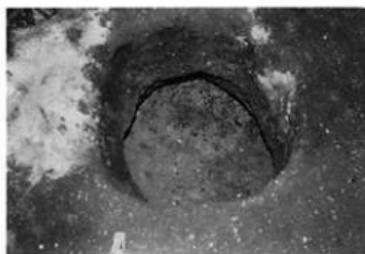
17号



21号 (確認状況)



21号



22号



23号 (確認状況)



23号 (土器出土状況)



左の拡大



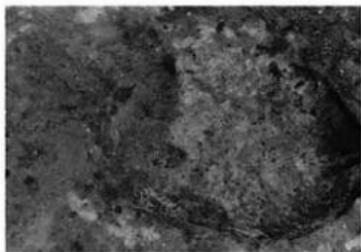
24号



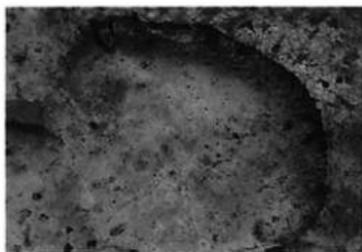
28号 (手前a、後方b)



30号



30号



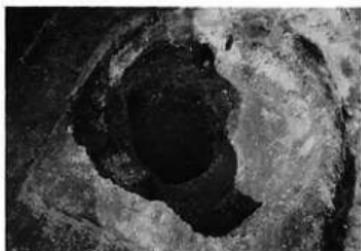
31号



33号 (磨弁出土状況)



33号 (磨弁拡大)



33号



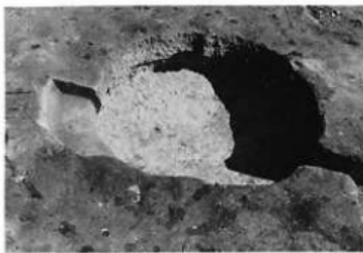
34号 (左b, 右a)



34号a



37号



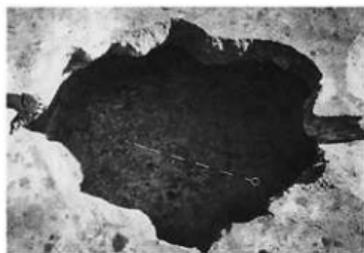
38号



39号



40号



41号



41号



43号



47号



2号屋外炉



4号屋外炉



3号屋外炉



3号屋外炉



1号溝状ビット



2号溝状ビット



PL.14 遺構内出土土器(1) (第1号竪穴住居跡)



5 (18号土壙)



6 (14号土壙)



8 (15号土壙)



9 (15号土壙)



10 (16号土壙)



11 (16号土壙)



12 (16号土壙)



13 (16号土壙)



12



14 (16号土壙)



15 (17号土壙)



15



16 (23号土壙)



18 (24号土壙)



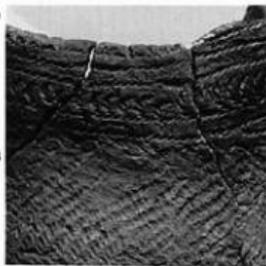
16



19 (27号a土壙)



20 (27号a土壙)



18



21 (28号a土模)



22 (28号a土模)



23 (28号a土模)



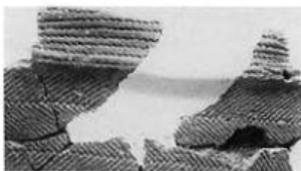
25 (28号a土模)



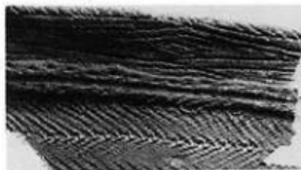
21



22



23



25



26



26 (28号a土壟)



27

27 (28号a土壟) 29 (28号a土壟)



28

28 (28号a土壟)



30 (28号a土槎)



30



31 (28号a土槎)



31



32 (28号a土槎)



32



33 (28号a土槎)



35 (28号a土槎)



34 (28号a土槎)



33



34



36 (28号a土槎)



37 (28号a土槎)



40 (28号b土槎)



41 (28号b土槎)



42 (28号b土槎)



44 (28号b土槎)



43 (28号b土槎)



45 (28号b土槎)



45



46 (28号b土槎)



47 (28号b土槎)



48 (29号土壙)



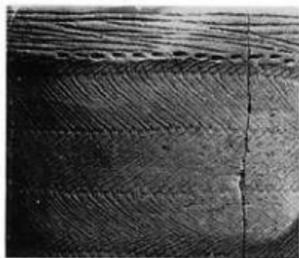
49 (29号土壙)



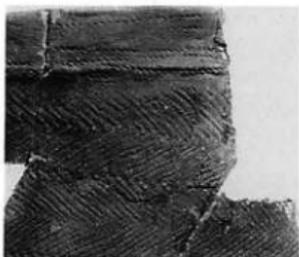
50 (29号土壙)



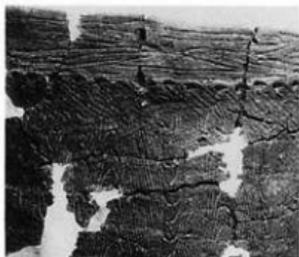
51 (29号土壙)



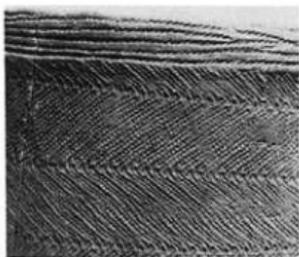
48



49



50



51



52



52 (50号土壙)



53



53 (50号土壙)



54



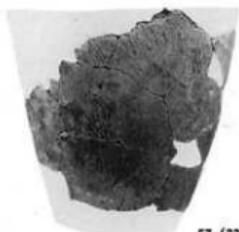
54 (51号土壙)



55 (51号土壙)



56 (51号土壙)



57 (33号土壙)

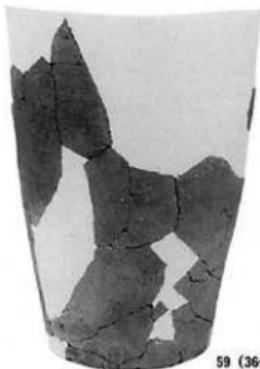




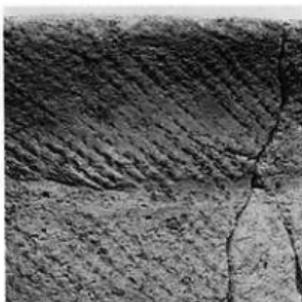
58 (36号土器)



58



59 (36号土器)



61



60 (36号土器)



61 (41号b土器)



62 (47号土甗)



63 (48号土甗)

62



64 (49号土甗)



65 (49号土甗)

63



66 (2号屋外炉)



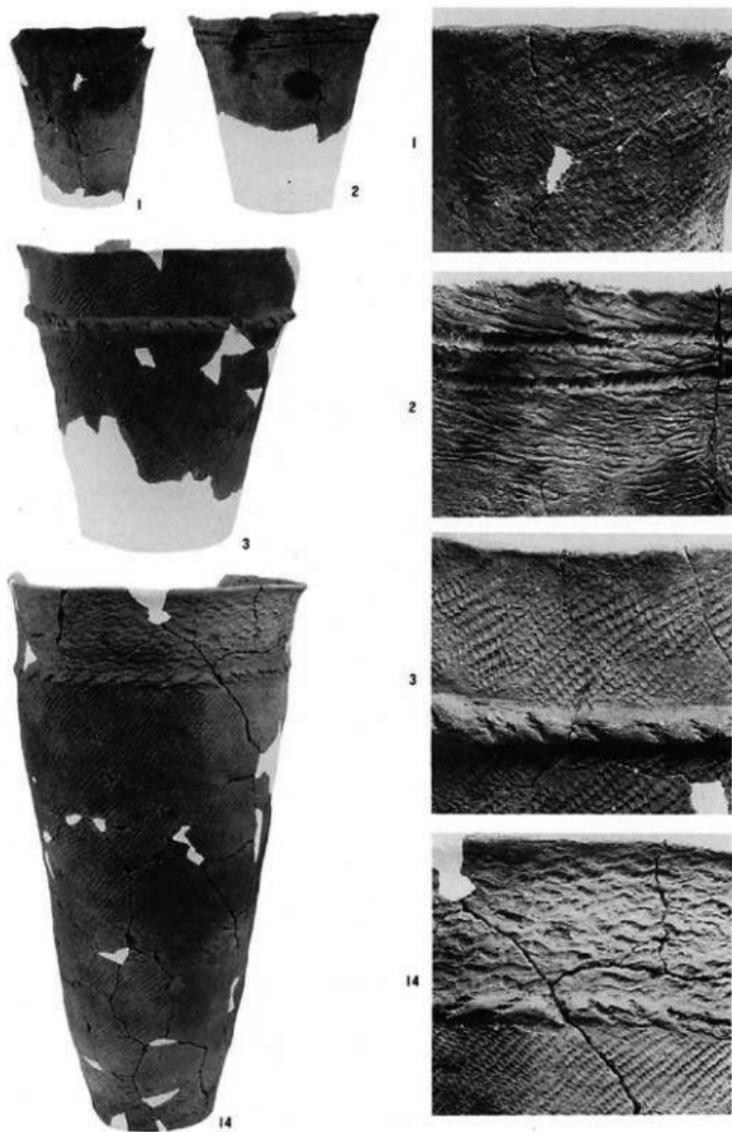
67 (3号屋外炉)

64

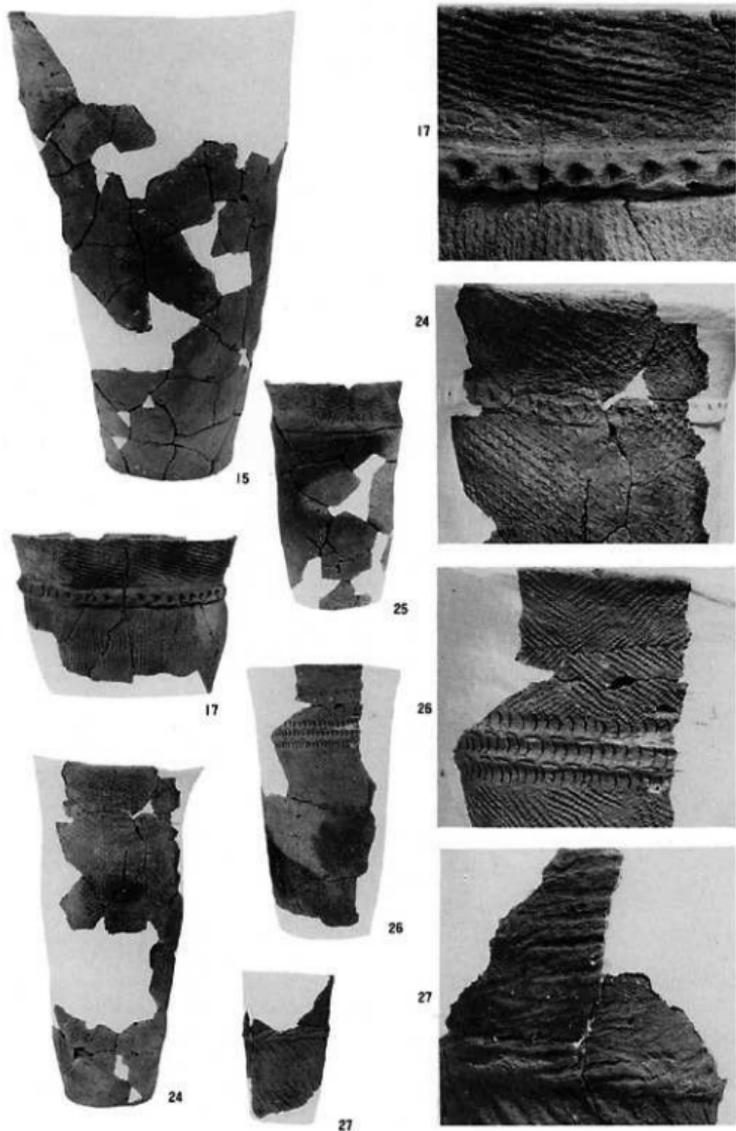


65

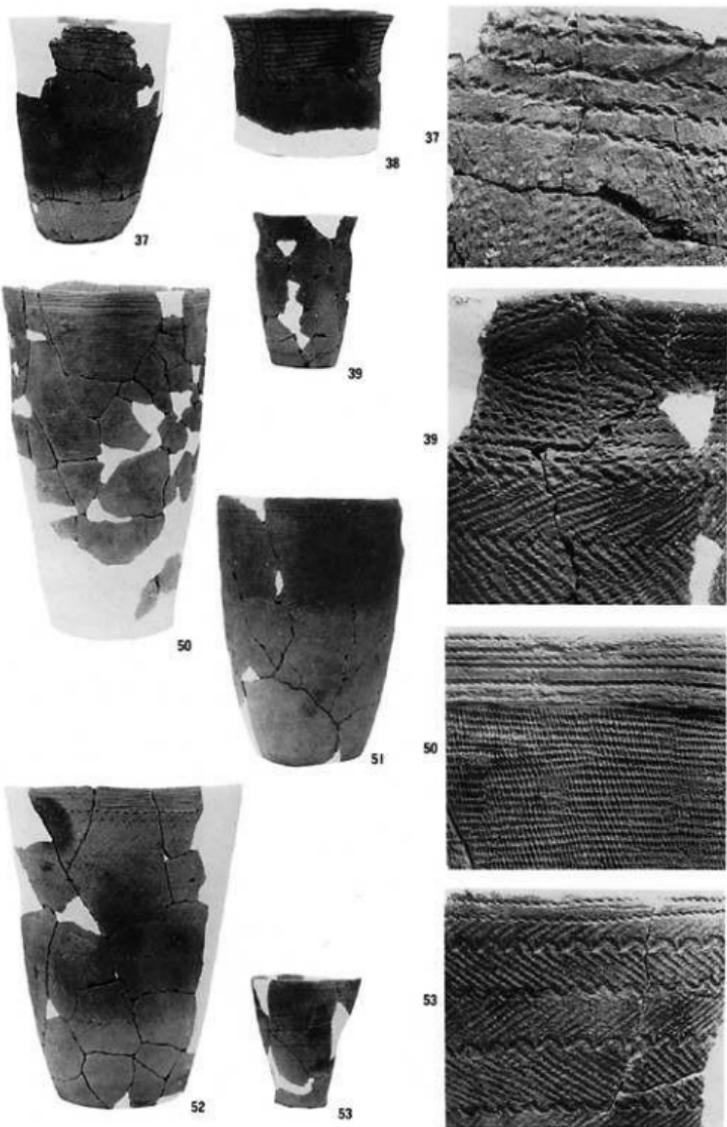




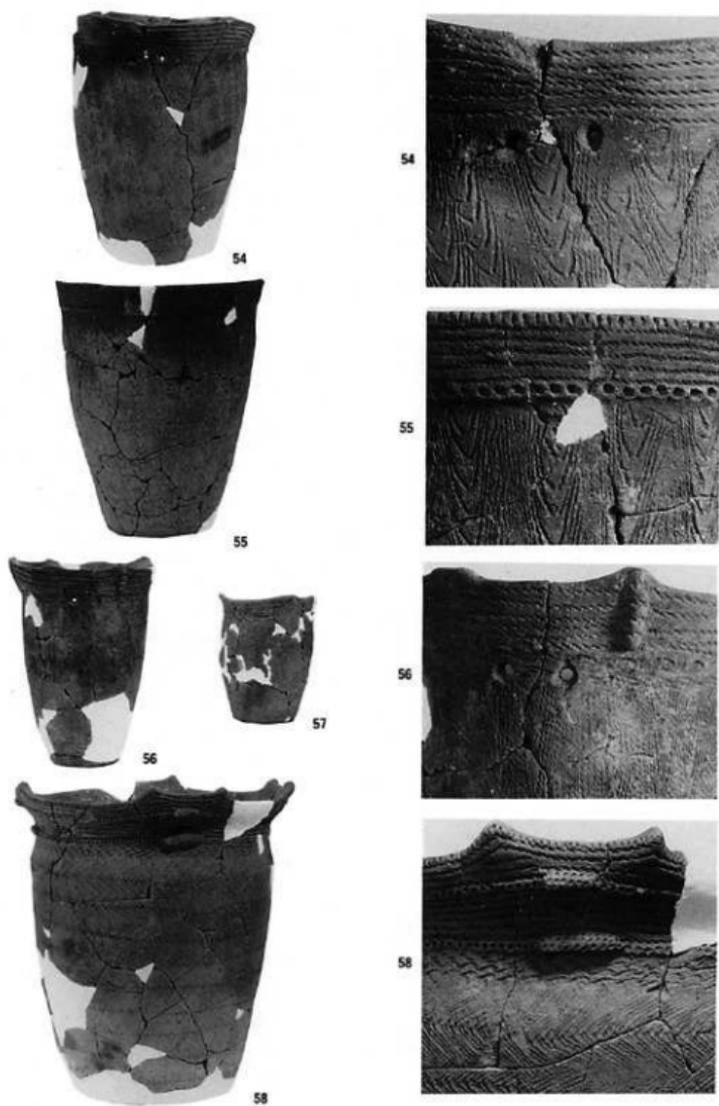
PL.26 遺構外出土土器（円筒下層式土器） ※Noは土器図録No之同一



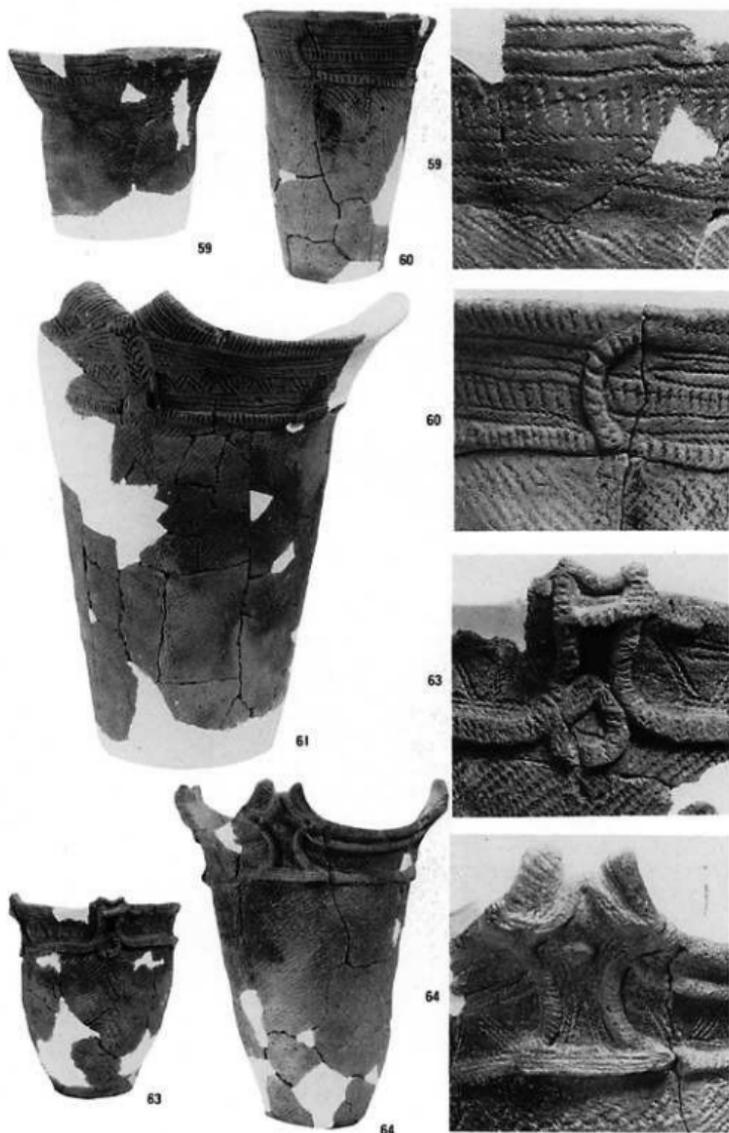
PL.27 遺構外出土土器 (円筒下層式土器)



PL.28 遺構外出土土器 (円筒下層式土器)



PL.29 遺構外出土土器 (円筒下層式土器)



PL.30 遠構外出土土器（円筒上層式土器）



62



65

PL.31 遺構外出土土器（円筒上層式土器）



66



67



66



68



69



68



70



71

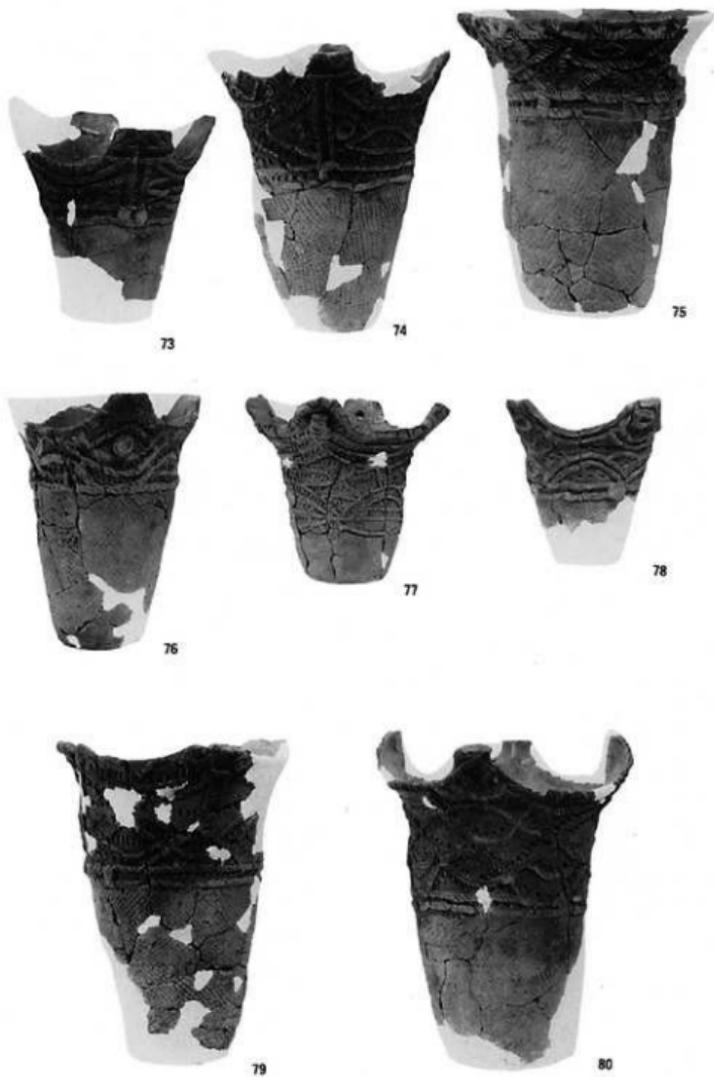


71



72

PL.32 遺構外出土土器 (内筒上層式土器)



PL.33 遺構外出土土器 (円筒上層式土器)



73



74



75



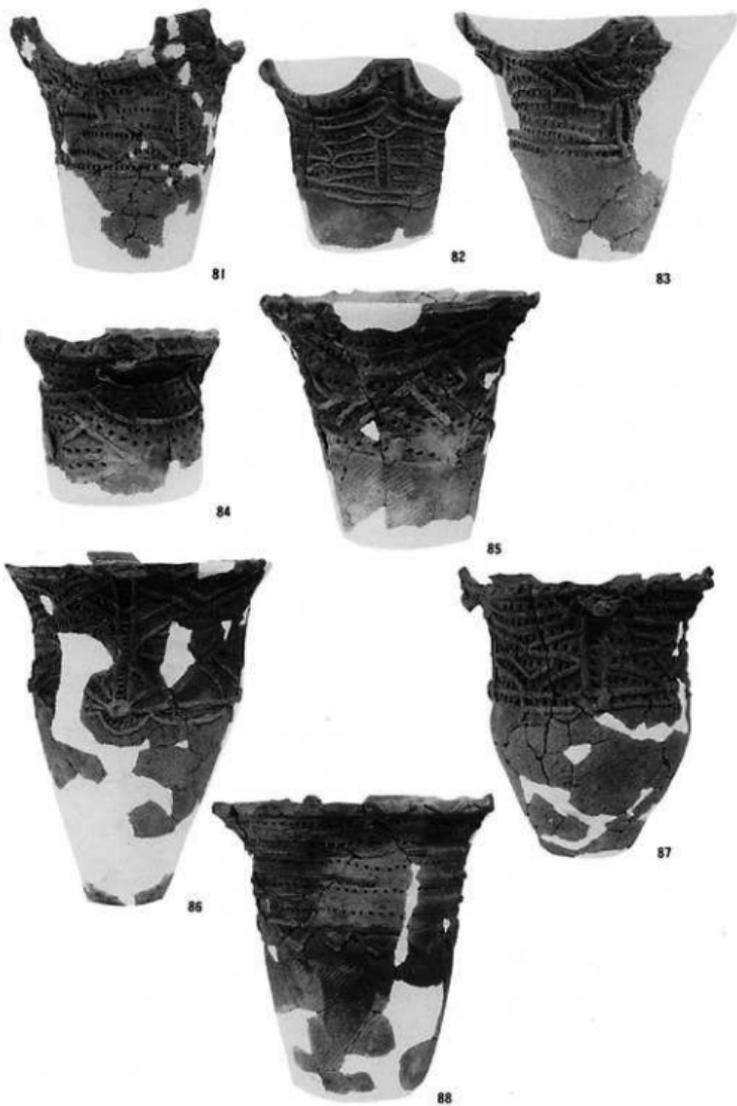
76



77



80



PL.35 遺構外出土土器（円筒上層式土器）



81



82



84



86



87



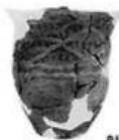
88



89



90



91



92



93



94



95



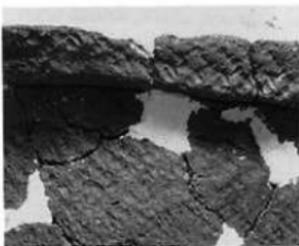
88



93

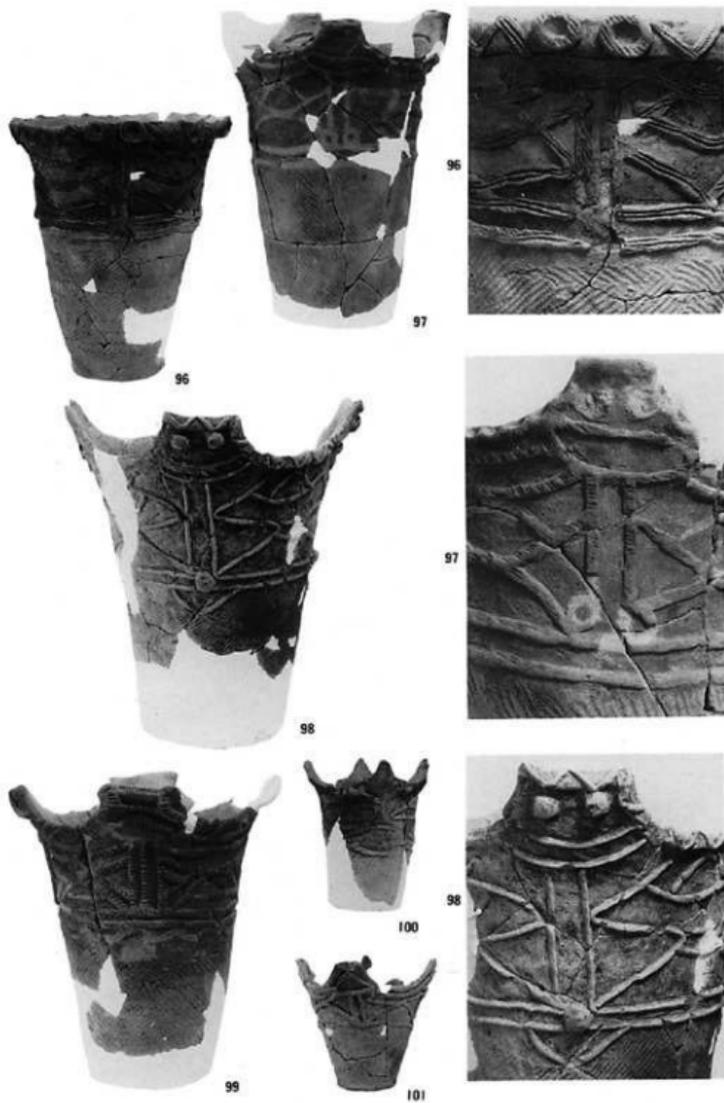


94

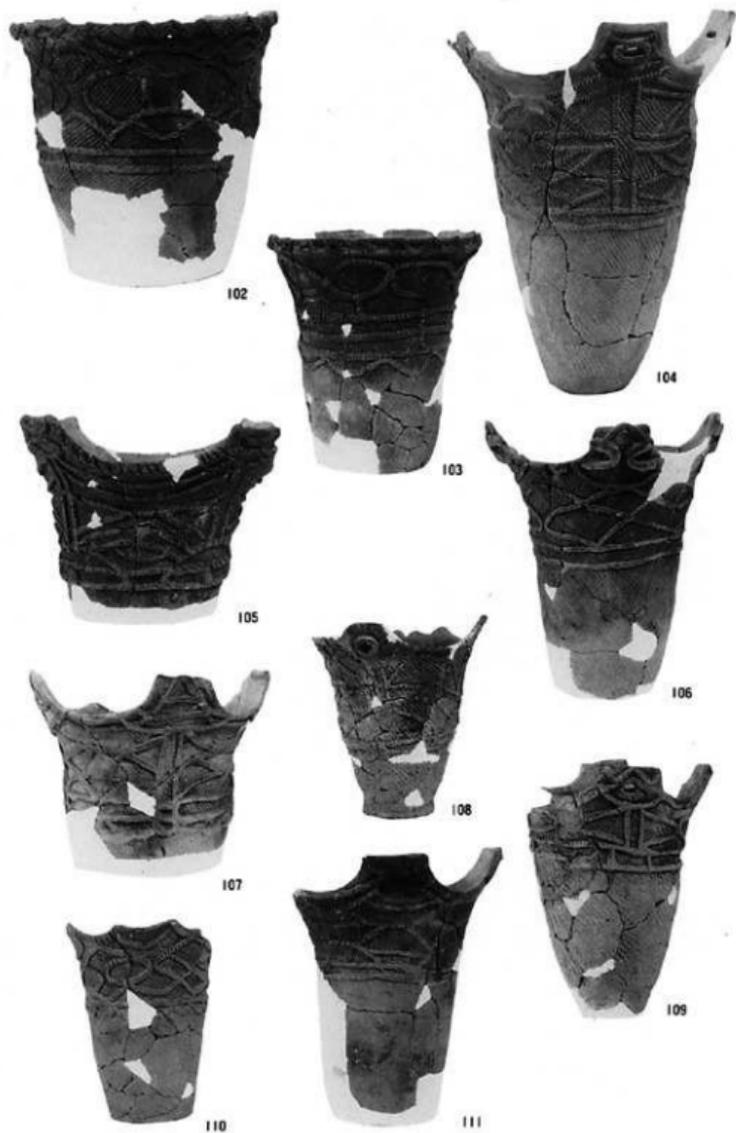


95

PL.37 遺構外出土土器 (円筒上層式土器)



PL.38 遺構外出土土器（円筒上層式土器）



PL.39 遺構外出土土器 (円筒上層式土器)



102



104



106



107



109



111

PL.40 遺構外出土土器（円筒上層式土器）



112



113



114



115



112



113



115

PL.41 遺構外出土土器 (内面上層式土器)



116



117



119



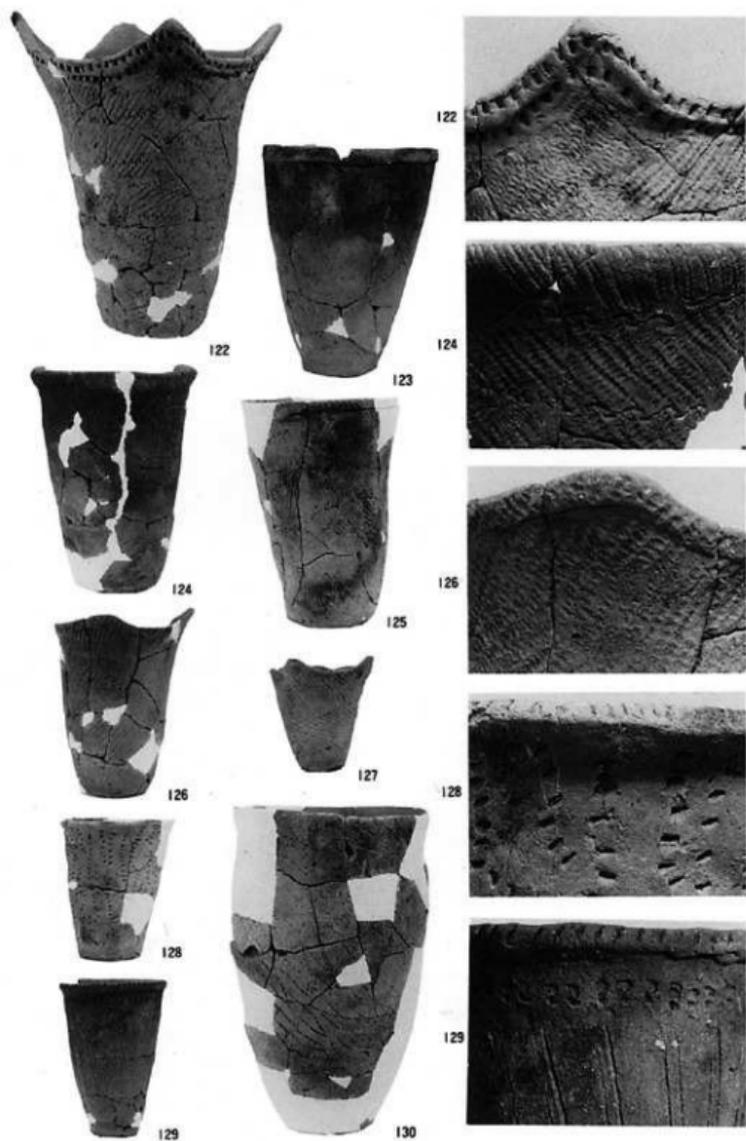
118



120



PL.42 遺構外出土土器 (円筒上層式土器)



PL.43 遺構外出土土器 (X群土器)



131



132



133



134



135



131



132



133



134



152



151



149



150



154



153

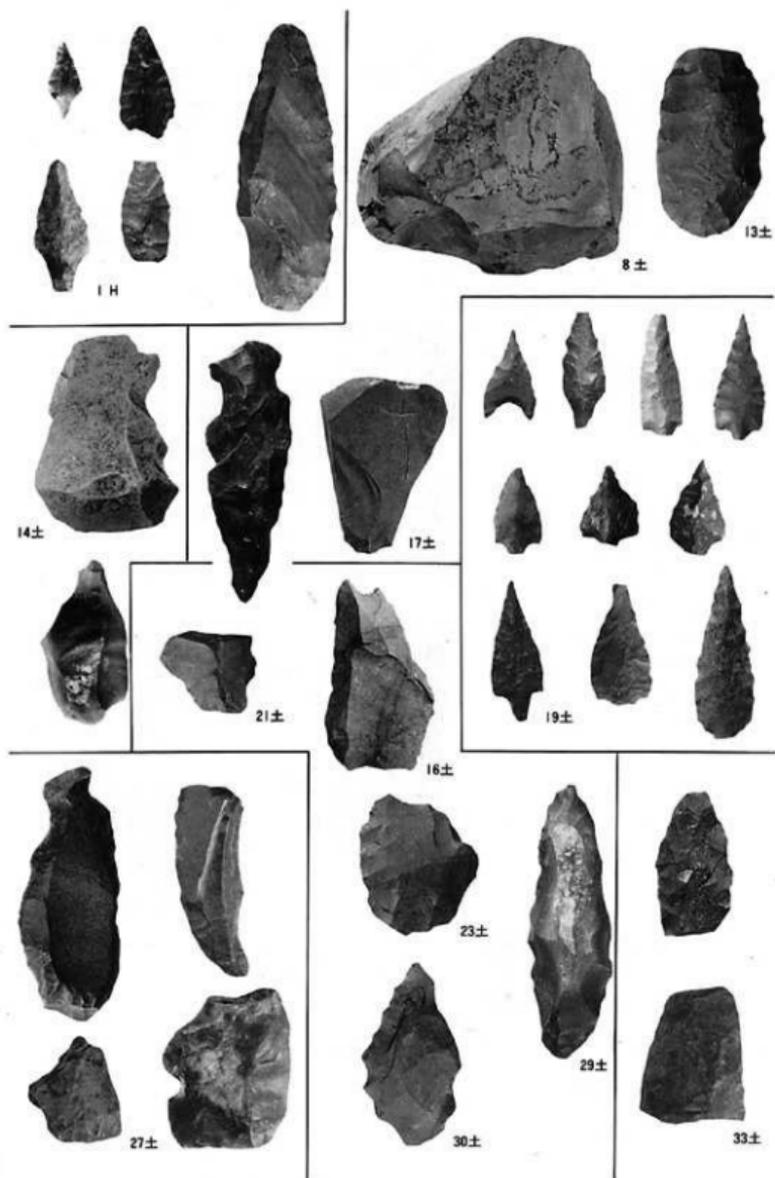


148

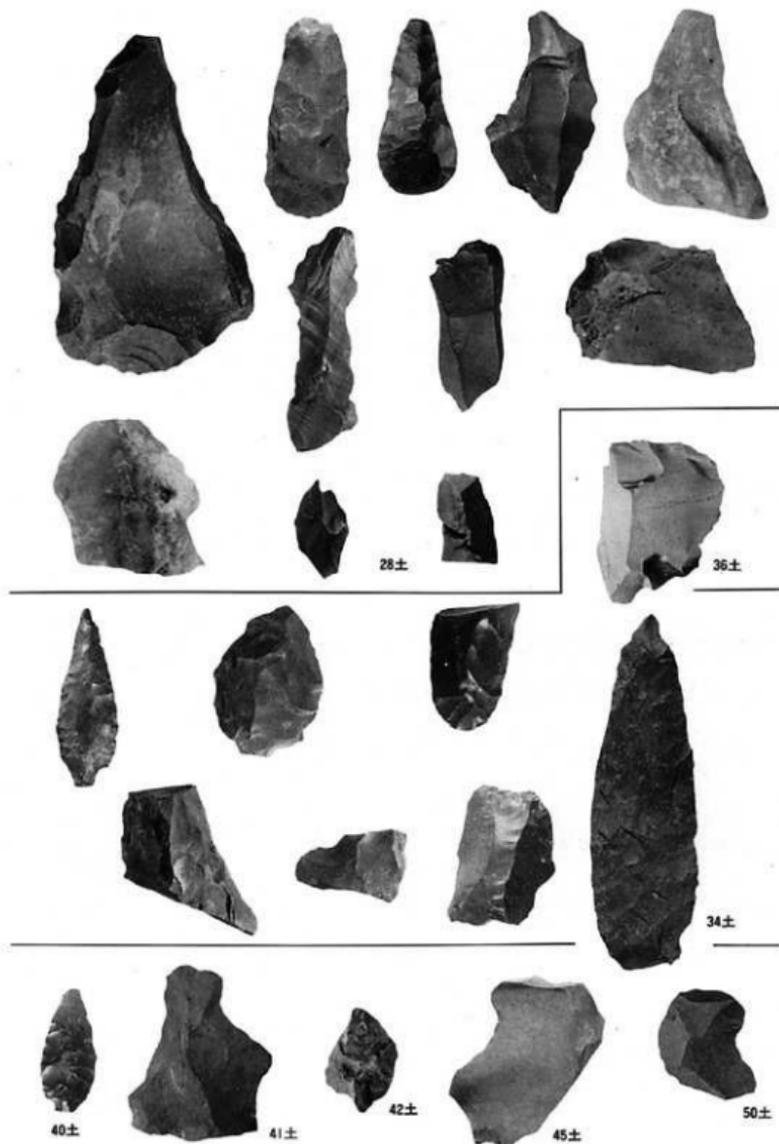


155

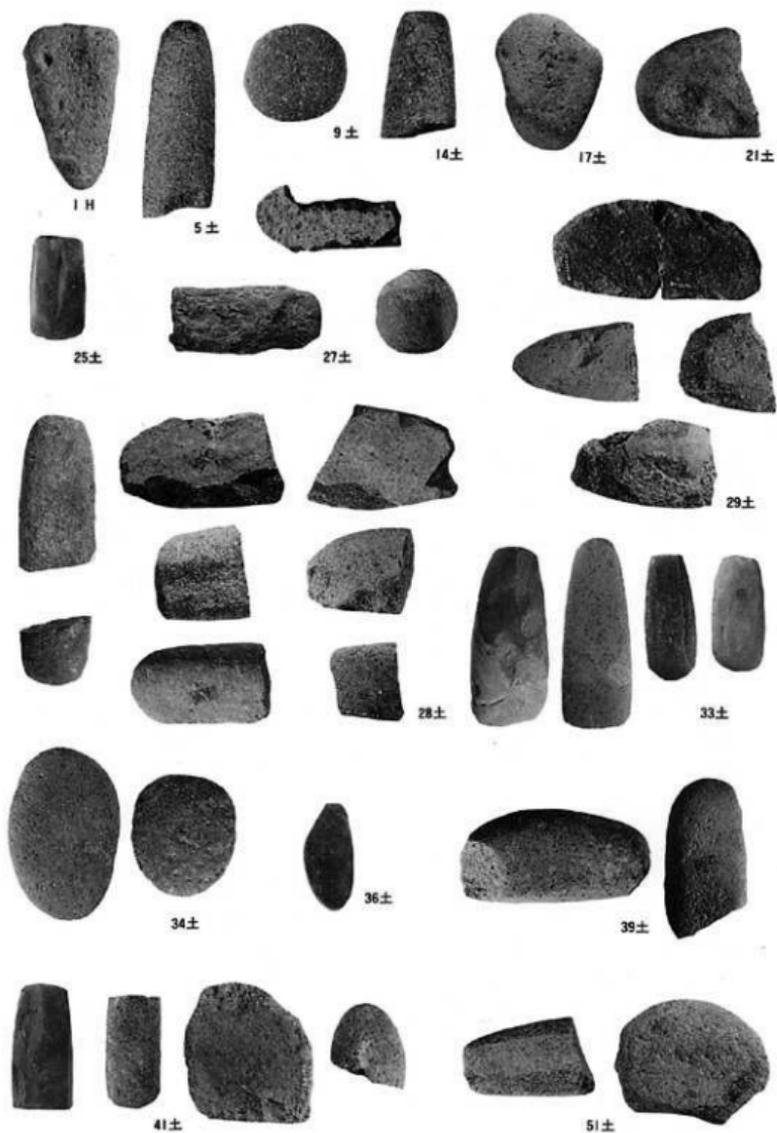
PL.45 遺構外出土土器 (後期土器)



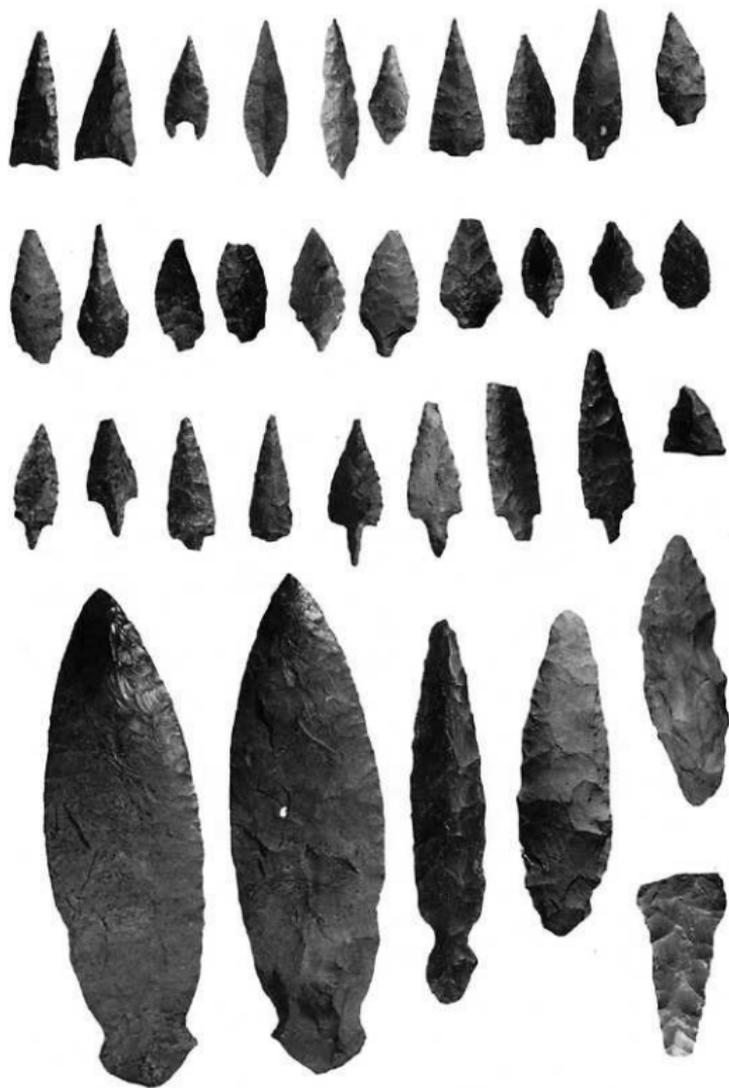
PL.46 遺構内出土石器(1)



PL.47 遺構内出土石器(2)



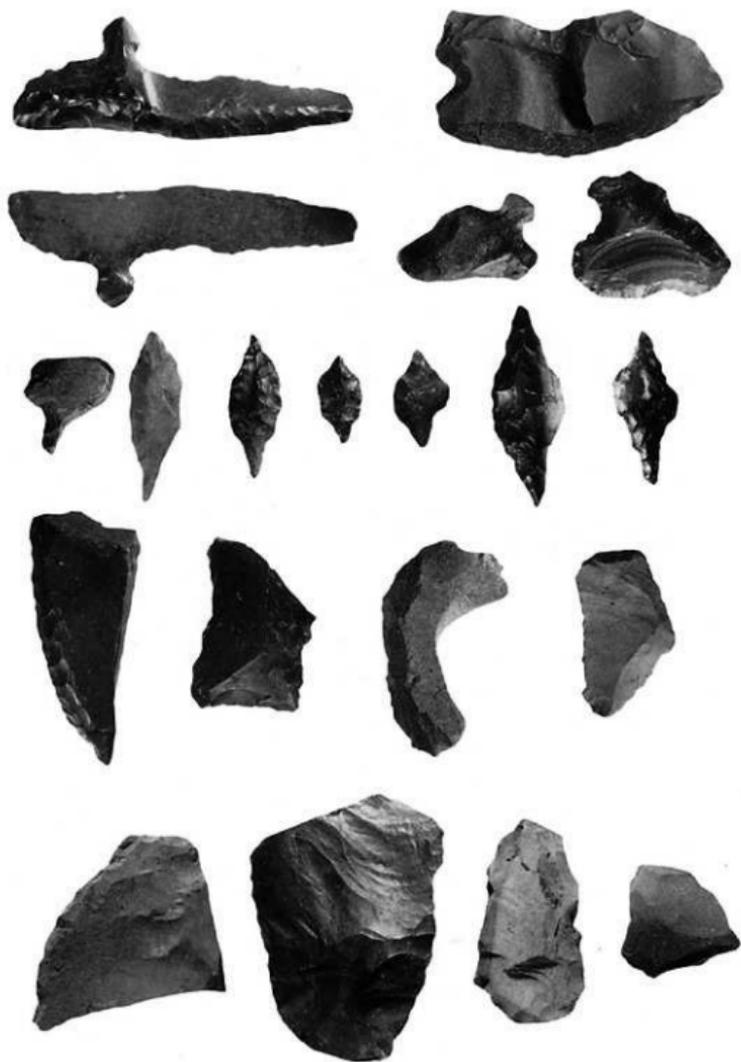
PL.48 遺構内出土石器(3)



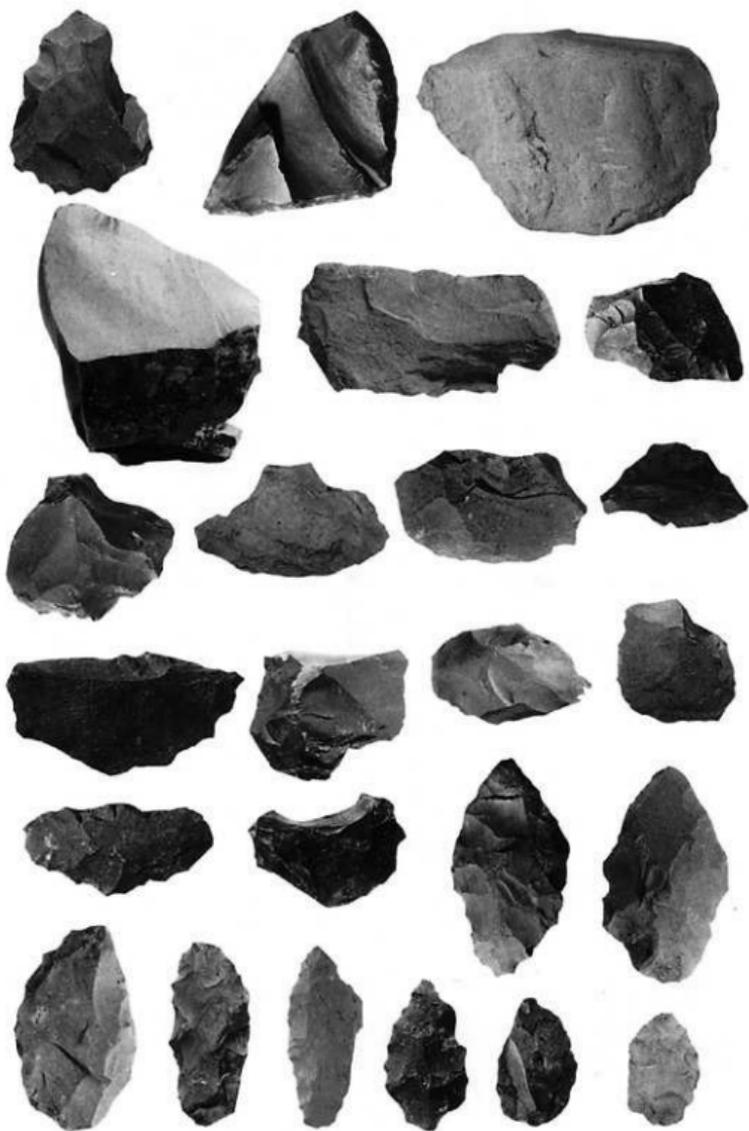
PL.49 遺構外出土石器(1)



PL.50 遺構外出土石器(2)



PL.51 遺構外出土石器(3)



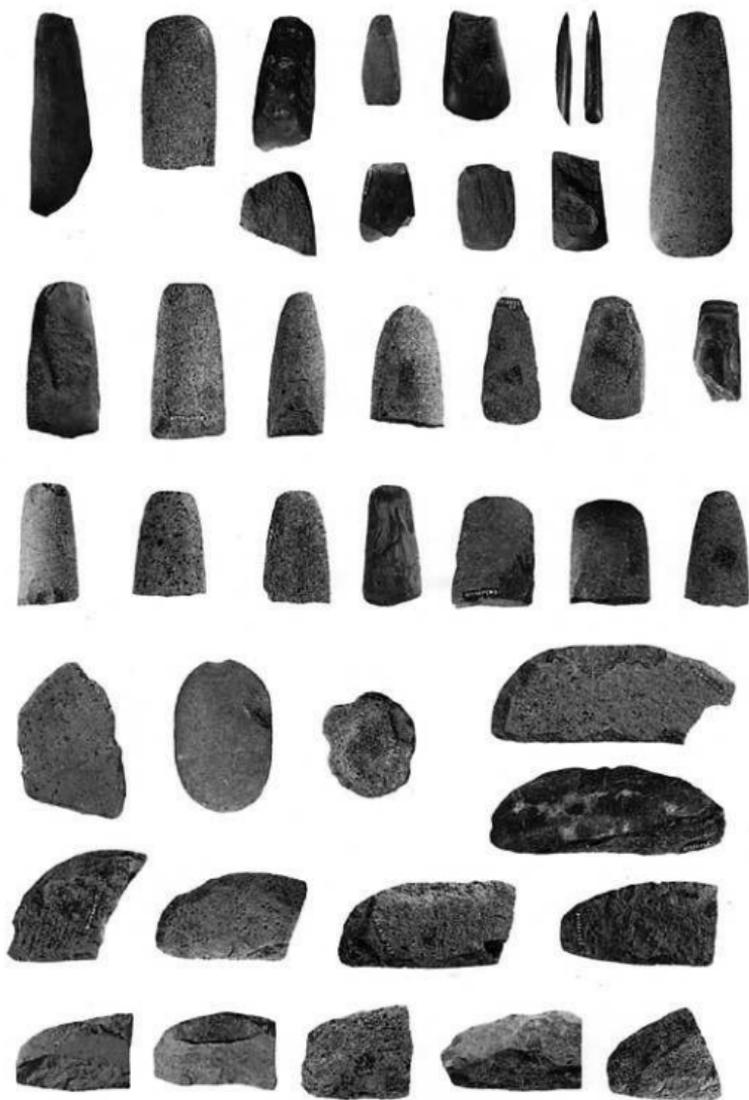
PL.52 遺構外出土石器(4)



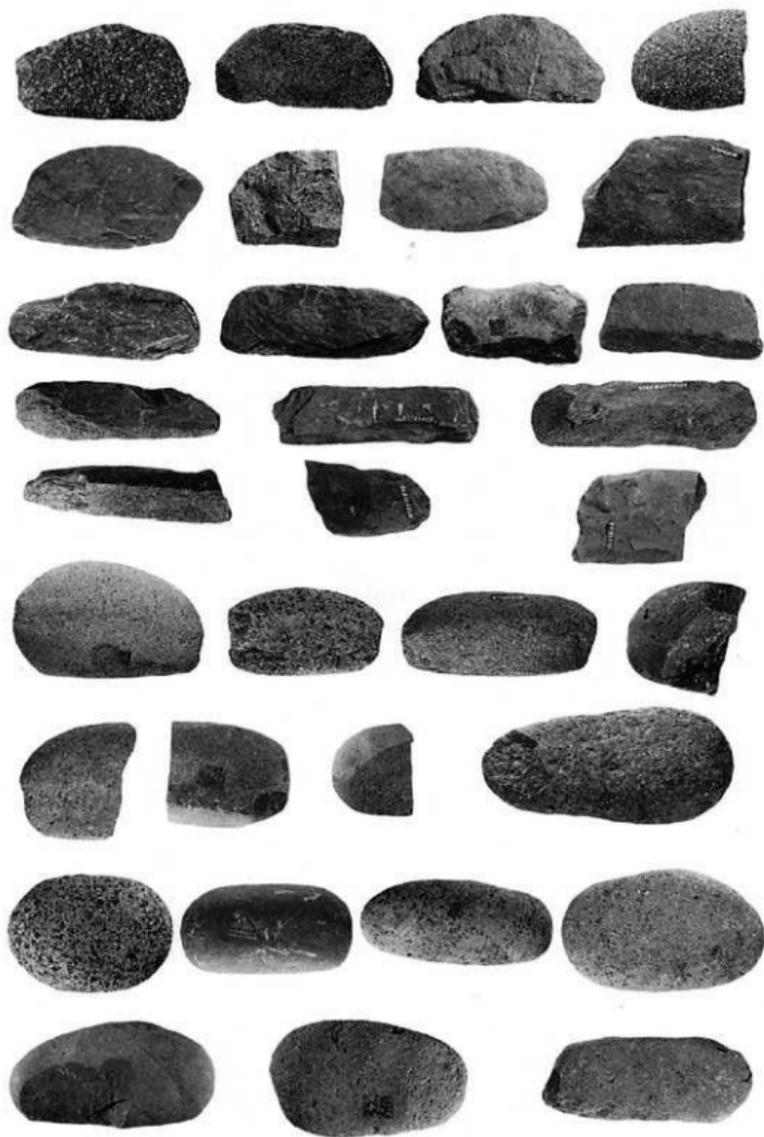
PL.53 遺構外出土石器(5)



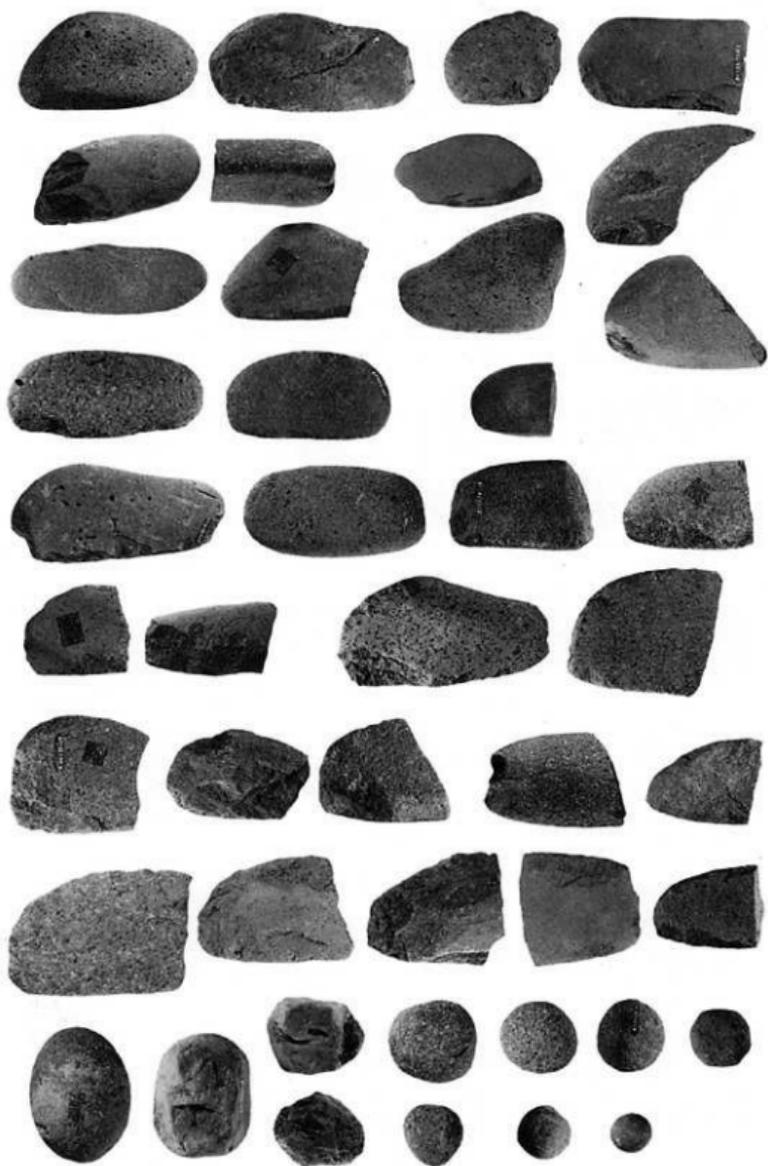
PL.54 遼構外出土石器(6)



PL.55 遠構外出土石器(7)



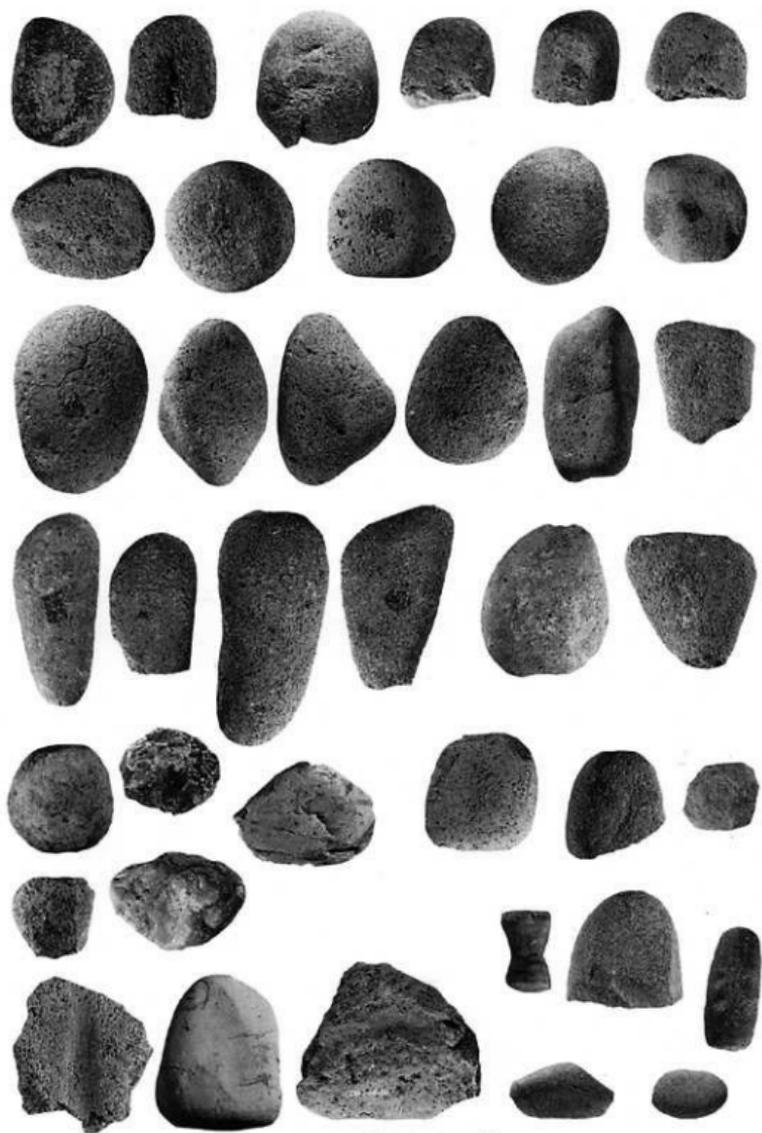
PL.56 遼博外出土石器(8)



PL.57 遺構外出土石器(9)



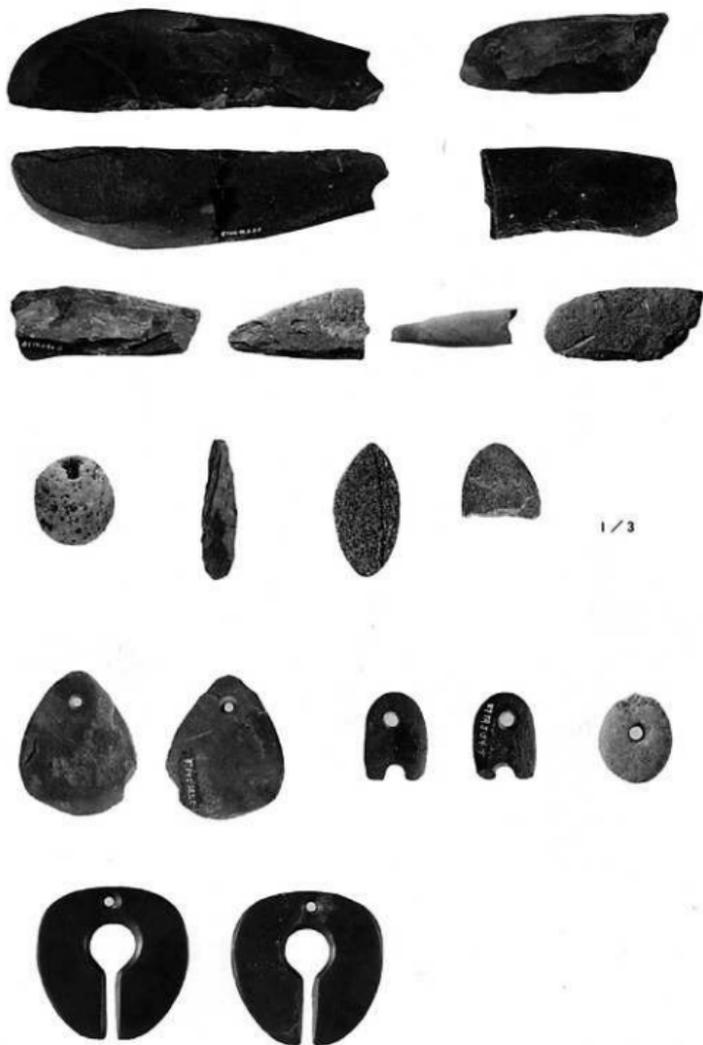
PL.58 遺構外出土石器(10)



PL.59 遺構外出土石器(1)



PL.60 土製品 (番号は実測図版番号と同一)



PL.61 石製品

青森県埋蔵文化財調査報告書 第119集

## 館 野 遺 跡

— 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行年月日 平成元年 3月31日

発 行 青森県教育委員会  
〒030 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒030-02 青森市新城字天田内152-15  
☎ 0177(88)5701・5702

印 刷 第一印刷株式会社  
〒030 青森市石江字江渡3-1  
☎ 0177(82)2333